

第7章

医学部 医学部附属病院



1 金沢大学医学部の沿革

- (1) 蘭学よりドイツ医学へ (1862～1944年)482
- (2) アメリカ医学の奔流 (1945～1964年)486
- (3) 大学紛争：ドイツ医学からアメリカ医学への葛藤 (1965～1969年)492
- (4) 新しい医学への発展 (1970～1989年)495
- (5) 21世紀の医学・医療へ向かって (1989～1999年)498

2 医学科基礎講座の沿革と業績

- (1) 解剖学第1講座史501
- (2) 解剖学第2講座史504
- (3) 解剖学第3講座史506
- (4) 生理学第1講座史508
- (5) 生理学第2講座史510
- (6) 生化学第1講座史514
- (7) 生化学第2講座史516
- (8) 薬理学講座史519
- (9) 病理学第1講座史523
- (10) 病理学第2講座史526
- (11) 微生物学講座史528
- (12) 寄生虫学講座史531
- (13) 衛生学講座史534
- (14) 公衆衛生学講座史537
- (15) 法医学講座史539
- (16) 国際医療保健学講座史541
- (17) 分子情報医学系専攻543

(18) 動物実験施設史545

3 医学科臨床講座の沿革と業績

(1) 内科学第1講座史548

(2) 内科学第2講座史551

(3) 内科学第3講座史554

(4) 神経内科学講座史557

(5) 神経精神医学講座史559

(6) 小児科学講座史562

(7) 放射線医学講座史565

(8) 皮膚科学講座史568

(9) 核医学講座史570

(10) 外科学第1講座史573

(11) 外科学第2講座史575

(12) 整形外科学講座史578

(13) 脳神経外科学講座史582

(14) 泌尿器科学講座史584

(15) 眼科学講座史587

(16) 耳鼻咽喉科学講座史590

(17) 産科婦人科学講座史593

(18) 麻酔・蘇生学講座史596

(19) 臨床検査医学講座史598

(20) 歯科口腔外科学講座史600

4 附属病院中央診療施設の歩み

(1) 検査部の歩み	603
(2) 手術部の歩み	604
(3) 放射線部の歩み	605
(4) 理学療法部、作業療法部の歩み	606
(5) 材料部の歩み	607
(6) 輸血部の歩み	608
(7) 分娩部の歩み	609
(8) 救急部の歩み	610
(9) 高密度無菌治療部の歩み	611
(10) 集中治療部の歩み	612
(11) 病理部の歩み	613
(12) 血液浄化療法部の歩み	614
(13) 医療情報部の歩み	615
(14) 光学医療診療部の歩み	616
(15) アイソトープ部の歩み	617
(16) 麻酔部の歩み	618
(17) 総合診療部の歩み	618
(18) 電子顕微鏡センターの歩み	619
(19) 薬剤部の歩み	620
(20) 看護部の歩み	623

5 大学院医学研究科における教育と研究

（1）沿革	624
（2）新制大学院発足から現在まで	625
（3）現行の医学研究科の概要	625
（4）学位審査制度	626
（5）大学院の将来構想	627
附 録	629

1 金沢大学医学部の沿革

(1) 蘭学よりドイツ医学へ(1862~1944年)

種痘所の設立

加賀藩13代藩主、前田斉泰は1854(安政元)年に加賀藩学の源流であった明倫堂、経武館に加えて、洋式専門の学校壮猶館を金沢・広坂の地に設立した。はじめは砲術と合図を教えるためであったが、間もなく洋学、医学、航海学、測量学が加えられた。その中心となったのは蘭方医黒川良安である。良安は1828(文政11)年12才の時、医師であった父黒川玄龍に連れられ、長崎出島の大通詞吉雄権之助のもとに留学した。彼は7年にわたり医学とオランダ語を学んだ。留学を終えた良安は、大阪・適々塾に緒方洪庵を訪ね、洪庵の指示で江戸の蘭学者、坪井信道の門に入り塾頭となっている。1846(弘化3)年良安は30歳で金沢に居を移し、木倉町で開業するに至った。良安の門下生は数百人に及び、その中から後の医学校の伝統を継ぐ大田美農理、津田淳三らが輩出している。

1862(文久2)年3月、加賀藩は金沢彦三番丁「反求舎」に種痘所を設立し、痘瘡対策に取り組んだ。当初は私立の種痘所であったが、接種が急速に普及するに従い、公立の種痘所に発展したもので、この時をもって金沢大学医学部の濫觴とされている。さらに第14代前田慶寧は、種痘所の発展を見て病院を建て貧民の病苦を救おうと決意し、1867(慶応3)年6月11日、卯辰山に西洋式病院、養生所を建設した。この時併設された製薬関係の舎蜜局は後の金沢大学薬学部の淵源をなしている。

医学館の設立

明治政府は1869(明治2)年6月大学校設立の規則を制定し、翌年学校を分けて大学、中学及び小学とし、中央に大学を置き、各府県の中学出の俊才を首長の推薦の下に学ばせようとした。これに呼応して全国に病院及び医育機関の整備発展をみるが、既に加賀藩でも養生所の良安に医学校設立の立案を命じていた。藩命を受けた良安は1868年7月、子息誠一郎、医師横井三柳を伴って長崎に行き、医学校、病院の設置制度について調査し、翌2年、製造人体(キンストレーキ)、医療器械、薬品及び長崎病院教師、マンズヘルト(Mansvelt, C.G.)の講義録などを購入帰沢した。さらにオランダ医師の雇用も計画され、1870年12月、藩の代理人浅津涉とオランダの一等軍医官スロイス(Sluys, P.J.A.)との契約が成立し、実現することになった。

藩は良安らの建議に基づき、1870年2月に養生所を廃止し、大手町、加賀藩家老津田玄蕃の邸を医学館として養生所の学生をすべて移し、その附属病院を一般患者の治療所と

した。ここにはじめて学校を主とし病院を従とする制度が確立した。スロイスは翌1871年3月に来任し、理化学、動植物学、健康学、解剖学、生理学、病理学、薬剤学、内科学、外科学、軍陣外科及び実験など広範な講義を担当し、学則を整備している。これを機に良安は55歳で引退したが、30年にわたって西洋の学術を移植し、子弟の教育薫陶に当たった功績は大きく、医学部の祖とされる所以である。

しかし、創立以来順調に発展した医学館に突如危機が訪れた。1871年7月廃藩置県の令が下り、前田慶寧は藩知事を免ぜられた。金沢県は石川県と改称し、県庁所在地は美川町に移され、同時に医学館を含む藩立の諸学校は閉鎖されることになった。医学館は津田、大田、田中らの尽力により私立病院として存続することになったが、授業料や病院収入で病院を維持することは困難で、特に病院の支出の半ばに匹敵するスロイスの月給は経営を圧迫した。1873年3月に至り、医学館の窮状を憂えた金沢町戸長らは県庁に働きかけて、毎月300円の補助金が交付されることになり、病院は半官半民の形となった。同年8月文部省の命により医学館は金沢病院と改名され、1875（明治8）年6月、県へ全面的に移管されることになった。また、美川町に移転した石川県庁が加賀・能登2国を管轄することになったので、1873年1月金沢町に復帰した。スロイスは公立になる1年前の1874年9月、任期満ちて帰国した。

石川県病院及び医学所の分立

1875（明治8）年8月、石川県では従来のものであった医学館が石川県（金沢）病院として発足することになり、スロイスの後任として蘭医ホルトルマン（Holtermann, A.）を迎えた。また津田淳三、大田美農理、田中信吾が並んで主務医として登録され、治療並びに教育に当たることになった。スロイス時代に予科本科を含めて5年であった就学期間は、予科1年、本科5年に改められ、履修が難しい学生には略則による医科2年の過程もつくられた。

石川県金沢病院は当初から医育機関を含むものであったが、医学の進歩とともに医育部門の分離拡充が強く要望されるようになった。1876年8月、金沢病院から医学所が分離され、大田美農理が院長に、田中信吾が医学所長にそれぞれ任命された。これが学校と病院の分立の始めである。同年10月、富山千石町に石川県富山分院が置かれ、田中信吾が分院長を兼任した。また、越前福井に石川県福井病院を置き、馬嶋健吉を院長とした。翌77年、この両病院にも医学所を併設し、生徒を養成した。大田、田中とともに長らく病院を支えてきた医学館主務医津田淳三は、1876年11月54歳で引退した。

1878年9月、明治天皇は北陸行幸の際、金沢医学所に臨御され、伊藤侍医、ホルトルマン教師らが倍侍し、全校未曾有の光栄に浴したという。1879年春、ホルトルマンは任期満ちて金沢を去った。1880年4月ドイツ人ローレッツ（Roretz, A.von）が来て8月までドイツ語で講義し、ドイツ医学の嚆矢となっている。当時の東京大学医学部では主なる講義がドイツ人教師によりなされ、我が国におけるドイツ医学教育の先鞭をつけた。

第7章 医学部 医学部附属病院

金沢医学校への変革

1879（明治12）年11月、県は医学教育の統合強化を企図し、金沢医学所を金沢医学校と改称した。田中信吾を校長兼金沢病院御用掛とし、学則及び学科の改正を行った。すなわち医学所の6年制を「実地修行、医術速成」の目的で4年に短縮し、国語をもって教育する学校として発足した。そして、東京大学医学部第2回卒の医学士伴野秀堅、外山林介を招いて、外人講師に代わる役目を期待した。彼らは金沢医学校が迎えた最初の医学士であったが、2年足らずで金沢を去った。同年2月、内務省は東京大学医学部及び欧米諸国の大学医学科以外の卒業生に開業医試験を受けることを義務付けた。

1882年5月、政府は医学校通則を改定し、医学校を甲乙二種に分け、甲種の卒業生は無試験で医師免許が与えられ、乙種は簡易速成のためのものとした。同年、長崎医学校が甲種に認定され、金沢は1884年に甲種医学校と認定されたが、その間、東京大学出身の医学士、木村孝蔵、佐藤廉、長谷川寛治、山崎兵四郎、中浜東一郎を次々に招いて認可への努力をしている。当時、東京大学医学部は甲種医学校振興の責任を負っていたが、その当時の主任教授陣の大半はドイツ人教師で構成されていた。この蘭学からドイツ医学への転向は、1871（明治4）年から始まっていた。

第四高等中学校医学部の設置

1886（明治19）年、文部省は高等中学校の設立を定め、全国を5区に分けた。この各区に大学予科としての高等中学校を1校ずつ置くことを決めたが、新潟、富山、石川、福井を含む第4区には金沢の地が選ばれた。さらに政府は各県立の医学校の不備なものは廃止する方針をとった。この通達により、全国の多くの県立医学校は廃校の運命をたどり、医学校を維持できたものは、京都（後の京都府立医大）、大阪（同阪大）、愛知（同名大）などの数校にすぎなかった。

1887年8月、第四高等中学校に医学部が設置され、木村孝蔵を医学部長とし、翌年4月から開学するに至っている。医学部の教育は大手町の石川県金沢医学校の校舎、臨床実習は殿町の石川県金沢病院をもって出発したが、1892年4月には仙石町に新校舎が建設された。1894年6月、勅令75号で高等学校令が公布され、高等中学校の名称は廃止され第四高等学校となり、医学部も第四高等学校医学部となった。翌年、学生、職員、教授間の親睦を保つための組織として十全会が結成され、翌年11月に『十全会会誌』第1号が発刊された。

金沢医学専門学校の発足

1901（明治34）年、勅令24号で千葉、仙台、岡山、金沢、長崎に医学専門学校を置くこと定められた。これらの高等学校医学部は独立分離し、金沢では金沢医学専門学校が成立した。病院の新築も計画され、小立野の現在地において総工費31万円をかけ、1905年に完成した。その横に金沢医専も新築され1912年3月に完成し、同年3月25日移転した。



写真7-1 (旧)附属病院 正面

1915(大正4)年5月11日には、創立25周年記念式典及び移転祝賀会が挙行された。

金沢医科大学の成立

1922(大正11)年4月、文部省は直轄学校官制を改正し、1923年4月より医科大学として発足し、高安右人が学長となった。医科大学の発足とともに、附属医学専門部及び附属薬学専門部が設置された。1923年9月1日、関東大震災が発生し、学校当局は直ちに救護班を組織し東京に送った。1926年5月11日、医大昇格後初の開学式が大講堂で盛大に行われた。医科大への昇格に伴い助教授、助手が大幅に加えられ、教育研究の能力は一段と増大した。1931(昭和6)年に大学は学生定員を60名から80名に増加した。

大学の成長期にはどこでも教授選考をめぐる新旧の争いが起こるが、金沢医科大学も例外ではなかった。1931年7月、須藤学長が脳溢血で倒れ、後任に石坂伸吉が新学長に就任した。この学長の下で、金沢医専及び医大卒業生と教授会が、医化学教授の後任をめぐる対立した。教授会は東大卒業後7年の助手内野豊生を推薦したが、卒業生らはドイツ留学より帰朝し医化学教室助教授であった岩崎憲を推し、東大閥に反対した。結局1933年1月、石坂学長は教授会の了承を経て岩崎憲を医化学教授に推薦し、事態は収拾した。岩崎擁立をきっかけとして母校同窓生統合の気運が高まり、1932年9月、十全同窓会が結成され大講堂で発会式が行われた。翌年4月15日、第1回全国総会が開催された。従来の十全会は、同窓会、医学会、学生会を併せたものであったため、これを機に各々分離することになった。

戦時体制下の医科大学

1937（昭和12）年、日支事変が勃発した。政府は「事変」と呼んだが、実態は戦争であり、以後政府の不拡大の方針声明にもかかわらず軍事的には一方的に拡大し、1941年12月に至って遂に対米英宣戦布告となった。以後、坂道を転げ落ちるように敗戦へと事態は急転する。戦争の影響は医科受験者数に反映し、全国的に急激な志望者の減少をきたした。医者不足の対策として軍医を速成するため、軍部は修業年限4年の臨時附属医専課程の設立を計画、1942年までに29,000、1944年までに51,000の軍医をつくる見通しを立てた。さらに文部省は学生組織を強化し、学友会を「報国団」なる組織に変えるよう通達した。

1941年8月、文部省は報国団の命令系統を一層明確にすることを要求し、団の中に報国隊をつくることを要請した。この訓令に基づき大学報国隊がつくられ、病院教授医局員が医療特技隊、院長が特技隊長と格付けされ、学生には病院の防空警備のため、夜間勤務が割り当てられた。さらに1943年、陸軍の要請で医大、医専の学生に軍事講習の時間を設定した。1944年、大学の定員を100名とし、「医専」定員を160名とした。しかしこの年7月、マリアナ諸島を失ってからは、東京をはじめ全国の都市に米空軍の無差別爆撃が始まり、広島、長崎への原爆投下を契機に、1945年8月15日の終戦を迎えるに至った。

（2）アメリカ医学の奔流（1945～1964年）

医学教育の改革

終戦当時の我が国医学界の状況は、開業医60,000人と復員医師20,000人、それに新規卒業生6,000人を加えて86,000人の膨大な数になるが、その質の面をみると、戦時中の医師不足を補うための医専の続出、修業年限の短縮などによる臨床経験未熟な医師の増加で質の低下をきたし、その対策が焦眉の問題であった。そこで連合軍総司令部（GHQ）は戦後いち早く、医学界の再建に積極的に乗り出した。1946年2月、GHQ公衆衛生福祉局長サムス大佐（Sams, C.F.）は「医学教育改革について」と題する講演の中で、「日本の医学界はドイツ医学に盲従し自己欺瞞に陥っている。今後は最も優れている米国の医学を規範とすべきである。」と批判し、以後医学の改革に精力的に取り組んでいった。サムスの影響は非常に大きく、日本の医療、保健、厚生行政全般にわたっている。彼は最初の対策として、医療制度協議会と医学教育審議会の設置を政府に申し入れた。その要請に従い、医療制度審議会は1946年3月に、次の2事項を決定した。

（1）**医育機関（医科大学及び医学専門学校）の卒業生は、卒後1年以上の診療の修練を要する前項の診療修練を経た者は、更に国家が行う一定の試験に合格するを要する**

その実施時期はおおむね1946年秋以降、すなわち、その年9月の卒業生から行われる見込みであると発表した。実際に第1回の医師国家試験はその年の11月に実施され、受験者270名、合格者137名、合格率51%の成績であった。翌年5月、第2回目が全国規模で行われ、受験者1,646名、合格者1,370名、合格率83%であった。この時金沢からは66名

が受験し、52名（79%）が合格、全国19医大中16位の成績であった。

一方、実地修練についてもいち早く、1947年9月に全国206病院が実修病院として指定され、本格的に動き始めた。石川県では国立石川病院、国立金沢病院、農業会加賀病院、農業会能登病院の4病院が指定を受けている。実地修練はアメリカにおけるインターン制度を真似たものであり、国家試験は州試験を取り入れたものであるが、従来の医学生が卒業して直ちに医師免許を得ることができたのに対して、大きな変革であった。しかし終戦直後の混乱期において、何ら医療基盤の整備もないままに、わずか1年足らずの期間でこの大改革を実施したのには大変な無理があった。単に数だけを見ても、1948年9月の大学卒業生は2,125名、翌年3月の大学卒業生は2,245名、同医専卒業生5,300名、総計9,670名がインターンに入る予定であるのに対し、その時点での指定病院は全国266箇所、新インターン生の収容能力は7,786名、すなわち1,884名が収容不能となり、インターン指定病院を新たに102ヵ所追加せざるを得なかった。突然の指名を受けた病院に受け入れ態勢があるはずもなく、現実には形骸化した状況であり、このためにインターン制度は以後、医学界を揺るがす大問題に発展していった。

一方、医学教育審議会は、将来医師たるべき医学生の資質向上を目的として、医学専門学校に予科を設け、医学学習以前に予備教育を行うこととなった。取りあえず、1947年は1年間の予科を、1948年以降は2年の予科を設置することとなった。

金沢大学の誕生

1945（昭和20）年10月、GHQから出された「日本教育制度に対する管理政策」、またGHQから米国陸軍省への依頼により1946年3月に来日した『アメリカ教育使節団報告書』によって、個人の価値と尊厳に基づく教育理念が掲げられ、新しい6・3・3制度が勧告された。翌1947年3月、「教育基本法」「学校教育法」、同年7月には、我が国大学の基準を示す「大学設置基準」が制定された。この中の学校教育法によって「6・3・3・4」制となり9年の義務教育がはじめて制度化され、新制高等学校を卒業した者は、制度上の格差のない新制大学へ進学し得るという制度が規定された。同時に、特権的と見なされた従来の帝国大学は廃止されることとなった。学校教育法は教育の普及のため、新制の大学は現存の学校を切り替えて、一県一大学を指示しており、石川県では1947年11月、柴野県知事と県下官民及び教授会代表が集まり、県下の高専、大学を統合した現実的な大学を建設するための金沢大学準備委員会が成立するに至った。

設立の過程で問題となったのは、一府県一大学を設置すること、一大学における学部や分校は、他の府県に及ばないことであった。各県がそれぞれの事情を抱えて難航したが、石川県においては金沢医科大学が中心となり、第四高等学校、金沢工業専門学校、金沢高等師範学校、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢医科大学附属医学専門部、金沢医科大学薬学専門部が包括され、附属の研究所として、結核研究所、附属図書館、附属学校、教育施設として、教育学部に小学校、中学校、高等学校、幼稚園、医学部に病院、看護婦

第7章 医学部 医学部附属病院

養成施設を含め、国立金沢大学設置の構想が固まった。1947年12月に金沢総合大学設立のめどが立ち、金沢城跡が大学用地に開放されることになった。翌1948年5月には、文部省の要望で「金沢大学」と名称を決定した。1949年5月31日をもって新制金沢大学が発足するが、学長人事で折り合いがつかず、9月22日付けで戸田正三が任命された。翌年5月、金沢大学通則が制定され、総合大学における管理運営の実質的担い手は学長、学部長ではなく、学部教授会であることが規定された。大学の設立にかかわる詳細は、通史編に譲る。

新制大学における医学教育

新制大学の発足によって医学教育は、6・3・3・4プラス1という原則が規定されたので、旧来の4年制医専は大学昇格か廃止か、いずれかを選択すべき運命にあった。「現存する医専はその施設、教授内容によってAとBに二分され、A級医専は1950年度で廃止され、大学部開設へと切り替えられる。B級医専は1947年度限りで廃止される。」と定められた。当時の医専は、官立19、公立18、私立13の50校あり、官立はA級に確定しているが、残る公立、私立医専が問題であり、大学昇格の力のない医専は消え去るしかなかった。金沢医専も1939（昭和14）年に設置以来、卒業生を送ること8回、1951年3月にその幕を閉じた。

一方、4年制1本に統一された新制医大への入学資格は、単なる技術者養成にとどまらず、社会人としてより高い人格が求められるとの理由から、2ヵ年間新制大学において人文科学、社会科学並びに自然科学を合わせて60単位以上、ことに自然科学は24単位以上を修得した者でなければならぬと規定された。ところが現実には、全国108校の私立大学中、理工科大学を除いたほかの大学で自然科学24単位を修得できるのは数校にすぎなかった。そのため私立医大では、入学志望者が定員の数%にしか達しない医大が続出した。一方、金沢大学医学部では医学生一般教養履修単位を64単位と規定したが、学生は1年半のうちに規定単位数を取り終え、2年の後半は無為に過ごすことになるため、発足当初から既に2年制医学部進学課程の欠陥が指摘されていた。その対策として、一貫した6年制医科大学の実現が提唱され、教養教育はカリキュラム改革の焦点となり今日に及んでいる。

日米連合医学教育者協議会

我が国医学界がアメリカ医学へ傾斜していく中で、一層強い動機付けとなったのは日米連合医学教育者協議会である。これはユニテリアン奉仕団が中心となり、文部省、厚生省、日米医学教育委員会が主催して、日米医学の相互紹介、専門科目の内容、教授方法の解説を目的としたセミナーであり、1950（昭和25）年7月17日より8月11日まで東京で、8月14日より9月8日まで関西で開催された。協議科目は基礎5科目と臨床5科目にわたり、米国側から団長エール大学医学部長ロング（Long, C.N.H.）ら専門家21名、日本側からは東京以北の22大学、関西以南の24大学より前記専門科目担当教授各1名が参加して行われた。この会に出席した教授は、アメリカの医学教育における基礎と臨床の密接な関連

性、clinical-pathological conference, CPCの実態に強い関心を持った。さらに独立した臨床麻酔の機能的運用、生化学領域におけるアイソトープ実験法、関連病院やインターン制度の実態に興味を引かれた。

この成果が著しかったので、文部省は翌1951年、やや異なった形で医学教育講習会を全国12大学において開催した。本学においても一般講演、内科外科、ポリクリ、テーマ別臨床病理検討会並びに臨床病理合同講義（CPC）の形で講習会が行われた。参加者は、アメリカの教授法が各科相互に有機的連携を保ち、生徒の自主的研究を補佐、育成しながら、医師としての実効的な効用を念頭に置いた斬新な指導方針をとっていることに感銘を受けた。こうしてアメリカ医学教育の実態を身近に経験したことは、混迷期にあった医学界再建の目標をアメリカ医学へと強く方向付けることになった。

医療制度の抜本改正

GHQは日本占領を開始した1945（昭和20）年秋から、戦前以来の日本の諸制度や団体を「軍国主義的」として、解体・改革する指令を矢継ぎ早に発した。戦時体制下につくられた官制の旧日本医師会の解散もその一つであった。GHQの指示には三つのポイントがあった。すなわち、法律による強制設立から、医師の自由意志による任意設立の団体に変える、旧制医師会は、現役の軍医以外すべて強制加入であったが、これを改めて医学研究者、公衆衛生の専門医も含めた任意加入団体とする、学術研究を中心とする職域団体の性格を強めること、であった。さらに医療を国家統制してきた国民医療法の廃止を厚生省に命じ、日本医師会にも根本的な改組を指示し、1947年11月1日ようやく新生日本医師会の設立が認可された。

これと並行して、厚生行政機構の改革、公衆衛生の改善、保健所制度の改革もGHQの主導で進められた。我が国の健康保険制度は既に1927（昭和2）年から始まっており、診療報酬の支払いは日本医師会が報酬代金を受け取って、道府県医師会を通じて配分する仕組みをとっていた。しかし、サムスは医師会が支払い事務にかかわることに真っ向から反対した。一方、厚生省は、かねてから医師会と独立した診療報酬支払基金の設立を考えていたが、これを機会に支払基金構想を表に出し、1948年6月4日閣議決定し、26日国会に提出、7月4日には成立させ一気に創設に持ち込んだ。この間、医師会執行部は医薬分業問題や事業税課税問題の対応に追われて基金の成立に対処できず、結果として社会保険診療の主体性を奪われ、診療内容を支払い面から規制されるに至った。以後、健康保険法の改正ごとに医師会は、厚生省、支払い側との確執を繰り返すことになる。ともあれ、以後我が国の医療全般にわたり多大の影響を及ぼす国民健康保険制度は、GHQと厚生省の主導で出発することになった。

医学部と附属病院の整備

従来大学病院は、教育、研究に力を注いできたが、医療法の施行以来、総合診療機関と

第7章 医学部 医学部附属病院

しての設備構造の充実、管理運営の合理化、患者サービスの強化及び社会保険診療への協力にも積極的に取り組む必要が生じてきた。文部省は、1951（昭和26）年1月、大学病院改善協議会を設置して大学病院改善要綱を決定した。その内容を要約すると、大学病院の組織及び管理運営の合理化を図る、専任の病院長を置き適切な管理を行う、大学病院の特殊性を生かし診療各科の総合的、能率的運営を図る、患者サービスの改善を図る、社会保険診療に協力する、大学病院の建物、設備などを整備改善する、大学病院に関する経常的予算はその算出の基礎を根本的に検討し、適正額を計上するとともにその運営に支障を来さないようにする、などの方策が挙げられた。

1952年5月11日、医学部大講堂において十全同窓会結成20周年記念総会が開催された。その際、記念事業として記念講堂の建設と附属病院改築促進を決議し、その資金として目標1,000万円の募金を集めることになった。一方、戸田学長、泉病院長、倉知同窓会理事長、平松教授らの尽力の結果、1953年度予算として1,000万円が計上された。最終的に予算は850万円に削減されたが、第3病棟の基礎工事を実施することになった。1954年度予算として1,700万円が配布され、予算執行の遅れや悪天候の影響はあったものの、1956年7月に地上6階、地下1階の第3病棟が完成した。この改築が基点となって診療体制の改革が進められ、1959年5月、中央診療棟の竣工とともに中央診療部が発足し、同年7月に検査部と放射線部が、翌年4月に手術部が業務を開始した。

大学院の設置

1952（昭和27）年10月に大学設置審議会第28回総会が開かれ、大学院設置審査基準要



写真7-2 （新）附属病院

綱が決定された。本学にとって設置条件の最も大きい要素は、必要講座の整備にあった。当初は必要講座数28という厳しい制約があったが、その後緩和され、最低基準は22講座となった。本学は整形外科学講座主任に高瀬武平を、第2生理学講座主任に岩間吉也を選び必要な講座を整備したが、戦争による被害を受けていなかったことが幸いして、大学院設置基準に合致する物的財産の面での苦労はなかった。1953年3月31日、政令51号をもって金沢大学大学院医学研究科の設置が決まり、1955年4月1日より大学院が正式に発足した。しかし、新制の大学院制度は当初から多くの矛盾を抱えていた。その根本的な原因は、第1に、大学院がその制度上の建前にふさわしい物質的な裏付けを与えられず、独立の機関としての体裁さえ整えられないまま放置されてきたこと、第2に、我が国の科学研究体制の一環として大学院制度を位置付け、その長期的発展を図る政策を欠いていたことが挙げられる。大学院設置に至る詳細な経緯とその内容は別章に譲る。

停年制の施行と世代交代

1954（昭和29）年、22年間にわたり学部長の任にあった石坂伸吉が退任の意を表明したため、新しく学部長公選の規則が定められた。同年3月27日に後任学部長選挙会が行われ、谷友次（微生物学）が当選した。翌1955年11月、教育公務員特例法に基づいて金沢大学に教員停年規定が定められた。この規定により医学部においてまず対象となった教授は、泉仙助（小児科）、岩崎憲（医化学）、笠森周護（産科婦人科）、熊埜御堂進（外科）の4名である。1958年3月末日をもってこの4教授は停年退職したが、それに先立ち3月15日、医学部大講堂において教官、教室員、学生ら400名の参加の下に、退職記念会が盛大に施行された。

時期を同じくして4人の後任教授を選考することは容易ではなかったが、同年7月26日の教授会でまず小児科教授に佐川一郎（京都大学結核研究所）を決め、同年10月17日、産科婦人科後任教授に赤須文男（東邦大学）を選任した。医化学の後任は、翌年1月12日の臨時教授会で高木康敬（大阪大学）を、外科は3月25日、本庄一夫（京都大学）を選任した。

停年制の実施に先立つ1955年、佐口栄（第1解剖）、宮田栄（第1病理）が6月10日、9月28日に相次いで急逝した。佐口栄の後任には、第3解剖主任本陣良平を同年12月の教授会で選任し、宮田栄の後任は1956年12月の教授会で寄生虫学教室主任の渡辺四郎に決定した。一方、1957年5月胃癌のため逝去した日置睦奥夫（第2内科教授）の後任として、村上元孝（群馬大学）を選任し、1958年4月より開講した。同年4月、精神神経科教授秋元波留夫の東京大学転出が決まり、後任に東京大学助教授島藺安雄を、また微生物学教授谷友次の停年退職に伴い、後任に助教授の西田尚紀を1959年2月に選定した。引き続き同年7月、東京大学へ転任した川村太郎の後任に、福代良一を12月に選任した。1960年3月停年退職の大谷佐重郎（衛生学）、石丸士郎（第2解剖）の後任選考は、空白期間を避けるため在職中に開始され、3月7日の教授会でそれぞれ石崎有信及び山田致知

第7章 医学部 医学部附属病院

を選任した。また1961年3月停年退職の谷野富有夫（第1内科）の後任には、武内重五郎を4月の教授会で決めた。このように本学では、停年退職制の施行により逐年、退職教授を送ることになり、医学部教授陣の新旧交代が進んだ。

ちょうど時代を区切るごとく、富山県で開催中の第13回国民体育大会にご臨席の天皇皇后両陛下が、1958年10月24日、金沢大学に行幸啓された。医学部では梅毒スピロヘータ、泉熱、神経系の構造と働き、薬理学教室と結核研究所の研究業績、アツオトメトリーなどが天覧に供された。

創立百年記念事業

1960（昭和35）年6月、十全同窓会からの発案で、医学部教授会は開学百年記念祭の開催を審議し、次の事項を決定した。

金沢大学医学部の起源を1862（文久2）年、彦三種痘所の開設と定め、1962（昭和37）年に百年祭を挙げる。

記念行事として、沿革史の編纂、記念講堂の建設、展覧会の開催、記念式典を行う。

この準備のため、岡本肇を委員長とする百年祭記念委員会が結成された。以後2年間の募金活動、記念講堂の建設計画を経て、1962年11月3日、金沢市観光会館において創立百年記念式典が行われた。午後からは医学部において園遊会が盛大に開催された。またこの年は同窓会の創立30周年にも当たるので、式典に先立ち同日午前9時30分より、十全同窓会創立30周年記念式も挙行された。遅れていた募金活動も進み、ようやく講堂建設の目処がついたので、同年8月13日、旧記念館及びテニスコート前を建設地として起工式が行われ、翌1963年7月7日に至り落成し、十全講堂と名付けられた。講堂建設費を含め百年祭記念事業の総経費は6,787万円で、6,500万円が寄付金で賄われた。一方、百年史の編集は予定より大幅に遅れ、西田尚紀はじめ編集委員の献身的な努力によって1972年6月、ようやく刊行の運びとなった。なお、本稿の記述もその多くを『金沢大学医学部百年史』に拠っている。

（3）大学紛争：ドイツ医学からアメリカ医学への葛藤（1965～1969年）

紛争の背景

GHQの要請と指導で出発した実地修練と医師国家試験制度は、前述のごとく当初から多くの問題を抱えていた。ことにインターン研修病院の受入体制は全く整わず、逐年その欠陥を露呈していった。1952年秋ころより、全国学生協議会を母体として全日本医学生連合会（医学連）が結成され、インターン反対運動が高まっていった。闘争の焦点は、生活保障が全くないこと、教育内容が乏しく指導体制がないこと、医師でも学生でもなく身分が不安定なこと、の3点にあった。当初の反対運動の目標は、これら3点の改善要求であったが、厚生省は経済的な身分保障のための予算要求を示し、学生側がインターン

願書の提出保留を中止すると、大蔵省が予算を削減して実現は見送られるというパターンの繰り返しであった。そのため、反対闘争も一時は沈滞気味であった。闘争が活発化する転機となったのは、1963年5月、全国医学部長会議が出した「現行のインターン制度は教育的意義が不十分であるばかりでなく、生活保障が全くないためにアルバイトなど医学教育上好ましくない傾向を生み出している。現状改善の見込みなき現在、学部教育の充実によりインターン制度は廃止すべきである」旨の声明であった。

1964年1月、これに呼応して医師試験審議会でも「実地修練制度に関し、その存否をも課題として包含しつつ、医学教育（学部及び大学院並びに卒業後の教育）医療制度を含めて全体として根本的に検討するため、医育及び医療に関する機関並びに関連諸機関、諸団体と緊密に協議しうる体制を早急に発足されたい」との意見書を厚生省に提出した。これによって図らずも、問題の視点が実地修練制度の批判から医学教育全体の見直しに発展した。これを境に、それまで慢性的不満がくすぶっていた状態であった反対闘争の様相が変わり、医学連を中心として全国医学生が、この問題を自分たちの問題として主体的に取り組み始めた。そして三つの要求、現行インターン制度の廃止、医師正式免許の一律要求、1年間の指定病院における義務的実地修練の廃止を目標として反対闘争が盛り上がっていった。

紛争の拡大

当時の文部省国立大学病院実態調査に拠れば、無給医局員なるものの存在は認めておらず、研究生7,964人、大学院生2,372人という形で発表されているが、現実には両者を併せた約1万人が無給医局員であった。これは医師総数のほぼ1割に当たり、大きな社会問題であった。この実態に基づき、現行制度に内在する医学教育、医療の矛盾が大学の管理者と学生の双方から指摘されたわけである。これを契機に、当初のインターン反対闘争は次第に国試ボイコットと大学立てこもりを戦術とする大学の講座制批判、無給医局員の解消、厚生省の低医療政策に対する反対闘争にエスカレートしていった。

東京大学医学部学生自治会は、1968（昭和43）年1月29日、医局無給体制の廃絶を目指して全学ストに突入し、全国的な大学紛争の口火が切って落とされた。1968～69年の全国的大学紛争は、これまでの学内闘争のように自治会や党派を核とせず、全共闘と呼ばれた新たなノン・セクトの大衆的學生運動組織がこれを牽引したことが大きな特徴であった。日大、上智大に機動隊が入り、1969年1月18日、19日の2日間にわたる東大安田講堂での全共闘と機動隊との攻防戦をきっかけとして、地方の大学にも大学紛争の影響が及んでいった。

1969年5月、本学第1外科で無給医局員により結成された医局改革会議が発足し、「医局長の公選、教授以下すべての医局構成員をもって構成する医局会議を医局の最高決議機関とする」との2項目を要求した。卜部教授との数回にわたる団体交渉の結果、この改革案に教授も調印するに至ったが、他の教室はむしろ内容に批判的で、この決議は大方

第7章 医学部 医学部附属病院

の支持を得ることができなかった。その後、第1外科改革会議は二つに分かれ、助教授、講師、助手らが教室員会を結成して対立した。こうした運動は学内全体に波及し、同年10月には第1内科医員会が発足し、その人事委員会が医局員の病院への就職、出張、アルバイトの斡旋を担当し、人事の公募制をとった。

同年5月に金沢で開催された第66回日本精神神経学会総会は、研究発表が行われず、会期中の3日間は総会議事のみにて終了した。また、1970年4月22日から東京千代田区のホテル・ニューオータニで開かれた第73回日本小児科学会総会で、会頭であった本学の佐川一郎は、会頭任期や認定医問題の紛糾のため辞任し、小児科認定医制度は中止された。

1969年12月、本学医学部学生自治会が教授会に対し学生自治の公認など6項目の要求を出し、これがいれられなかったため12月6日の学生大会でストライキを可決し、8日からストに入った。以後、翌年5月に至るまで、5ヵ月間に及ぶ医学部開闢以来の長期ストが続いた。スト中の経緯は『十全同窓会報』第41号及び『百年史以後の三十年史』に詳しいのでここでは述べないが、卒業試験のボイコットと強行をめぐって紛糾が続き、最終的には5月7日の学生大会でスト中止が決定され、学生側はストを解除した。

紛争の決算

学生ストは中止されたが、教室を二分した第1外科の紛争は、相互に多大の犠牲を払いつつも解決せず、その解決は法廷に持ち込まれることになった。1974(昭和49)年3月、裁判所が示した第一審判決を不服として、原告側は名古屋地裁に控訴したが、1977年4月に至り和解の気運が高まり、同年5月28日ついに和解が成立した。結局、教育上の問題は司法の場では解決できず、最後に人の和を重視した結着となった。

そもそもの火種となったインターン制度は、米国の真似にすぎなかったとはいえ、実際にそれを経験した世代は当時を懐かしむ者も多く、制度自体を悪いと考える者は誰もいない。その間の身分保障、経済的保障、指導体制を欠いていたがための反対であり紛争であったわけで、現在の研修医制度もその基本的な考え方は全く変わりはない。問題は、日本古来の師弟関係の枠組みにドイツ医学の柱を持ち込んで構築された医局制度にあり、そこでは教授を師と仰ぎ、先輩の技を体で覚え、ひたすら修練を積むのが弟子たる者の道とされた。そこへアメリカ社会の基本理念である個人の権利と平等思想、豊かな経済基盤に立つ労働契約関係が突如持ち込まれれば、上下の人間関係に軋轢が生ずるのはむしろ当然の帰結であった。その意味から、日本の医学にとって大学紛争は非常に不幸な出来事であったが、一度はくぐらねばならぬ試練であったとも言えよう。

1968年の医師法の改正により、インターン制度は廃止され、代わって診療協力謝金を支払う臨床研修医制度が導入された。この制度では厚生省認可の指定病院で2年間の研修を積むと、開業の資格が得られることになっている。大学病院では3年目からは医員となり、原則として6年目まで在籍できることになった。研修医、医員ともに時間給が支給され、それまで続いた無給副手は完全に姿を消した。研修指定病院の指定基準や指導医の資

格も見直され、その発足以後徐々に研修率は増加し、この制度が定着してきた。

文部省もこれまでのバラバラの教育を見直し、学部教育、卒業教育、附属病院と関連病院の在り方を一貫する制度を考え始めたことは、遅きに失した感は免れないものの、一歩前進と言えよう。医学部長・附属病院長会議も、医学教育に関する在り方委員会、医学部における研究の在り方委員会、医学部附属病院の在り方委員会の三委員会を設置し、医学教育の全般について検討を加えることになった。この在り方委員会は、その後の大学の意志決定方式として一般化していった。

(4) 新しい医学への発展(1970~1989年)

1970年から80年代にかけて医学に起こった革命的進歩は、まさに刮目に値するものがあった。第1にDNAのラセン構造の発見を契機として発展した分子生物学は、あらゆる生命現象を解き明かす原理となり、医学を根底から変えることになった。第2に放射性同位元素が生体構成成分の代謝や生物活性物質の測定に用いられ、ラジオインムノアッセイの開発によって実験科学や臨床検査に大きな進歩がもたらされた。第3にコンピュータを利用した画像機器や超音波医療機器が開発され、画像診断法や核医学の発展に大きく寄与した。第4にコンピュータは医学界にも情報革命をもたらし、新しい病院情報システムや教育システムを生み出した。そして第5に医学がこれら多くの科学技術を取り込んで、新しい分野を広げると同時に専門分化した結果、医療の場では各種の医療技術者を必要とする事態を招来した。こうした激しい医学の潮流に直面して、本学も様々な時代への対応を迫られることになった。

教育研究における変革

1972(昭和47)年3月30日、学校法人金沢医科大学(河北郡内灘町)設置の正式認可が文部省から下り、益谷秀次理事長、小市政男副理事長、大谷佐重郎学長、倉知与志医学部長、吉田清三病院長を中心として発足した。同年6月1日第1回入学式、6月14日開学式が行われ、1974年9月1日には金沢医科大学病院が開院した。この医科大学の設立はその後の新設富山、福井医科大学の先鞭となり、金沢大学医学部との相互交流による学術の発展が期待された。一方、1972年5月、看護学校、診療放射線技師学校、及び衛生検査技師学校が発展的に解消・統合されて、医療技術短期大学部が創設された。今日の医学部保健学科の基礎となるものであるが、その経緯は別章に譲る。

一県一医大の構想に基づき1975年10月1日、富山医科薬科大学が初代学長に平松博を迎えて開学した。翌1976年4月に富山大学から薬学部が、1978年4月に和漢薬研究所が移管され、2学部1研究所の構成で、医学と薬学の一体化を目指した国内初のユニークな大学となった。さらに1978年10月1日、福井医科大学が福井市郊外の松岡町に開学し、初代学長に準備室長であった本学高瀬武平が就任し、1980年に新入生を迎えて開校した。

第7章 医学部 医学部附属病院

なお1986年4月には、当時十全同窓会長であった梶川欽一郎が福井医科大学学長を継いだ。

学内では1967年6月、医学部附属神経情報研究施設が設置され、施設長は歴代教授が併任したが、1970年4月、情報伝達部門の初代教授に根岸晃六が就任した。1976年5月、神経物性研究部門が増設され、初代教授に本学第1解剖学教室の中村俊雄が選出された。さらに長年の念願であった医学部附属動物実験施設が同年5月に設置され、その工事が1978年9月26日竣工した。本施設は医学部、附属病院、がん研究所、薬学部、医療技術短期大学の共同利用施設であり、日本海側の大学としては最初の施設で、動物実験のレベル向上に寄与した。

金沢大学医学図書館は1969年に竣工して以来、10年の歳月を経たが、従来の閉架方式の運営では対応しきれないので、1979（昭和54）年夏期休暇の間に、校費700万円を捻出して開架方式に切り替える工事を行い、館内の模様は一変し、利用者も増加した。2階には情報検索用のオンラインシステムも設置され、広く学内で利用されることになった。

金沢大学宝町キャンパスにおけるラジオアイソトープ（RI）を用いた研究は、従来、旧RI施設においてなされていたが、RIを使用する研究の急速な増加に伴い、総合RIセンターの必要性が1970年代後半より論議されていた。こうした背景の下に、1980年4月、全国で第7番目のRI総合センターとして設置が決まり、1981年7月に工事竣工、10月13日に開所式が挙行された。これによって、従来問題の多かったRIの管理運用が根本的に改善され、研究自体も促進されることとなった。

分子遺伝学の発展に伴い、組換えDNA実験技術が開発されたことにより、あらゆる生物について遺伝子DNAのクローニングと遺伝情報の解析が可能となった。その結果、遺伝子操作実験は飛躍的な発展を遂げてきた。本学においても1979年、がん研究所内に組換えDNA実験指針に基づくP2実験設備が設けられ、遺伝子研究が進められてきた。その過程で全学共同利用の専門施設の必要性が出てきたため、金沢大学遺伝子実験施設が1985（昭和60）年4月に設置されるに至った。1986年3月、宝町キャンパス内に工事が竣工し、同年7月25日に開所式、10月16日より共同利用が開始された。

また、臨床検査についての教育研究を担当する臨床検査医学講座が、1986年4月に設置され、同時に大学院医学研究科内科系臨床検査医学が設置された。これに伴い、附属病院検査部の松原藤継教授、橋本琢磨助教授がそれぞれ医学部教授、助教授に配置換えとなった。

診療における変革

附属病院では1972（昭和47）年に核医学診療科が新設され、シンチグラフィーによって従来のX線撮影ではできなかった肝臓や甲状腺の形態的描写が可能となった。翌1973年3月、久田欣一が教授に昇任し、全国に先駆けて核医学講座が誕生した。同年5月、第1外科教授に岩喬が着任してからは心臓外科が診療の中心となり、先天性心疾患、弁膜症に対する手術や不整脈の外科的治療が精力的に行われた。

1975年には、1968年より活動を開始していた輸血部が正式に認可され、第3内科教授服部絢一が部長を併任した。また第3内科では、白血病に対する骨髄移植も開始された。1976年7月、頭部専用X線CT装置が中央診療施設放射線部に導入され、中枢神経系疾患の診断に威力を発揮した。1977年1月から歯科口腔外科の診療科教授に玉井健三が就任し、口腔内腫瘍、奇形、重症感染症などの治療を開始した。さらに1982年4月には、医学部に歯科口腔外科学講座が新設された。

1978年2月、村上誠一が麻酔学講座の専任教授に選出された。1965年4月に麻酔学講座が設置されて以来、赤須、豊田、黒田各教授による併任が続いていたが、ようやく講座は独立して歩み出すことになった。なお麻酔学講座は、1990（平成2）年6月、麻酔・蘇生学講座に改められた。また同年、附属病院薬剤部に専任の教授が置かれ、本学薬学部製剤学教授で薬剤部長を併任していた山中月中が選出された。これによって医療と薬剤部の密接な連携の基盤が固められた。

1979年3月から附属病院旧館の改修工事が開始され、翌年2月に完了し、第6病棟として内科系病棟を入れ再出発した。後に透析センター、輸血部、物療部治療室、神経内科研究室も入ることになった。久しくその開設が望まれていた神経内科は、病院診療科として、1981年度予算に計上され、1982年1月、長崎大学より高守正治が教授として着任した。1991年4月、医学部に神経内科学講座が新設され、同教授は医学部に配置換えとなった。

1983年9月より外来診療棟増築工事が開始され、翌年3月に完了した。地階に中央病歴室、1階に整形外科、2階に麻酔科と検査部より独立した内視鏡部、3階に歯科口腔外科の診療科が置かれた。かねてより三次救急に対処するため救急部の新設が検討されてきたが、1983年度になって概算要求が承認され、1984年1月より業務を開始した。同年4月より高密度無菌治療部が、骨髄移植の際の感染防止を目的とする中央診療施設として発足し、第3内科教授の松田保が部長を併任した。

また病院業務の電算化も長年の懸案であったが、1984年度予算に病院業務合理化推進案として電子計算機導入経費が計上された。病院としては、電算化により医療業務の合理化、自動化、省力化並びに患者サービスの向上を図り、あわせて蓄積された医療情報を利用することによって、総合的な病院情報システムの構築を目指した。1984年10月、改装工事成った電子計算室において病院業務電算化始動のセレモニーが行われ、同年12月医事業務、病歴管理業務が本番稼動した。1986年5月、院内措置として医療情報部が設置され、初代の部長は神経精神科教授山口成良が併任した。

1986年2月には集中治療部が発足した。既に設置済みの救急部と合同して、呼吸、循環、代謝などの重篤な急性機能不全患者の治療に当たるとともに、集中治療医学を中心とした教育、研究にも携わることになった。1987年5月に院内の病理検査、診断を集中して行う病理部が中央診療施設の一つとして設置された。病理部長は検査部長松原藤継が併任し、副部長には野々村昭孝が任命された。また画像診断の最先端をいくMR-CT装置（磁

第7章 医学部 医学部附属病院

気共鳴診断装置)が1987(昭和62)年に導入され、MR-CT装置棟が3月に竣工し、その開所式が5月14日行われた。これは、従来の画像診断法(超音波診断、X線CT、血管造影など)を超える威力を発揮し、中枢神経系の画像診断に不可欠の手段となった。

地域医療への貢献

金沢大学医学部卒業生の総数は9,630名、現存医師数は5,600名を数え、北陸3県を中心に全国で医療に従事している。石川県における医師数は、人口10万人当たり220と全国平均176を大きく上回り、本学の地域医療への貢献度は高い。また本学と関係を持つ公立関連病院は、石川県46、富山県23、福井県15、その他4、合計88病院に上り、人事の交流と地域医療への貢献を目的として、1964(昭和39)年以来、毎年関連病院長会議が開催されている。本学附属病院は北陸3県における中核病院として高度先進医療を担当し、一日平均外来患者数1,400、入院患者数730、年間外来患者延べ36万人、入院患者延べ27万人を数え、病床稼働率93%は国立大学附属病院中、第1位の成績である。入院患者の地域別分布を見ると、金沢市内41.7%、加賀地区27.6%、能登地区15.3%、富山県10.1%、福井県2.7%、その他2.6%である。この数字からも北陸の中核病院としての位置付けがうかがわれる。

(5) 21世紀の医学・医療へ向かって(1989~1999年)

1988年秋より病が重篤であった裕仁天皇は、ついに1989年1月7日早朝崩御された。波乱の昭和時代の幕が閉じ、翌8日より「平成」時代の幕開けとなった。それまで経済活動を柱として右肩上がりにひたすら成長を続けてきた日本の社会も、バブルの崩壊で陰りが見え始め、人口の高齢化、少子化、疾病構造の変化、医の倫理、環境汚染などが社会のキーワードとなってきた。一県一医大の結果として医師過剰時代に入り、医師の定年制構想が浮上して、医学の果てしなき進歩にも疑念が持たれるようになった。

こうした時代の変化を象徴するごとく、金沢大学は金沢城内のキャンパスから市の郊外、角間地区に総合移転することが決まった。第一次移転として、文・法・経済学部、附属図書館、大学会館が移転し、1989(平成元)年10月5日竣工式と祝賀会が開催された。金沢大学はここに新しい歴史の第一歩を踏み出した。近い将来、第2期として薬学部、工学部、がん研が移転することになる。

教育研究並びに入試制度の改革

医学の急激な進歩に伴って医学知識の変革が激しくなり、今日の真理がたちまち古くなる事態が生じたため、医師は生涯にわたって自己研修を迫られることになった。また大学においては知識を教えるよりも、知識を獲得する方法を教えることが求められるようになった。教育法の変革が時代の要請となったため、大学における教育研究の高度化、個性化、

活性化の具体策について諮問されていた大学審議会は、大学院制度の弾力化並びに大学教育の改善について文部大臣に答申し、これを受けて1991年6月3日に「大学設置基準の一部を改正する省令」が定められた。従来の大学設置にかかわる細かい規定や区分を削除し、大学に柔軟・多様な教育と自己評価システムの導入を求めたものである。それを受けて「学校教育法の一部を改正する法律」も1991年7月1日から施行された。これによって医学・歯学における専門課程（4年）と進学課程（2年）の区分が廃止され、修業6年の一貫教育が可能となった。

医学部教務委員会（委員長高守正治）でも、医学部における学生教育は医師の生涯教育の一貫であるとの視点に立ち、将来の医学・医療の様々な分野に共通した基本的知識、技術、学習態度を身につけることを目標にして、6年一貫教育のカリキュラム編成に取り掛かった。従来の一般教育科目を大幅に見直し、基礎教育科目に医学入門、動物実験概論をあて、4年冬学期に基礎講座に配属、6学年に臓器別総合講義を行うなどの新しいカリキュラムが編成された。この基本方針は委員長渡辺洋宇、小林健一に受け継がれ、系統講義を減らし、少人数のベツトサイド教育を重視する方針の下で変革がなされつつある。

1992年1月、新しく医学部長となった竹田亮祐の下で、医学部教育等評価委員会（委員長山口成良）が設置され、将来我が国の医学・医療を担う医師を養成する機関として、その社会的責任を果たしていくためには、不断の自己点検、評価を行い、改善への努力をしていく必要があるとの視点に立って、教育研究白書が2年ごとに出されることになった。既に『金沢大学医学部大学院医学研究科教育と研究の歩み1993』と『金沢大学医学部教育と研究の歩み1995』が刊行され、1997年版も井関委員長の下で刊行された。

医学部入学試験についても、将来医師となる学生に多様な人材を求めため、1992年度の医学部入学選抜から分離・分割方式（前期・後期日程）で個別学力試験を行うように改められた。入学定員は前期90名、後期10名である。1993年度からは、帰国子女も前期日程の定員として取り扱うことになった。また従来、医師国家試験は4月上旬に行われていたが、1993年の第86回からは3月20・21日に行われることとなり、臨床実習のスケジュールが10月中終了に繰り上げられた。その後も、医学部入学試験の方式は引き続き各大学で工夫がなされ、優れた人材の選抜方法が検討されている。本学でも1998年度から面接試験が導入された。

ゆとりある生活へ向けて

1988（昭和63）年に閣議決定された「豊かさを実感できる多様な国民生活の実現」「労働時間の短縮と自由時間の充実」を受けて、附属病院科長会では1990（平成2）年9月、「週40時間勤務制問題検討会」（委員長高島力）を発足させ検討を重ねた結果、1991年4月21日の週から、全診療科の土曜日外来休診と診療受付時間を8:30～12:30に変更することを決定した。さらに1992年5月2日より、病棟部門を除く週40時間勤務制が実施された。この間院内スタッフの協力体制で、診療の質とサービスの低下を来さないよう努力

第7章 医学部 医学部附属病院

がなされ、外来患者数の大きな変動やトラブルもなく移行できた。勤務時間の短縮が各個人において診療の充実と向上につながれば、変革の意義は大きいと考えられる。病院に並んで医学部においても、同年5月1日から完全週休2日制を実施した。しかし、医学部図書館とアイソトープ総合センターは利用者の便宜を考えて、従来どおり土曜日も開館している。

医の倫理の向上へ

先端医療技術の進歩は、様々の場面で医療が生命の尊厳にかかわる事態をもたらした。遺伝子操作、臓器移植、脳死判定、体外受精などの問題が一般社会の強い関心事となったため、本学医学部においても、1992年3月、従来あった「医学研究に関する倫理準備委員会」を「医学研究等に関する倫理委員会」とし内規を改めた。また附属病院内にも、同年5月、「脳死判定委員会」の設置が決議された。1997年10月から実施される脳死移植法では、臓器提供を前提とした脳死判定が要求されるため、脳死の判定規準や委員会の構成、運用には新たな見直しが行われている。

一方、医療の現場にインフォームド・コンセントを定着させるため、厚生省、日本医師会をはじめとして様々の検討が行われている。医師と患者の在り方として今後は避けて通れない問題なので、附属病院でも、1996年7月「説明と同意」に関する文書の書式を統一した。しかしその本質は、医師個人の診療態度と患者自身の意志決定にあるため、一般に定着するか否かはいまだ予断を許さない。さらに、1996年6月26日に公布された薬事法の改正により、国際的基準に合致したGood Clinical Practice (GCP) が実施されることになり、インフォームド・コンセントの原則は薬剤開発にかかわる臨床試験にも適応されることとなった。1997年4月より附属病院でも、市村藤雄を委員長として、院外からも委員を加えた新しい構成で受託研究審査委員会が発足した。国際的に信頼性の乏しかった我が国の臨床試験が、その信頼を回復できるか否かが問われている。

医療の将来を担う情報システム

金沢大学総合病院情報システムの一環として、長年準備してきたオーダリングシステム（発生源入力）が1992（平成4）年1月、外来処方部門から稼働し始め、以来、検査オーダ、病名オーダ、予約オーダ、注射オーダ、画像生理機能検査オーダが次々に加えられていった。同年4月、医療情報部が正式に設置され、翌1993年4月、小児科助教授佐藤保が初代教授に就任した。さらに院内各部門システムも整備され、院内業務のほとんどが病院情報システムに乗るまでになった。そのため1992年度に更新したメイン・コンピュータの処理能力を超えて業務に支障を来すため、1996年度に記憶容量を倍増した。幸い、1997年度でシステムの更新が認められたので、端末器をすべてパソコンに換え、1998年1月より大幅な機能増強を図った。新システムは学内ネットワークはもとより、全国の大学ネットワークとも接続され、電子メール機能が加わることにより、全国並びに地域の医

療機関と医療情報を交換できる基盤が整備された。さらに今後、画像転送システムや診療支援データベースが整備されれば、医療情報の活用は飛躍的に発展することが期待される。

新しい情報技術の利用によって、厚生省電子カルテ研究班の構想も固まり、衛星通信を利用した情報メディア、スペース・コラボレーション・システム（SCS）やハイビジョンによる大学病院衛星医療情報ネットワーク（MINCS-UH）も本学に設備された。近い将来、大学相互の隔壁を超えて、質の高い学術情報の交換がなされ、医療、保健、福祉を一本化した社会システムづくりの構想も夢ではなくなったと言えよう。

宝町団地の再開発

かねてからの念願であった宝町団地の再開発計画が、1997年度の概算要求で認められ、その第一歩として年度内に病院再開発の第一期工事を着工する運びとなった。開発の基本理念は、高島前病院長より「バリア・フリー」と提唱された。すなわち高齢者、障害者にやさしい病院であるとともに、院内・院外に壁のない人間中心の医療を提供することを掲げて、21世紀にふさわしい病院をつくる構想が渡辺病院長の下に進められている。医学部及び保健学科の再開発が完成した暁には、宝町団地に面目を一新した学術と医療の殿堂が誕生することになる。

最後に当たり一言。個人にかかわる記録、教室の動向、附属施設や十全同窓会関係の記事は各教室史並びに年表に譲り、スペースの都合から本稿で触れることができなかったことを容赦されたい。

2 医学科基礎講座の沿革と業績

（1）解剖学第1講座史

沿革

1862（文久2）年の加賀藩種痘所に始まる金沢大学医学部の幼籃期に、解剖学を講じた教官としては、オランダ人スロイス、ホルトルマン、本学出身の金子治郎らがいる。1868（明治元）年、本学創立者の一人黒川良安が長崎から持ち帰ったフランス製人体模型（キンストレーキ）は、その後長年にわたり解剖学教育に用いられ、医学部記念館に現存している。1887（明治20）年8月、本学は4年制の第四高等学校医学部となり、翌1888年6月、解剖学・組織学・病理学の教授として東京大学卒業の川瀬泰輔が着任した。1893年9月、川瀬教授にかわり東大大学院で解剖学を専攻した鈴木文太郎が着任し、初代の専任教授として解剖学教室の基礎を築いた。1894年7月、本学は第四高等学校医学部と改称され、解剖学教室は法制上2講座になったが、教授は一人のままであった。同年

第7章 医学部 医学部附属病院

10月にはじめての解剖体慰霊法要が卯辰山の解剖墓地で営まれ、以来今日まで毎年続いている。1896年7月鈴木教授退任の後、8月に当時大阪医学校教諭の金子治郎が解剖学教授として迎えられた。

1901（明治34）年4月、本学は四高から分離独立して金沢医学専門学校となり、現在の小立野の地にまず病院が、1911年に校舎が建築されたが、解剖学教室が現在地に移ったのは1915（大正4）年である。解剖学教室は2講座2教授制となり、1901年5月、第2講座の初代教授として四高医学部講師の石川喜直が就任して解剖学・局所解剖学を担当し、第1講座の金子教授は、解剖学・組織学・胎生学を担当した。1923（大正12）年3月、本学は金沢医科大学に昇格した。翌1924年に退官した金子教授にかわり、当時第2講座教授の佐口栄が第1講座教授に就任した。1934（昭和9）年10月、現存の解剖学標本庫が完成した。

1949年5月、学制改革に伴って金沢大学が発足し、金沢医大は金沢大学医学部となった。1952年4月、医学部に電子顕微鏡が設置され、研究・教育に利用され始めた。1953年7月、第3解剖学講座に定員を置くことが決まり、当時第1講座助教授の本陣良平が第3講座主任となった。1955年に大学院医学研究科が発足した。同年6月佐口教授が急逝し、本陣助教授が1956年1月に教授に昇任し、第1講座の主任となった。1966年、現在の基礎研究棟が完成し、また翌1967年に解剖、法医、病理のための独立した解剖棟が完成して、9月から解剖学実習を新実習室で行うようになった。1985年9月に本陣教授が金沢大学学長に就任のため退任し、後任教授として、当時新潟大学助教授の近藤尚武が1986年4月就任した。同年から翌年にかけて、組織学実習用の光学顕微鏡が全面的に更新された。1989年7月、近藤教授が東北大学に転出した後、1990年5月に助教授の井関尚一が教授に昇任して現在に至る。第1解剖学講座は、従来から医学部学生に対して、主として組織学・発生学・内臓学の講義並びに組織学実習の指導を担当している。

教育と研究

第四高等中学校時代までは解剖実習はまれで、生徒はもっぱら模型で勉強していたようである。四高医学部では、1年で解剖学と組織学、2年で解剖及び組織学実習、3年で局所解剖学が教えられた。鈴木教授は教材標本の充実に努力し、上手な図とユーモアを交えた名講義を行った。鈴木教授の下で行われた研究には、右鎖骨下動脈の破格、甲状腺の比較解剖、髄鞘染色法などがある。金沢医専時代、金子教授は解剖実物標本の製作に意を用い、本学の標本庫の名を世に知らしめた。研究業績の「鎌状縁および腱弓の人工作成」（*Arc. Entwickl. Mech.*, 18, 1904）は、我が国における発生機構学の嚆矢として評価されている。1922（大正11）年10月、学制頒布年記念に際し、金子教授は医学界からただ一人、在職40年の教育功労者として表彰を受けた。金子教授の門下から佐口栄、岡嶋敬治、岡本規矩男の3教授が輩出した。金沢医大時代から第1講座が組織学実習、第2講座が解剖学実習を行うようになった。

佐口教授時代（1924～1955年）

佐口教授は細胞学の研究に主力を注ぎ、その業績を欧文専門誌や同教授創刊の *Zytologische Studien*（後に *Cytological and Neurological Studies*）に発表した。また銅ヘマトキシリン・ミトコンドリア染色、中性赤生体染色液胞固定など、新しい組織標本作成法を考案した。佐口教授時代には、表皮細胞のミトコンドリア、膵臓の内及び外分泌細胞の分泌過程、線毛上皮細胞の線毛などの研究に始まり、以後、細胞内小器官と細胞核、特に核小体との関連について研究が進められ、培養細胞における核小体の生物学的意義が追究された。佐口教授の門下から、石丸土郎、本陣良平両教授が解剖学を専攻した。

本陣教授時代（1956～1985年）

戦後の新制金沢大学医学部になり、本陣教授の時代には、教室の研究の主体は神経系となった。神経染色法と神経軸索変性追求法に加えて各種の組織化学的方法、また光学顕微鏡に加えて電子顕微鏡を用いて、広く臓器における末梢神経終末分布を研究した。電顕及び凍結割断レプリカ法を用いた神経線維とその被鞘装置及び神経終末、神経膠細胞などの微細構造の研究、電顕及びX線回折法を用いた神経髄鞘の単位膜における脂質分子の構築の解明、さらに両棲類の卵黄粒蛋白質の高次結晶構造の発見など、多くの業績が生まれた。本陣教授の門下からは、中村俊雄、高橋暁、平松京一、水上稔の4教授が輩出した。

近藤教授時代（1986～1989年）

近藤教授は、光顕及び電顕的免疫組織化学、さらに新しい方法である遺伝子組織化学（*in situ hybridization*）を駆使して、自律神経節や神経終末、頸動脈小体、副腎髄質、小脳、松果体等における種々の神経特異的ペプチドの発現と局在について研究を行い、多くの業績を残した。また無包埋切片の電顕観察による細胞質の微細構造の研究や、消化器系の物質局在の研究も行った。

井関教授時代（1990年～現在）

1997（平成9）年9月現在、第1講座の研究者は井関尚一教授、天野修助教授、山本美由紀助手、沼田雅行助手、范莉英助手、若山友彦大学院生であり、組織学・発生学の教育と研究を行っている。研究対象は、ラットやマウスの広範な器官・組織、例えば消化管上皮、唾液腺、精巣、神経節、胎仔組織などであり、光顕及び電顕的免疫組織化学や遺伝子組織化学を用い、細胞の増殖や分化に關与する蛋白質の発現と局在について研究している。これまでの主な業績として、消化器系における脂肪酸結合蛋白質、唾液腺における各種の細胞増殖因子、神経再生における神経成長因子、精子発生におけるDNAメチル基転移酵素、発生におけるプロトンポンプ、肝と腎における尿トリプシンインヒビターなどに関する研究がある。

将来の課題

形態学の主流は、生物体の構造という「かたち」を基盤にしつつも、その中で特定の物質が存在する「場所」を追究することに移っている。最新の分子生物学の成果に立脚し、組織化学の手法を用いて組織・細胞における生理活性物質の発現と局在を調べ、また種々の生理的また実験的な条件下でその変化を調べることにより、当該物質及びそれを産生する組織・細胞の役割を解明することが当講座の研究目標である。これまでのホルモンや細胞増殖因子といったリガンドの発現のみならず、それらの受容体や細胞内シグナル伝達に関する物質の発現についても研究を進めたい。成体における発現のみならず、発生過程における物質発現をも対象とし、また *in vivo* の生物体のみならず、培養した器官・組織をも材料として用いたい。教育面では、学生に医学の基礎としての細胞学・組織学の知識を得てもらうこと以外に、生命科学の最先端としての形態学の面白さをも伝えるようにしたい。

(2) 解剖学第2講座史

1901(明治34)年4月、第四高等学校から医学部は分離独立し、金沢医学専門学校となった時に法制上誕生した解剖学第2講座は、1941(昭和16)年金沢医科大学の時に、岡本規矩男の主唱によって第2講座の実態が整った。

1949年5月、総合大学として金沢大学が発足し、金沢医科大学は金沢大学医学部となり、石丸士郎が引き続き講座主任となった。石丸は、肉眼解剖学の研究のほかに、ゴルジ装置の研究をはじめ、色素の発生機序、赤血球のペルオキシダーゼ、肝臓・耳下腺・胃底部の微構造など細胞学的研究に及ぶ広範な業績を挙げた。1960年4月、山田致知(岡山大学助教授)



写真7-3 岡本規矩男教授

が、石丸(同年3月停年退官)の後を受けて解剖学第2講座の教授に就任した。山田は本学に来任する以前は、鯨類の解剖学的並びに分類学的研究に従事していたが、金沢大学に着任後は、人体解剖学を形態形成原則に基づく説明科学に進化させる必要性を主張し、比較解剖学並びに発生学との関連性に力を注いだ。教育と研究との一体化という信念の下に、精緻な解剖に基づく研究は類を見ない。それらの貴重なデータは『解剖学実習資料集』第1巻と第2巻に収録されている。山田は、メスとピンセットを用いた文字どおりの肉眼解剖学の本来の姿に徹した研究を推進した。

山田の在任の時代は、全国の解剖学者が解剖実習に必要な解剖体確保に多大な貢献をした時代であった。解剖体が慢性的に不足していた1955年ころにおいて、それぞれの大学

は「引き取り者のいない死体の交付（原始的献体）を市町村長に遮二無二お願いします。」という“急務対策”が先行し、自らの篤い意志による教育への献体の理念が芽生えていない状況であった。1965（昭和40）年ころになると、医学部、医科大学、歯学部、歯科大学の新設が相次ぎ、解剖体の不足は一層深刻化した。ほとんどの医学部や医科大学は、二人の医学生に対して解剖体1（歯学関係は4人の学生に対して解剖体1）という学校設置基準を満たしていない状況であった。北陸の地も例外ではなかった。山田は、この中において、「無条件・無報酬の献体」こそが正しい献体であり、これこそが献体不足に対する根本的対策である。」ということ鮮明にし、1969年に北陸の地で献体運動推進組織の「しらゆり会」を結成した。初代理事長（後に会長）には、戦後の富山県の教育に多大の貢献をした中井精一が就任した。山田の念頭には、献体に支えられて本格的な肉眼解剖学の教育と研究が発展する姿こそが理想の姿である、という理念があった。献体の趣旨を広げる動きは、やがて全国的な献体運動に発展し、献体法の制定に至った。1970年に日本解剖学会に解剖体委員会が設けられ、山田が初代委員長になった。そして、1971（昭和46）年4月に篤志解剖全国連合会が発足した。その後、しらゆり会の会員の数は5,000名となり、1997（平成9）年4月、金沢大学しらゆり会、富山医科薬科大学しらゆり会、福井医科大学しらゆり会に分離・発展することになった。現在、金沢大学しらゆり会には約1,000名の会員がいる。

この間、1982（昭和57）年8月には小川平二文部大臣（当時）によって、「献体者に対する感謝状贈呈要項」が裁定され、篤志献体という行為が国の認めるところとなった。1983年5月12日には「医学及び歯学の教育のための献体に関する法律」が衆議院本会議、同18日には参議院本会議に上程され、可決された。

1987年7月、田中重徳（琉球大学）が山田（同年3月停年退官）の後任として就任した。人体解剖学の教育は、20余年の献体運動のおかげで、「献体が物好きの行為ではなく、教育的見地からしても意義のある尊い行為である」ことが国に認知され、献体数は充足し、人体解剖実習はカリキュラム上において、プライマリーとアドバンスの2段階のコースが組める恵まれた状況になっている。講座の研究は人体解剖学の研究とともに、免疫組織化学の手技を使った末梢神経の発生の研究に取り組んでいる。田中は肉眼解剖学の中にあ



写真7-4 石丸四郎教授



写真7-5 山田致知教授

第7章 医学部 医学部附属病院

って、いわゆるハイデルベルグ学派（比較解剖学、比較発生学）の流れをくむ一人である。当初の研究は、板鰓類や両生類の脊髄神経と鰓弓神経の比較解剖学的な研究が主要であったが、ドイツ留学後は、酵素組織化学的研究や電子顕微鏡を用いた肉眼解剖学以外の研究にも従事するようになった。最近は、免疫組織化学的手法を用いてニワトリ胚の末梢神経を全胚標本の状態で染色し、立体的に直接観察する方法の考案に成功し、この方法を用いて、脳神経の発生経過の詳細を明らかにした。金沢大学医学部に着任してからは、ニワトリ胚のほかに哺乳動物の胚の末梢神経、神経堤細胞、心臓・血管並びに筋節を同時染色し、その発生過程を追跡することによって人体の構造を形態形成の観点から明らかにしようとしている。往時の比較発生学がもたらした、菱脳節や鰓弓節に関する古典的で地味な形態形成理論は、これまで学者の戯れごととされて、解剖学の教科書から姿を消していたが、分子生物学の発達により、これらの節の形成にかかわる遺伝子が明らかにされ、再び代表的な解剖学の教科書に記載されるようになった。



写真 7-6 田中重徳教授（前列左から2番目）

（3）解剖学第3講座史

講座の沿革

1949（昭和24）年、学制改革により金沢大学が発足し、1953年7月、第3解剖学講座に定員を置くことが決まり、当時第1講座助教授の本陣良平が第3講座に配置換えで講座主任となった。1956年1月、本陣良平は第1講座教授に昇任、1958年7月、第2講座助

教授の松田健史が第3講座に配置換えで講座主任となった。1976年4月、松田健史は富山医科薬科大学の教授として転出し、当時講師の高橋暁が後任の助教授かつ講座主任となった。1981年4月、高橋暁は福井医科大学の教授として転出し、当時京都大学助教授であった中村泰尚が第3講座の初代教授として着任した。これをもって28年間、教授不在の不完全講座が解消された。1990年5月、中村泰尚は東京医科歯科大学教授に転任した。1991年1月、助教授の工藤基が第3講座の第2代教授に就任した。1995年5月、助教授の森泉哲次が信州大学の教授として転出した。1998年4月、工藤基は滋賀医科大学教授に転任した。1999年3月、第3代教授として大阪大学より小川智が着任した。

教育、研究の推移と展望

教育において第3講座は、脳実習及び解剖学実習の一部を担当してきた。松田健史助教授は、北陸日本人の形質人類学的研究及び染色体の研究を含む人類遺伝学的研究を行い、高橋暁助教授は、感覚器の電子顕微鏡的研究を行った。

初代教授の中村泰尚が着任してから、本格的な神経解剖学講座として、神経解剖学総論と各論を講義し、脳実習などの中枢神経系の解剖学実習を飛躍的に充実させた。中村教授は、最新の神経線維結合研究法であるHRP法とオートラジオグラフィ法を用いて、それまで知られていた大脳基底核を中心とする神経線維連絡を見直し、さらに発展させて運動機能に關与する種々の神経回路網を解明する研究を行った。この中には、大脳皮質からの下行性投射を中継する間脳中脳境界領域の核群、基底核神経回路に属する核群、脊髄運動ニューロンに投射線維を送る核群などが含まれる。

第2代教授の工藤基も神経解剖学の講義と脳実習を担当し、その内容を高いレベルで維持した。工藤教授は、HRP法とオートラジオグラフィ法を用いて、聴覚伝導路の研究及び大脳皮質聴覚野の比較解剖学的研究を行い、聴覚生理学に世界的貢献をした。教室では聴覚伝導路のほかに、嗅覚伝導路や大脳基底核に関する線維連絡の研究が行われた。さらにその後、形態形成の原則を神経系において追究する方向の下に、発生学的研究が行われた。具体的には、最終分裂時にラベルした神経細胞について、線維連絡や神経伝達物質発現を追究したり、幼若動物において損傷後の神経細胞の可塑性を調べる研究が進んだ。

現在、第3講座の教官は尾小山重雄講師、北尾康子助手、河野純助手であり、神経解剖学・発生学の教育と研究を行っている。

人事（歴代教授の略歴）

中村泰尚教授 1938（昭和13）年11月12日京都市生まれ。1964年4月京大医学部卒業後、京大解剖学の岡本道雄教授に師事し、1969年大学院医学研究科修了。1969年4月京大助手、1975年7月助教授。1977年8月から1年間米国ペンシルバニア大学へ留学。1981年4月金沢大学教授に就任し、1990年5月東京医科歯科大学教授に転任した。

工藤基教授 1950（昭和25）年3月9日京都市生まれ。1975年3月岡山大医学部卒業後、

第7章 医学部 医学部附属病院

助手として岡山大解剖学の新見嘉兵衛教授、熊本大解剖学の川村祥介教授、京大解剖学の水野昇教授に師事。1983年9月から2年間米国フロリダ州立大学留学を経て、1985年8月金沢大学助教授。1986年8月より半年間、豪州モナッシュ大学へ留学。1991（平成3）年1月教授に昇任し、1998年4月滋賀医科大学教授に転任した。

（4）生理学第1講座史

本学で生理学の授業がはじめて行われたのは、1870（明治3）年、金沢医学館の時期であった。以来、学校の名称は、金沢医学所、金沢医学校、石川県甲種医学校、第四高等学校医学部、金沢医学専門学校、金沢医科大学と変わったが、当時のほとんどの学校で生理学の授業時間数は200余時間に及び、今日のそれに比して大差がないことには一驚に値する。

1923（大正12）年12月に上野一晴が、小立野の金沢医科大学の生理学担当教授として赴任した。翌1924年9月には生理学教室が竣工し、ここに上野教授の指導によって本格的な実験生理学の灯が金沢に点じられた。しかし、上野教授は1947（昭和22）年暮れより病床につき、1947年3月7日逝去した。上野教授亡きあと、大井成之助教授が教室主任となった。

「国立学校設置法」の公布により、金沢医科大学が金沢大学医学部になって間もない1949年6月、当時長崎医科大学教授の齋藤幸一郎が当教室の主任教授に就任した。1954年には大学院設置の機運が熟し、同年12月1日、新設の第2生理学教室の初代教授として、東北大学助教授岩間吉也博士を迎えた。かくして、従来の生理学教室は第1生理学教室と呼び、植物性機能に関する生理学の講義と実習を担当することになった。1968年10月には医学部校舎の改築が完了し、第1生理学教室も現在の医学部基礎南棟3階に移転した。

1973年3月に齋藤教授が停年退職し、しばらく本田良行助教授を講座主任として教室の運営が行われたが、1974年3月本田助教授の千葉大学教授就任に伴い、同年10月に名古屋大学環境医学研究所から永坂鉄夫が第3代教授として就任し、1998（平成10）年3月に停年退職した。翌1999年1月、第4代教授として東京大学より多久和陽が着任し、現在に至っている。

上野教授以降の歴代教授の略歴及び当時の教室業績は、以下のごとくである。

初代上野一晴教授 1893（明治26）年3月19日、熊本県八代町生まれ。1918（大正7）年12月東大医学部を卒業、直ちに同大学生理学教室永井潜教授の門に入った。1920年より欧州諸国に留学、主として英国のラングレー教授の下で研究を重ね、1923年10月帰国、直ちに金沢医大へ赴任した。着任早々、金沢医学会（1923年12月）において、「ニコチンによる蛙筋の収縮とクレアチン生成について」と題して英国留学中の研究業績を発表しているが、恐らくこれは就任演説であったのであろう。上野教授自身の著述としては、『人体の科学』（1931年）、『生理学』（1933年）、『最新小生理学』（1940年）、『解説医学用羅典

語集』(1951年)がある。『羅典語集』は教授の死後出版されたものである。教授は1948年3月7日金沢医大附属病院で胃癌のため逝去した。享年54才。

上野教授時代の研究業績を通覧すると、研究は幾つかの系統に分かれるが、そのうち最も重要なものは、20カ年にわたり継続された心臓に関する研究である。取り扱われたテーマは、刺激伝導系の機能とその回復、これらに対する自律神経、諸種薬物やイオンの作用に関するもので、研究資料には各種の温血・冷血動物の心臓が用いられ、心拍数の機転に関する詳細な実験的検討が加えられた。また心電図に関する研究もケンブリッジ製心電計を駆使して早くより着手され、心臓各部の心電図についての新知見が挙げられた。1932(昭和7)年より1938年にかけて、各種神経に含まれる神経繊維の太さに関する統計学的研究、神経の太さとその機能の関係についての研究が報告されている。その他、上野教授着任当初の研究として、血管反射、呼吸機能、血圧、蟾蛙の皮膚色素、腎灌流実験、骨格筋の仕事などの研究が行われ、第二次世界大戦中から戦後にかけて心臓内神経、神経終末における液性伝導、筋組織に対するアセチルコリン及びニコチンの作用などの研究が報告されている。第12回日本生理学会大会が1932年7月、上野教授の当番幹事の下に金沢市にて開催された。出演総数206、参加者数約200名であった。

第2代齋藤幸一郎教授 岡山県出身。1908(明治41)年3月21日生まれ。1931(昭和6)年京大医学部を卒業し、直ちに同大学生理学教室第1講座に入り、正路倫之助教授の下で血液、呼吸の生理学を修めた。その後、陸軍技師、京大附属臨時医学専門部教授、山口県立医専教授、長崎医大教授を歴任し、1949年6月30日、上野教授の後任として、当第1生理学教室教授に就任した。その後20余年にわたり生理学発展に寄与したが、1973年停年退職した。齋藤教授は、1994(平成6)年12月11日心不全のため逝去した。享年86才。

齋藤教授時代の研究業績は、1949年より1953年にかけて、疲労判定法としてのドナジオ反応陽性物質の本態とその排泄機転に関する研究を行い、その疲労判定法としての価値を批判した。また、麻酔薬の心臓機能に及ぼす影響、赤血球浮遊液のカタラーゼ能、カタラーゼの不能動化と再能動化、赤血球浸透抵抗などの研究がある。その後、酸塩基平衡の研究に着手し、血液、保存液、赤血球内容の酸塩基平衡、腎の酸塩基平衡調節能などの研究が行われた。1955年頃微量血液用ガラス電極と循環動脈血用ガラス電極の試作に成功し、これを用いて、呼吸の化学的調節作用の解析にある程度の成功を収めた。その後、更に低体温下における呼吸機能に関する研究を進めた。

一方、1958年頃より遠心限外濾過法を考案し、これを用いて血液中における蛋白質とカルシウム、パラアミノ馬尿酸、色素、クロール、及びロダンなどの結合を研究し、また、本法を用いて血色素と炭酸の結合を研究した。さらに、体液酸塩基平衡、呼吸調節の中核における相互作用の問題、意識の関与、更には種の相違などの問題につき検討を加えた。

1958年5月、第35回日本生理学会大会が、齋藤・岩間両教授当番幹事の下に金沢市において開催された。出題総数402、参加者は約800名の盛況であった。

第7章 医学部 医学部附属病院

第3代永坂鉄夫教授 1932(昭和7)年10月26日生まれ。愛知県碧南市出身。1957年3月名古屋大学医学部卒業、翌年5月から助手として同大学医学部第1生理学講座の高木健太郎教授に師事し、皮膚循環、体温調節の研究に従事した。1962年8月から2年間米国ケンタッキー大学で、1968年7月から1年2ヵ月間カリフォルニア大学デービス校で、ともにL.D.カールソン教授の下で体温調節の研究を行った。この間、1965年10月から3ヵ月間高所医学研究のため、チリ、アルゼンチンに出張した。1968年2月から名古屋大学環境医学研究所航空医学部門助教授、1974年10月当第1生理学教室教授に就任し、現在に至っている。

永坂教授になってからの研究は、体温調節とエネルギー出納、低酸素や無重力の自律機能に及ぼす影響と適応、運動時の代謝と末梢循環など環境生理学特に温熱生理学的色彩が濃い。それらの研究を時代を追って大別すると、おおむね以下のごとくになる。試作した動物用直接熱量計を用いた、温熱その他の環境適応によるエネルギー代謝、熱出納、体温調節機序の変容、暑熱環境時、あるいは運動時のヒトの皮膚血管反応、選択的脳冷却機構の解明、体温調節機構、生物リズムなどについての比較生理学。動物用直接熱量計を用いた研究は、我が国の生理学界では唯一のものであり、現在も紫藤治助教授を中心に小動物をモデルとして暑熱適応解明のための研究を行っている。高体温時に、手足を更に高い温度に暴露すると、その部の皮膚血管が収縮する。当教室ではじめて見つけられた現象で、高体温時に外部から体内への熱移動を遮断する合目的反応である。この反応を温熱皮膚血管収縮と名付け、その機序の解明を行っている。ヒトでも高体温時に選択的に脳が冷却される必要があるが、それには顔面、頭皮で冷却された静脈血の頭蓋内への流入が重要であり、その機序についての解明も行っている。毎日決まった時間に温熱刺激を繰り返し与えられた動物では、実際に温熱刺激がなくとも、かつて暑熱暴露を受けた時間に同じ体温調節反応が惹起されることを見出し、この現象を手がかりとし、温度馴化の中樞機序を探っている。

この間、1981年11月には第27回日本宇宙航空環境医学会総会を、また1983年10月には第22回日本生気象学会総会を主催した。1990(平成2)年4月からは、日本生気象学会の会長として学会の会務を統括している。また、1998年3月に第75回日本生理学会大会が、永坂教授と東田陽博・加藤聖の両神経情報施設教授の当番幹事の下に、金沢市において開催された。

(5) 生理学第2講座史

沿革

大学院を設けるに当たっては、生理学の専任教授が2名必要であることを条件としたので、本学でも1954年の半ば以降、生理学専任教授を1名増員することが問題となった。選考の結果、当時東北大学医学部助教授であった岩間吉也を本学第2生理学教室主任教授

に任用することに決定し、1954年12月1日付けをもって発令した。一方、前任の齋藤幸一郎教授（第1生理学教室）は、主としていわゆる植物機能の生理学を研究領域としてきたので、教育面での分担も、おのずから齋藤教授が植物性機能の生理学を、岩間教授が動物性機能の生理学を受け持つことになった。1962年9月、岩間教授は大阪大学医学部神経研究施設の新設の神経生理部門へ配置換えとなり、1963年4月転任した。

岩間教授の後任として、1963年11月1日、当時鹿児島大学医学部教授であった大村裕が、第2生理学教室主任教授に配置転換された。1974年8月、大村教授は九州大学医学部第2生理学教室教授として転任した。

大村教授の後任として、1975年1月、群馬大学医学部行動医学研究施設生理部門の山本長三郎助教授が、第2生理学教室主任教授に就任した。1977年4月、小野武年助教授が富山医科薬科大学医学部第2生理学教授に昇任し転出した。同年3月、大阪大学医学部高次神経研究施設の津本忠治助手が講師として赴任し、同年4月、助教授に昇任、1983年9月、元の大阪大学医学部高次神経研究施設の教授に昇任し、転出した。1986年5月、同研究施設の中村彰治助手が助教授として赴任し、1993（平成5）年11月、山口大学医学部第2生理学教室教授に昇任し、転出した。1997年3月、山本教授が停年退職し、1998年4月より狩野方伸博士が第4代教授として着任した。

研究業績

岩間教授時代（1954～1963年） 岩間教授は着任後、教室創設の仕事に取り掛かった。実験設備は皆無の状態から出発しなければならなかったが、1955（昭和30）年4月ごろまでに、一応の実験が行われるまでに設備が整えられた。教室創設の仕事がようやく軌道に乗りかけたころ、岩間教授はかねてから交渉のあった米国のペンシルバニア大学神経科学研究所に留学し、神経解剖学、神経生理学の技術的な面で習得するところがあった。その後、モンリオール神経学研究所で、 γ -アミノ酪酸の皮質電気活動に及ぼす影響について研究した。この研究はその後、大きな話題を生んだ脳の抑制物質に関する研究の先駆をなすものであった。

岩間教授時代の研究は、大脳皮質誘発性電気活動の分析、反射機序の解明などが、その主たる興味の対象となっており、条件反射、シナプス伝達、大脳辺縁系、網様系などの総合研究に参加した。なお浅野助教授は、イオンの膜透過と代謝の関連に興味を向け、生体膜特に消化管粘膜の能動輸送、腺の分泌機序などの総合研究に参加した。

大村教授時代（1963～1974年） 大村教授時代は、10年以上にわたって精力的に視床下部食欲機序の生理学的研究が行われた。その研究成果は、次のように総括される。

複合化学受容器の性質を有する視床下部外側野（LH）ニューロンが体液中の満腹物質グルコース、空腹物質としてのインシュリンや遊離脂肪酸などの濃度や胃の拡張の度合などの内因性入力、さらにまた視覚、味覚及び嗅覚などの感覚系からの外因性入力を受容する。これらを総合して、LHは動物に食行動開始の指令を出す。また満腹という状態は、視床下



写真7-7 岩間教授時代



写真7-8 大村教授時代

部腹内側核（VMH）及びLH内ニューロンの血中成分への応答、内蔵臓器の伸展及びそれから分泌された物質からのフィードバック入力などにより達成される。この際満腹感の発動は、VMHによりなされると考えられる。これらが、視床下部摂食調節に関する研究により得られた考え方である。

山本教授時代（1975～1997年） 山本教授は1965（昭和40）年、英国精神病研究所のマッキルウェイン（H. McIlwain）教授の研究室にて、脳の薄切片を用いてニューロンの電気活動の記録を行った。この時、世界で最初に脳切片標本において電気刺激による誘発電位の記録に成功し、脳生理学の分野に先駆的業績を残した。英国より帰国後は、一貫して脳切片標本を用いた神経生理学的研究を発展させ、現在の脳の薄切片による電気生理学的研究の世界的隆盛を築いたパイオニアとして、認められるに至った。

山本教授時代の教室の主なテーマは、記憶の基礎過程であるシナプス伝達の可塑性に関する研究である。記憶に関係の深い海馬という部位のシナプスには、長期増強と呼ばれる現象があり、これによってシナプスの信号伝達の高まることが記憶形成につながると目されている。そこで海馬の脳切片を用いて、シナプス伝達及び長期増強の発生機構について多くの研究を行い、その起源を定めた。



写真 7-9 山本教授時代

現状と将来の課題

山本教授時代の研究は、今日二つの方向に発展し継承されている。第1は神経活動に伴う細胞内カルシウムイオン濃度の上昇を直接研究し、記憶の形成を解明しようとする流れ、第2は神経細胞膜の微小片を採取（直視下パッチクランプ記録法）し、その生理活性を研究する流れである。これらの最新技術を取り入れながら、シナプス伝達の可塑性のメカニズムを分子レベルで解明し、次に記憶との関係を求めようと努力している。

(6) 生化学第1講座史

沿革

本学において、医化学という言葉が授業科目名としてはじめて用いられたのは、金沢医学専門学校時代からである。後に、1912（大正元）年官立医学専門学校の規定改正により、正式に学科目として追加され、当時東大助教授でドイツ留学中の須藤憲三が金沢医学専門学校教授に任ぜられ、医化学講座を担当することとなった。1923年、本学の医科大学への昇格に伴い、教授は金沢医科大教授に任ぜられ、1924年からは金沢医科大学長を兼任、1932（昭和7）年退官するまでその要職にあった。1933年、当時助教授の岩崎憲が2代目教授に昇任し、1949年の新制大学設置に伴い、1952年に金沢大・医学部教授に任ぜられ、1958年に停年退官した。引き続き1959年3代目主任として、当時阪大歯学部助教授兼医学部講師の高木康敬が金大医学部教授に昇任した。高木教授は1963年7月に九大医学部教授に転任、同年いっぱい金大教授を併任した。なお、教室名は従来医化学講座であったが、1963年4月の第2講座の新設から生化学第1講座と改称された。4代目主任教授として、1964年、当時東大医学部助教授であった米山良昌が金大教授に昇任した。米山教授は25年の長きにわたって教室を主宰し、1988年停年退官したが、その間、第1講座の確固たる基盤を築いた。同年、後任の5代目主任として、当時国立遺伝学研究所助教授であった福田龍二が金大教授に昇任して現在に至っている。

教室研究史

岩崎教授時代（1933～1958年） 岩崎は、ほとんど独学により医学研究者としての研鑽を積んだ。1919（大正8）年に当教室須藤教授の門をたたき、副手を囑託された。約4年後、私費でドイツ国に留学した（1923～1931年）。その期間中、とりわけカイザーウイヘルム生物学研究所、ノーベル賞受賞者マイヤーホーフ教授の下での活躍は華々しく、当時の同僚には多数の後のノーベル賞受賞者がいた。金沢医科大学助教授として帰朝。1933年に教授に昇任以降、新制の金沢大学医学部教授として停年退官を迎えるまでの28年間にわたる教室の研究は、ほとんど生化学的超微量分析法の一つの体系、すなわち教授の命名によるアゾトメトリーの完成に向けられた（岩崎憲「Azotometrieに関する総説」、『生化学』23(4)207～238、1952）。その功績により、1950年の日本学士院賞をはじめ、朝日賞、毎日学術賞、中日文化賞、金沢市文化賞、北國文化賞など数々の荣誉に輝いた。当時、教授とともに研究を推進した主要な教職員は、早稻田正澄（助教授、後に本学附属病院初代検査部長・教授）、関田潔（後に慶応大医学部医化学教授）、服部信（後に本学医学部第1内科学教授、都立駒込病院院長）、中島誠一、大月理、大石太郎などであった。1950年4月には、大会会頭として第22回日本生化学会大会を本学で開催した。

教授は学生たちより、その独特の風貌と人柄から“グレート岩崎”の愛称で呼ばれた。講義は脱線が常習で、「…留学中のエピソードになると青年岩崎に戻り、流暢なドイツ語で

の会話のやり取りを再現されるなど、若い医学生を魅了してやまなかったようである。…」(木羽敏泰「岩崎憲先生をしのぶ」『ぶんせき』4, 260, 1978より引用)。

高木教授時代(1959~1963年) 1959(昭和34)年、高木教授の就任により、教室の研究テーマは分析生化学から遺伝子の実体のDNAの研究へと大きく飛躍することとなった。当時、欧米では分子生化学の進歩は目覚ましく、揺籃期から既に第1期完成期に入っていた。ところが日本では、いまだに核酸の研究は正統な生化学や生物学の枠外に置かれている状況だった。そのような中で「…名実ともに核酸研究を前面におしたた研究室が日本で初めてできたわけである。そこを目指して全国から若い人達が集まってきた。…」(関口睦夫「日本の生化学研究者の系譜：遺伝子生化学のパイオニア - 高木康敬先生とその研究室」『蛋白質・核酸・酵素』42(12), 1945~1948, 1997)。当時の研究室の助教授は岡田利彦(後に金沢医大教授)、助手は関口睦夫(後に九大・医・生化学教授)、松本勇(後に金沢医大教授)、松原謙一(後に阪大教授、奈良先端大教授)、三井広美(後に京都薬科大教授)、堀勝治(後に佐賀医科大教授・副学長)であった。これらの人たちをはじめ、後に日本の分子生物学を担うこととなる多数の人たちが共同研究のために訪れた。主要な研究テーマは、ファージ - 大腸菌の系を用いたDNAの合成、代謝の遺伝生化学的研究であった。

高木教授の大きな貢献として、我が国ではじめてファージ講習会を企画し実施したことが挙げられる。この講習会の原形は、米国のコールドスプリングハーバ研究所にあるが、分子遺伝学・分子生物学の誕生から発展期を通じて果たした大きな役割はよく知られている。教授は当時の日本の最高の研究者を講師として迎え、当教室のスタッフの労働奉仕により、第1回と2回の日本版講習会を金沢で開催した。その後この講習会は、阪大微生物研究所の援助により長期にわたり開催され、その参加者の中から、後に日本の分子生物学を背負う人たちを輩出した。高木教授はさらに本学医学部癌研究施設生化学部設置(1962年)に際し、分子生物学者・亀山忠典の招聘に尽力し、両教室を中核とする当時の我が国の分子生物学研究の一つの拠点形成にも大きな貢献をした。また、医学部中央研究室システム生化学部門の設立・運営にも協力した。しかし、教授は在任4年半足らずにして九州大・医学部へ転任することとなり、教室の大部分のスタッフも移動した。以後、分子生物学の研究の中心は癌研究施設・がん研究所へ移ることとなった。

米山教授時代(1964~1988年) 25年間にわたる主な研究は、オーソドックスな生化学的研究に帰り、ヘモグロビンを中心として、その生合成、構造と機能、酸化還元機構、異常症の分子メカニズムに向けられた。ヘモグロビンは、それまでにX線構造解析などにより高次構造が他の蛋白質に比べかなり明らかにされていたため、米山らの構造と機能との相関に関する研究は、地味ではあるが多くの蛋白質研究の先駆的役割を果たし、その多数の研究成果は一流国際誌や国際学会で発表された。長年にわたるヘモグロビンの研究業績に対して、1983(昭和58)年に中日文化賞、1987年に日本医師会賞が授与された。

米山教授は、1982年に日本生化学会北陸支部を発足させ、初代支部長として北陸での

第7章 医学部 医学部附属病院

生化学会の発展にも多大に貢献した。1987年には生化学会会頭として、本学で第60回日本生化学会大会を開催した。大会には、2,400題の演題と6,000人余りの参加者があった。日本生化学会は、岩崎教授の時に続き金沢では2度目であった。

米山教授の下には、その独自の親しみやすさから多くの人が集まり、また多くの研究者が育った。筑波大学生化学の杉田良樹教授、同坂内四郎教授、大分医科大学副学長の竹下正純教授、東北大学医化学の岡本宏教授、東京医科大学生化学の友田燁夫教授、金沢大医・保健学科の谷島清郎教授、同長井雅子教授ら多数の研究者を輩出している。

現状と展望（1988年～現在）

福田教授になってからの教室の主な研究対象は、RNAウイルスである。エイズ、インフルエンザ、その他最近大きな騒ぎとなったエマージングウイルスは、すべてRNAを遺伝子としている。これらは変異頻度が極めて高く、容易に新種ウイルスが出現することや、非常に巧妙な増殖機構を持つことにより、生体の防御機構を容易にすり抜けるため、有効な制御手段の開発は、まだ今後に残された難問である。一方ではRNAウイルスの遺伝子の発現効率が非常に高いことに注目して、これらを遺伝子治療用ベクターとして利用しようとする研究も開始されている。このような状況下で、当教室ではインフルエンザウイルスや麻疹ウイルスの増殖機構、及び宿主細胞との相互作用の分子生物学的研究が推進された。とりわけ、遺伝子工学によるインフルエンザウイルスの効率の良い改変技術確立したことが特記される。この技術により、作成される新種ウイルスはウイルス増殖の研究だけでなく、生ワクチンの開発や遺伝子治療用ベクターの開発への道を開くものであり、今後の進展が期待される。これらの研究は主に、榎並正芳助教授、畑田恵利子助手、滝澤剛則講師（現愛知県身障者コロニー研究所室長）により推進された。一方、米山教授時代の研究の発展として、長井雅子教授（保健学科）と置塩信行助手により行われている、共鳴ラマンスペクトルなどを用いたヘモグロビンやプロテインキナーゼの超微細分子構造解析の進展も、注目に値する。生体高分子構造の詳細な解明は、世紀末から21世紀前半にかけ、遺伝子研究と並んで非常に重要視されている分野であり、その足掛かりを得ようとしている。

（7）生化学第2講座史

沿革

生化学第2講座は、1963（昭和38）年4月新設。翌1964年4月、京都大学より久野滋博士が初代教授として着任、開講した。1966年12月、旧木造校舎2階から、現在の医学部北研究棟3階に移転した。1990（平成2）年3月、25年間にわたり講座を主宰してきた久野教授が停年退官され、同年10月、東北大学より山本博博士を第2代教授として迎えた。

教室業績

久野滋教授時代（1964～1990年）

「ヌクレオシド、ヌクレオチド代謝」：チミン要求性ファージの新しい選択方法を開発し、チミン欠乏条件下にコロニー形成能を失うチミンレスデスの機構を明らかにした。また、チミジンがチミジン 1 リン酸リン酸化酵素の阻害によりdTTP/dTDP低下とdTMP上昇を来すことを発見した。

「カタボライトレプレッション」：大腸菌における酵素誘導に関して、カタボライトレプレッションの解除には、炭素源によりcAMP依存性、非依存性の2種の仕組みが存在することを明らかにした。

「デオキシリボース転移反応」：Transdeoxyribosylation反応として知られるデオキシヌクレオシドのペントース転移反応は、チミジンホスホリラーゼとプリンヌクレオシドホスホリラーゼという二つの酵素が、弱い相同作用によって複合体を形成することで、効果的に進行することを明らかにした。

「バクテリア産生の新理論」：バクテリアを用いた工業生産に関する工学部の沢田達郎教授との共同研究で、菌の増殖速度（ μ ）と菌体構成高分子のうちDNA、RNA及び蛋白質の含量（ C ）との間には

$$C = C_0 \exp(\alpha \cdot \mu) \quad (\alpha = \text{各高分子の係数})$$

と表示される関係が成立することを明らかにした。この成果は、物質の効率的産生のみならず汚濁処理やパルプ廃液処理にも応用された。

「真核生物染色体複製開始機構」：酵母*Saccharomyces cerevisiae*の自律複製配列（autonomously replicating sequence、ARS）-1の活性に最も重要なドメインAと強く結合するタンパク質を同定するとともに、ドメインAのT-rich strandのみに結合する新規因子を発見し、ARS T-rich strand factorと命名した。

「線虫*Caenorhabditis elegans*を用いた分子遺伝学的研究」：多細胞生物の生命科学上の諸問題を解く上で有用な材料である*C. elegans*を我が国にはじめて導入して、温度依存性麻痺変異体分離法を確立し、アセチルコリン合成酵素遺伝子*cha-1*の亜種や*unc-64*など神経伝達に関与する新しい遺伝子を分離した。

同門からは、岡田利彦金沢医科大学教授（生化学第1講座）、武藤明福井医科大学教授（生化学第1講座）、犬塚学同助教授、小平憲一富山大学工学部助教授（細胞工学講座）が輩出した。

山本博教授時代（1990年～現在） 山本教授は着任後、血管系の細胞分子生物学という新分野に挑み、以下の成果を挙げた。

「血管構成細胞種間相互作用」：血管を構成する種々の細胞種の初代培養系・共存培養系・低酸素培養系を確立し、細小血管を構成する内皮細胞 - 周皮細胞間の相互作用とそれを担う因子の実体を明らかにするとともに、脳血管では、星状グリア細胞が血液脳関門能を含む脳血管内皮特異形質の誘導・維持にかかわっていることを立証した。

第7章 医学部 医学部附属病院

「血管新生機構」：発生・生殖・創傷治癒などの生理的過程やがん増殖・転移をはじめとする病的状態の進行と密接にかかわる血管新生に関して、当該血管変化の主要因である低酸素が、血管新生の場となる内皮細胞と周皮細胞自身で血管内皮増殖因子（vascular endothelial growth factor、VEGF）遺伝子の発現を誘導し、産生されたVEGFのオートクリン、パラクリン作用により内皮細胞の増殖と管腔形成が促進されることを発見した。

「糖尿病性血管症発症、進展の分子機構」：高血糖状態で促進的に形成される後期糖化反応生成物が特異レセプターを介して周皮細胞を傷害する一方、内皮細胞にも直接作用して血管新生と血栓傾向を促すことをはじめて明らかにし、糖尿病性血管症発症、進展の新機序を提唱した。

「高血圧発生機構に関する研究」：内科学第2講座（竹田亮祐教授）との共同研究で、血圧調節に関係するステロイドであるアルドステロンが、ヒト動脈内皮細胞と平滑筋細胞自体で生成されていることを発見するとともに、血管アルドステロンが平滑筋肥厚に関与し得ることを証明した。また、本態性高血圧症モデル動物血管で発現異常を示す新しい高血圧関連遺伝子を分離した。

細野隆次講師、金子二久講師は、それぞれ次のように久野教授時代以来の研究を進展させた。

「神経伝達の分子遺伝学」：シナプス前終末で働く新しい遺伝子cha-1、unc-64、ce-syntaxinなどを分離し、遺伝子産物の分子性状を明らかにした。

「ピリミジンヌクレオシドキナーゼ」：ピリミジンリボヌクレオシドをリン酸化する新しい酵素を大腸菌から分離精製し、cytidine kinaseと命名した。

山本教授は、前記血管研究のほか以下の研究も展開した。

「遺伝子医学」：外科学第2講座（宮崎逸夫教授）・薬剤部（市村藤雄教授）と一部共同で、がん細胞増殖・浸潤、薬剤耐性、血管新生といった、がんの悪性形質を担う遺伝子群を標的とする各種アンチセンス標品の開発に成功した。また、“Antisense Display”という新しい機能性遺伝子スクリーニング法を開発した。

「高磁場の生体作用」：本学工学部電磁場制御実験施設（別所一夫教授、山田外史教授）との共同研究で、現代生活で曝露の機会が増えている低周波変動高磁場が、個体の発生・成長・生殖・行動・老化やDNAの複製・修復反応にどのような影響を及ぼすかを明らかにした。

学部教育では、遺伝子診断実習、学生自身によるプレゼンテーションといった新しい試みも成功裡に行われた。

人事面では、細野講師、金子講師がそれぞれ本学部教授（保健学科・生体情報学）、金沢女子短期大学教授（生活文化学科）に昇任し、東北大学米倉秀人博士を助教授に迎えた。山岸昌一博士が講師に昇任した。

現状と展望

生化学第2教室の歴史は比較的浅いが、前任教授から後任教授への円滑なバトンタッチを示す好例であろう。久野名誉教授は、退官後も4年間にわたり講義を分担された。教授室調度は現在も久野教授時代のままで、かつてそうであったように、久野教授愛用の机からは今、山本教授の手によって、どんどん論文が送り出されている。

生化学第2教室は現在、「分子医学」を標榜し、引き続き現代医学生物学の中心的課題にチャレンジしている。特に、糖尿病性血管障害とその防止の分子機構に関しては、糖化蛋白受容体遺伝子の発現調節と機能の解明、血管新生制御機構に関しては、新規血管新生抑制因子の分離、神経系の分子遺伝学ではシナプス伝達をつかさどる遺伝子hierarchyの全容解明を目指した研究が、積極的に進められている。

教室のモットーは「対話」である。自然や人とscientificに、公正に、建設的に対話する。これにより、仕事と人が更に育ち、将来も金沢大学医学部生化学第2教室の歴史に、良いページが綴られていくよう祈念している。

(8) 薬理学講座史

沿革

本学においては、1912(明治45)年、小立野に新校舎が竣工した時に、薬物学教室が創設された。しかしながら、当時まだ薬物(薬理)学が医学の専門分野として確立されておらず、主として臨床の教官が薬物学講義を兼務していた。医学の歴史を紐解くと、近代薬理学はドイツのシュミートベルク(Schmiedberg: 1838~1921年)に源流をたどることができる。金沢医専・金沢医科大学の生理学教室の石坂伸吉教授は、1923(大正12)年からドイツ・イギリスに留学し薬物学研究を行って、1926年5月に帰国した。ここにようやく研究体制を整えた薬物学教室が誕生した。石坂教授は30余年教室を主宰し、その間結核研究所長、金沢医大学長、新制金沢大学医学部長を歴任し、1954(昭和29)年3月に退職した。同年6月、当時結核研究所の岡本肇教授が第2代教授に就任すると同時に、薬物学教室を薬理学教室と改称した。岡本教授は、結核研究所長、医学部長、がん研究所長の要職を兼任し、1968年3月に退職した。同年10月、正印達助教授が教授に昇任した。正印教授は医学部長の要職を兼任し、1993(平成5)年3月に退職した。1994年1月に、徳島大学から吉本谷博助教授が教授として転任し、現在に至っている。

研究と教育

石坂伸吉教授時代(1926~1954年) 石坂教授は、1926(大正15)年5月から初代教授として薬物学教室を主宰した。在職中は、有機合成化学と生物化学を基盤とした薬理学研究を推進した。肺炎双球菌感染治療薬としてエチールアポヒニンの発見、第4級アンモニウム塩基・第3級アミンによる肺炎双球菌の乱麻状長連鎖発育現象の発見、グアノフラ

第7章 医学部 医学部附属病院

シンの研究などが行われた。1937年に金沢で開催された第11回日本薬理学会総会の会長を務めた。1954年3月に退職し、翌年には金沢大学発足以来最初の名誉教授の称号を受けた。

岡本肇教授時代（1954～1978年） 岡本教授は、1927（昭和2）年3月、金沢医大卒業後薬物学教室に入り、1931年5月には助教授となった。1941年1月には、教室に付設された結核研究施設の教授となり、後の結核研究所の基礎を築いた。1954年6月、結核研究所から薬理学教室の第2代教授に就任した。岡本教授の多くの研究業績の中でも特筆すべきは、1939年に核酸RNAによる溶血性連鎖球菌（溶連菌）の溶血毒素（ストレプトリジン-S）増産現象を発見したことである。従来全く未知であったRNAの生物学的・生化学的意義の解明に重要な知見をもたらし、いわゆる「RNA効果」として国内外で高く評価された。この重要な発見は、1944年に肺炎双球菌を用いた実験で核酸が遺伝物質であることを解明したアベリー（Avery）博士の発見の5年も前のことであり、その研究内容が世界をリードしていたことを示している。また、オルトアミノフェロールを中心として展開した結核に対する化学療法的並びに免疫化学的研究、オルトアミノフェロール系アゾ蛋白誘導体の研究、核酸のストレプトリジンS生成効果をめぐる生化学的研究、溶連菌の制癌能とストレプトリジンS産生能についての研究などがある。とりわけ、溶連菌による制癌研究では、ペニシリンと加温処理することで非感染化かつ無毒化して調製した溶連菌製剤が制癌作用を持つことを見いだした。これは単に腫瘍に直接作用するのではなく、宿主介在作用を有することが明らかとなり、免疫賦活能を持つがん治療薬OK-432（ピシバニール）として製品化された。岡本教授は1957（昭和32）年5月に、「核酸による溶血性連鎖



写真7-10 岡本肇教授と教室員

状球菌の溶血毒増産現象の発見について」の研究で日本学士院賞を受賞している。また、1948年金沢市文化賞、1952年日本細菌学会浅川賞、1956年中日文化賞、1957年北國文化賞受賞の榮譽に輝いている。岡本教授は、1965年に第38回日本薬理学会総会を金沢で開催し、1969年には第28回日本がん学会の会長を務め、これらの学会の中心的指導的立場にあって、その発展に多大な貢献をした。

正印達教授時代（1978～1993年） 正印教授は、1952（昭和27）年、金沢医科大学を卒業し、翌年結核研究所に入り、1954年薬理学教室に移った。以後助教授を経て1968年10月に第3代教授に就任した。1968年より金沢大学においても大学紛争が起こり、学寮委員として寮生と団体交渉の矢面に立ち、また医学部においても学園紛争の後始末、厚生会館建築について学生自治会・文化委員会・運動部委員会・学食委員会との団体交渉などに時間を費やした。残念ながら、この間の研究・実験はすべて中止された。紛争鎮静後、岡本教授時代より行われていた核酸による溶連菌の溶血毒素増産現象や、これに基づく制癌研究が行われた。溶連菌の培養液や無細胞抽出液のストレプトリジンS産生の研究で成果を挙げた。さらにこの無細胞抽出液を分画し、活性酸素を介して抗腫瘍活性を有する蛋白質を単離・精製し、この物質を用いて活性酸素による癌細胞致死の機構を解明した。これらの研究により、1982（昭和57）年に越村三郎金沢大学（がん研究所）名誉教授とともに石川テレビ賞を受賞した。この間の教室出身者としては、木越茂福井医科大学（薬理学）名誉教授、西尾眞友金沢医科大学薬理学教授がいる。



写真7-11 正印達教授還暦お祝いの会：1987（昭和62）年9月金沢東急ホテルにて

第7章 医学部 医学部附属病院

吉本谷博教授時代（1994年～現在） 1994（平成6）年1月に、徳島大学医学部生化学教室の吉本谷博助教授が第4代教授に就任した。吉本教授は、1975（昭和50）年、広島大学医学部卒業後、京都大学大学院医学研究科（生理系専攻）に進み、1979年に大学院を修了した。その後、徳島大学医学部生化学教室助手、助教授を経て、金沢大学に転任した。専門研究分野は脂溶性生理活性物質の分子生物学である。ホルモンや神経伝達物質などで細胞が活性化されると、細胞膜リン脂質からアラキドン酸が遊離し、シクロオキシゲナーゼやリポキシゲナーゼの働きで、一群の生理活性脂質（エイコサノイド）が合成される。このエイコサノイドは、循環器系、呼吸器系、神経系、炎症や免疫系などにおいて、脂溶性メディエータとして細胞機能を制御している。これらの酵素には、幾つかのアイソザイムがある。すなわち、シクロオキシゲナーゼには、細胞に恒常的に存在するシクロオキシゲナーゼ-1と、炎症や増殖刺激により誘導されるシクロオキシゲナーゼ-2がある。またマウスにおいては、一次構造や組織分布の異なる4種類の12/15-リポキシゲナーゼアイソザイムがある。これまで種々の動物組織からシクロオキシゲナーゼやリポキシゲナーゼのcDNAをクローニングし、酵素の構造と機能に関する分子生物学的研究を行った。さらに酵素の病態生理機能を明らかにする目的で、種々の培養細胞やマウスマクロファージなどを用いて、神経伝達物質の放出やホルモン分泌、腫瘍細胞の増殖・転移、動脈硬化の発症機序などと、これらの酵素のかかわりに焦点を絞って研究を進めている。

薬理学講義においては、総論と各論の題目について最適任の担当者を決めて、きめ細かい授業を行っている。薬理学の授業は従来の学問にこだわらず、薬理作用を薬物や受容体の分子構造に基づいて理解できるように指導している。実習においても、実習項目の見直しや追加など、毎年実習書の内容の改訂を行っている。



写真7-12 吉本谷博教授と現教室員：1997（平成9）年10月医学部屋上にて

現状と将来の課題

これまで、エイコサノイドと総称される生理活性物質の生合成にかかわるリポキシゲナーゼの構造と機能に関する酵素学・分子生物学的研究を行ってきたが、今後はこれを更に発展させ、これらの物質が細胞に働いて生理活性を発現するメカニズムに関する研究や、その臨床的病態に関する研究が必要であると考えられる。また大学院医学研究科においては、将来基礎医学としての薬理学の教育と研究を担う人材の養成が重要であると考えている。

(9) 病理学第1講座史

沿革

1887(明治20)年8月、第四高等中学校医学部となってから、その学科課程の中に従来の内科学あるいは外科学から分かれて、基礎学科として病理学総論・病理解剖学が、第2年において授業されることになった。はじめは、医学士山田謙治が病理学、病理解剖学を講述したが、同教諭は同時に、婦人科学、産科学、婦人科産科臨床講義も担当した。また、病理学の関連学科としての外科病理学は、医学士有松戒三教諭によって講述された。1889年から病理学理論、病理解剖学は医学士川瀬泰輔によって解剖学、組織学とともに講述された。1890年から「教諭」は「教授」に改められ、病理学は引き続き川瀬が担当した。1893年から、病理学を薬物学とともに田中正鐸教授が担当した。

1894(明治27)年第四高等学校医学部と改称され、病理学は1講座となり、病理学理論と病理解剖学及び実習が第2年と第3年において、引き続き田中教授によって教授された。1895年村上庄太が病理学及び法医学の教授となり、以後、1914(大正3)年まで同教授によって病理学の講義が行われたので、彼をもって基礎病理学教授の嚆矢といえるだろう。村上教授は4月退職し、これより先、1914年1月31日付けをもって、福土政一が病理学・病理解剖学・法医学教授として着任した。しかし、同教授の在職期間は短く、1916年7月退職した。

同年5月11日付けをもって、当時京大医学部助教授であった中村八太郎が、後任として病理学及び法医学の教授に着任した。彼は以後、1943(昭和18)年3月まで病理学教室の主任教授を務めた。1923(大正12)年金沢医科大学の発足とともに附属医学専門部も置かれ、中村教授は附属医学専門部の病理学・法医学教授も兼任していたが、1924年3月古畑種基教授が法医学に専任するようになってから、ここにはじめて病理学教室と法医学教室とは分離した。

1926年7月病理学は2教授制となり、新たに当時京大医学部助手であった杉山繁輝が病理学教授に選ばれてから、従来の病理学教室を第1病理と呼び、建物の2階を第1病理学教室が、1階を第2病理学教室が占めるようになった。

中村教授は1943年3月退き、その後任として、同年7月助教授であった宮田栄が教授に昇任した。宮田教授は、1955年9月29日脳出血のため急逝した。1956年12月、後任

第7章 医学部 医学部附属病院

として、当時本学寄生虫学講座の主任であった渡辺四郎教授が第1病理学教室主任に選ばれて就任したが、1968年7月28日胃癌のため逝去した。

1969年1月渡辺教授の後任として、助教授の梶川欽一郎が教授に昇任した。梶川教授は、1983年4月停年退職した。同年4月助教授の中西功夫が教授に昇任、現在に至っている。

教育と研究

中村八太郎教授時代（1916～1943年） 中村教授の研究の主なるものは、日本住血吸虫症、内分泌及び結核症の病理解剖学的研究で、これらの研究を通じて、体質の病理学の解明が終生の研究課題であった。主な学会発表としては、1911（明治44）年の第1回日本病理学会総会における日本住血吸虫症に関する宿題報告、1916（大正5）年4月の第6回日本病理学会総会の「内分泌の病理学的方面」の宿題報告、及び1939（昭和14）年の第17回日本結核病学会総会における「日本人結核症の病理解剖学」の発表などが挙げられる。著書としては、速水教授と共著の『病理学総論 上下二巻』（1919年）がある。1935（昭和10）年4月に金沢で開催された第25回日本病理学会の会長も務めた。

宮田栄教授時代（1943～1955年） 宮田教授ははじめ、中村教授指導の下に結核症の病理解剖学及び実験的結核症の研究に従事したが、ドイツ留学より帰朝後は、次第に結合組織の研究に移り、その成果は1953年4月6日仙台における第42回日本病理学会総会の宿題報告「結合組織の病理形態学的研究」と題して発表された。

宮田教授時代の教室業績は人体病理解剖学に加えて、次第に実験病理学の分野が前景に立ち、特に戦後、電子顕微鏡的研究の導入とともに新しい研究の時期に入り、研究課題は結合組織の病理形態学に移り、小皮標本及び電子顕微鏡を駆使しての画期的な研究業績が発表された。当時は、本邦において結合組織の研究者は甚だ少なかったのであるが、宮田教授はドイツ留学後いち早く結合組織の重要性に着目し、広範な結合組織の研究を展開し、本邦における結合組織研究の先駆者となった。

宮田教授は、絵画、音楽、映画、写真などに造詣が深く、また文筆に優れ、しばしば新聞や雑誌に随筆、論説を寄稿し、地方文化の向上啓蒙に努力した。また、十全同窓会副会長として同窓会の発展にも尽力した。

渡辺四郎教授時代（1956～1968年） 渡辺四郎教授は、1929（昭和4）年3月金沢医科大学卒業後、直ちに母校の第2病理学教室杉山繁輝教授の門下に入り、超生体染色、超生体墨粒貧食試験など、当時最も斬新にして進歩的な実験病理学の分野において研鑽を積み、1933年5月助教授に昇進した。1940年4月からは金沢医大臨時附属医専講師を兼任した。1943年より金沢医科大学学生主事も兼任し、戦後、1946年3月より1949年6月30日まで、金沢医科大学厚生課長として学生の補導に当たった。1949年6月30日金沢医大教授となり、同時に初代の金沢大学学生部長に就任。1950年6月15日、元医専生徒控室を改造して新教室を設けたが、これは渡辺病理学教室と仮称され、研究の主体を実験病

理学においた。1956年12月、宮田教授急逝の後を受けて第1病理学教室主任に転じ、血液細胞学的研究とともに間葉組織の病理形態学的研究を遂行した。

梶川欽一郎教授時代（1969～1983年） 梶川教授は就任後、1969（昭和44）年8月に東大医学部より北川正信（現富山医科薬科大学医学部教授）を助教授に迎えて、人体病理学の充実を図るとともに、自らも病理解剖、外科病理組織診断を指導して、教室員のレベル向上に努めた。研究面では、宮田栄教授の下で始められた結合組織病理学の研究を一貫して押し進め、電子顕微鏡の導入とともに結合組織の構造及び組織反応の微細構造の解析に努めた。これらの一連の研究の功績により、1969年5月、日本電子顕微鏡学会寺田賞、1976年11月、北國文化賞を受賞した。病理学会においては、研究業績のまとめを1975年4月、第64回日本病理学会総会において「細胞間マトリックスの病理」と題して報告し、高い評価を受けた。さらに40余年の研究の集大成を著書『結合組織』（金原出版：1984年）に盛り込んで出版した。本書は、現代の結合組織研究の標準的学術書として用いられている。

梶川教授は電子顕微鏡資料作成法にも留意し、このうち、弾性線維研究のために開発したタンニン酸電子染色法は、梶川法として世界で広く用いられている。多忙な研究活動の中で、第10回日本結合組織学会会頭となった。1976年4月より1980年3月まで、医学部長を2期併任し、1983年4月停年退職した。

梶川教授は、研究面のみならず教育行政にも精通し、卓越した人格識見を有し、十全同窓会長を1983年6月から1991年6月まで務め、その重責を果たした。

この間、松原藤継十全同窓会理事長とともに、金沢大学医学部学術振興募金会に尽力し、それを成功に導いた。1990（平成2）年4月、勲二等旭日重光章を授与されている。

中西功夫教授時代（1983年～現在） 中西教授は、前任の梶川教授の結合組織の形態学的研究を発展させるとともに、生化学的、細胞生物学的手技を導入して研究を進め、特に型別コラーゲンの役割、結合組織と上皮細胞との接着、結合組織の崩壊に働く分解酵素などの課題について、それぞれ研究チームを作り、勝田省吾、岡田保典、河原栄、大井章史、岡田仁克、小田恵夫らのスタッフを重用して人材の育成に力を注いだ。

その結果、1994年勝田助教授が金沢医大病理学教授に迎えられ、同年岡田保典博士は金沢大学がん研分子免疫学教授に、さらに1997年10月に慶應義塾大学医学部病理学教授に転出した。河原栄講師は、新設の保健学科検査技術科学専攻の教授に昇任、また、岡田仁克博士は大阪医大病理学助教授に転出した。人材の流動化とともに大学院重点化を目指して研究内容が変動した。結合組織の質的变化を基盤にヒトがんの新しい診断法、神経疾患における伝達物質障害の解析、細胞接着能とがんの浸潤に関する研究を、分子レベルで発展させている。

一方、中西教授は1996年6月には、第28回日本結合組織学会会頭、1996年8月からは医学部長を務め、医学部の管理運営面に携わっている。また、医療における人体病理学の重要性に鑑み、1989年に北陸病理集談会を発足させ、代表幹事として活躍するなど地域

医療に寄与している。

(10) 病理学第2講座史

沿革

1926（大正15）年7月3日、当時京大の清野謙次教授の門下であった杉山繁輝が、本学の病理学教授に就任し、第1病理学教室（中村八太郎教授）から数人の助手が移籍し、建物も従来の病理学教室の1階を使用して第2病理学教室が発足した。杉山教授は、1938（昭和13）年12月24日、京大病理学教授に選ばれ、金沢医大教授も兼任したが、1943年9月8日、金沢医大教授の兼務を解かれた。

1943年9月9日、同じく京大清野教授の門下であった石川太刀雄丸が、杉山教授のあとを受けて、第2病理学教室主任教授として着任した（同年7月5日発令）。石川教授は1973年3月31日停年退職した。同年、石川教授は北國文化賞を受賞した。

1973年4月、金沢大学医動物学教室の助教授であった太田五六が石川教授のあとを受けて、第2病理学教室主任に就任した（同年4月15日発令）。1983年6月に、太田教授開講十周年記念式が門下生によって金城楼にて行われた。太田教授は、1987年3月31日停年退職した。太田教授就任後当教室の運営を補佐した者に、小田島肅夫、野々村昭孝助教授がいる。太田教授就任後、小田島庸夫助教授が金沢医科大学教授（病理学）及び学長に、福田鎮雄講師が北陸大学教授（微生物学）に、門下生の吉沢浩司助手が、広島大学教授（衛生学）に就任している。

1987年5月、太田教授の後任として、太田教授の門下生である当教室講師の中沼安二が主任教授に昇進（1987年5月1日発令）した。中沼教授就任後、1996（平成8）年8月には、寺田忠史助教授が鳥取大学第2病理教授に就任し、1997年4月には細正博講師が本学医学部保健学科教授に就任している。

歴代教授と教室業績

杉山教授時代（1938～1943年） 初代杉山繁輝教授の略歴並びに当時の教室業績については、百年史に記載があるので省略し、百年史の記載と一部重複するが、第2代石川太刀雄丸教授の略歴及び当時の教室業績から記述する。

石川教授時代（1943～1973年） 石川教授は、形態学はもちろん組織化学、発生学、免疫化学、病理化学、病態生理学（特に電気生理学）などに造詣が深く、研究領域も甚だ広範囲である。教室の業績として、教授就任後直ちに、流行性出血熱、ペスト、森林ダニ脳炎、原子爆弾症の形態学的研究に着手した。次いで、化学的感受体系統の機能形態学的研究が、潤管部機能を中心として展開された。1949（昭和24）年ころより組織化学の系統的研究が開始され、諸種の新法が創案され、特に胚発生の領域に利用されて成果を挙げた。1950年ころより実験的甲状腺腫の研究に当たり、甲状腺ヨード集積物質、ケロジンモノ

ヨージナーゼとその補因子に関する発見へと発展した。

組織化学的研究から引き続いて発生学へと研究の歩みを進め、胚の蛋白表面基に関する免疫化学的及び生物学的研究、初期発生の代謝系に関する研究などが行われ、胚における神経系の分化がカーテシアンダイバー法を駆使して追求された。これらの研究は、更に腫瘍との比較研究へと進み、腫瘍の比較生化学及び免疫化学的研究が行れた。同時に、試験管内での遺伝子導入による癌化実験に成功し、発癌機構の解析の道を開いた。また、これら癌の研究業績を基礎として、早期癌の血清診断や、制癌剤COPP（コバルト・プロトポルフィリン）などが開発された。

一方、神経系の分化の研究と同時に成熟神経系の研究、自律神経系及び脊髄神経節の病態生理と化学的感受体系の求心神経支配について多くの成果を挙げた。特に自律神経系の機能面の研究は、新しい反射形式 - 内蔵体壁反射 - の存在を見出し、これまで全く未開の分野であった東洋医学の科学的展開の道を拓いた。このように、細胞化学を基礎とした多方面の研究で多大の業績を挙げ、1973年11月3日、北國文化賞を受賞した。

太田教授時代（1973～1987年） 1973（昭和48）年4月に、石川太刀雄丸教授の退官に伴う後任として、第2病理学教室の主任教授に就任し、肝臓病理学、特に肝免疫病理が教室の研究の主体となった。当時、最先端の技法を用い、肝細胞膜特異抗原の抽出、リンパ球や肝細胞培養法による肝細胞障害の機序の解明に日夜の努力を注いだ。つまり、多くの慢性活動性肝疾患の肝硬変への進展には、肝細胞膜に存在する自己抗原が重要であり、その精製が当時最大の懸案であった。この自己抗原成分を明らかにし、これが自己反応性リンパ球の標的になっていることを示した。当時、肝疾患の発生と免疫の関与に関する研究は、最も進歩の激しい領域であったが、教室の研究成果は常に学会の主流をなし、この方面の我が国の指導者としての地位を確立し、1981年11月に第16回日本肝臓学会西部会を金沢市で開催した。その他、日本病理学会、日本肝臓学会などの評議員を歴任し、学会の運営に大きな手腕を発揮した。やがて、大学院生や研究生の増加に伴い、肝内胆管系の病理と生理の研究も教室の研究の一端に加え、その成果の一部を欧米の一流誌に発表した。

中沼教授（1987年～現在） 太田教授時代に引き続き、研究領域は肝臓・胆道の病理である。中沼教授は大学院時代に、太田前教授より原発性胆汁性肝硬変の研究を命ぜられたのが契機で、現在までこの研究を続けている。収集した原発性胆汁性肝硬変は既に600例を超えており、症例数では世界で最も多い研究機関の一つとなった。病理組織学、組織計測学、免疫組織化学、電子顕微鏡を用い、また臨床医との共同による臨床病理的研究を行い、この疾患に関する多くの学術論



写真7-13 第二病理 中沼教授

第7章 医学部 医学部附属病院

文を欧米の一流雑誌に発表し続けており、1987（昭和62）年10月米国の消化器学会からローラー賞（首席）、1990年2月ウィルス肝炎研究財団から研究奨励賞を受賞し、1992年6月第31回肝臓学会総会で、原発性胆汁性肝硬変の教育講演を行っている。また、1991年より、原発性胆汁性肝硬変の免疫の分野で世界をリードする、カリフォルニア大デービス校のガーシュイン教授と共同研究を行い、数名の留学生を送っている。

また、肝内胆管系に付属腺組織が分布することを見出し、その生理、形態、病理に関する研究も活発に行っている。この分野の研究は、他の研究機関に先駆けて行われ、国内外で高く評価されている。さらに画像診断学の進歩に従って注目されている、早期肝癌の病理と発癌の研究も行っている。1997年9月には、金沢の地で国際肝病理シンポジウムを開催し、国内外から多数の参加者を迎えた。現在、形態面のみならず、遺伝子解析を含めた分子生物学的手法も積極的に取り入れた研究の展開が行われている。北陸の肝胆道系を専門とする臨床医とともに、共同研究や症例検討も積極的に行っている。

現代と将来の課題

現在、分子生物学や遺伝学で得られつつある生命科学情報を病理学の分野、特に肝胆道系疾患の病態解明に応用することが当教室の将来の大きな研究課題である。具体的には、原発性胆汁性肝硬変の障害胆管で発現している標的抗原（ビルビン酸脱水素酵素のE2成分と交差反応性を示す物質）の解析と胆管をめぐる病的環境を、免疫病理学的手法により解析する。また、本疾患の病態の進展を阻止することも大きな研究課題である。

また現在、診断病理医が不足している。病理医の育成も病理学教室の今後の大きな課題である。

（11）微生物学講座史

沿革

日本の細菌学はドイツ流に衛生学の中から分かれて誕生している。以下年代を追って歴代の教授について述べる。

上田計二教授：1912（明治45）年就任、衛生学・細菌学担当（学校名、金沢医学専門学校）

児玉豊次郎教授：1915（大正4）年就任、衛生学・細菌学担当（金沢医学専門学校）

下條久馬一教授：1923（大正12）年就任、衛生学・細菌学担当（金沢医学専門学校）

谷友次教授：1925（大正14）年就任、細菌学担当（金沢医科大学）、1954（昭和29）年、微生物学担当（金沢大学医学部）

西田尚紀教授：1959（昭和34）年就任、微生物学（金沢大学医学部）

中村信一教授：1986（昭和61）年就任、微生物学担当（金沢大学医学部）

上田・児玉・下條の各教授は、実質的には伝染病にかかわる細菌学者であった。社会的

に衛生の中心テーマが伝染病に集中された時代であり、本家のドイツでもInstitut für Hygieneは、伝染病源としての細菌類を主テーマとしていたのと軌を一にする。児玉教授は結核症に、下條教授はサルモネラ菌群に研究業績を残している。しかし、研究体制を担う人員と研究費が整備されるのは、1923（大正12）年に医学専門学校から医科大学に昇格してからである。

教育と研究

谷友次教授時代（1925～1959年） 谷教授の講義範囲は、細菌・ウイルス・真菌・原虫等の微生物並びにその感染免疫に及んだ。しかもこの広範囲の領域を教授一人が担任した。実習準備は助教授以下に課された実務であったが、学生に対する説明は教授が当たり、助教授以下は説明を終えた後の指導実務を担当した。試験の厳しさは、教授の薫陶を受けた当時の学生の語り草になっている。

研究経歴は、1920（大正9）年東大卒業後、直ちに竹内松次郎教授（細菌学教授）に師事し、1922年ドイツ留学（ロベルト・コッホ研究所、カイザーウィルヘルム研究所）し、1925（大正14）年帰朝とともに金沢医科大学教授を拝命している。研究は、一貫して当時の社会問題であった梅毒に集中している。ペニシリン発見以前の梅毒は、いずれの国でも悲惨な性病としてその撲滅は悲願であったが、谷教授とその一門は、その家兎への実験感染を通して、その感染と免疫の実態の解明に努めた。1934（昭和9）年、第8回連合微生物学会で「中枢神経梅毒について」を特別講演し、1958年来沢された天皇に御前講演をした。賞としては皆見賞（日本皮膚科学会）、金沢市文化賞、北國文化賞、浅川賞（日本細菌学会）を受けた。1931～1959年まで56編の学位論文、主たる論文17編をZbl. Bakteriologieに発表している。

西田教授時代（1959～1986年） 西田教授は1945（昭和20）年、金沢医科大学（国立）を卒業し、直ちに谷友次教授（細菌学教室）の下で学び、1957年英国リーズ大学・オークレイ（C.L.Oakley）教授に師事し、1959年帰国と同時に教授を拝命している。当時、医学教育はドイツ医学様式から米国様式にかわりつつあり、スタッフによる教育システムの確立を目指した。かくて、ウイルスに対し千葉大学より波田野基一助教授（後、金沢大学がん研究所ウイルス部教授）を、免疫部門に柿下正道教授（後、更に金沢大学がん研究所西東利男、右田俊介、高橋守信の各教授）を、さらに新興の細菌遺伝学に在米留学中の桐谷和文博士を招き、講義実習を行った。



写真7-14 梅毒スピロヘータ凝集反応の発見（御前講演パネル）

研究としては、1945年ジフテリア抗毒素血清製造のためにジフテリア菌の毒素産生に携わった。この過程で「ジフテリア菌は増殖期に毒素を生成流出するとともに酵素活性を失ってゆく」という不思議な現象を報告した(1957年)。この報告は間もなく、英国の代表的な微生物学テキストのTopley and Wilson's Principle of Bacteriology, Virology & Immunologyの中に、ジフテリア菌の毒素原性の説明として30余年間用いられた。一方西田は、ジフテリア菌特有の棍棒状形態形成がこの菌の自然界での強い生存力とかわる事実を知り、耐久型への切り替えの生理機構が前述の増殖過程の酵素の全面失活、毒素蛋白の合成流出に関係するのではないかという仮説を立てた。この仮説は、実際には耐久型の孢子を作る菌群特にクロストリジウム(*Clostridium*)属(嫌気性グラム陽性芽胞形成菌群)で容易に見る事実であり、クロストリジウム勉学のため、英国のオークレイ教授の下に留学した。帰国とともに、クロストリジウム菌群の孢子形成能と毒素原性についての論文を次々と発表し続けた。現在、毒素原性の説明は、シェファア(Schaeffer)教授(パスツール研究所)の総説が引用されているテキストが多いが、彼はほとんど西田とその研究同僚の論文を引用して外毒素原性の説明の土台としている。これらの研究に対して小島三郎文化賞(公衆衛生関係)(1974年)、日本細菌学賞(浅川賞)(1976年)、北國文化賞(1975年)、中日文化賞(中村信一と共同受賞)(1979年)を受けている。また1995(平成7)年に、勲二等瑞宝章が授与された。1959年~1986年まで28年間に33編の学位論文、40編の英文論文を発表している。門下から、後任の中村信一教授、波田野基一金沢大学がん研究所教授、桐谷和文北陸大学教授、山岸高由金沢大学医学部教授が出ている。

そのほか教授の別側面について付加しておく。教授は、1984(昭和59)年に開始された日本-中国国際微生物学会議の開設者であり、この会は1997年まで6回行われている。1996(平成8)年に大山健康財団より財団賞を受け、「中国への志、日本中国国際微生物学会議の成立」の講演を行っている。また教授は、大冊の『金沢大学医学部百年史』の編集長を務め、学校の成立から86年間の歴史を執筆している。

現状と将来の展望

1986(昭和61)年、西田教授の後を受けて、中村助教授が教授に就任した。中村教授の中心的な研究領域は、一貫してクロストリジウムである。教授就任前の主研究テーマは、毒素原性の立場に立ったクロストリジウムの分類であり、世界に先駆けてDNAレベルでのクロストリジウム菌種の分類学的関係を明らかにした。研究は有毒クロストリジウム全般に及び、新菌種*Clostridium absonum*の発見(1973年)をはじめとする多数の研究成果は、世界の権威ある嫌気性菌マニュアル、教科書に広く記載されている。これらの研究により、中村は先任の西田教授とともに中日文化賞(1979年)を受けている。

教授就任後のクロストリジウム領域での主たる研究対象はボツリヌス菌(*Clostridium botulinum*)、ディフィシル菌(*Clostridium difficile*)である。ディフィシル菌に関する研究は、偽膜性大腸炎、抗生物質関連下痢症の原因菌がディフィシル菌であることが分か

りつつあった1978（昭和53）年ころから開始され、疫学的、生理学的、毒素学的分野で優れた研究成果を挙げている。ボツリヌス菌に関する主な研究テーマは、ボツリヌス症及び土壌における分布である。分布の研究は、日本各地で多数の野鳥の斃死が見られたことが契機となり、1974年ころから始まった。山川清孝講師らとともに、日本のみならず、中国、ケニア、パラグアイなど、研究を世界的に展開し、多数の重要な研究成果を発表している。

教室は、日本のクロストリジウム研究の中心的存在であり、また日本細菌学会のクロストリジウム菌株保存機関でもあり、多数の研究者に菌株を分与している。1993年、唐澤忠宏助手（1997年、講師）が加わり、分子遺伝学的手法が本格的に導入され、ヒト細胞におけるセカンドメッセンジャーであるサイクリックADPリボースを標的とする細菌毒素（酵素）の研究が、新研究分野として加わった。小倉壽助教授は麻疹ウイルスによって起きる亜急性硬化性全脳炎を研究テーマとし研究を展開、ウイルス学の教育を担当していたが、1992年大阪市立大学医学部医動物学講座教授に転出した。また、クロストリジウム研究に携わっていた神谷茂講師は、1991年に請われて東海大学助教授に転出し、1994年4月杏林大学医学部微生物学講座の教授に就任した。1986～1997年の11年間に9編の学位論文、96編（英文69編）の論文が発表されている。

21世紀には、感染症が深刻な問題となることが近年各方面から指摘されており、細菌研究者の養成は重要な課題である。教育面では、伝統的に微生物学講座には細菌学、ウイルス学、免疫学の講義・実習が課せられ、特に金沢大学がん研究所ウイルス部、分子免疫部、免疫生物部、病態生理部の多大の協力により行われてきた。しかしながら、高度に分化・発展した各学問分野を展望した時、多くの大学に見られるような各々独立した専門部門による教育体制の確立が望まれ、近い将来の大きな課題である。

（12）寄生虫学講座史

沿革

寄生虫学教室は、第2病理学助教授であった渡辺四郎博士が、石川太刀雄丸教授の下から独立し、第1病理学教室内にその研究室を設けたことに始まる。当時、寄生虫病は日本人の国民病とさえ言われた時代で、教育の場にあっては、寄生虫学は医動物学に含まれ、必須科目として講義時間が当てられ、重要かつその対策が大きな課題でもあった。しかし、当教室においては、開設当時の経緯から研究の主体は実験病理学、とりわけ細胞学に置かれていた。

渡辺博士は、1949（昭和24）年6月30日付けをもって金沢大学教授に任ぜられ、翌1950年6月15日に、元医専生徒控室を改造した新しい研究室に移った。以後、渡辺病理学教室として多くの門下生が参集し、日夜研究にいそしむことになる。渡辺教授は、1954年6月の大学院の発足を控え、医学部の機構改革に従い、教室名を一時寄生虫学教

第7章 医学部 医学部附属病院

室と改め、寄生虫学を担当することとなった。

医動物学講座は、1956年4月15日付けをもって正式に設置されることとなったが、渡辺教授は同年12月、故宮田栄教授の後任として第1病理学講座を担当されることとなり、同教室へ転出された。その後、太田五六助教授が教授不在のまま約16年半の間、教室主任として教育・研究の責を全うされた。1957年9月から1959年12月まで、太田助教授が米国留学の間、当時千葉大学医学部の教授であった横川宗雄博士が非常勤講師として来学し、寄生虫学の集中講義を担当した。

1973年4月、太田教室主任は故石川太刀雄丸教授の後任として、第2病理学講座を担当することになり転出した。そのため、1974年4月1日付けをもって吉村裕之教授が秋田大学医学部から着任し、1976年5月には講座名を寄生虫学講座と変更され、教室名も医動物学教室から寄生虫学教室と改称した。吉村教授は15年にわたって講座を担当し、1989（平成元）年3月停年退職した。

吉村教授退官後は、近藤力王至助教授が教室主任として講義・実習・研究に当たった。

1990年8月から1994年7月まで講師を務めた赤尾信明は、東京医科歯科大学講師に迎えられ、また、1991年4月から助手を務めた大山卓昭は、1994年8月から1996年6月までJohns Hopkins大学に国際医療計画学の研修に出張した。1995年3月に近藤助教授は教授に昇任し、同3月末に停年退官した。近藤教授の退官後は、病理学第1講座の中西教授が寄生虫学講座主任を併任した。

1995、1996年度の寄生虫学講義は、金沢医大・医動物学池田照明助教授（非常勤）によってなされた。これに加え、熱帯医学及び国際医療協力の現状を学生に理解させるために、板倉英世教授（長崎大）、多田功教授（九州大）を特別講師に招くとともに、寄生虫免疫診断学に関しては辻守康教授（杏林大）、藤田紘一郎教授（東京医歯大）による特別講義がなされた。アメリカ留学より帰国した大山助手は、1996年8月から1997年2月までWHOコンサルタントとして、ニューデリー（インド）、ヤンゴン（ミャンマー）へ出張して「小児麻痺根絶計画」に参加し、続いて1997年7月には国立感染症研究所（感染症情報センター主任研究員）へ転出した。この結果、寄生虫学教室には専任教官が不在のまま、併任の中西教授による寄生虫学全般の運営と講義並びに免疫学の特別講義を継続する形で、寄生虫学教室の脱皮・新装を待つことになった。

教育と研究

渡辺四郎教授・太田五六助教授時代（1959～1973年） この期間の研究体制は、まず渡辺教授にて実験病理学を主体とし、細胞学、血液学の研究を遂行していた。渡辺教授が1956（昭和31）年12月、故宮田栄教授の後任として第1病理学講座に移ったので、太田助教授が血液学、細胞学の研究の流れを受け継いだ。太田助教授はこの間、血管内膜の病理、肝疾患の病理に関して研究を進めるとともに、教育については、千葉大学医学部の横川宗雄教授による集中講義で補った。

吉村裕之教授（1974～1989年） 吉村教授は、1924（大正13）年8月15日生まれ、松任市の出身。1949（昭和24）年、金沢医科大学を卒業、直ちに当時の渡辺病理へ入った。1956年千葉大学助教授として横川教授の下に移り、1971年から秋田大学教授として寄生虫学講座を担当した。そして、1974年から1989年に退官するまで15年間、当金沢大学教授として寄生虫学講座を担当した。

吉村教授は、渡辺病理出身の病理学者でもあり、千葉大学横川教授の薫陶もあってか、寄生虫病理に卓越した業績を世に出してきた。今日、我が国においては一般寄生虫症の減少していく中であって、早くから「人畜共通寄生虫症」に思いを寄せ、本症に関心の高い人々を次々と招き、逐次研究体制を整えていった。中でも、幼虫移行症であるアニサキス症、ヒトの肺イヌ糸状虫症の病理学的研究に加えて、虫体断端像による虫種同定など、寄生虫の組織病理学的診断の根拠となる研究が進められた。これら研究の成果を基に多彩な表現力をもって、一般医家、社会人に対しても、これからの寄生虫症について、予防医学的な観点からも啓蒙活動に力を注いだ。この業績により、第37回北國文化賞を受賞し、社会的にも高い評価を受けた。

吉村教授は、これら研究、社会的活動に加え、特にトキソカラ症（ヒトイヌ蛔虫症）についても強い関心を示し、近藤らを中心に推進してきた。

この間1976（昭和51）年、吉村教授は小泉賞（学会賞）を受賞した。一方では、9年間の長きにわたり動物実験施設長として、早川助教授（動物実験施設）とともにその運営、発展に尽した。

近藤力王至助教授・教授時代（1989～1995年） 近藤助教授は、1930（昭和5）年3月20日岡山県津山市に生まれ、大阪府立大学農学部獣医科を経て、1958年甲南大学理学部生物学科を卒業すると、直ちに大阪大学微生物研究所（寄生虫・原虫学部）の森下薫教授の門をたたき、その後京都府立医科大学に移り、助手、講師を経て、1975年吉村教授門下に入った。

吉村教授時代から現在まで行われているイヌ蛔虫幼虫に関する研究では、宿主の免疫応答には幼虫排泄・代謝物（ES）のうち、CON・A、ヒマ・レクチン結合の糖結合蛋白が抗原であることを明らかにした。幼虫の微細構造並びにES抗原の分泌・排泄をつかさどる細胞は、主としてブドウの房状をした小嚢胞を含有する巨大な排泄細胞であり、抗原の局在はその小嚢胞壁並びにその腔内にあることが、免疫電顕学的観察から証明された。

また、アニサキス、イヌ糸状虫、広東住血線虫、種々の住血吸虫などによる疾患に対し、虫体が排出するESを抗原とする研究も進み、抗原の種特異性が次々と確認され、血清学的診断法を開発した。

一方では、国際医療協力（JICA）、国際緊急援助活動（JDR）とWHOポリオ撲滅計画、熱帯地域海外在留邦人の健康管理事業（熱帯医学協会）に参加し、グアテマラ、ソロモン諸島、トルコ、フィリピンをはじめ東南アジア諸地域へ出張するとともに、マラリア、オンコセルカ症、日本住血吸虫症など熱帯寄生虫症に関する研究も行われた。これらの研究

第7章 医学部 医学部附属病院

は、熱帯諸地域における国際医療協力の中で、寄生虫疾患の治療・予防対策を通し国際的な貢献に寄与するものと意義深い。

近藤助教授は退官前に教授に昇任し、退官後は予防医学協会で活躍している。

現状と将来の課題

吉村教授・近藤助教授・赤尾講師らによって開発された寄生虫の免疫血清学的診断法は、東京医科歯科大学に移籍した赤尾講師に引き継がれた。一方、国際医療支援の思想を持ってJohns Hopkins大学で学んだ大山助手は、国立感染症研究所に転任し、世界的感染症の情報処理に当たることになり、それぞれ花を咲かせることになった。今後、新しい人材を得て寄生虫講座が再出発することが待たれている。

(13) 衛生学講座史

教室の沿革

衛生学の歴史は古く、医学教育には不可欠のものとして、金沢医学校時代に既に教科として取り入れられていた。旧制金沢医科大学から数えても第3代教授となる大谷佐重郎教授在任中に、新制金沢大学への移行を迎えた。したがって、大谷教授は1960年3月、停年退職するまで、通算で20年間、新制移行後9年間当教室を主宰したことになる。さらに特記すべきこととして、初代学長戸田正三は、京都帝国大学医学部衛生学講座教授・講座主任を務めており、大谷教授が師事していた。

1950(昭和25)年2月には、公衆衛生学講座の新設があり、教室の助教授石崎有信が選ばれて教授昇進の上、同講座主任に転じた。1958年4月から停年退職まで、大谷教授は医学部長を兼任した。大谷教授在職中、第16回日本連合衛生学会(1944年)及び第26回日本衛生学会総会(1956年)が、いずれも同教授を会長として当地に開催された。

1960年4月、大谷教授の後任として、公衆衛生学講座主任在任中の石崎有信教授が選ばれ、11年間教室を主宰した後、1975年3月停年退職した。1969年4月から約2年間は医学部長を兼務した。また、1970年には第40回日本衛生学会総会が石崎教授会長の下に開催された。

1975年6月、大阪府立公衆衛生研究所主幹労働衛生部労働生理学研究室長橋本和夫が教授に選ばれ、新教室主任となった。1993(平成5)年には、International Conference on Peripheral Nerve Toxicity(国際末梢神経毒科学会)が同教授を会長として開催された。

1994年11月、神戸大学医学部公衆衛生学助教授西條清史が橋本教授の後任に選ばれ、現在に至っている。

歴代教授略歴及び教室業績

第3代大谷佐重郎教授 1922(大正11)年7月京大医学部卒業、同大学衛生学教室(戸田正三教授)に入り、1925年10月助教授の後、1926年1月には金沢医大教授に就任し、衛生学教室を主宰した。1949年1月から1953年まで、第1・2期日本学術会議会員に選ばれ、1960年3月31日停年退職した。1969(昭和44)年11月3日多年にわたる衛生学の研究と教育、地域社会での衛生行政の向上と衛生思想の普及に寄与した業績により、金沢市文化賞を受賞した。退官後も、地方自治行政、衛生行政に関する各種審議会長、委員会委員として活躍した。

教授は京大在職中より、従来の西欧直輸入の衛生学を日本の衛生学に改めるための諸研究に参画し、学術振興会委員として、日本全国、さらには満州、中国にまで住居衛生に関する調査研究を行い、その成果は、本邦住居の改善に益するところが多い。本学に着任後は広く衛生学一般にわたる研究を指導したが、殊に発育に興味を持ち、従来の発育研究がいわば横断的なものであったのに反し、個人発育の追求による縦貫的な研究を行った。門下からは、桐元武一教授(金大教育学部)、野村亨一教授(金大教養部)らが輩出している。

その他、労働の固定が女子工員に及ぼす諸影響に関する研究、呼吸力に関する研究、米の搗精度と吸収率に関する研究、北陸地方の農・山・漁家の衣・食・住に関する調査研究並びに実験的研究、気候衛生に関する研究、体感気候に関する研究、本邦乳児死亡に関する研究、蛔虫感染の疫学的研究、キシラン分解菌に関する研究、ビタミンB₁の定量方法の研究、同血中濃度に関する研究などがある。

第4代石崎有信教授 1933(昭和8)年3月金沢医大卒業、直ちに副手として衛生学教室(主任古屋教授)に入り、1941年9月講師、1943年10月助教授に累進し、附属医専講師を兼任し、主として栄養学方面の研究に従事した。1950年5月31日、金大教授に昇任し、新設の公衆衛生学教室主任に就任した。1959年10月から1960年11月まで、文部省在外研究員として、米国ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生学部生物統計学研究室に留学した。留学中の1960年4月、大谷教授のあとを受けて当衛生学教室主任教授に選ばれた。

教授は1944年以来、栄養能率研究委員会、国民食糧及び栄養対策審議会、総理府資源調査会専門委員(栄養部会)などの委員を歴任した。研究も栄養学的方面、特にカルシウムに関する研究が主となっている。数理にも明るく、生物統計学を講義し、著書に『医学研究のための統計法』(1955年)がある。

教授が衛生学教室を主宰するようになってからは、当時社会問題としても重大視されるようになってきた富山県のイタイイタイ病の原因究明に鋭意努力し、同病が河川の重金属汚染によって発生したものであり、その主役がカドミウムであることを裏付ける幾多の業績を発表し、動物実験でカドミウムの経口投与によって、腎性の骨軟化症を発症し得ることを立証した。その他、鉛などによる環境汚染についての疫学的調査と併せて実験的研究を行った。

第5代橋本和夫教授 1954(昭和29)年3月金沢医科大学卒業。1955年3月大阪大学大

第7章 医学部 医学部附属病院

学院（医学部衛生学、主任梶原三郎教授）に入学。同年12月大阪大学医学部助手となり、放射性燐標識菌を用いた結核菌の経気道感染機序に関する実験的研究に従事した。さらに、工業化学物質、特に当時大量に用いられ始めたアクリロニトリルの中毒学的研究に着手し、中毒作用機序として、ニトリル類一般に共通するシアン中毒に加えて、アクリロニトリル分子自体、特に二重結合部位の作用が存在することを実験的に示した。この結果は、本物質の変異原性や脂質過酸化作用などの関係で重要視されている。さらに、強い末梢神経麻酔作用を持つことを、電気生理学的にはじめて明らかにした。

1960年4月、大阪府立公衆衛生研究所（梶原三郎所長）労働衛生部に転出し、労働生理学の研究、特にアクリル系化合物の神経毒性作用について研究し、作業現場で発生した各種の中毒性神経障害の診断、治療、予防などの労働衛生業務にも従事した。1966年から2年間、W.N.オールドリッジ博士の招きにより、英国MRC中毒学研究所生化学部にて、アクリルアミド神経障害に関する研究を行った。

1975年6月金沢大学医学部教授（衛生学）に任ぜられ、アクリル系化学物質の神経毒性の研究を更に発展させるとともに、各種工業化学物質の毒性予測を最終目標とする構造・活性相関の研究、アニリン誘導体のメトヘモグロビン形成能と化学構造との関係解析、培養神経細胞を用いた神経毒性予測法の開発などを行ってきた。

これら研究活動のほかに、国際化学工業職業病会議（MEDICHEM）理事、日本メディケム会長、産業神経・行動学研究会の代表世話人などとして、国内外の学会活動にも力を注いだ。

第6代西條清史教授 1981（昭和56）年神戸大学医学部卒業後、直ちに神戸大学大学院（医学研究科生理系薬理学専攻：主任田中千賀子教授）に入学し、1985年神戸大学助手となり、主任住野公昭教授の下で、水俣病の原因物質である有機水銀をはじめとする各種重金属の中枢神経情報伝達に及ぼす影響の研究を開始した。この研究は情報伝達にとどまらず、中枢神経の生体防御機構の解析へと発展し、社会医学分野ではいまだ珍しかった分子生物学的手法を真っ先に取り入れ、末梢臓器でしか役割を果たさないと考えられていたメタロチオネインが、中枢神経でも生体防御の役割を果たすことを明らかにした。この間には、日本学術振興会からシンガポール大学へ派遣され、同大学社会家庭医学講座において鉛作業者の自律神経障害の研究を補助・指導した。

1989年1月から1990年4月の間、E.J.ネスラー教授の招きにより、米国エール大学精神医学教室において、モルヒネ中毒時に生じる中枢神経遺伝子の応答に関する研究を行い、脳の特殊な部位にのみ発現するエズリン・オステオネクチンなどの蛋白をクローニングした。帰国後も、様々な化学物質や環境変化に応答する遺伝子の研究を続け、脳内にセレノプロテインP類似蛋白という生体内抗酸化蛋白が発現していることを見いだした。1994（平成6）年6月には助教授に昇進し、さらに11月には金沢大学医学部教授に任ぜられた。環境変化を認識し、情報伝達し、適応するために必要な遺伝子の検索として、癌の悪性度、近視の進展、アルコール中毒の進展などにかかわる遺伝子群を解析するとともに、高度に

分化した脳の各部位の機能・形態を決定する遺伝子の解析を行っている。

国内での活動のみならず、American Society for Neuroscience (米国神経科学会)、International Congress of Occupational Health (国際労働衛生会議) などをはじめとする様々な国際学会で活動中である。また建築行政、生活環境に関する各種委員として、地方自治行政、衛生行政に協力している。

橋本教授時代から助教授を務める谷井秀治 (1972年3月金沢大学理学部修士課程化学科修了) は、主として各種工業化学物質の神経障害性・構造・活性相関について研究活動を行うとともに、学生教育、教育運営の補佐役を務めてきたが、最近では、汚染化学物質の神経障害機構を分子レベルから解明するように研究を進展させている。

(14) 公衆衛生学講座史

教室の沿革

戦後、定められた医学教育基準に基づいて、医学部では公衆衛生学講座を新設することとなり、1950 (昭和25) 年4月に文部省より設立が許可された。連合軍総司令部により、アメリカ流の予防医学の教育・研究の発展を目的として、各医学部、医科大学に設置が要請されたものであるが、初代教授には、本学衛生学助教授の石崎有信が1950年5月に任命された。石崎教授は、1960年4月には医学部衛生学講座を主宰することとなり、衛生学講座へ移った。第2代重松逸造教授は、1962年1月から1966年7月まで在任し、その後国立公衆衛生院疫学部長に転出した。1972年11月、札幌医科大学公衆衛生学教授の岡田晃が第3代教授として就任した。岡田教授は21年間在任し、1993 (平成5) 年9月、第8代金沢大学長として転出した。1995年2月に、山口大学医学部公衆衛生学助教授の荻野景規が第4代教授として赴任し、現在に至っている。

歴代教授略歴及び教室業績

初代石崎有信教授 (1950年5月～1960年3月) 石崎教授在任当時の教室業績は、栄養学的な分野の研究が中心であった。まず最初に挙げられる業績が、邦人の無機質、特にカルシウム摂取基準決定のためのカルシウム代謝に関する研究である。これについては、石崎教授が、1956 (昭和31) 年金沢で開催された第26回日本衛生学総会 (会長大谷教授) で、「カルシウム代謝について」と題して特別報告をしている。また、翌1957年5月に開かれた第11回栄養・食糧学会総会においても、石崎会頭の司会の下で、「カルシウムの栄養学的諸問題」というシンポジウムを行っている。同じく栄養学的分野のもう一つの業績として、邦人の必須熱量決定のためのエネルギー代謝測定が挙げられる。これによって、北陸地方の乳児から青年期に至るまでの者について、基礎代謝量の基準値が与えられた。その他に、衛生統計、産業衛生、環境衛生に関する研究などがある。

第2代重松逸造教授 (1962年1月～1966年7月) 重松教授は着任以来、結核を主とす

第7章 医学部 医学部附属病院

る胸部疾患の疫学、循環器疾患の疫学、小児の追跡的研究、生活環境や労働条件の健康への影響、集団や地域の健康管理などを取り上げ、幅広い分野にわたり研究を進めた。しかも、これらの数多くの研究の中心は、公衆衛生学の診断学とも言うべき疫学によって貫かれていた。結核の疫学に関する研究については、1966年6月に開かれた第41回日本結核病学会総会（札幌）で、「結核変遷の疫学的考察」と題した特別講演を行っている。また学生教育の一環として、大学近辺の家庭と臨床各科の協力の下に家庭健康管理の実習が始められ、これは現在に至るまで引き継がれている。

第3代岡田晃教授（1972年11月～1993年9月） 岡田教授の代表的研究は、物理的環境刺激、すなわち振動、衝撃、騒音、低周波空気振動、マイクロ波などによる生体反応に関するものである。その研究業績は、人体における力学的応答、伝達様相、感覚・知覚の諸特性の究明により基礎的知見を確立し、生体への影響・障害の全貌を明らかにするとともに、力学的応答と生理学的影響・障害との相関、量的反応関係について新知見を与えるものであった。これらの許容値に関する研究成果は、我が国及び国際的な許容基準に活用され対策の指針にもなっている。一方、世界ではじめて振動公害に関する先駆的な研究を手がけ、当時我が国で最も多発していた職業病の一つである振動障害についても、病態の解明に関して数多くの新事実を発見し、スクリーニングテスト、精密診断法及び関連する機器を新しく開発して振動障害の客観的な診断を一段とすすめた。また、これらの環境因子の複合影響についても、数多くの新知見を報告し、この領域の先覚者とされている。その他、化学的環境刺激と生体反応に関する研究、公衆衛生活動に関する基礎的研究、細胞・組織レベルにおける健康障害発現機序に関する研究などについても、積極的に展開し成果を挙げた。これらの研究業績により岡田教授は、1973（昭和48）年に「振動・騒音の生体影響、許容値に関する研究」で日本医師会より医学研究助成賞を、1988年には、国際環境複合研究協会から「種々の環境要因の複合作用の研究」にて国際環境複合影響研究大賞を、1989年には「振動刺激に関する環境医学的研究」で石川テレビ賞を、さらに同年「長年にわたる環境医学、予防医学の領域をはじめ地域保健医療の向上に対する貢献」に対して金沢市文化賞を受けた。学会長としては、1978年に第43回日本民族衛生学会総会、1986年には、金沢としてはじめての国際会議となった第2回国際環境複合影響会議、1988年に第61回日本産業衛生学会、1989年に第5回国際手腕振動会議、第35回日本宇宙航空環境医学会総会、1990年に第31回大気汚染学会、1991年に第56回日本温泉気候物理医学会総会、第46回日本体力医学会大会、1994年の第64回日本衛生学会の各学会長を歴任した。さらに、金沢へ赴任後設立した北陸公衆衛生学会の理事長も務め、地域の公衆衛生の向上に大きく貢献した。岡田教授が赴任してからの公衆衛生学講座からは、幾多の人材が輩出され、全国各地の衛生・公衆衛生学の教育研究者として活躍している。

第4代荻野景規教授（1995年2月～現在） 予防医学の概念を疫学的危険因子の分析だけでなく実験予防医学まで発展させ、21世紀の社会医学としての公衆衛生学を模索している。すなわち研究面では、生体内における酸化剤と抗酸化剤の分子レベルでの関係を食生

活などのライフスタイルとの関連で追究し、分子から疫学までの予防医学を想定している。社会的活動として、県や市の各種委員会を通じて地域医療に、あるいは労働省の委員として地域産業保健に貢献し、さらには厚生省に卒業生を医系技官として送りつつ厚生行政との連携に奔走している。

(15) 法医学講座史

沿革

1924(大正13)年に欧米留学から帰国した東京帝国大学の古畑種基が初代主任教授に就任し、ここにはじめて専任の教授の下で、法医学講座が創設された。これ以前は兼任として、病理学など他科の教授(教諭)が法医学の講義を行っていた。1936(昭和11)年3月、古畑教授は東京帝国大学教授として転出したが、1939年1月まで金沢医科大学教授を兼任した。

古畑教授の後任として、1939年2月、井上剛が東北帝国大学助教授より第2代教授に就任し、1971年3月31日停年退官するまで、長きにわたって北陸3県の法医実務を一手に担っていた。井上教授は、1961年に第45次日本法医学会総会を、1968年には交通科学協議会を主催した。また、1967年4月から2年間金沢大学医学部長を務め、現在の医学部校舎並びに医学部図書館の改築に尽力した。

1971年8月に、鳥取大学教授何川涼が第3代教授として着任し、1972年10月に第7回日本アルコール医学会総会を主宰した。1978年6月に岡山大学へ転出したが、1979年3月まで金沢大学教授を併任した。

1979年4月に、和歌山県立医科大学永野耐造教授が第4代教授として着任した。永野教授は1981年4月に第3回日本法医学会中部地方会、1990(平成2)年10月には、高円宮憲仁親王殿下ご台臨の下に、日・独法医学会共催第1回国際法医学シンポジウム(金沢)の大会会長を務め、さらに1992年4月には、第76次日本法医学会総会を主宰した。1993年4月に警察庁科学警察研究所長に転任した。

1993年12月に大島徹助教授が第5代教授に昇任し、1995年11月には、第17回日本法医学会中部地方会を主宰し、現在に至っている。

教育と研究

井上剛教授時代(1939~1971年) 第2代井上剛教授は、主に窒息死血の流動性化現象の機序解明や脂肪組織の死後変化に基づく人屍体の死後経過時間の判定に関する研究、並びに交通事故に関する法医学的研究を時代に先駆け始められ、これらの成果を自らが編集・発行した『法医・鑑識並びに社会医学雑誌』(第1~6巻)で公表した。1971(昭和46)年、長年にわたる法医学への貢献により北國文化賞を受賞した。

何川涼教授時代(1972~1979年) 第3代何川涼教授は、1972(昭和47)年「アルコー

第7章 医学部 医学部附属病院

ルに関する法医学的研究」について、第56次日本法医学会総会（京都）で特別講演した。1977年には『法医学』（日本医事新報社）を著し、1973年から2期4年にわたり、金沢大学医学部図書館長を務めた。なお、現高知医科大学橋本良明教授（本学1976年卒）は、何川教授時代に大学院生として指導を受けた。

永野耐造教授時代（1979～1993年） 第4代永野耐造教授は、和歌山医大時代からの課題である「高度焼損死体に関する法医学的研究」について、1982（昭和57）年、第66次日本法医学会総会（東京）で特別講演した。血液型抗原の熱抵抗性から始まった法医血清学的研究に加え、燃系血痕などからの連続的繰り返し試験法の確立、並びに最新の免疫組織化学的手法（光顕及び電顕）を用いた血液型抗原の組織・細胞レベルでの局在の解明など、国際的な一連の研究を発表した。これらの研究内容は『Burned Bodies-From the Aspect of Medico-legal Investigation』としてまとめられ、同書は金原一郎記念出版助成賞を受けた。さらに、法医中毒学的研究も精力的に行い、特に「救急医療をめぐる臨床法医中毒学的研究」や「揮発性薬毒物分析へのパルス・ヒーティング法の応用」を行った。永野教授は、医学と法学の学際的領域にも関心を寄せ、脳死や臓器移植など、医と法の接点にかかわる諸問題について提言を行い、『北陸医事法研究会誌』の編集・発行（第1巻～7巻）に加え、『脳の死 人の死』（日常出版）を1991年に出版し、脳死論議が高まる中で、活発に活動した。永野教授はこれら一連の研究の集大成として、『現代の法医学』（金原出版、初版、改訂第2版、改訂第3版）を編集・執筆し、同書は現在、代表的な教科書として広く用いられている。一方、法医実務面では、年間約50件の司法解剖に加え、年間数件ないし十数件の親子鑑定、物体検査、書類や医事裁判関係の鑑定も積極的に行った。

この間、1987年金沢医科大学教授として転出した田中宣幸（現産業医科大学教授）、1990年大阪市立大学教授として転出した前田均、及び1986年助手、講師、助教授となり1993年に第5代主任教授に昇任した大島徹らは、いずれもドイツに留学し、また中国から2人の長期留学生も招き、活発な学術国際交流を行った。このように、永野教授の下で多くの人材が育ち、国際的にも評価される教室の体制が築かれた。

大島徹教授時代（1993年～現在） 第5代大島徹教授は、法医学の三本柱である法医病理学、法医血清学及び法医中毒学に重点を置き、最新の技術を駆使し、法医学全般にわたる基礎的並びに応用的研究を進めている。すなわち、法医病理学では手術用双眼顕微鏡を法医解剖に導入し、微視的・系統的検査法による損傷検査の精度向上に努め、1995（平成7）年には「交通事故に起因する頸部損傷の法医病理学的検討」で佐川交通社会財団研究助成を受けた。また、免疫組織化学や免疫化学的手法を用いて、コラーゲン、フィブ

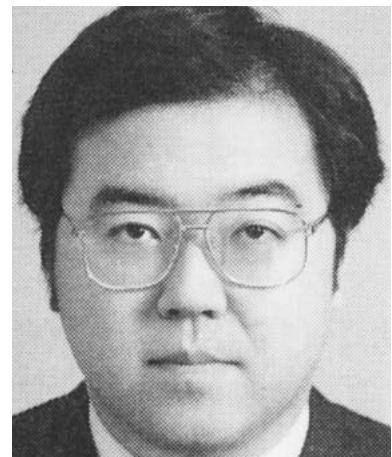


写真7-15 大島徹教授

ロネクチン、並びにインターロイキン1と6及び腫瘍壊死因子が、皮膚損傷の受傷後経過時間判定の有用な指標となることを、権（近藤）稔和講師や佐藤大学院生とともに明らかにし、国際的に高い評価を受けている。法医学血清学では、血痕・毛髪及び指紋などの微量かつ様々な環境下に置かれた各種の法医学的試料について、PCR法を用いた、性別及びABO式血液型の遺伝子型判定法を確立した。さらに、ABO式血液型遺伝子についてヒトと霊長類の相違点をDNAレベルで明らかにした。また、中国で発見された約1,300年前のミイラの性別や血液型判定に成功し（日中医学協会の研究助成）人類遺伝学への新たな展開を目指している。法医学中毒学では、生物試料についての包括的・迅速薬毒物スクリーニング法を確立するため、HPLCを応用した薬物分析システムを導入し、多剤同時分析への有用性を大辻雅彦助手らとともに示した。また、ホルマリン固定臓器から揮発性物質、覚醒剤及び向神経用剤がGC-MS法で検出し得ることを高安達典助教授らとともに実証した。さらに、1996年には「日・独・スコットランドの児童虐待に関する法医学病理学的及び社会病理学的研究」で、ファイザー・ヘルスリサーチ振興財団から国際共同研究助成を受け、法医学の立場からその解決を目指している。大島教授時代も活発な学術国際交流を行っており、高安、権、大辻は全員留学して共同研究を行い、さらに現在も中国からの博士研究生が共同研究を行っている。

大島教授は、前任の永野教授編の『現代の法医学』（金原出版、改訂第3版）の分担執筆、さらに1993年発行の『エッセンシャル法医学』（高取健彦東京大学教授編、医歯薬出版、初版、第2版及び第3版）並びに1997年発行『事例による死亡診断書・死体検案書記載のてびき』（医歯薬出版）の執筆なども行い、これらを基に法医学教育にも熱心に取り組んでいる。さらに、年間合計50件位の司法解剖及び行政解剖、年間数件の親子鑑定、物体検査、書類や医事裁判関係の鑑定も行っている。

現状と将来の展望

法医学は社会医学の一つとして、医学と法学の接点に当たる学際的問題について、その科学的解決を目指している。その活動領域は臨床・基礎医学を問わず、広範囲に及んでおり、地味ではあるが着実に進歩している。法医学には日常の鑑定実務の質的向上が絶えず求められており、この課題の実現のため、他の医学諸領域と密接に連携し、法医学専門家のさらなる育成が急務である。

（16）国際医療保健学講座史

沿革

当講座は、1996（平成8）年4月に発足したばかりである。旧教養部から助教授の藤原勝夫（講座主任）と外山寛が就任した。教室は基礎南棟4階に設けられた。当講座が新設された目的は、海外との医療及び保健協力に関する研究を推進するとともに、学内外を

第7章 医学部 医学部附属病院

対象としたそれらの教育・指導に当たることにある。現在、その目的達成に向けて邁進中である。

研究

発展途上国における、生活状態と健康状態の把握を目的に、次に挙げた国の現地調査を行った。

1996年 8 月（2 週間）：インドネシア共和国

1996年12月（1 週間）：タイ王国

1997年 8 月（1 週間）：中華人民共和国

人類学的に見た場合に、立位姿勢保持と直立二足歩行の獲得は、ヒトの進化を方向付けた重要な機能である。また、生活様式や運動様式を理解する上でも、またヒト特有の病気や健康問題を理解する上でも、立位姿勢と歩行の制御様式や生理機能の研究は極めて重要であると考えられる。このような観点で、次のようなテーマで研究を進めている。

随意的な上肢挙上運動時の予測的姿勢制御

立位姿勢の保持機構と歩行運動のフォームの関係

床振動時の予測的姿勢制御

頸部前屈位の中樞神経系への促通・覚醒効果

上・下肢運動間の干渉

立位姿勢の位置知覚における足底の機械受容器からの感覚情報の役割

体幹傾斜の空間知覚

足踏み運動時の体幹傾斜と接地時間の左右差

日本や先進国の多くは高齢化社会を迎え、高齢者の健康問題、特に生活習慣病の予防法の確立が社会的要請となっている。発展途上国においても、社会の進歩が急激であるがために、原始的な段階の健康問題に加えて成人病も発生している。このような観点で、高齢者の健康問題に焦点を当て研究を進めている。中でも、研究が遅れている平衡機能の低下予防法や、神経機能が関与する運動制御能の加齢変化やその訓練法を中心課題としている。研究テーマは、以下のようになっている。

高齢者を対象とした床振動時の立位姿勢調節適応能の評価

高齢者における運動制御能の低下

加齢に伴う下肢筋力の低下と各種生理機能との関係

インドネシアの人々の食と身体活動が健康に及ぼす影響

現状と展望

教室の態勢は、前述したように整いつつある。今後、各分野で国際化がますます進むと思われるが、当教室でも国際的な視野で医療や健康問題を系統立てる理論を構築すべく研究を進め、国際交流を活発化して教育に当たりたいと考える。

(17) 分子情報医学系専攻

神経系の機能は生体の示す機能のうちで、最も複雑かつ高次のもので、生体の内外からの刺激（情報）を各種感覚器で選択受容し、求心性の興奮（符号化された情報）として大脳中枢に伝え、中枢においては生体各部からの興奮を統合積分し、遠心性興奮として末梢に送り、効果器（筋及び腺器官）の作用として具現され、生体の行動となる。このような神経情報処理機構を、生理、形態、生化学及び薬理学の諸方面より総合的に把握究明し、人体機能の解明に資するとともに、人類の最終疾患と言われる精神神経疾患の理解と治療のための基礎研究を果たすことが、本研究施設の目的である。なお、1998（平成10）年の本学大学院医学研究科の改組により、分子情報医学系が独立専攻となり、神経情報研究施設の2部門（神経情報伝達学、神経情報物性学）は、それぞれ分子神経情報学、細胞遺伝子学として大学院講座に再編成された。

分子神経情報学講座史（旧神経情報伝達研究部門）

1967（昭和42）年6月1日、本研究施設の設置が認可され、直ちに情報伝達研究部門の教授候補の公募が開始され、1970年4月15日、根岸晃六がカラカスのベネズエラ国立科学研究所神経生物学教室から教授として着任した。したがって、本研究施設の実質的な活動は、その時から開始されたと言える。所在は基礎北研究棟の4階で、医学部附属がん研究施設（現金沢大学がん研究所）のあったスペースが充てられた。何も無い、誰もいない13室の改装のための設計と機器の発注が事始めであった。根岸教授は、1992年3月31日停年退職した。1992年11月1日、根岸教授の後任として、同情報伝達研究部門の加藤聖助教授が昇任した。

根岸教授時代（1970～1992年） 根岸教授は、当時未開拓であった、網膜内シナプス伝達物質の研究を旗印に実験に着手し、鯉の剥離網膜標本を用いて網膜電図、神経節細胞のスパイク放電、水平細胞膜電位を指標に、シナプス伝達候補物質とそれらの関連物質の薬理作用を検索し始めた。実験は多岐にわたり、網膜における情報処理機構の総合的な研究や、医学部及び国内外の関連研究機関との共同研究が積極的に推進された。

魚類網膜研究における特筆すべき新知見は、次の5点である。ドーパミンが網膜水平細胞間の電気的ギャップ結合を遮断する。多くの同種アマクリン細胞の樹状突起は、先端・先端間接触により内網状層内でネットワークを形成しており、しかもその接触部位はギャップ結合である。さらに、多くの脊椎動物網膜の桿体系双極細胞とドーパミン細胞がプロテインキナーゼCを特異的に内在していること、及びやつめうなぎ網膜にも錐体と桿体が共存していることを免疫組織化学的に証明した。

加藤教授時代（1992年～現在） 研究テーマとしては、根岸教授以来の教室の伝統である網膜内情報処理機構の研究、特に外来性及び内在性神経伝達物質の網膜細胞からの放出を指標とした神経回路網の解析、及び放出のシグナリングに関する神経化学的研究、ほか

第7章 医学部 医学部附属病院

に中枢神経変性疾患の発症機序解明を目指した興奮性アミノ酸（特にグルタミン酸）による神経細胞死、及びその防御機構に関する研究、神経変性や傷害からの再生・修復に関する細胞生物学・分子生物学的研究などに取り組んでいる。

現状と将来の課題 今後は、過去に集積された解剖学、生理学、薬理学的データを基にして物質、分子に立脚した分子生物学的手法を用いて解析し、より深い現象の理解に努めたい。また神経研究には、コンポーネントの解析とシステム研究の両輪が重要とされており、行動や高次機能の解析にも心掛けていきたいと考えている。また時代のニーズにこたえるべく、分子神経生物学を志す若手研究者の育成にも努めたい。

細胞遺伝子学講座史（旧神経情報物性研究部門）

1979（昭和54）年に、神経情報研究施設の第2部門として新設された。同年12月、初代教授として中村俊雄教授が本医学部第1解剖学助教授から昇任した。1987年3月に、中村俊雄教授が退職した。1988年2月に東田陽博教授が、金沢大学がん研究所薬理学部助教授から着任し、現在に至る。1989（平成元）年に、神経機能を分子生物学的に解明するため、特別設備「総合核酸検査システム」が導入された。

初代中村俊雄教授 1929（昭和4）年10月16日、金沢で生まれた。第4高等学校理学科甲類を1950年卒業。金沢医科大学を1954年卒業。同大附属病院でインターンの後、1955年、同大第3解剖学教室助手。1958年、第1解剖学助手。1959年、同講師。1960年、同助教授。1972年5月、金沢大学医療短期大学部教授（看護学科）。同年12月、助教授に戻り、1976年より1987年まで神経情報研究施設・神経物性部門教授。自律神経の終末支配と外眼筋の神経支配の研究を、組織化学的に行った。また、神経筋接合部の組織学的検索を中心に研究を行いコリンエステラーゼと神経線維や、カテコールアミンとの二重染色法の開発に努めた。1979年3月、鳥越甲順助手（後、講師・現福井医科大学解剖学助教授）を採用し、形態学的手法による神経伝達及び神経変性後の再生機構等の研究を行った。1996年1月逝去。

第2代東田陽博教授 1947（昭和22）年2月4日、奈良柳生の里に生まれた。岐阜大学医学部を1971年卒業。直ちに名古屋大学大学院医学研究科（環境医学・航空生理部門・御手洗玄洋教授）に入った。脳のグリア細胞の細胞膜内電位と脳波との関連を研究した。同時に愛知県心身障害者コロニー発達研究所生化学・柏俣重夫室長の下で、ビリルビンによるミトコンドリアリンゴ酸脱水素酵素阻害の研究を行った。1976年、アメリカ・NIH心肺研究所遺伝生化学部のニーレンバーグ博士の下に2年半留学し、それ以後同所への留学は3回、約6年にわたった。ニーレンバーグ博士は、RNAの塩基配列の暗号を解明したことで1968年にノーベル生理・医学賞を受賞し、その直後神経科学の研究を始めていた。記憶がどのように暗号化されているかを、ニューロプラストームとグリオームを掛け合わせて作った細胞を使って究明していたので、そのプロジェクトに参画した。以後この細胞を日本に持ち帰り、その細胞を中心に研究を続けることになる。1981（昭和56）年金沢

大学がん研究所薬理部助教授。1987年より現職。

本講座は、教授以下、鳥越講師、横山茂助手（現講師）の3名でスタートした。その後、星直人助手と明星康裕・木村康宏・武藤恵大学院生、ロックフェラー大学より技能補佐員として野田百美博士（現九州大医・助手）及び橋井美奈子博士（現講師）も加わった。その他、Md. Shahidulla、Z.-G. Zhong や R. Knijnenik、高橋博人が大学院生として研究に参画した。京都大学医化学、東京大学脳研生化学、岐阜大学生化学、三菱化成生命研、東北大学、その他ロンドン大学及びNIHと共同研究を行った。

現在の研究 神経細胞の受容体・イオンチャネル分子の機能解析を行っている。特に、細胞膜表面の化学伝達物質受容体からのシグナルが細胞内でどのように変換され、どのような経路でイオンチャネル分子に伝達され、神経細胞の興奮性を調整するかの機構について研究を重ねている。特に、ムスカリン性アセチルコリン受容体と、ブラジキニン受容体反応について研究した。受容体蛋白質をコードする遺伝子を導入した神経腫瘍培養細胞をそれぞれ創出し、リガンドで刺激した際の細胞内情報伝達物質（カルシウムイオン、イノシトールリン脂質、環状ヌクレオチド等）の動態を調査した。また、カリウムイオンチャネルを形成する蛋白質の遺伝子を3種類単離し、これを培養細胞とアフリカツメガエル卵母細胞の系で再構成して、チャネルの基本的性質を調べ報告した。

（18）動物実験施設史

沿革

動物実験施設は、科学的・倫理的な動物実験の重要性が認識されたことにより、昭和40年代から国立の医科系大学を中心に設置が進められてきたが、本学の動物実験施設（以下施設と略す）は、1976（昭和51）年に設置が認められた。これは国立大学の施設としては11番目であるが、1978年には現在の建物が竣工して、東京大学、京都大学、九州大学などに次いで6番目の医学部附属の施設として利用を開始した。これに先立ち、1973年には宝町団地中央動物実験施設委員会（委員長 服部絢一内科学第3講座教授）が設けられ、設置に向けて活動を開始している。この名称から分かるように、この施設は医学部だけでなく、宝町地区にある全部局の共同利用を目的としている。

設置認可と同時に、初代施設長に吉村裕之寄生虫学講座教授が併任され、科学技術庁放射線医学総合研究所から早川純一郎主任研究官が専任助教授として着任した。

1976年6月、動物実験施設運営準備委員会が設置され、翌1977年8月にはこれを運営委員会に改め、同年9月には施設棟施工に着手した。翌1978年9月に、地上5階、地下1階、延べ面積4,200m²の屋舎が完成し、10月より運営が開始された。この間、1977年4月に小泉勤が助手に採用された。

1985年4月、第2代施設長として宮崎逸夫外科学第2講座教授が併任された。1987年5月、第13回国立大学動物実験施設協議会が、全国45施設から施設長はじめ関係者多数

第7章 医学部 医学部附属病院

が参加して本学を主催校として開催された。1988年4月、科学的・倫理的に適正な動物実験を行うための指針として、「金沢大学宝町地区動物実験指針」が作成され、同時に宝町地区動物実験委員会が設置された。

1990（平成2）年4月に、第3代施設長として永坂鉄夫生理学第1講座教授が併任され、同年8月小泉勤助手が講師に昇任した。1991年6月、施設設置15周年の記念式、並びに学内の講師及び国立遺伝学研究所・森脇和郎教授を招待講師とする記念講演会を開催した。同年10月、小泉勤講師が新設された福井医科大学附属動物実験施設の助教授として転出した。

1992年4月、東京大学、京都大学、東北大学に次いで施設に教授が設けられ、同年6月、早川助教授が教授に昇任した。同年4月、橋本憲佳助手が新規採用された。

1994年1月に、第4代施設長として専任の早川教授が就任し、同年5月からは国立大学動物実験施設協議会会長校として、1996年5月まで協議会活動を総括した。特に、1995年1月の阪神淡路大震災に際しては、被災地神戸の神戸大学医学部附属動物実験施設への救援活動に協議会会長校として協力した。また同年11月には、協議会主催で、国立大学動物実験施設技術職員研修を、全国の国立大学の動物実験施設職員を集めて辰口共同研修センターで、3日間にわたり開催した。現在この研修会は、文部省主催の国立大学等動物実験施設教職員高度技術研修として継続しており、1997年度の研修にはSCS（space collaboration system）によって本学からも参加した。

1996年6月には、施設開設20周年を記念して講演会を開催した。講演会では、徳島大学医学部の桑島正道助教授による「全身性カルニチン欠乏の病態 - JVSマウスの教えてくれたこと - 」と題して、当施設で発見されたカルニチン欠乏症マウスを用いた研究が紹介された。次いで、本学保健管理センターの中林肇教授の「血中腓・消化管ホルモンを感知する門脈神経機構とその生理学的意義」と題して、長年の施設でのイヌ・ラットを使用して得られた膨大な研究成果が紹介された。同年8月には遺伝子操作動物の利用増加に伴う、遺伝子導入のためのウィルスベクターの安全性と動物実験の倫理を遵守する立場から、施設利用要項を改訂し、動物実験委員会の組織が改められ、大島徹教授（法医学講座）が委員長に選出された。

利用状況の変遷

1978（昭和53）年10月に施設運営が開始されて以来、利用は徐々に増加し、1995年度実績では、宝町地区からの施設利用講座部門50、研究テーマ237、年間延べ入館者数約12,000名、主な一日平均飼育動物数はおよそマウス7,000、ラット2,300、ハムスター200、モルモット200、ウサギ250、ネコ30、イヌ120である。平成に入ると、教育学部、理学部、工学部からの利用もあるようになり、飼育動物においては、イヌ、ネコの利用数減少に対して、トランスジェニックマウス、遺伝子ノックアウトマウスなどの遺伝子操作動物の利用が増加している。

このような施設を利用しての研究成果は、年間で口頭349編、印刷206編（1995年度）と発表されている。なお、1978年からの毎年の利用状況、研究成果リストは『金沢大学医学部附属動物実験施設利用報告書』として隔年に刊行されている。

教官の研究

施設の設置目的に沿って、施設開設以来、研究目的を動物実験の精度の向上と倫理的な遂行に置いて行っているが、教官定数の不足もあり、すべて学内の他講座・部局、及び他研究機関との共同で行われてきている。

開設当初から昭和50年代は、マウスの補体など、血清成分の遺伝的変異の研究をがん研究所・分子免疫部と、寄生虫抗原の動物での反応性について、吉村施設長の寄生虫学講座とそれぞれ共同で行った。また、1979年度から1988年度まで厚生省の難病の疾患モデル調査研究班に参加して、疾患モデル形質の遺伝解析と新しい系統の育成・研究を行った。1981年からは、二階堂浩子博士（現非常勤職員）が専修生として研究に加わった。

1985年からは、薬学部放射薬品化学教室と共同で、複数突然変異を持つ免疫不全マウスの系統の育成を開始し、1994（平成6）年にはこれが完成し、現在学内外と共同で、これらの系統の有用性の検討を行っている。

1985年に施設で発見された脂肪肝を発症する突然変異マウス（JVSマウス）は、鹿児島大学・大阪大学・徳島大学などとの共同研究により、カルニチン欠乏症のモデルであることが明らかになった。この研究は現在まで続いており、その成果は10数編の研究論文として発表されている。

1990年から1年間、小泉助手が米国ジャクソン研究所でヒトとマウスの遺伝的相同性の研究を行った。また、1992年から3年間、がん研究所分子免疫部、カロリンスカ研究所（スウェーデン）との形質細胞腫の発生機構についての国際共同研究に参加した。

1993年8月には、JICAプロジェクト「中国実験動物人材養成センター」による遺伝学的統御及び育種技術の研修のために、中国科学院から派遣された汪歌講師が外国人受託研修生として1年間研究に参加し、1995年4月より同プロジェクトによる研修生、孟雁講師を3ヵ月間受け入れた。

1978年から現在まで、文部省科学研究費がん特別研究、がん重点研究の実験動物委員会に参加し、がん研究のための実験動物の維持・供給・情報についての支援活動を行っており、1990年から2年間は文部省科学研究費（総合A）の交付を受けて、大学などで維持されている実験動物の有効利用についての調査研究も行った。

技術職員人事と業務

開設時には、講座、事務所属の動物飼育担当者の配置換えにより事務官1、技官5、技能補佐員2名であったが、翌1979年には配置換えなどによって、技官3名、技能補佐員1名が増員された。空調機器管理、飼育器具の洗浄作業は、これとは別に業者委託とした。

第7章 医学部 医学部附属病院

同年には飼育長制度が設けられ、橋本松太郎技官が学長から初代の飼育長に任命され、現在の多賀たか子飼育長（1996年度就任）に至る間に、中尾好夫、小林昭一、津田政儀各技官が飼育長に就任した。また1990（平成2）年11月には、本多登美夫技官が施設管理主任に昇任し、さらに1993年4月、医学部に技術部が組織化されると、生体機能班の技術主任に就任した。1990年までは、部局間の振り替えによって人員が確保されており、1991年には内本淳技官が新規採用者としてはじめて配属され、翌年には鷺直由季子技官が新規採用されたが、それ以後は新規の採用はなく、停年退職職員の補充はされていない。そのために、1991年度から一部飼育管理業務を業者委託することとなった。

職員の業務は、当初の動物飼育管理から、最近は衛生管理のための微生物検査、特殊動物の系統維持などにわたり、1994年からは、遺伝子導入動物作出支援のために必要なマウス初期胚の操作技術（凍結保存、体外受精、胚移植）の改良・錬磨にも取り組んでいる。学外的には、1979年に施設職員を中心に日本実験動物技術者協会北陸支部が設立され、第19回日本実験動物技術者協会総会（1985年5月）、第29回総会（1995年5月）が、本多登美夫技官はじめ施設職員が中心となって、本学医学部で開催された。

現状と展望

動物実験の適正な実施の場としての施設整備の当初の目的は、一応達成された。しかしながら、最近の医学研究の高度化と研究動向の変化に対応するためには、施設設備の近代化が必要不可欠となっている。特に遺伝子導入動物を用いた研究の急増と、高齢化社会に対応した脳神経分野の研究の増加に対しては、施設の支援無くしては成立し得ない。既に文部省主催の施設教職員高度技術研修のプロジェクトが始まっているが、施設設備の近代化と人材の確保並びに支援システムの開発に加え、全国の動物実験施設との連携、施設職員の技術水準の向上が急務となっている。関係各方面の理解と協力が必要である。

3 医学科臨床講座の沿革と業績

（1）内科学第1講座史

沿革

内科学第1講座（第1内科）は、初代佐藤廉教授が1883（明治16）年11月に、金沢医学校の一等教諭兼内科医長に任命されて以来、長谷川寛治、浅田決、黒柳精一郎、小林広、山根文策、岡部忠の各教授が歴任した。1896年4月には山崎幹教授が着任し、1917年8月に退職されるまで31年にわたって在職された。着任後の翌年12月には、内科が2部に分けられ、山崎幹教授は第1内科部長に就任した。さらに1905年に、病院が小立野に移

転し、ここに第1内科の診療室が別棟として建設された。さらに1923（大正12）年に旧制金沢医科大学となるとともに、第1内科の研究室や外来診療室が明確に区別され、歴代の大西克孝、田村昌、山田詩郎、行徳健介教授の下に助教授以下のスタッフも充実し、教室としての研究・診療体制が確立した。1932年10月には、山田詩郎教授の後任に谷野富有夫教授が就任し、以後1961年3月に退官されるまでの29年間教室を主宰された。この間、1949（昭和24）年に国立学校設置法の公布により、本教室は新制の金沢大学医学部内科学第1講座として再出発した。

その後の教室の変革は、施設面においては1966年4月に外来診療棟及び研究室が完成し、現在の教室へ移転した。さらに1980年3月には、旧館を大幅に改装した第6病棟が内科病棟並びにその附属設備として完成し、今日に至っている。人事面では、谷野富有夫教授の後任に武内重五郎教授が1961年5月に着任した。武内教授は医学教育法の改革に情熱を示し、1964年より今日まで実施されている臨床実習（BST）、セミナーの新設、さらには診療面における腎・高血圧、肝・消化器、循環器、内分泌、血液の各専門外来の創設を行った。1969年には、谷野名誉教授に勲二等瑞宝章が授与された。1972年6月金沢医科大学の新設に伴い、高田昭助教授が消化器内科教授として転出した。さらに篠田晤講師、大谷信夫助手がそれぞれ腎臓内科、呼吸器内科主任として赴任し、後に主任教授に昇任した。さらに廣瀬源二郎が神経内科教授に、高瀬修二郎、石川勲が高田、篠田教授の後任として主任教授に、蓮村靖が同大学総合研究所教授に就任した。1974年2月、武内教授が東京医科歯科大学医学部第2内科教授として転出し、同年9月に、国立がんセンター服部信部長が第16代教授として着任した。服部教授は、診療、教育、研究のいずれの面においても武内内科時代の形態を継承、発展させた。1975（昭和50）年秋に開学した富山医科薬科大学へ、1977年4月に杉本恒明助教授が第2内科主任教授として転出し、水村泰治講師以下10名がともに赴任した。1980年5月に、野村岳而助教授が久留米大学医学部第3内科教授、1983年1月に澤武紀雄講師が金沢大学がん研究所内科教授に就任した。1986年、服部教授は肝癌研究の功績について北國文化賞を受賞し、1989年6月、都立駒込病院長として転出した。後任には、小林健一助教授が1990年1月に昇任した。1993年5月、高畠利一助教授が島根医科大学第4内科教授として赴任した。さらに医学部保健学科の新設に伴い、1996年4月に高田重男助教授が生体情報学教授に就任した。また同年、小林教授が服部教授に引き続き、北國文化賞を受賞した。この間、教室出身の大島徹が金沢大学医学部法医学教授、土肥和紘が奈良県立医科大学第一内科教授、浅野喜博が愛媛大学医学部細菌学教授に就任した。現在、本教室で育かれた多くの人材が、北陸のみならず日本全国において内科学の広い専門分野で活躍しており、古き伝統の上に新しき歴史が刻まれつつある。

診療と研究

谷野教授時代（1932～1961年） 谷野教授が教室を主宰して以来、1939（昭和14）年

第7章 医学部 医学部附属病院

までの研究業績を論文集から抽出すると、消化器病学（慢性胃炎・レントゲン検査・潰瘍食の研究）、感染症学（胃内細菌・結核菌・人工気胸療法の理論的研究）、循環器病学（冠動脈の薬物作用と神経支配）、血液学（悪性貧血）、さらには基礎的研究として医化学岩崎教授と血中残余窒素並びに光照射の血液生化学的影響、あるいは病理学杉山教授の方法による急性熱性疾患における白血球機能の研究などが行われている。これ以後、時代の背景もあり、「低圧環境の生体機能に関する研究」が循環器系のみならず生体防御に至るまで教室員全員で精力的に行われたが、敗戦とともに米軍による中止命令が出され、その成果は惜しくも公表されなかった。しかし、教授の在任中に58編の学位論文が発表され、研究のほかにも優秀な実地医家の育成にも力が注がれた。

武内教授時代（1961～1974年） 武内教授の着任により、診療・教育・研究体制が一新された。診療においては、いち早くカルテの英語化、再来の専門外来制（循環器、腎・高血圧、一般、消化器、内分泌、血液）が導入され、総回診前の専門グループ別症例検討、回診時のBSTと症例検討会、剖検率の向上とこれに基づく臨床検討会の充実が図られ、臨床医の養成に留意した厳しい指導が実施された。教育面においては、1963年より小グループ制の内科診断学と、翌年よりBSTが教授の推進の下に導入された。武内教授の多くの著書の中でも『内科診断学』は我が国における基準書となり、杉本恒明教授により改訂され現在に至っている。加えて『内科診療指針』は、近年多数出版されている類書の原型となった。研究面では、現在に引き継がれている第1研究室（内分泌）、第2研究室（肝・消化器）、第3研究室（腎・高血圧）、第4研究室（循環器）の体制が整備され、各専門分野における国際的レベルに通ずる質の高い研究の促進が図られた。武内教授の研究分野は、腎の生理及び病態生理、高血圧、冠動脈疾患の組織病理、冠不全並びに不整脈発生機序、心機能評価法、肝臓の生理及び病態生理、肝障害における糖代謝と多岐にわたった。その成果は、日本内科学会総会宿題報告などで報告され、さらに49編の学位論文として発表された。

服部教授時代（1974～1989年） 服部教授は、診療・教育・研究体制を継承し、特に研究面において独自の構想を発展させた。教授自身の研究テーマである肝炎・肝臓については、生化学、免疫、代謝面から肝臓の発生機序、診断・治療、さらには予防に至るまで多面的に検討された。1975～1983年まで厚生省がん研究班「がん診断を目標とした臨床化学の研究班」班長の任に当たり、その多くの研究成果として肝細胞癌に極めて特異的な novel γ -GTPの発見、実験的ウッドチャック肝臓の樹立がなされた。さらに「難治性の肝炎班」にも参加し、B型肝炎ワクチン、インターフェロンを用いたB型肝炎の予防と治療にも成果を挙げた。これらの成果を踏まえて「ウイルス肝炎から肝細胞癌」をはじめ多数の著書・総説を上梓した。さらに教室のみならず、多くの施設と共同研究がなされ、教室においても前任の武内教授時代からの研究テーマを発展させた内分泌グループは、肝臓における耐糖能異常、糖尿病性腎症、腎・高血圧グループは、腎炎・ネフローゼ症候群、腎微小循環、高血圧の血行動態、循環器グループは、不整脈、虚血性心疾患、循環調節機能

を主な研究分野とした。これら教室の各研究グループの成果が、国内外の学会において多数発表され、それらは在任中の欧文著書・論文158編並びに学位論文87編として発表された。

小林教授時代（1990年～現在） 小林教授が教室を主宰してからは、診療・教育・研究の流れを更に発展させている。教育においては、BSTの学生一人一人について実地診察の手ほどきから最新の論文抄読までを指導し、その教育効果を高めている。研究面においても、ライフワークである肝細胞癌の研究では、基礎面においてウッドチャック肝癌培養細胞株の樹立、臨床面では肝癌の早期スクリーニング法として多数例の長期観察に基づく“小林スコア”を提唱した。さらに1989～1993年まで、厚生省研究班「C型肝炎と肝癌に関する研究班」班長の任に当たり、C型肝炎の診断、治療、予防に多大の貢献をなした。最近では金子周一助教授とともに、遺伝子学的研究によるC型肝炎からの肝細胞癌発生機序の解明、並びに将来の遺伝子治療への応用に向けた研究を展開している。さらに、高田重男生体情報学教授、阪上学講師を中心とする循環器研究においては、心不全をはじめとした各種病態における神経調節の検討、不整脈の発生機序とこれに基づくカテーテルアブレーション治療の開発が行われている。腎・高血圧研究では、横山仁血液浄化療法部助教授を中心とする腎炎・ネフローゼ症候群におけるサイトカイン・接着分子の研究、伊勢拓之血液浄化療法部講師の高血圧発症における腎性因子の検討、並びに血行動態の評価が行われている。永井幸広講師を中心とする内分泌研究では、糖尿病をはじめとする各種病態の遺伝子的背景の検討、並びに実験的糖尿病性腎症の治療が試みられている。これらの成果は、欧文著書・論文174編並びに学位論文51編として発表された。

現状と将来の課題

前述のように、現状は武内教授時代に培われ、服部教授時代に築かれた体制を時代の潮流に合わせつつ、多少の改変を加えながら踏襲されていると言えよう。近い将来の大きな課題は、臓器別体系の確立と大学院大学の実現化であることは自明である。人員の増加が望めない中で、百年にも及ぶ講座制をどのように改編して、学問を中心とした診療、教育の新しい体制を築き上げるか。至難の課題ではあるが、成し遂げねばならない。

（2）内科学第2講座史

沿革

1883（明治16）年6月、石川県金沢病院に内・外科両科が置かれ、1897年12月に内科が2部に分けられ、第一部長に山崎幹、第二部長に高橋剛吉がなった。次いで佐々木達、田村昌、山本直枝、近藤清吾と就任したが、詳細は『金沢大学医学部百年史』に記載があるので省略する。塩村和喜男は、1921年3月より1924年3月まで第2内科副医長として勤務し、1923年4月に金沢医科大学となるとともに、第1内科と第2内科の外来診療室

第7章 医学部 医学部附属病院

や研究室の位置が明確に区別された。1924年4月に、大里俊吾教授が東北大学熊谷内科助教授より第2内科講座主任として着任し、同年11月さらに小池亀代治を助教授に迎え、第2内科講座の内容は完備した。

第2内科病棟は、1938（昭和13）年に建てられた旧館病棟（第6病棟）に、第1外科とともにあった。大里教授は1944年2月まで在職したが、東北大学へ転任し、同年3月、当時金沢医科大学教授兼結核研究所員であった日置睦奥夫が、第2内科主任となった。しかし、1957年5月、日置教授は不幸にも不治の病を得て、惜しまれつつ54才で他界した。以後、倉金丘一助教授が第2内科主任を代行したが、約1年を経て、後任として群馬大学教授であった村上元孝が迎えられた。1958年4月、再び第2内科は生気を呼び戻し、教室員も増加し臨床、研究両面において一段と充実した。病棟は、1967年に新館病棟に移転した。村上教授は1972年7月、東京都養育院附属病院長に就任のため退職した。同年10月竹田亮祐が助教授より教授に昇任した。

1972年、金沢医科大学が開校され、関本博が老年科教授として、1973年10月村上暎二助教授が循環器内科教授として転出した。病棟は、1979年より再び改築された旧館病棟（第6病棟）へ戻り、現在の形となった。1981年7月、森本真平助教授が金沢医科大学内分内分泌科教授として、1983年10月、黒田満彦助教授が福井医科大学臨床検査医学教授として転出した。1984年4月に元田憲、1987年4月に東福要平、1990年4月に中林肇が、相次いで金沢大学保健管理センター教授に転出した。1994年3月、竹田教授が停年退官し、同年7月、馬淵宏助教授が主任教授に昇任した。さらに1997年4月、宮森勇助教授が福井医科大学第3内科教授として転出した。

診療と研究

日置教授時代（1944～1957年） 日置教授は就任後、ドイツ留学中に学んだ脂質及び蛋白化学を駆使して、結核の化学療法、次いでホルモンの臨床化学の分野で先駆的な研究を続け、その成果は1950（昭和25）年5月、第25回日本結核病学会（金沢市）において発表された。主なる研究は、結核の実験的研究と化学療法、実験的感染症の化学療法及び抗生物質による治療、ビタミンB₁代謝（焦性ブドウ酸測定とその臨床応用に関し研究された）、内分泌学に関する研究で、1954年の日本内科学会と内分泌学会との合同シンポジウム「下垂体・副腎系」を日置教授が担当し、その後の第2内科の内分内分泌学の基礎が形づくられた。これらの研究を中心として、92編の多数の学位論文が発表された。

村上教授時代（1958～1972年） 村上教授の着任とともに、教授のライフワークである動脈硬化症をはじめ、これと関連の深い高血圧、糖尿病に関し、成因・治療を実験的立場から解決すべく、脂質代謝、血管障害因子、凝血、線溶、血小板機能、血行力学的因子、内分泌的因子、などの実に多方面にわたる研究を展開した。村上教授は、1969年8月には第8回国際ジェロントロジー学会（ワシントン市）において「粥状硬化症の予防」についてのシンポジウムを担当し、1970年4月、第67回日本内科学会（福岡市）宿

題報告において「動脈硬化症、特にその成因と治療」と題し研究を集約した。

1968年4月から1972年3月まで、医学部附属病院長及び評議員として大学の管理・運営に携わった。この間、1966年第8回日本老年医学総会、1966年第8回日本臨床血液学会総会、1972年第36回日本循環器学会総会を金沢で開催した。症例を大切にし、深く掘り下げていく真理の探求心、医学への情熱により、教室の研究活動は活況を呈し、51編の学位論文が発表され、次世代の内科を担う人材が数多く育った意義深い時代であった。

竹田教授時代（1972～1994年） 村上教授の後を受けて、竹田助教授が教授に就任し、内分泌代謝学と循環器学を中心に教室が運営された。内分泌代謝学として副腎及び甲状腺ホルモン、内分泌性高血圧、糖尿病、脂質代謝、消化管ホルモン、また循環器学として高血圧、心筋症、冠動脈疾患、動脈硬化症、腎疾患など、多岐にわたる臨床と研究を展開した。竹田教授は、1975年、第48回日本内分泌学会のシンポジウム「ホルモンと高血圧」の司会を指名され、ミネラルコルチコイドやプロスタグランジンをめぐる高血圧の成因に力を入れ、ミネラルコルチコイド研究に関する成果は、1986年第83回日本内科学会宿題報告「ミネラルコルチコイド分泌代謝異常の臨床」として報告した。1983年から5年間、厚生省特定疾患「副腎ホルモン産生異常症調査研究班」の班長として、日本における同疾患の実態調査をはじめ、病態の解明、治療法の開発に全国レベルで研究活動を展開した。

竹田教授は、1984年4月から1986年3月まで金沢大学附属病院長、1986年4月から1992年3月まで金沢大学保健管理センター所長、1992年1月から1993年12月まで金沢大学医学部長を歴任した。1985年、糖尿病学の進歩、1989年、第32回日本糖尿病学会総会、1992年、第66回日本内分泌学会と第42回日本体質学会を金沢で開催した。竹田教授時代に学位論文は130編に上り、一連の竹田教授の業績に対し、1990（平成2）年第43回中日文化賞が、1993（平成5）年第47回北國文化賞が、1997（平成9）年第51回金沢市文化賞が授与された。この間、1983年4月第2内科出身の宮保進が福井医科大学第3内科教授、1984年7月松田保が金沢大学医学部第3内科教授、1985年4月竹越襄が金沢医科大学循環器内科教授、1992年1月内田健三が金沢医科大学内分泌内科教授、松井忍が同大学循環器内科教授、1994年9月藤村昭夫が自治医科大学薬理学教授にそれぞれ就任した。

馬淵現教授は、助教授時代から展開している「疾患の分子遺伝学的研究」で、家族性高コレステロール血症や家族性CETP欠損症をはじめとするリポ蛋白代謝異常に関する研究で業績を挙げ、N Engl J Medの3編をはじめ、多数の一流医学誌に論文を発表してきた。特に、コレステロール低下剤であるHMG-CoA還元酵素阻害剤の開発に関する先駆的な業績は、New York Timesのニュースにもなったほどである。この薬剤は、現在世界で最も広く使用されているコレステロール低下剤で、動脈硬化性疾患の初発予防、再発予防に画期的な成果を収めている。1992（平成4）年、医学部十全講堂において、ノーベル賞受賞者として名高いゴールドスタイン（Goldstein）とブラウン（Brown）両博士を招いて、University Forum Kanazawaを開催し、同年12月、日本動脈硬化学会冬季大会を金沢

で開催した。

現状と将来の課題

馬淵教授が就任し、竹田教授時代の臨床・研究分野を発展的に継承するとともに、“臨床例に基づいて、疫学から分子遺伝学まで追求する”方針が教室全体に浸透しつつある。家族性高コレステロール血症、家族性CETP欠損症、家族性LCAT欠損症、家族性無リポ蛋白血症、肥大型心筋症、Wilson病、Gilbert症候群、Cowden病、Fabry病、Liddle病、Bartter症候群、腎性尿崩症、多発性嚢胞腎、若年発症II型糖尿病、ミトコンドリア遺伝子異常性糖尿病などに関して新しい遺伝子変異を見いだした。今後も内科疾患の遺伝子診断と遺伝子治療を推進する予定である。内科学の専門化が進み、より高度な医療が求められているが、その進歩を担い得る人材の確保と、内科学の臨床と研究の均衡ある教室運営、学生教育と卒後臨床教育の充実が、今後も追求すべき課題となっている。

(3) 内科学第3講座史

沿革

1968(昭和43)年4月に設置され、1969年4月に初代教授として、九州大学第1内科学教室より初代の服部絢一教授が着任し、開講した。当時、我が国は高度経済成長を遂げていた時期であり、同時に医療も急速に発展していた。これに伴う医師不足が社会問題となり、その解消が急務とされ、さらに卒後研修を含めた医学教育の在り方の再検討を迫られていた時代でもあった。内科領域でも専門分野の細分化が進み、一層高度な専門化が求められていた。このような社会状況を背景に、内科学第3講座は開講した。講義分担当科目は、血液学、呼吸器病学、感染症学、心身医学であった。

開設時、教室は附属病院北病棟(当時)に設置されたが、1973年12月に研究棟1階及び2階に移転し、さらに1983年には救急部の設置に伴い、現在の3病棟1階に移転した。病床数は当初20床で、旧館6階(現在の6病棟6階)と東病棟(当時)にあった。その後1971年に現在の3病棟3階に移転するとともに、37床に増床になった。さらに、1978年に40床に、1983年には41床となり、現在に至っている。

1984年3月、服部教授が停年退官した。この間、1973年4月には、谷本一夫講師が金沢大学医療技術短期大学部教授に就任し、また、1983年4月には宮保進助教授が福井医科大学内科学第3講座の教授として転出した。服部教授は在任中、1972年4月から退官まで附属病院輸血部長を併任するとともに、1978年4月から1980年3月まで、附属病院長を務めた。同教授は、長年にわたる血液学を中心とした研究業績に対して1984(昭和59)年4月、紫綬褒章を授与されるとともに、1989(平成元)年11月に勲三等旭日中授章に叙せられた。

1984年7月に、本学内科学第2講座出身である松田保教授が東京都老人総合研究所よ

り着任し、血液凝固学の研究が新たに加わった。松田教授は、1984年から1997年5月まで附属病院輸血部長を併任し、また、同年から高密度無菌治療部の部長も併任した。さらに、1996年1月から同年6月まで医学部長を務めた。同教授は、血液凝固学を中心とする研究業績により、1989（平成元）年には北國文化賞を受賞した。

診療と研究

服部教授時代（1969～1984年） 服部教授は、既設の内科学講座の専門外領域であり、同教授の専門分野でもあった血液学を中心に教室の運営に着手した。それまでは、北陸には血液疾患を専門とする機関がなく、学内外からの期待は大きかった。研究は免疫血液学が主で、当初抗体産生細胞の同定から研究が始まった。さらに、白血病、再生不良性貧血などの致死的であった疾患に対する骨髄移植療法の基礎的研究を、全国に先駆けて開始した。本研究は、典型的な集学的治療であるので、研究は造血幹細胞、移植免疫、腫瘍に対する化学・放射線療法、無菌対策など広い範囲に及んだ。それぞれの研究グループは、骨髄移植という大きなテーマに向かって活発に研究を進めた。しかし、我が国ではまだ全く研究にも着手していなかった分野であり、試行錯誤の繰り返しではあった。あたかもこのような状態の時期の1977年に、服部教授を会長として日本血液学会が開催され、この招待講演として世界の骨髄移植の中心であるフレッドハッチンソンがん研究センターのトーマス（E.D. Thomas）教授（1990年にノーベル医学賞を受賞）を招くとともに、自らも渡米し骨髄移植の現状を視察し、移植の実施に備えた。

1975（昭和50）年に、国立大学でははじめて病棟内に無菌室が設置され、移植実施の体制が整い、1977年10月に、再生不良性貧血患者に対して我が国で最初の本格的な同種骨髄移植が実施された。本例は、残念ながら拒絶により生着しなかった。しかし翌年、急性リンパ性白血病患者に対して行った移植は成功し、教室員を大いに勇気付けた。本例は現在、我が国の急性白血病の最長無再発生存例である。その後、服部教授は骨髄移植の健康保険の適応並びに普及のための組織作りに奔走し、現在の日常的な治療法に成長させた。その後も症例を重ね、移植成績の向上を目指して研究は続いている。

骨髄移植の研究に加えて、細胞回転を利用した造血器腫瘍化学療法の試み、白血病分類に関する研究、細胞診断学における細胞変性にかかわる検討など、血液学、細胞学の分野でも新しい知見を報告した。また内分泌学でも、視床下部・下垂体・副腎皮質系の日周リズムの検討及びステロイドホルモンの代謝の研究が、呼吸器病学ではアレルギー及び肺癌に関する研究の基礎づくりがなされた。このほか、敗血症を中心とした造血器疾患に伴う感染症学、並びに心身医学では神経性食欲不振症の研究も進められた。

教室の創設と骨髄移植の成功に向けて教室が一体となって努力した時代であり、研究の成果は、53編の学位論文として発表された。

松田教授時代（1984～1999年） 1984（昭和59）年、松田教授が就任した。同教授は本学内科学第2講座在任中に血液凝固学の研究に着手し、既に我が国の血液凝固学をリー

ドする血液学者であった。特に、東京都老人総合研究所に転出してからは、播種性血管内凝固症候群（DIC）の研究に精力的に取り組み、多くの臨床データを基にしてDICの診断基準を作成し、「松田のDIC診断基準」として国内外から高い評価を受けており、DIC研究の飛躍の基礎となっている。松田教授は就任後、北陸ではほとんど研究の進んでいなかった血液凝固学について研究室を組織し、研究の基礎をつくるとともに、臨床面での指導並びに専門医の育成に努めている。また、厚生省特定疾患血液凝固異常症調査研究班の班長を務めるなど、DICの準備状態並びに早期診断法の確立のために、分子マーカーをはじめとする新しい手法を取り入れた検討を進め、我が国の研究推進の指導的役割を果たしている。このような松田教授の精力的な指導の下で、教室では血液凝固学の研究が進み、この業績を基にして白血病をはじめとする種々の疾患に合併するDICについて新しい考え方、手法で診断並びに治療を行っている。激しい出血傾向のために、それまでは手を拱いて見ているしかなかったDICが、的確な診断と治療によりコントロール可能であることが明らかとなり、DICに対する考えは一変した感がある。さらに遺伝子解析など分子生物学的手法を用いて、新しい血液凝固異常症を発見し報告している。このほか、脂質代謝異常を血液凝固との関係についての研究も進めている。

血液凝固学に加えて、骨髄移植及び末梢血幹細胞移植を含めた造血幹細胞移植の基礎的、臨床的研究が進められており、白血病、悪性リンパ腫を中心として年間20例を超える移植が実施され、長期生存例も増加してきている。特に、末梢血幹細胞移植を利用した超大量化学療法は、造血器腫瘍のみならず固形腫瘍にも応用が可能であり、これに関しての研究を通していろいろな教室との研究交流が行われている。また、造血器腫瘍に関する集学的治療が行われており、細胞死（アポトーシス）の誘導に関する検討も進められている。呼吸器病学では、主に喘息を中心とするアレルギー性疾患の解明、並びに肺癌の化学療法に関する基礎的臨床的研究が精力的に行われている。また感染症では、敗血症に関する臨床的研究が進められている。

新たに血液凝固学が加わり、研究的にも臨床的にも教室に一層の厚みと幅ができた。また、血液、呼吸器の分野での人材が育ち、北陸を中心とする診療施設に多くの専門医を派遣することができた。研究面では、現在までに51編の学位論文が発表されている。

現状と展望

分子生物学の発展に伴い、近い将来、血液学、呼吸器病学の分野でも遺伝子治療を含めた最先端医療が不可欠となる。血友病をはじめとする遺伝性血液疾患は、遺伝子治療の最もよい対象となろう。造血幹細胞移植を含む集学的治療により、造血器腫瘍のかなりの例が治癒を期待できるようになった。今後は、より質の高い予後を求めての検討が必要である。呼吸器疾患でも、次第に患者の増加している喘息や肺癌は社会的な問題となっており、これらに対する効果的な治療、予防が急務である。解明すべき問題は山積しているが、一層研究を進めるとともに、多くの専門医が育ち、多くの患者により質の高い医療を提供で

きるように人材を育成していきたい。

(4) 神経内科学講座史

沿革

神経内科学は従来より、内科諸分野の中でも比較的高い専門性を要求され、また神経難病への対応など社会的ニーズは多い。さらに戦後の急速な神経科学の発展とも相まって、日本においては昭和30年代後半より、神経内科独立の気運が高まっていた。これまで金沢大学において、臨床神経学は内科あるいは神経精神医学の中で各論の講義、学生実習、及び診療が行われてきた。また、神経解剖学、神経生理学、神経化学など基礎医学の分野での厚い伝統も背景となって、1976（昭和51）年より神経内科学教室新設の要求が出された。諸代の医学部長、附属病院長、並びに関係各位の御尽力により、広く全国に人材を求め、長崎大学医学部第1内科学教室より高守正治助教授を招聘し、1982年1月1日、高守教授の着任により、国立大学としては全国第9番目に、附属病院診療科として神経内科が設置されるに至った。

第6病棟2階の一角に教室を構え、同年4月よりは、院内第1・第2・第3内科、神経科精神科、及び関係諸科より、人的並びに病室、外来など診療面での支援を受け、教授1名、助手3名、その他教室員3名の体制の下で、教育、研究並びに診療活動が開始された。1983年、新潟大学脳研究所神経内科学教室より福原信義講師を助教授に、同年ペーラー医科大学留学を終えたばかりの井手芳彦医師を長崎大学第1内科学教室から迎え、教室としての臨床、教育、研究の面で一段と充実した。その後、順次本科固定の定員が充足され、1991（平成3）年4月1日付けで、医学部に神経内科学講座が設置された。その間、1988年福原助教授が国立療養所犀潟病院神経内科医長として転出した。

以後、毎年本学及び他大学から神経内科学を志す若い医局員が集い、入院病床数も関係各位の御協力により、現在の14床に増加した。1993年、医局設立当初から免疫性神経筋疾患を研究してきた奥村誠一助手が国立療養所医王病院へ、1994年、筋病理を専門に研究を行ってきた松原四郎講師が東京都立府中病院神経内科部長として、1996年には、錐体外路疾患に詳しい井手助教授が長崎弓張病院院長として転出した。

1998（平成10）年8月現在、教授1名、講師2名、助手2名の教官、医学博士22名、現大学院生3名を含む同門63名、うち日本神経学会による神経内科専門医資格取得者51名を数え、北陸3県に加え、関東、新潟、中部の各医療施設の協力の下に、基礎的な研究活動、神経学全般にわたる教育、診療及び地域医療活動に従事している。

診療と研究

高守教授時代（1982～1999年） 1933（昭和8）年9月15日、長崎県佐世保市に生まれた。1958年3月長崎大学医学部を卒業し、インターンを終え、1959年長崎大学医学部

第7章 医学部 医学部附属病院

第1内科学教室に入局した。1963年、長崎大学大学院医学研究科を終了（医学博士）の後、海外留学、同年7月よりカナダ・モントリオール大学附属病院で神経内科レジデント、1965年7月より米国メイヨークリニック神経生理学研究員、一時帰国の後、1969年7月からは米国ウエストバージニア大学医学部 Assistant professorに就任した。帰国後、1972年3月、長崎大学医学部第一内科助教授、1982年1月、金沢大学医学部附属病院神経内科教授に就任、1991（平成3）年4月、医学部における神経内科学講座の設置に伴って同教授となり、現在に至っている。医学部学生の間では、数多い臨床教室の教授の中でも特に厳しいとの噂が出る一方、これまでになかった、専門的な神経疾患に対する論理的な症候の解釈と正確な診断に至るアプローチは絶賛されている。



写真7-16 高守正治教授

同教授は、重症筋無力症やランバート・イートン筋無力症候群、筋ジストロフィー症などの神経筋疾患の臨床及び基礎的研究をテーマとし、米国NIH、文部省、厚生省、通産省、民間研究財団などより研究助成を受けて、アセチルコリン受容体分子構造と免疫、シナプス伝達にかかわるカルシウムチャンネル機構、諸受容体の受容体後シグナル伝達諸系、骨格筋収縮の実験生理学、筋細胞膜の生理と細胞死の分子生物学につき、多くの国際的業績を挙げている。現在、生物工学、遺伝子工学の概念と技術を導入したテーマでの大学院生の指導に着実な成果が上がりつつあり、この15年間の医学博士号取得者は19名を数える。このほか、高齢化社会を迎えての社会的要請を受け、老年性痴呆や、パーキンソン病その他の錐体外路系疾患、脊髄小脳変性症、運動ニューロン疾患、筋炎などの神経難病についても造詣が深く、各研究グループの指導に当たっている。

1989（平成元年）年3月には第24回脳のシンポジウム（金沢）、1990年8月には第3回神経免疫研究会（京都）、1998年7月には第16回日本神経治療学会総会（金沢）が、高守教授主催にて開催された。研究面での交流を持つ主な海外の施設には、米国メイヨークリニック、ジョンズホプキンス大学、バイラー医科大学などがある。これらの研究成果は、『高守教授、開講十周年記念業績集』（1991年）にまとめられている。

1993年から1995年の3年間は、厚生省特定疾患免疫性神経疾患調査研究班の班長として全国レベルでリーダーシップを発揮し、重症筋無力症、多発性硬化症、Guillain-Barre症候群を含む免疫性末梢神経障害、HTLV-1 associated myelopathy、傍腫瘍性神経症候群、多発性筋炎の各疾患について広範な研究活動を展開した。1995年には、日本神経学会理事に選出された。研究面ではアセチルコリン受容体及び電位依存性カルシウムチャンネルの分子免疫学的研究、世界に先駆けたランバート・イートン筋無力症候群の動物モデルの作成、モデル動物を用いたリアノジン受容体の分子免疫学的解析、rimmed vacuoleを

有する遠位型ミオパチーの遺伝子解析などを行ってきた。

1998年9月開催の第9回国際神経筋学会（オーストラリア）の組織企画も担当した。なお高守教授は、1999年3月をもって停年退官した。

現状と将来の課題

神経免疫疾患の分子生物学を基本においた基礎的、臨床的研究、パーキンソン病を主体とする錐体外路疾患の分子病態解明、神経変性疾患、筋疾患を対象とした遺伝子解析と実際の遺伝子治療、血行力学に基づいた脳血管障害疾患の研究などが現在行われている。

「21世紀は神経科学の時代」と言われるように、今後も引き続き社会から当教室に寄せられる期待と要請の多さは計り知れないものがある。それにこたえるべく、医局員一同さらに取り組んでいかなければならない。



写真7-17 ランバート、レノン両先生をお招きして



写真7-18 ドラクマン先生をお招きして

(5) 神経精神医学講座史

沿革

1867（慶応3年）、卯辰山に養成所が創られた際に、癲狂院の記載があるのをもってはじめとする。オランダ等軍医スロイス（Sluys, P.J.A.）が1871（明治4）年3月に来沢し、直ちに教則を改め、修業年限を5年とした際、第5年に精神病の学科名が挙げられている。1888（明治21）年の第四高等中学校医学部の職員表には、内科、精神科、小児科の教諭に医学士黒柳清一郎の名が見られ、このころに精神医学の講義が始まったものと推定される。1893年有松教授が内科とともに精神科を担当し、1900年、石川県金沢病院に精神病室が造られ、1901年金沢医学専門学校に改称された際、内科の山碓幹教授が精神科を兼務している。1903年、大西克孝内科医長が神経科医長を兼務し、1905年には内科の松浦医長が、1906年には山碓幹医長がそれぞれ神経科医長を兼務している。

第7章 医学部 医学部附属病院

1909年に東京大学助手の松原三郎医学得業士が金沢医学専門学校教授を命ぜられ、精神病学、神経病学、法医学を担当した。1927年、東京大学講師の早尾庸雄が金沢医大教授となり、精神病学教室を主宰した。1941年に秋元波留雄が金沢医大教授となった。1942（昭和17）年教室主宰の下、第1回北陸精神神経学会が開かれ、その後北陸精神神経精神科集談会と改称され、さらに北陸精神神経学会と改称し、今日に至っている（1998年6月現在、第140回）。1958年、秋元教授は東大へ転出し、1959年、島園安雄が金大教授に任命された。同年9月には教室創立50周年記念行事が行われている。1960年、講座名を精神神経科学から神経精神医学に改め、診療科名は1966年に精神神経科を神経科精神科に改称した。1967年に、島園教授は東京医科歯科大学教授を併任され、1968年、助教授の大塚良作が昇任した。同年、竣工になった附属病院第5病棟へ神経科精神科病棟が移転した。1970年には、教室出身の根岸晃六博士が医学部附属神経情報研究施設情報伝達研究部門の教授に、1972年には、山口成良助教授が新設の金沢医科大学神経精神医学教室の教授に就任した。1974年、大塚教授は病のため急逝され、1975年、金沢医科大学教授の山口成良が教授に就任した。また、当時、福井県立精神病院院長島居方策が山口教授の後任として金沢医科大学教授に、1978年に遠藤正臣助教授が富山医科薬科大学教授に、1983年に伊崎公德助教授が福井医科大学教授に就任した。1985年、遠藤教授が逝去された。1986年、倉知正佳助教授が富山医科薬科大学教授に就任した。1990（平成2）年には、山口教授は金沢大学医学部附属病院院長に就任し、2年間大学病院の電算化、診療報酬の同月請求など病院の近代化に尽力した。1994年、山口教授の退官に伴い、福井医科大学助教授の越野好文が教授に就任し、現在に至る。1996年には、石川県立高松病院副院長・前助教授の小山善子が金沢大学医学部保健学科教授に、1997年には、地引逸亀助教授が金沢医科大学教授に就任した。

1975（昭和50）年に、教室同窓会会則が作られ、山口教授が教室同窓会会長となり、1976年から、金沢大学医学部神経精神医学教室同窓会会報が発行され、1998（平成10）年現在で第23号に至っている。1994年からは、越野教授が同窓会会長を務めている。北陸精神神経学会では、学会機関誌として『北陸精神神経学雑誌』が1987（昭和62）年に創刊され、多くの重要な論文が掲載されており、1997年現在で第11巻に至っている。

診療と研究

松原三郎、早尾庸雄、秋元波留夫、島園安男、大塚良作各教授当時の教室業績については、『百年史』及び『百年史』以後に記載があるので省略し、山口成良教授時代からの教室業績から記述する。

山口成良教授時代（1975～1994年） 山口教授時代の教室の研究面での躍進は大きく、研究分野も多岐にわたる。山口教授は、ネコを用いて向精神薬による睡眠の変化を研究し、当時世間で問題となったトリアゾラムによる一過性健忘に注目し、動物実験から海馬神経細胞の異常放電が原因である可能性を報告した。実験てんかんの分野では、動物実験によ

るキンドリング研究が行われ、地引助教授は急性キンドリングを提唱し、和田講師は視床外側膝状体でキンドリングを成功させた。これらの業績でそれぞれ日本てんかん学会のJ.A.Wada賞を受賞した。また、和田講師は1993（平成5）年にも、てんかん治療研究振興財団の研究褒賞を受賞した。倉田助手（前富山医科薬科大学助教授）・木戸講師は神経薬理学の分野で、向精神薬、とりわけ抗てんかん薬の治療濃度設定の研究に精進した。フェニトイン急速飽和法で多くのてんかん重責患者が救われている。また、当時最新式の高周波装置でドーパミン受容体の研究を行っている。伊崎助教授・中村助教授・倉知助教授・小林助手の病理組織グループは、新たに発見された神経蓄積症の広範な臨床病理学的研究、失語症の視床変性、アルツハイマー病のコリン作動性神経細胞の定量研究と神経変性疾患の細胞病理学的研究を免疫組織学を用いて行った。小山助教授は、臨床に密着した神経心理学研究を行い、前頭葉症状、特に強制把握の研究や、当時まだ珍しかった進行性失語症の臨床研究を報告した。木場助手は、臨床心理の研究から精神分裂病のエゴバンダリーの著しい低下を報告し、神経症との比較を試みた。

臨床研究も活発で、文部省科学研究費による直接検診による分裂病予後調査が山口教授在任中に2度行われ、ハロペリドール・デカノエイト導入後の分裂病予後調査は、1993（平成5）年に行われている。また、離島における精神障害の調査も行われている。越野講師は、遅発性ジスキネジアの脳波変化を大きな母集団で研究し、ジスキネジアの程度と脳波の相関、予後などについて広範な研究を行った。睡眠研究は、古田助手を中心とした臨床研究、すなわち睡眠時無呼吸症候群、神経疾患に伴う変容性睡眠の研究が活発に行われた。金沢市における高齢者の睡眠障害の研究など疫学的研究も重要である。

山口教授在任中には、日本精神神経学会、日本てんかん学会、日本脳波筋電図学会、日本神経心理学会、日本睡眠学会、脳波と筋電図データ処理国際カンファレンスなどの多くの重要な学会が開かれた。

越野好文教授時代（1994年～現在） 1994（平成6）年、越野好文教授が福井医科大学から転じ、教室を主宰することになった。教室の基本的な進路に変更はなく、世界の精神医学の主流である生物学的精神医学を中心に、臨床に根ざした視点からの研究が進められている。また、北陸地方の研修医を対象にセミナーの開催や、精神科の治療の基本である薬物療法のきめ細かい指導など、研修医に対する卒後教育にも力が注がれている。

教室の研究は、精神医学の広い領域に及んでおり、越野教授はパニック障害をはじめとする不安障害の治療と、心理・社会・生物学的研究に取り組んでいる。和田助教授は、キンドリングの手法を用いたてんかんの薬理学的基礎実験、臨床的には定量脳波及びコヒーレンス解析法を駆使し、精神分裂病や痴呆性疾患の病態解明に努力している。古田講師の睡眠グループは、睡眠時無呼吸症の治療、睡眠覚醒リズム障害の病態解明、あるいは睡眠障害の疫学研究を、小林講師・宮津助手の神経病理組織グループは、痴呆疾患を中心とした神経変性疾患の細胞病理学的観点から細胞骨格や免疫異常を中心に研究を進めている。東間助手のスライス及び精神分裂病研究グループは、神経心理学、画像診断、電気生理学、

第7章 医学部 医学部附属病院

さらには薬物療法の効果を含め、総合的に精神分裂病の本態に迫る研究を続けている。木場助手の臨床心理グループは、MMPIの日本版の作成、精神分裂病や不安障害の心理テストによる評価、臨床では行動療法を実践している。長年英国で精神分析を研究し帰国した矢崎助手は、精神療法の実践と心気症についての研究をまとめている。1997（平成9）年から着任した棟居助手が率いる児童青年精神医学グループは、自閉症に加えて登校拒否及び摂食障害の医学的研究・治療を開始した。

現状と将来の課題

今なお精神疾患あるいは精神科に対する多くの人々の認識には自然さが乏しく、善くも悪くも、特別視されがちである。「精神科は全然特別なところではない」ということへの理解を深め、精神科を広く開かれたものとする事は、精神科医に課せられた重要な課題である。そのために、我々は教室が主催した学会を活用し、市民を対象に公開フォーラムを同時に開催するなど努力している。しかし、特別視される原因の一つに「精神障害は治らない」という誤解があるのではないかと思う。現在我々精神科医は、多くの治療手段を活用できるようになり、優れた治療効果が得られるようになった。治った人が増えることにより、精神科が特別視されることも減ることが期待される。我々は病気を治すことを目標に、治療上の様々な工夫を凝らし、臨床教育を行っている。また、脳の時代と言われて久しい。しかし、多くの精神科疾患の原因はまだ謎に包まれたままであり、我々の挑戦を拒み続けている。生物学的精神医学に基礎を置いて、精神疾患の病態解明への着実な研究を続けていくことが本教室の使命である。

（6）小児科学講座史

沿革

1901（明治34）年4月、金沢医学専門学校の附属病院として公立金沢病院が発足した。同年10月、金沢病院に小児科が創設され、内科部長が小児科部長を兼務したが、1914（大正3）年に林篤が初代の小児科学教授に就任した。1922年、林教授は依願免官し、津田好文教授が就任した。翌1923年、官立医科大学官制改正により、金沢医学専門学校は金沢医科大学に昇格した。1924年9月、津田教授は依願免官し、泉仙助教授がその後任として就任した。以後1958年の退官まで、34年の間に小児科教室の基礎が整えられた。1928（昭和3）年には小児科研究室と伝染病室が竣工し、医科大学としての設備も整備された。

1949（昭和24）年、「国立学校設置法」の公布により金沢大学医学部となり、新制大学として教室は再出発した。1956年には、病院改築工事の一環として第3病棟が竣工し、小児科病棟はその1階に移転した。1958年、泉教授は停年退職し、同年9月、その後任として京都大学より佐川一郎教授が着任した。同年10月には昭和天皇、皇后両陛下が金沢

大学に行幸され、泉名誉教授が泉熱についてご説明申し上げた。翌1959年11月、泉名誉教授に紫綬褒章が授与された。1963年3月には第2病棟が竣工し、小児科病棟が移転した。翌1964年、新外来棟着工のため小児科外来は旧伝染病棟へ移転した。1966年に新外来棟が竣工し、小児科外来が移転した。翌年11月、第5病棟の竣工とともに小児科病棟はその1階へ移転し、研究室、外来、病棟が現在の形に整えられた。

1971年3月、佐川教授は停年退官し、翌1972年に中島博徳教授が千葉大学より着任した。しかし中島教授は、在職5年で元の千葉大学小児科教授として転出し、1978年谷口昂助教授が教授に昇任した。翌年11月、佐川先生に勲三等旭日中綬章が授与された。また1991(平成3)年11月には、谷口教授が北國文化賞を受賞した。1993(平成5)年、病院に医療情報部が設置され、佐藤保助教授が教授として転出した。さらに1995年には、宮脇利男講師が富山医科薬科大学小児科教授に就任した。翌1996年3月、谷口教授が停年退官し、同年6月小泉晶一助教授が主任教授に昇任した。さらに医学部保健学科の新設に伴い、1996年に関秀俊講師が看護学科教授に、谷内江昭宏講師が臨床検査学教授にそれぞれ就任し、小児科学との境界域にも人材が広がり、新しい時代に対応しつつある。

診療と研究

泉教授時代(1924~1958年) 金沢大学医学部以前の教室では、疫痢の発生機転とその治療法の解明に総力が注がれていた。疫痢様症状の病因として、消化管感染に基づくヒスタミン中毒の立場から研究が進められていたが、1949(昭和24)年の新制大学発足以降も、赤痢菌のヒスタミン産生能、疫痢症状における血清生化学的变化について研究が続けられた。戦後アメリカから疫痢調査団が来日し、疫痢症状の病因を低カルシウム血症によるテタニーと結論付けたが、日本の学者はその説に必ずしも賛同しなかった。病因の解明に先立って、教室では、昭和10年代から既に疫痢に対し静脈内持続輸液療法が開発され、先駆的な研究として治療成果を挙げている。

一方、猩紅熱に類似した急性発疹性疾患を、泉教授が独立した疾患として報告し、以後「泉熱」として知られるようになった。教室ではその病因究明に総力を挙げ、病原体の電顕像、組織培養、血清診断法に取り組んだが、基本となる研究方法がまだ整わず、泉熱自身の流行も下火になって、病原ウイルスの同定には至らなかった。それ以外の研究としては、北陸地方の風土病であったクル病やアレルギー疾患、百日咳などのテーマが取り上げられ、これらの研究を中心として34編の学位論文が発表された。

佐川教授時代(1958~1972年) 佐川教授の着任によって、教室の研究は乳児栄養とウイルスに二分された。乳児栄養班は蛋白代謝と脂質代謝班に分かれ、前者は乳児の蛋白所要量とアミノ酸代謝、後者は必須脂肪酸代謝について研究を進めた。折から病院での出産傾向が進み、未熟児、新生児の集中管理が時代の要請となった。それに伴って社会的に母乳栄養から人工栄養への急速な変換が起こり、人工粉乳の組成をいかにして母乳に近づけるかが学会の主要なテーマとなった。ラクトアルブミンやアミノ酸、不飽和脂肪酸の添加

第7章 医学部 医学部附属病院

粉乳、低電解質乳が次々に登場し、それらによる人工栄養が乳児の発育、体組成に及ぼす影響が、アットメトリーを用いた窒素出納法やカラムクロマトグラフィーによる脂質、アミノ酸分析法を駆使して検討された。

一方、ポリオや麻疹に対する弱毒生ワクチンが開発され、時代の脚光を浴びていたので、ウイルス研究班は、その臨床的效果をフィールドワークにより検討した。乳幼児を対象としてソークワクチン投与後の血清中和抗体価の推移、弱毒麻疹生ワクチンの投与法の研究が行われ、今日の予防接種の基盤となる知見が集積された。さらに新しい免疫学的方法が開発され、液性免疫に関する知見が集積されたことも、この時代の大きな進歩であった。血中の免疫グロブリン濃度や乳汁中の分泌型IgA濃度が測定され、その成績は34編の学位論文として発表された。

中島教授時代（1972～1977年） 中島教授の専門は小児内分泌学であり、特に小児の甲状腺学では、我が国の草分け的な存在であった。教授は、全く基盤の無かった教室に内分泌学の柱をうち立て、厚生省橋本病研究班に参加し、小児慢性甲状腺炎の病態の解明と疫学調査を展開し、本邦小児における同疾患の実態を全国ではじめて明らかにした。折から新生児マス・スクリーニングが全国的に展開される気運にあり、その方法論の開発のため、クレチン症の新生児スクリーニング研究班にも参加し、その制度化に大きな役割を果たした。中島教授は在籍5年で母校千葉大学へ移籍し、その間に発表された学位論文は5編に止まった。しかしその在籍中は「大学紛争」の収拾期に当たり、多くの人材が入局して自発的に免疫、細菌、アレルギー、血液、神経、循環器などの研究グループを組織して活動を始め、教室は活況を呈した。次世代の小児科を担う人材が数多く育った点で、意義深い時代であった。

谷口教授時代（1978～1996年） 1978（昭和53）年、中島教授の後を受けて谷口助教授が教授に就任した。就任以前の研究テーマは乳児栄養とムコ多糖代謝異常症であったが、1959年京都大学から移籍して以来、長年にわたり病棟医長として小児科全医局員の臨床修練を指導し、その的確な診断と寝食を忘れての診療態度は、臨床医のかがみとして医局員から畏敬された。

教室を主宰してからは免疫学を研究の柱とし、液性免疫の伝統から細胞性免疫へと展開、リンフォカイン、リンパ球表面抗原を標的とし、セルソーター、単クローン抗体を駆使して新生児期から成人期へのリンパ球分化成熟過程を解明、その業績を基に厚生省免疫不全症候群調査研究班の班長として全国レベルで研究活動を展開した。研究分野はさらにリンフォカインと様々な病態との関連性、腫瘍細胞における表面抗原の発現、感染細胞におけるウイルスゲノムの解析へと発展した。一方、小泉講師の血液グループは小児白血病の治療プロトコルを設定し、全国的規模で治療成績を検討して白血病の予後を大幅に改善した。研究面では、腫瘍細胞の薬剤抵抗性獲得機序が追求された。佐藤助教授の内分泌グループは成長ホルモンによる低身長児の治療、甲状腺疾患や若年性糖尿病の治療を中心とした診療を行い、甲状腺ホルモン作用、成長ホルモンとインスリン様成長因子とその受容体の研

究が進められた。この時期には中島教授時代に蓄積された人々のエネルギーが花開き、外国留学もルーチン化して、北陸3県の診療施設に多くの人材を送り出した。研究面でも、谷口教授の在任18年間に、合計90編の学位論文が発表された。

現状と将来の課題

谷口教授時代に拡大、発展した分野を継承するとともに、遺伝子解析を含めた分子生物学的手法が、いずれの分野にも浸透していくであろう。いま一つは、ハイリスク妊婦とその結果として、超未熟児の管理が小児科の大きな分野となろう。少子化の流れにもかかわらず、小児科医の需要は決して衰えていない。胎生期から思春期まで、小児の成長、発育のすべてに小児科学がかかわるべく、人材の確保と、小児科臨床、研究、教育が今後とも必要である。

(7) 放射線医学講座史

沿革

当講座の前身は、1917(大正6)年4月に小池才一(当時講師)の下に創設された石川県立金沢病院理学診療部で、同部は1922(大正11)年4月の石川県立金沢病院の文部省移管に伴い、金沢医学専門学校附属病院理学診療科と改称されている。1933年10月小池助教授(当時金沢医科大学)は急逝されたが、同年に後の放射線医学教室の初代教授となる平松博先生が入局し、1936年5月に理学診療科医長(当時助教授)に任じられている。1945年3月平松助教授が教授に昇格し、理学診療科は完全講座として認められたが、この時期、相前後して全国の放射線科が独立している。1949(昭和24)年5月金沢医科大学は金沢大学医学部となったが、当教室は7月に診療科名を放射線科と改め、教室名を金沢大学医学部放射線医学教室と改称した。1959(昭和34)年、院内各科に分散配置されていたX線発生装置とX線技術者が統合され、放射線部が発足し、1956(昭和31)年5月に附設された医学部附属X線技師学校(後の医療短大放射線技術学科)とともに、診療・研究を進める体制となった。放射線科病棟は、1956(昭和31)年8月現在の第3病棟が落成し、5階に28床をえた。現在の6階には1971年6月に移転した。1968年4月に現在の臨床研究棟6階に研究室を移転し、現在に引き継がれている。1972(昭和47)年に分離独立した核医学講座に引き継がれるRI部門の歴史は、1952年3月の平松教授の提案による金沢大学アイソトープ委員会の設置、1964年6月アイソトープ部の独立に始まるが、以後の沿革については核医学教室の稿を参照されたい。平松教授は1975年3月退官し、高島力教授が同年5月、第2代教授に就任した。

診療と研究

平松博教授在職時代(1945年3月~1975年3月) 平松教室発足当時は、基本的な線量

測定に関するものから、X線を用いた生体測定、心臓の形態と機能に関するもの、骨格の形態と計測、放射線生物では放射線によるガス代謝の変動、放射線血液学、特に白血球の形態と機能の変動についての論文が多い。当時の診断装置は、単純写真と消化管、気管支、子宮・卵巣などの造影検査法、断層撮影が主であり、論文は、各臓器の正常像や計測に関するもので、対象とした臓器も単純写真で検討可能な肺、心大血管、横隔膜、骨などであった。後の高島教授時代に教室の主要研究テーマの一つとなる血管造影法、特に超選択的造影法の開発は、昭和40年代になってからなされている。



写真7-19 放射線科 平松博教授

放射線治療部門は発足当時、研究の重点が置かれず、現在のような根治的線量を照射できる装置はもちろん存在しなかった。1927（昭和2）年3月に深部治療室完成との記録があるが、その詳細は明らかでない。 ^{60}Co 遠隔照射装置（27キュリー）の設置は1954年11月であり、2,000キュリーの線源を持つ本格的な高エネルギー放射線治療装置である ^{60}Co 遠隔照射装置の設置は1962年10月である。また、初期の放射線治療の対象疾患も現在とは大きく異なっていた。1968年3月ベータートロン照射装置、1973年3月 ^{60}Co 遠隔照射装置（3,000キュリー）が設置されている。教室の発足当時は、前身である理学診療科の影響が強く物療内科的性格があり、放射線以外に紫外線、赤外線、超短波、低周波などが研究されていた。その一つとしての温泉医学は、現在の放射線医学の領域ではないが、当教室では当時高原温泉研究所として、1949年7月に石川県吉野谷村中宮温泉に温泉治療学研究所を開設し、1963年には岐阜県吉城郡上宝村栃尾温泉に、種々のX線装置、自動気象観測器などを持つ研究所を開設している。1960年に山中温泉で開催された第25回温泉気候学会の会長も平松教授が務めている。

平松教授在職中の学位取得者は、442名、論文1,289編を数え、1950年4月には第9回日本医学放射線学会総会が、平松教授を会長として金沢で開催されている。また平松教授は1958年4月から2年間、第20代医学部附属病院長を務め、退官後の1969（昭和44）年北國文化賞を受賞、1974年4月には、アメリカ放射線学会名誉会員に推薦された。高島力教授時代（1975年5月～1999年3月）他大学の放射線医学講座は診断、治療、核医学の3部門からなるが、1972（昭和47）年3月に核医学部門が分離独立し、当教室では診断・治療部門を担当している。現在では、Interventional Radiology（IVR）が放射線医学の新しい柱となり、当教室でも診療・研究の大きな部分を占めている。

高島教授、上村良一講師を中心とする呼吸器グループは、Digital Radiographyの臨床導入当初より、Fuji Computed Radiography（FCR）とX線CTを中心に肺癌の早期発見と質的診断能の向上について研究を進めてきた。その成果は、1986年4月第45回日本医

学放射線学会総会の宿題報告「第1部：肺癌診断の新しい展開 - X線CTとcomputed radiologyによる - 」

「第2部：肺癌診断における一回撮影エネルギー差分法」、及び1996年4月の第55回日本医学放射線学会総会における会長講演「金沢大学病院における胸部単純撮影の現況とエネルギー差分法導入について - Fuji

Computed Radiography (FCR9501ES)を用いて - 」をはじめとする論文群にまとめられている。血管造影を中心とした腹部画像診断部門では、高島教授らが開発した緩速注入肝動脈造影 (Infusion hepatic arteriography) は、肝細胞癌での血管造影による検出能を向上させた国際的に有用な方法として評価されたが、その後研究を引き継いだ松井助教授を中心とする

グループは、血管造影とX線CTを組み合わせた動注CTの有用性を早くから報告し、門脈造影下連続CT (CT during arterial portography) は、1984 (昭和59) 年の報告から現在まで、肝結節性病変検出のgolden standardとなっている。現在では、さらに動注CTを中心とした画像診断で硬変肝における肝結節病変の非観血的な質的診断を可能とした。現在の画像診断の大きな柱の一つであるMRI装置は、専用の独立した研究棟の内に設置され、1988 (昭和63) 年5月より稼働した。この恵まれた環境と独自の撮像法の工夫により本学の画質は高く評価され、角谷真澄講師を中心としてメーカーと共同開発を行っている腹部領域の研究成果は、内外からも評価されている。中枢神経グループは、X線CT、MRIを臨床面を中心に研究を進めている。川島博子助手を中心にした乳腺の画像診断では、MRIを用いた診断法の研究の成果が今年の放射線学会で評価され、日本医学放射線学会最優秀論文賞を、松井助教授に次いで当教室2人目の受賞を果たした。IVRでは、松井助教授を中心として肝細胞癌に対する肝動脈塞栓療法を中心に研究、臨床経験を積み、その成果は小肝細胞癌に対する“subsegmental TAE (亜区域塞栓療法)” (1994年) にまとめられた。放射線治療部門は、1981 (昭和56) 年3月直線加速器 (ライナック照射装置、10MVX線) と治療計画コンピュータの設置、1995 (平成7) 年2台目の直線加速器 (ライナック照射装置、10MVX線) 治療計画用CT装置の設置と器機の充実が図られ、肺癌、特に小細胞癌と悪性リンパ腫の治療を中心に、他科と密接な関係を築きながら診療・研究を進めている。院内各科と共同で、術中照射 (1976年～)、骨髄移植のための全身照射 (1981年～)、温熱放射線併用療法 (1984年～)、早期乳癌に対する乳房温存療法 (1986年～) など大きな成果を挙げている。

高島教授は、1984年から1995年までの11年にわたり日本医学放射線学会理事を務め、放射線学会の発展に貢献した。この業績により、1995 (平成7) 年のAmerican College of Radiologyの名誉会員にノミネートされ、現在名誉会員である。1996年4月から1998



写真7-20 放射線科 高島力教授

第7章 医学部 医学部附属病院

年3月まで附属病院長を務めた。高島教室開講以来、27名が学位を取得している。また平松教室開講以来、本年（1997年）までに本学及び他大学・研究所に35名の教授を送り出している。

現状と展望

X線CT、MRIを中心とした診断器具の進歩はさらに、非侵襲的、高速かつ詳細な画像をもたらし、血管造影などの侵襲的な診断法は、治療法の一つとして発展していくものと考えられる。特殊検査であったCT、MRIも、一般検査の一つとして広がっていく可能性もある。血管系では、メタリックステントを使用しての閉塞性動脈・静脈疾患の治療症例が増え、大動脈瘤の血管内治療も人工血管用膜付きステントにより可能になる可能性が高い。脳神経外科と共同で研究が進められている脳血管動脈瘤の血管内治療や、末梢脳動脈での血栓溶解療法も可能となり、外科手術にとって代わる可能性もある。治療部門では、これまで外照射治療が主体であったが、1998年から、遠隔操作高線量率密封小線源治療装置の導入が決定している。本装置では子宮癌のほか、気管支、食道、鼻咽腔、胆道といった部位の腔内照射が可能で、患者のQOLを保ちながら根治照射も期待でき、適応・治療効果の更なる改善が期待される。

（8）皮膚科学講座史

沿革

1912（大正元）年12月、土肥章司が金沢医学専門学校教授として着任し、翌1913年2月に皮膚病花柳病学教室が開設された。また、このとき金沢皮膚科集談会が設立され、1920年に日本皮膚科学会金沢地方会と改称された。1923年4月、金沢医学専門学校が金沢医科大学に昇格するとともに皮膚科性病科学講座となり、1930（昭和5）年9月には、皮膚科泌尿器科学教室と改称された。1931年4月、土肥章司教授の退職後、伊藤実教授が昇任した。1937年7月、伊藤実教授が東北大学教授に転任後、長谷川宋憲教授が就任したが、病気のため1939年12月に退職した。翌1940年3月、後任として並木重郎教授が着任した。

金沢大学医学部が発足した1949年4月、並木重郎教授が千葉医科大学教授に転任し、翌1950年3月に川村太郎教授が着任した。1955（昭和30）年9月には、泌尿器科学講座が開設され、翌1956年8月に正式に分離して皮膚科学教室となった。1959年7月、川村太郎教授が東京大学教授に転任し、翌1960年4月に福代良一教授が着任した。1964年2月、日本皮膚科学会金沢地方会は北陸地方会と改称され、泌尿器科学会と分離された。1966年3月、外来診療棟・臨床研究棟が竣工、1970年11月には第1病棟が竣工した。1974年10月、広根孝衛助教授が新設された金沢医科大学の皮膚科学講座教授に、塚田貞夫講師が同じく形成外科学講座教授に転任した。1980年4月、福代良一教授の退職後、

広根孝衛教授が就任した。1994年3月、広根孝衛教授が退職し、同年11月に竹原和彦教授が着任した。

診療と研究

土肥教授時代（1913～1931年） この時代の業績は多岐にわたり、同教授によって命名された疾患も若干ある。欧米で記載された稀有な疾患の本邦報告第1例も多数あり、在職中に皮膚科学教室の基礎が確立された。著書『皮膚及性病学』は、我が国ではじめて自家症例のみによって書かれた教科書である。

伊藤教授時代（1931～1937年） この時代には皮膚の色素と色素異常症、アレルギー性皮膚疾患、遺伝性皮膚疾患の業績が多い。

長谷川教授時代（1937～1939年） この時代には泌尿器科の基礎が築かれたが、病気がちであったため、在職2年半で退職した。

並木教授時代（1940～1949年） この時代の業績の多くは性病に関するもので、淋菌などの新染色法とその臨床応用、梅毒のマファルゼン療法などがある。

川村教授時代（1950～1959年） この時代には、主に皮膚の色素細胞、母斑細胞及び母斑症の研究がなされた。多数の業績は、著書『母斑及び母斑症』に集録され、同教授によって提唱された母斑細胞の神経櫛起源説は、現在定説となっている。

福代教授時代（1960～1980年） この時代の研究は多方面にわたり、病原性真菌の電子顕微鏡的・生化学的研究、スポロトリクムの抗原分析、真菌症の臨床的研究、サルコイドーシスの臨床的研究、皮膚悪性腫瘍の電子顕微鏡的研究、皮膚色素細胞の電子顕微鏡的研究、悪性黒色腫の細胞学的研究、皮膚疾患の皮膚血管顕微鏡的研究など多数の業績が発表されている。

広根教授時代（1980～1994年） 当初メラノサイトの微細構造及び色素顆粒の形成機序に関する電子顕微鏡的研究、メラノサイト系腫瘍である母斑細胞母斑や悪性黒色腫の電子顕微鏡的研究及び臨床病理学的研究、表皮角化細胞の分化及び角化異常症の形態学的研究、自己免疫性水疱症の臨床病理学的研究などに関する多数の業績を上げ、天疱瘡のコルチコステロイド療法の標準化に貢献した。教授就任後は、表皮角化細胞に対する紫外線の細胞動態学的作用の研究により、皮膚疾患に対する紫外線治療の作用機序を解明した。また悪性黒色腫の早期診断や予後因子の解析及び進行期の新治療開発、結節性硬化症やレックリングハウゼン病の病態生理の研究に貢献した。

現状と将来の課題

竹原教授の専門である強皮症とアトピー性皮膚炎については、その病態の解明のため基礎及び臨床の両面から、特にサイトカインの関与について研究が進められている。そのほか高田助教授による皮膚癌の遺伝子異常の解明、川原講師による紫外線と光線過敏症の研究、佐藤講師の免疫学的手法による膠原病の病因の解明など、教室に幾つかの研究の柱が

確立された。専門外来開設などの診療努力による患者数増加と相まって、教室は活気を呈しているが、大学病院の名に恥じない診療と研究のため、教室員のますますの研鑽が必要であろう。

(9) 核医学講座史

沿革

1972年度文部省予算で、金沢大学に本邦最初の核医学講座が認可された。翌年3月15日には、初代教授となった久田欣一教授の下で、核医学講座が設立された。

金沢大学における核医学の端緒は、講座の開設前にさかのぼるが、久田による1954(昭和29)年のP-32治療、1959年のI-131標識ローズベンガル及びI-131変性アルブミンによるヘパトグラム、1966年の人癌の陽性描画(Hisada, 1966)などの一連の仕事によるものである。国際的にも、第1回米国核医学会は1954年、ヤーロウ(Yalow)とバーソン(Barson)によるラジオイムノアッセイが1959年、体軸横断断層シンチスキャニングが1963年なので、これらと並行して先駆的な仕事がなされていたことになる。以後、久田教授の下で、広範囲の核医学領域にわたる研究、診療、教育活動が行われており、日本核医学会の中でも指導的立場を維持してきた。この成果は、1995年8月より講座主任である利波紀久教授に引き継がれ、新たな展望の下に活気を呈している。

主な人事異動は以下のとおりである。1975年には鈴木豊が東海大学に転出し、1982年に放射線科教授に昇任した。1980年、アイソトープ総合センターが開設され、森厚文助教授が転出した。1987年には、小泉潔が助教授として山梨医科大学に、また高山輝彦が金沢大学医療技術短期大学の助教授として転出した。桑島章は東邦大学へ移動後、1990年に放射線科助教授に昇任した。1992年には、分校久志が助教授として医療情報部に就任した。また、1993年には、油野民雄が旭川医科大学放射線科教授として転出した。1996年に高山輝彦が金沢大学医学部保健学科放射線診療技術学教授に昇任、辻志郎は保健学科放射線診療技術学助教授として転出、瀬戸光は、富山医科薬科大学放射線科の助教授より教授に昇任した。現在講座主任である利波紀久教授は、1976年より助教授を務めていたが、1995年8月より現職にあり、アイソトープ部の部長を併任している。

診療と研究

1974年の久田教授就任以来の活動としては、臨床核医学から基礎核医学、更には学会活動や教育活動など多岐にわたる。当初、教室の3大指針として掲げられたのは、国際的に通用する研究活動、核医学専門医の養成、及び地域核医学診療の普及と充実であった。

現在では核医学診断学として確立され、関連する多数の出版物が見られるが、当時は有用性が認められつつあるが、診断学として確立されるに至っていなかった核医学の集大成が必要であった。このような視点から、1967(昭和42)年に久田教授によりまとめられ

た『最新核医学』は幅広い研究者や臨床家の支持を受け、第7版まで刊行された。その後、新たに核医学講座が開設された北海道大学、群馬大学との共同編集による『最新臨床核医学』に引き継がれ、現在1995年以来当講座主任となった利波紀久教授により、全面改訂が進められている。海外との人的交流の面でも、積極的に海外留学・研修が進められており、一方、海外からもイラン、中国、フィリピン、パナマなどから多数の研修者を受け入れてきた。

各分野の研究活動 核医学は、本質的には体内の追跡子（トレーサー）による診断法であり、機能情報であったが、当初は形態的に臓器が描画されることに重点が置かれていた。しかしながら、新しい情報を提供できる放射性医薬品の開発、それを検出する測定機器とコンピュータ技術の進歩により、機能代謝情報を担う核医学としての役割がより鮮明になってきている。

久田教授の研究主題である「腫瘍イメージングの基礎的研究」は、初期には金沢医療短大の安東教授（現保健学科教授）との共同研究で、多数の腫瘍集積物質が検討された。このうち、Ga-67の集積機構に関する研究はユニークな成果の一つになっている。TI-201による腫瘍診断では、とりわけ甲状腺や肺をはじめとする各種の悪性腫瘍で応用され、肺腫瘍に関しては、現在ではTI-201が標準（Tonami, 1989）となり、骨軟部でも標準（Sumiya, Taki, 1997）となりつつある。さらに、腫瘍免疫核医学の領域に研究は進められ、集積性を改善するモノクローナル抗体や炭化水素型スパーサーの標識への利用（Yokoyama, Kinuya, 1993～97）、Tc-99m製剤の腫瘍集積性も検討されている。

中枢神経領域は森（現アイソトープセンター教授）、前田（現映寿会病院院長）、松田（現国立神経センター放射線科部長）を中心に、脳領域に関して診断体系の確立、及び基礎研究が進められてきた。さらに1980年代後半には、I-123 IMPによる脳血流定量法や、Tc-99m製剤による脳血流測定の新しい方法論が確立された（Matsuda, 1988～93）、IMPの脳結合部位の解明（Mori, 1990・Matsuda, 1990）や絶対値としての脳血流定量は、脳循環評価に重要な手法となっている。現在、ベンゾジアゼピン、ドーパミン、アセチルコリンなど脳の受容体イメージングの研究も進行中である。

心臓領域では、1973（昭和48）年にTI-201心筋血流シンチグラフィが報告されて以来、血流検査の標準であったが、これらの臨床応用と体系化は分校（現医療情報部助教授）らにより始められたが、その後の臨床応用の進歩と普及により、心臓核医学という独自の領域をつくるに至っている。1980年代半ばには、当院第1外科岩教授との共同研究として、断層位相解析による副伝導路の位置推定法が開発された（Nakajima, 1985）。また、携帯型心機能モニターの基礎的検討（Taki, 1992）とともに、冠動脈バイパス手術やX症候群でも新知見を得た。心筋生存性の評価、さらに交感神経イメージング、脂肪酸代謝イメージングを加え、虚血心の病態生理や、心筋症の早期評価、重症度、予後評価（Nakajima, Taki, Matsunari, 1990～97）などにこれらの放射性医薬品が利用可能であることが示され、評価されている。

消化器領域では1970～80年代にかけ、油野らにより、Tc-99mコロイドや胆道排泄性のTc-99m標識製剤による肝臓診断学の基礎がつけられた。また、利波らによりTI-201門脈大循環短絡の検査法が開発され（Tonami, 1982）、ユニークな方法として利用されるようになった。さらに消化管通過検査では、現在、第2外科との共同で胆汁と食物の2核種同時検査や、皮膚科との共同研究として全身性硬化症で食道通過の方法論が開発・確立されつつある。

骨に関する広範囲の診断学の集大成は利波によってなされており、豊富な症例数とともに、診断学上不可欠のモダリティとなっている。1976（昭和51）年の久田、鈴木（現東海大学教授）の骨シンチグラフィの外傷への応用の報告（Hisada, Suzuki, 1976）も当時は注目されるものであったが、現在は転移の検索への利用とともに、日常診療の一部となっている。

甲状腺に関する研究と診療は、道岸助教授を中心に施行されてきたが、核医学創設以来の甲状腺診療の中で外来の基本的ルーチンとなっている。診断からアイソトープ治療までを含めた甲状腺機能異常と腫瘍（癌）の診断は、核医学が極めて有用な分野となっている。

新しい放射性医薬品に対応して、測定機器の開発も久田前教授以来、当科が取り組んできた柱の一つとなっている。等感度スキヤニングのアイデアは、30年前にさかのぼり（Hisada, 1967）さらに多核種シンチグラフィの提案は1963年になされたものである。1989（平成元）年には、東芝との共同で三検出器型SPECTが開発された。米国核医学科学会総会のImage of the yearに選定された画像は、この第1号機によるものであった。この装置は高感度、高分解能のイメージングに適しており、普及しつつある。これに付随する機器の開発やSPECTシミュレーションも報告されている（Nakajima, 1991）。

なお、文献はその一部について名前と年号のみを記したが、主な研究論文は『Nuclear Medicine in Kanazawa - from its early beginning to the present - (Festschrift in memory of Prof. Hisada's retirement)』に記されている。

放射性核種による治療 久田前教授による1954（昭和29）年のP-32治療は、優れた成績を挙げたが、その後、本邦では件数も少なく核種の入手が困難になっている。一方、放射性ヨードI-131を用いた甲状腺癌の治療は、今日まで甲状腺分化癌転移に対する第1選択として施行されており、道岸を中心にすべての核医学医師により施行されてきており、良好な成績を挙げてきた。また、甲状腺機能亢進症に対するI-131も米国のように第1選択とはなっていないまでも、適切な症例に対して積極的に治療が施行されている。さらにSr-89による骨転移の治療が認可待ちであり、新しい治療薬として注目されている。現在、モノクローナル抗体の基礎的検討が進められており、将来的にはこれらの領域も期待されている。

展望

昨今の高齢化社会における医療状況、保険制度の改定や医療費の制限の動きの中で、核医学診療が果たす役割として、以下の点が展望されている。小児、高齢者を含めて、すべての人に安全に適応できるやさしい医療、機能代謝イメージングとしての特色を活かした早期発見、機能評価による治療効果のモニターリング、治療効果の推定や予後評価による適切な治療指針の選択、ポジトロン核医学と連携したより高度な機能と代謝のイメージング、病巣に特異な放射性医薬品や放射免疫を利用したイメージングと治療への発展。

これらの展望の下に、国内では数少ない核医学専門講座としての特色を生かして、核医学診療の一層の普及と研究活動の発展を願っている。

(10) 外科学第1講座史

沿革

1883(明治16)年11月に、金沢医学校の外科医長に木村孝蔵が任命された。これをもって本学の外科の開設とされている。1897年10月、下平用彩がさらに任命され、翌年7月木村孝蔵はドイツに留学したが、1899年帰朝するに及んで、同年12月外科は2部に分かれ、第1部長木村孝蔵、第2部長下平用彩となった。1902年木村孝蔵が大阪府立医学校に転出し、下平用彩が第1部長に就任した。1924年2月、下平用彩が逝去し、1925年4月九州帝大より石川昇が赴任した。石川昇の時代にはっきりした形で第1外科となり、近代外科学教室としての体制と内容を備えて活動が開始された。1937年1月、石川昇は自らの研究課題であった肺結核により急逝した。翌年7月東北帝大から桂重次が赴任し、北陸ではじめて脳外科手術を行ったが、1941年3月、元の東北帝大に転出した。

1941年4月、東京帝大出身で財団法人癌研究会附属康楽病院外科医長の久留勝が教授として赴任し、中枢神経系の外科、癌の外科治療が盛んとなった。1954年、久留勝は大阪大学に転出した。同年6月、東京大学助教授の卜部美代志が教授として赴任し、呼吸器外科、心臓外科の基礎が築かれた。教室の脳神経外科班が担当していた脳神経外科診療科は、1966(昭和41)年講座となり、教室の山本信二郎講師が教授に就任した。1965年、麻酔科学講座が開設され、教室の村上誠一講師が翌1966年助教授として転出し、1978年教授に昇任した。卜部美代志教授は1973年3月停年退職した。

1973年5月、札幌医科大学の岩喬助教授が教授として赴任した。心臓外科、呼吸器外科、消化器外科、血管外科の診療、研究が飛躍的に進歩した。1976年4月、教室の山本恵一講師が新設の富山医科薬科大学第1外科教授として転出した。1983(昭和58)年、第1外科は開講百周年を迎えた。1991年3月岩喬教授は停年退職した。同年11月、渡辺洋宇助教授が第8代教授に昇任し、開講以来はじめて教室出身者による教授が誕生した。1992年2月、教室の三崎拓郎講師が富山医科薬科大学第1外科学教室に助教授として転

第7章 医学部 医学部附属病院

出し、1994年11月、同第1外科教授に就任した。教室の伝統的研究課題である呼吸器外科、心臓外科、血管外科、消化器外科を中心に研究が進展し、教室員の増加とともに教育診療関連施設が増し、今日の発展に至っている。

診療と研究

久留勝教授時代（1941～1954年） 1941（昭和16）年、第1外科に着任すると、中枢神経の顕微鏡解剖学的知識を土台として、中枢神経系の外科をはじめ、脳神経外科の大略がこの時期に確立した。神経系の研究としては、主として変性繊維の観察によったが、知覚系、ことに痛覚系の脊髄、延髄路の起始核の解明、並びに線維群の追跡に幾多の新知見を挙げた。また哺乳類から冷血類に至る種々の動物を用いての比較研究によって、系統発生的解明は高く評価された。やがて過労がたたり、病を得て病臥する身となった。抗結核剤の出現とともに再起し、神経系の研究のほかに、癌の研究にも乗り出した。手術によって得られた多数の癌標本について連続切片によって精細な検索を遂げ、特に胃癌、乳癌の発生母地を推按し、「前癌状態」の観念と事実を強調した。久留勝の本領は、その「Gedankengang」であり、合理的、論理的な臨床講義は学生の人気をさらった。病床にあるころ、医学書のみならず哲学書も読み、医学自身を反省して練られた構想が『一般外科学』の著書となった。

卜部美代志教授時代（1954～1973年） 1954（昭和29）年6月、東京大学第2外科助教授卜部美代志は、2カ年の欧米留学で得た胸部外科の新知識を携えて金沢大学第1外科教授となり、結核研究所臨床部教授に併任され、以後肺結核の外科的治療が肺切除を主力として北陸に普及するようになった。当時、我が国では心臓外科、特に人工心肺の応用について、動物実験で生体反応の追求に腐心していた時期であった。1955年10月、石川県体育館で第10回日本胸部外科学会が開催された。その後、癌の研究にも重点が置かれ、胃癌、直腸癌、乳癌、甲状腺癌などについても早期診断、根治手術、化学療法、臨床病理形態学、腫瘍免疫学などの臨床的及び理論的研究が展開された。また術後代謝、外科内分泌学、老人外科など、外科学の広範な領域にわたって多彩な研究が行われた。1968年4月、第68回日本外科学会を主催した。教室の伝統であった神経系の形態的並びに生理学的研究は、引き継がれて盛んに推進された。視床正中中心核の生理学的意義に着目し、それと内臓知覚との関連を解明した。それらの幾多の業績に対して、1969年中日文化賞が贈られた。

岩喬教授時代（1973～1991年） 岩喬教授は札幌医科大学時代から心臓外科、特に先天性心疾患、不整脈の外科治療でその名が高く、世界に先駆けて頻拍症に対する高周波誘導型ペースメーカーを開発した。1973（昭和48）年に金沢大学に着任してからも心臓外科に情熱を注ぎ、中でもWPW症候群や心室性頻拍などの不整脈の外科治療が重要研究課題であった。岩喬教授が開発したWPW症候群に対する心内膜側からの副刺激伝導路切断術は世界の標準術式となり、世界最多の手術症例数を誇った。1987年には世界28カ国から

500余名の専門家を集めて国際不整脈シンポジウムを開催した。『Cardiac Arrhythmias』が、この分野の最新の成果として編集・執筆され、内外から高く評価された。教室では、研究分野を心臓外科、呼吸器外科、血管外科、消化器外科の分野に分け、それぞれが切磋琢磨して多くの成果を挙げ、隆盛を極めた。日本胸部外科学会、日本心臓血管外科学会、日本人工臓器学会など多くの全国学会を開催した。これらの業績に対して、1987（昭和62）年中日文化賞、金沢市文化賞を受賞し、1989（平成元）年には渡辺洋宇助教授とともに北國がん基金を受賞した。1990（平成2）年、岩喬教授の「心臓外科学研究」に対して紫綬褒章が授与された。1996年5月、岩喬名誉教授に勲三等旭日中綬章が授与された。

現状と将来の課題

渡辺洋宇教授は文部省長期在外研究員として、癌研究のメッカとして知られる米国メモリアル・スローン・ケタリング癌センター、次いでラッシュ・プレスビテリアン病院に留学した。肺癌の外科治療、免疫療法、化学療法を研鑽し、岩喬教授の退職に伴い、1991（平成3）年11月、第8代主任教授に就任した。渡辺教授は、胸部外科、特に呼吸器外科を専門分野とし、肺癌の外科治療では気管支形成術、拡大リンパ節郭清、拡大合併切除の手術術式を開発し、これらの手術法を駆使して極めて良好な手術成績を挙げてきた。分子生物学的手法を用い、肺癌について核DNA量、増殖細胞核抗原、癌遺伝子p53、などに関する研究を行う一方、癌の免疫的抑制機構、すなわち細胞傷害活性、自己腫瘍細胞傷害活性を検討し、これらの諸因子と予後との相関を解析している。また本学で開発された溶連菌製剤（OK-432）を用いた免疫療法、自己リンパ球を用いた養子免疫療法について多くの業績を挙げている。術前後の補助療法として、抗癌剤感受性試験、気管支動脈抗癌剤注入療法、術前化学療法の効果を研究している。また気管支再建部の創傷治癒機転、肺移植時の再灌流傷害を研究している。さらに、気腫性嚢胞性疾患の手術術式の開発、縦隔腫瘍の外科治療、胸郭変形の外科治療など研究は広範に及んでいる。1997（平成9）年5月、第14回日本呼吸器外科学会を開催した。これらの業績に対して1997年6月、石川テレビ賞を受賞した。渡辺教授の広い視野に立った総括的指導の下に、教室の伝統的な重要研究課題である呼吸器外科、心臓外科、血管外科、消化器外科の4分野を中心に研鑽が積み、拡大手術と低侵襲手術という外科の大きな潮流の中で、独創性の高い研究を目指している。さらに、来る21世紀の外科学を見据え、遺伝子診断、臓器移植の新分野の研究に取り組んでいる。

（11）外科学第2講座史

沿革

本学医学部は、1862（文久2）年3月に加賀藩種痘所が設置した時をその起源とし、

第7章 医学部 医学部附属病院

1901（明治34）年4月に金沢医学専門学校に、1923（大正12）年4月に金沢医科大学にと変遷を経て、1949（昭和24）年に金沢大学医学部となっている。

当教室は、泉伍朗が1922年11月に九州大学より金沢医学専門学校の教授に就任し、1923年4月に金沢医科大学が発足するとともに、現在のような講座制がとられ、1949（昭和24）年5月より金沢大学医学部外科学第2講座となって今日に至っている。

診療と研究

泉教授時代（1922～1928年） 初代の泉教授は、1922（大正11）年11月13日から1928（昭和3）年3月5日まで在任し、岡山医科大学教授として転出している。着任当時、まだ内臓外科が導入されていない北陸地方ではじめての内臓外科の権威として、新聞でも「内臓外科の新権威者、泉博士の着任」「胃癌博士」などと紹介している。泉外科時代は、腹部内臓外科を主とした診療、研究が行われ、胆嚢、胃、脾などに関する論文30編を発表している。1928年4月の第29回日本外科学会総会において、泉教授は「脾腫について - 外科的方面」と題する宿題報告を担当しており、その1年前より教室では脾に関する研究が行われていた。

熊埜御堂教授時代（1928～1958年） 泉教授が転出した後、1928（昭和3）年6月16日に熊埜御堂進教授が北海道大学より着任した。熊埜御堂教授の在任期間は1958年3月31日までの約30年間と非常に長く、その間に第2次世界大戦を挟み、1949年には学制改革により現在の金沢大学となっている。診療内容は、泉外科時代と大差なく内臓外科を主とし、特に胃切除術、胆嚢切除術、腸閉塞手術などを得意とし、整然たる手術術式を完成している。腹部内臓のほか、乳癌、甲状腺、肺結核、特発性脱疽、骨折、先天性奇形などあらゆる外科的疾患を診療していた。研究業績は、消化器系の病態生理を中心とした広範な領域に及んでおり、指導学位論文は66編以上をみる。

本庄教授時代（1959～1965年） 1959（昭和34）年5月1日、本庄一夫教授が京都大学より着任した。本庄教授は、消化器外科の中でも肝臓、胆道、膵臓の外科を得意とし、既に教室に導入していた全身麻酔法の進歩とともに、当時最先端であった広範囲肝切除や膵頭十二指腸切除などの手術が行われた。教室員の教育として、臨床と研究の二面制度を明確にし、臨床面の修練は症例検討会や最新文献の抄読会を通じて、研究的修練は年数回のゼミナールの開催により、教授の直接指導が行われた。肝臓、膵臓を中心とした研究業績は内外の注目を集め、指導学位論文は50編余りを数える。本庄教授は1965年4月1日まで在任し、京都大学教授として転出した。

水上教授時代（1965～1973年） 1965（昭和40）年8月1日、水上哲次教授が金沢大学結核研究所より着任した。これまでの腹部内臓外科の伝統は水上外科時代も引き継がれ、特に癌の基礎的臨床的研究に主眼が置かれた。教室員への教育は、症例検討会、抄読会に加えて外科医として病理学的能力の必要性を重視し、ミクロクルズスが行われるようになった。また、手術では合理的で迅速な手技・術式を教育した。研究業績は、癌の発生・増

殖と生体の免疫機能、内分泌代謝、自律神経機能などとの関連に関する研究や、臓器移植に関する研究に及び、指導学位論文は45編余りである。1972年10月には、第34回日本臨床外科医学会総会が水上教授会長の下で、金沢で開催されている。教授在任中、1966年には麻酔科学教室の増設に伴い当教室からもスタッフとして参加し、これまで各科で行っていた麻酔はすべて麻酔科に依頼することになった。また1967年には、現在の臨床研究棟が完成し、教室の移転が行われ、長年使用した教室研究棟は撤去した。水上教授は1972年夏ころより食道癌に冒され、翌1973年3月15日に60歳で逝去した。

宮崎教授時代（1974～1997年） 1974年4月1日、水上教授の後任として宮崎逸夫教授が助教授より昇任し、はじめて当教室出身の教授が誕生した。同年6月1日には金沢医科大学の開学に伴い、小坂進が教室員5名とともに同大学一般・消化器外科教授として転出した。1977年10月1日には、金沢大学がん研究所外科学講座の新設に伴い、中川原儀三が教授として転出した。中川原教授は1980年4月1日に福井医科大学の開学により同大学第1外科学教室教授として転出し、その後任として教室出身の磨伊正義が、がん研究所外科学教室の教授に昇任した。このように、この時期には多くの当教室出身の教授が輩出し、教室の発展の一端が現れている。宮崎外科時代には、診療、研究面において各臓器別の分担責任者が決められ、各分野で活発な活動が行われた。宮崎教授は消化器外科の中でも特に胆道、膵臓を専門分野とし、これらの分野で多くの業績を残した。実験的膵石症は、教室で開発したモデルで、広く内外から注目を集めた。臨床面では、膵臓癌、胆道癌をはじめ消化器癌全般及び乳癌・甲状腺癌における治療法の開発を教室の研究課題とし、癌に対する拡大手術を実践してきたが、後期にはQOLを重視した縮小手術の可能性も模索し、多くの成果を残している。中でも、膵癌に対する拡大郭清手術の開発と、その術後に起こる高度の消化吸収障害に対する管理法の確立は、この分野での進歩に大きく貢献した。また昭和50年代後半からは、しばらく中断していた臓器移植に関する研究も再開し、膵臓、肝臓、小腸などの移植を臨床応用すべく研究活動が続けられ、さらに、癌の発生・増殖に関する分子生物学的研究も精力的に行われた。指導学位論文は、161編、発表論文は2,136編（欧文327編）と膨大な数に上る。1982年5月には第7回日本外科系連合学会、1988年7月には第32回日本消化器外科学会、1992年7月には第23回日本膵臓学会が宮崎教授の会長の下で開催されている。宮崎教授は1997年3月31日まで在任し、停年で退官した。

三輪教授時代（1997年～現在） 1997（平成9）年7月1日から三輪晃一教授が助教授より昇任し、現在に至っている。三輪教授の専門分野である胃癌をはじめ食道、大腸、肝胆膵領域の消化器癌及び乳癌、甲状腺癌などの悪性疾患を中心に、診療、研究が進められている。さらに、膵臓、肝臓、小腸などの臓器移植を臨床応用すべく準備中である。

現状と展望

現在は、臓器別に分担責任者を置いて教授が統括するという従来からの体制を踏襲しつ

第7章 医学部 医学部附属病院

つ、診療に当たっている。消化器外科の一般として大部分の患者は悪性疾患であり、その治療が最も大きな課題の一つである。早期癌に対しては術後のQOLを重視して、より機能を温存した縮小手術を、一方、現時点で治癒不可能な進行癌に対しては、他の治療法も組み合わせ、より積極的な手術を目標としている。また、欧米に比べて立ち遅れた感のある移植医療も、今後は外科領域に大きな比重を占めてくると思われ、実施に向けて準備中である。

研究面ではoncologyを中心として、分子生物学的手法などを用いた基礎的研究から、臨床例を対象とした研究まで幅広く行っている。

学生、若手医師に対する教育もまた大学病院の重要な業務の一つであるが、特に、学生の臨床研修、研修医教育の充実を図っており、関連施設と連携した体制を目指している。

(12) 整形外科学講座史

沿革

広義の外科学から派生した整形外科学は、1926（大正15）年に第1回日本整形外科学会が開催されて以後、その地位が確立されていった。金沢大学医学部で実際に整形外科学教室として具体化するのには、1953（昭和28）年7月であった。当時、第1外科学教室の高瀬武平助教授が、はじめて整形外科学教室の講座主任として発令されたことに始まる。教室の開設当時は、高瀬武平、中村富夫、野村進ら総勢7名の布陣であった。そして1954年12月1日付けをもって高瀬武平が教授に昇任し、ここに金沢大学整形外科学教室は名実ともに講座としての形態を整えたのである。

開講当初、整形外科学教室には独立した建物がなく、旧館にあった当時の第1外科学教室に間借りをしていたが、1953年12月に南病棟の一隅を改造して、ここに整形外科学教室及び外来診療部門の体裁を整えた。その後、研究と診療の場所を確保するため多くの苦勞が重ねられ、1954年7月より南病棟の階下を利用することになり、22床を確保することになった。さらに、理学療法室、レントゲン室をつくり、整形外科棟の階下を改造して手術室とした。以後は、患者の急増とともにベッド数不足が常時教室の悩みの種となった。

診療と研究

高瀬武平教授時代（1954～1976年） 開講後、年を追って北陸の各病院に整形外科が開設されるに至り、1960（昭和35）年6月に、北陸整形外科集談会が発足された。1961年には、第3回骨腫瘍研究会及び第18回中部日本整形外科災害外科が高瀬会長の下に開催された。1965年、第18回日本筋電図学会及び第9回日本低周波学会が、十全講堂で高瀬会長の下に開催された。1968年第19回中部日本形成外科学会、1969年第2回日本整形外科学会骨腫瘍学会、1971年第36回中部日本整形外科災害外科学会が、金沢で開催された。1972年には、整形外科における最大の学会である日本整形外科学会が、高瀬会長の下に



写真7-21 金沢大学整形外科開講3周年記念(最前列中央に高瀬教授)

教室員と同門会が一丸となって開催された。このことは、金沢大学医学部整形外科学教室の業績が全国で認められたあかしでもあった。高瀬教授を中心とする骨腫瘍班は、組織培養におけるヒト骨肉腫細胞の株化に成功し、電子顕微鏡による骨腫瘍細胞の微細構造の研究やSr誘発骨肉腫の発生など、多大な成果を挙げていた。また、野村進助教授を中心とする末梢神経再生と機能に関する研究も、高い評価を受けていた。これらの研究は、日本国内ばかりではなく海外でも高く評価された。さらに、1972年に北陸リウマチ研究会が発足した。1974(昭和49)年4月には東田紀彦が同門で初の金沢医科大整形外科学教授に就任した。

野村進教授時代(1976~1989年) 1976(昭和51)年3月に高瀬武平教授が停年退職した後、同年6月からは、野村進助教授が2代目の整形外科学教授に就任した。この時点で教室開講後23年が経っており、同門生からも優れた人材が各大学の教授に抜擢された。1977年7月に山崎安朗助教授が金沢医科大学教授に就任し、1978年2月には、立野勝彦講師が金沢大学医療技術短期大学部教授に就任した。また、高瀬名誉教授が10月1日付けで福井医科大学初代学長に就任した。1980年4月に山口昌夫が金沢大学医療技術短期大学部教授に就任し、1981年4月には井村慎一助教授が福井医科大学整形外科学教授に就任した。この間の学会活動としては、1977年に北陸骨傷研究会が発足し、1978年第1回末梢神経を語る会と、第51回中部日本整形外科災害外科学会が野村会長の下で開催された。社会に整形外科の認識が広まりつつあるこのころより、整形外科学教室への入局者は毎年10人前後を数えるようになり、関連病院へも続々と整形外科の医師が派遣されるようになった。

第7章 医学部 医学部附属病院

1982年11月21日、高瀬名誉教授が72歳で逝去した。金沢大学整形外科同門会では一周忌に『高瀬武平遺稿』、三周忌に『同門会報（高瀬名誉教授追悼号）』を編集した。1983年には開講30周年を迎え、『金沢大学整形外科開講30周年記念誌』を発行した。1984年、第27回日本手の外科学会が野村会長の下で金沢で開催され、学会誌の創刊事業に自ら着手し刊行した。1986年8月、栄えある第1回日本整形外科学会基礎学術集会を主催した。野村教授は創立会長としての名誉を担って、日本の整形基礎科学の方向付けを明確に打ち出した。これは、将来の日本の整形外科にとって極めて重要な意義を持っており、快挙と言うべき大事業であった。そして1988（昭和63）年7月、第21回日本整形外科学会骨軟部腫瘍研究会を主催して好評を博し、これが野村教授現役最後の締めくくりの仕事となった。1989（平成元）年には、野村教授のライフワークを示す『末梢神経損傷文献集』、『野村進教授退官記念業績集』が刊行された。

野村教授の時代で最も大きく変わった点は、現富田教授を皮切りにして多数の医局員に海外留学の機会を与えたことである（計22名に上る）。海外生活において広い知識と視野を身に付けさせようとの配慮であり、国際化時代を先取りしたものであった。

富田勝郎教授時代（1989年～現在） 1989（平成元）年3月に、野村進教授が停年退職した後を受けて、同年8月から富田勝郎助教授が3代目の整形外科教授に昇任した。初代高瀬教授時代は教室の創生期、充実期であり、第2代野村教授時代は教室の拡充期、国際化への転換期であった。そしてこの確固たる伝統の上に、第3代富田教授の時代となって今日に至っている。1989年11月より金沢骨軟部腫瘍症例検討会発足、1990年12月には第1回北陸脊椎外科研究会が開催された。1993年5月、金沢全日空ホテルで金沢大学整形外科開講40周年記念会を開催した。医学部長（第2内科竹田教授）や病院長（皮膚科広根教授）をはじめ、多数の医学部教授が参加した。同門会誌（開講40周年記念）を発刊した。学会の開催に関しては、1995年8月日韓整形外科合同シンポジウム、1997年4月には、日本創外固定・骨延長学会が富田会長の下で開催された。また1996年4月1日付けで、染谷富士子が金沢大学医学部保健学科教授に就任した。

現状と展望

野村教授時代同様、海外留学の伝統は現在も受け継がれているが、富田教授時代に入って学会発表の場が国際舞台へと大きく変わった。現在、脊椎外科、腫瘍、関節外科、手の外科、スポーツ医学の各研究班が年2～3回その成果を国際舞台で発表している。富田教授の号令の下、金沢大学医学部整形外科学教室は世界に向けて飛躍し始めた。また、富田教授の開発した悪性脊椎腫瘍に対する脊椎全摘術が世界的に注目を集め、今や我々が海外へ行くだけでなく、逆に海外から多数の研究者、整形外科医たちが我々の教室を訪れるようになった。さらに、国外の施設から手術の依頼もあり、教室員の誇りとなっている。富田教授は、高瀬野村両教授の流れをそのまま受け継ぎ、骨肉腫及び悪性骨腫瘍の研究をライフワークとし、骨悪性腫瘍への化学療法の導入、抗癌剤感受性試験の応用、切断術が

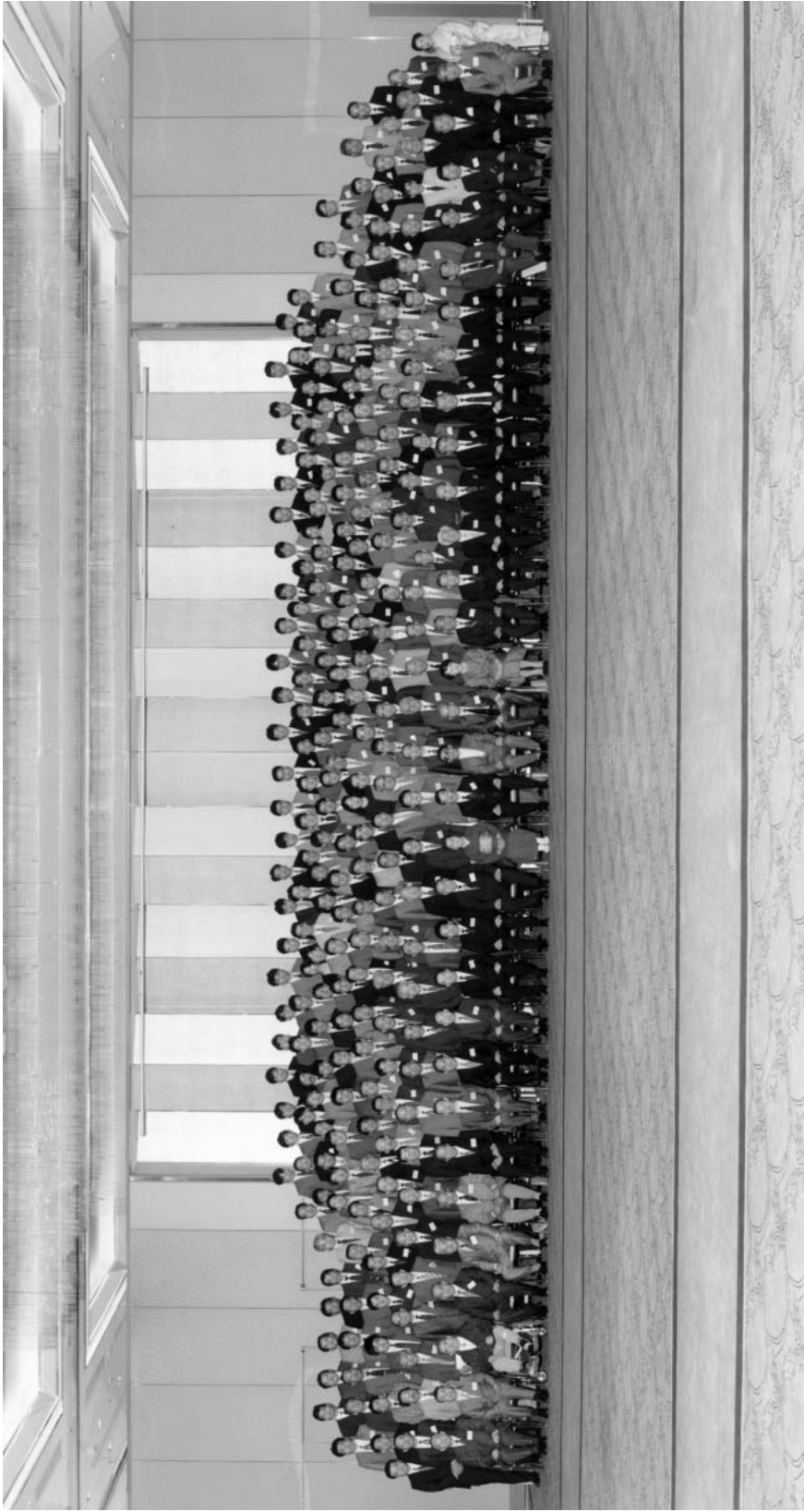


写真7-2-2 金沢大学整形外科40周年（最前列中央に野村名誉教授と富田教授）

第7章 医学部 医学部附属病院

ら患肢温存手術への転換、脊髄全周除圧術、後方侵入脊椎全摘術など次々と新分野を開拓し、我が国の骨腫瘍および脊椎外科の第1人者として確固たる地位を築いている。

現在の教室の状況であるが、医局には研修医を含めて約50名の医師がおり、入院病床数は52名、1日の外来患者数は150～200名、年間手術件数は1,000件を超えている。入局者数は毎年10人以上となり、1997（平成9）年10月現在、同門会員数は330名余りに達している。北陸3県を中心として関東や関西を含めて50余りの国公立関連病院を擁して、名実ともに大教室へと変貌した。整形外科医の社会的ニーズを考えると、年間10人でも整形外科医の充足度は不十分である。今後も富田教授の指導の下、医局員が一丸となって北陸地区の整形外科をリードしていくのみならず、レベルの高い研究及び医療を行い、世界に向けて発信していくことになる。

（13）脳神経外科学講座史

沿革

北陸地方においてはじめて開頭手術がなされたのは、今から半世紀以上も前の昭和10年代のことである。ドイツ、イギリス及びアメリカへの留学を経て東北帝大助教授より金沢医科大学第1外科学教室の教授に着任した桂重次教授は、当地方で最初の開頭手術を行った。桂教授は3年足らずの在任期間中、外遊中に学んだ脳神経外科の普及に努めた。桂教授の伝統を受け継ぎ、金沢医科大学において脳神経外科の礎を築いたのは、その後任の久留勝教授である。すでに乳癌や胃癌及び直腸癌などの手術で内外の名声を博していた久留教授は、第1外科学教室に着任すると癌手術の傍ら、中枢神経のミクロの解剖学的知識に基づいて脳神経外科手術を精力的に行った。久留教授は、癌の治療及び脊髄伝導路の解明という研究テーマに対し非凡な着想を持ち、昼夜を分かたぬ努力と綿密な解析を行った。久留教授の研究態度は常に“学んで思い、思いで学ぶ”ものであり、また“故きを温ねて新しきを知る”ものであった。外科医がとかく技術論に走りがちなのに対し、ものを思う外科医、思索する科学者としての態度を貫いた。今日の脳神経外科学教室の学風は、久留教授によってその礎が築かれたと言える。

昭和30年代の後半より、金沢大学医学部附属病院において脳神経外科設置の要望が強まり、1964（昭和39）年4月に脳神経外科診療科が開設された。当時、アメリカの若き脳神経外科医、ベン・ケーシー（Ben Casey）が活躍するテレビドラマも放送されており、脳神経外科に憧れを抱く優秀なインターンが門をたたいた。同診療科の運営の実質は第1外科によってなされ、この状態は約2年間続いた。

1966年になり、脳神経外科学講座の新設が認められ、同年7月27日の教授会で山本信二郎教授が選出され、8月より正式に開講した。教室の創立とともに、外科、眼科、神経科、精神科、生理学及び解剖学教室などより幅広く人材が集まり、大学院生も加わって翌年3月までに教室の基礎づくりがなされた。教室の設立当初は、旧館横の木造研究棟1階

と1967年に完成した新研究棟との徒歩5分間を要する2ヵ所に、研究室の分断を余儀なくされた。しかし、1972（昭和47）年春に附属病院の外科棟が増設され、1階にある事務部門が移転したため、その跡を改装して教室は現在の位置に移転し、ようやく一つにまとまった。

教室からは、山本教授の推薦により角家暁金沢医科大学教授、及び林實福井医科大学教授（1991年3月22日物故）が誕生した。山本教授は、第39回日本脳神経外科学会会長を務めるなど、数々の学会の運営と発展に尽力し、1988年3月をもって停年退職した。

脳神経外科学教室の第2代教授として、1988年7月16日、当時京都大学脳神経外科助教授の山下純宏が着任した。その後、教室同門から山下教授の推薦により、伊藤治英山崎大学教授及び久保田紀彦福井医科大学教授が誕生している。

1997年11月現在、脳神経外科学教室の教室員は45名で、北陸地方をはじめ関東、中京、関西地方を含む約40ヵ所の関連病院及び関連大学に110名もの教室出身者を送り込んでいる。脳神経外科学教室の平均手術件数は、年間約250件で、うち100件は脳腫瘍、50件は脳血管障害である。金沢市のみならず北陸の隅々にまで、脳神経外科専門医が常勤する病院が増えている、いわば過当競争の状況にありながら、教室の手術件数は年ごとに増加している。これは基礎的研究の成果を臨床医学に還元するという脳神経外科学教室の伝統が、久留勝、山本信二郎及び山下純宏の3教授に代々踏襲され、最先端の治療レベルを築き上げているためであろう。

診療と研究

山本信二郎教授時代（1966～1988年） 久留勝第1外科元教授の薫陶を受けた山本信二郎教授は、教室の開設以来、研究と診療は表裏一体を成すべきであるという方針を貫いた。山本教授は、診療面においては全国に先がけてCTスキャンを導入し、独自のトレフィン開頭器や脳外科用手術台、脳内血腫吸引装置等を開発した。臨床医学は基礎医学によって支えられるべきものであるという立場を堅持し、基礎的な研究に精進した。

山本教授の指導する脳神経外科学教室の研究テーマは、電気生理、頭蓋内圧及び神経病理の3部門に大別された。電気生理の部門では、仙髄から延髄に至る副交感神経系、排尿調節機構、及び中枢性呼吸機構などについて先駆的な研究がなされ、その成果は『Handbook of Physiology』にも引用された。また、頭蓋内圧部門においては、クモ膜下出血後にみられる圧波やプラトー波の成因にかかわる神経性要因についての研究成果が、ユーマン（Youmans）監修の名著『Neurological Surgery』にも引用され、1987年度には、日本脳神経外科学会会長賞の栄誉を受けた。さらに、神経病理部門においては、髄膜、髄膜系出血及び髄膜腫について、免疫組織学的並びに電顕的手法を駆使した研究がなされ、多数の英語論文が出版された。

現状と将来の課題

山下純宏現教授は、国立遺伝学研究所への出向及び英国エディンバラ大学への留学中を含め、悪性脳腫瘍の研究と治療を最大の研究テーマとしている。山下教授は現在、外科療法、放射線療法、化学療法、免疫療法及び分子生物学的研究など、脳腫瘍の全分野において我が国の第一人者であり、脳神経外科学教室に新しい息吹をもたらした。頭蓋底部腫瘍をはじめとする難解な脳腫瘍に対して、緻密な計画と粘り強い精神力、そして何よりも患者のために尽くしたいという情熱で長時間の顕微鏡手術を行い、手術成績の飛躍的向上をみている。1997（平成9）年4月には、「臨床脳神経外科学と基礎医学との境界領域における卓越した貢献」の理由により、英国文化圏では最も権威のある英国エディンバラ王立外科学会から名誉会員の称号（Fellowship ad hominem）を授与された。これは日本人としては2人目の荣誉であり、脳神経外科学教室の伝統と業績が世界に認められたものととらえられる。教室では国際交流も盛んであり、同時期に5人の教室員の海外留学がある一方で、バングラデシュや中国から金沢大学脳神経外科学教室への留学を希望する国費外国人留学生も受け入れている。

老年人口が確実に増加する21世紀に向けて、脳神経外科の重要度は一層高まっている。痴呆の外科治療、神経移植など新しい治療法の開発や既存の検査、手術の低侵襲化など、より高度な医療技術の進歩が求められる。また、患者や医療従事者と十分コミュニケーションがとれ、心の通った治療を提供できる医師を育成することも極めて重要である。これらの山積みする課題に向け、基礎的研究の成果を臨床医学に還元するという脳神経外科学教室の伝統を踏まえ、教室員一同日々精進し、進歩していきたい。

（14）泌尿器科学講座史

沿革

1913（大正2）年2月20日に、土肥章司名誉教授により金沢医学専門学校に皮膚泌尿器科学教室が開設されて以来、伊藤実教授、長谷川宗憲教授、並木重郎教授、川村太郎教授がそれぞれ歴任された後に、1955（昭和30）年9月16日、東大講師兼三井記念病院皮膚泌尿器科医長であった黒田恭一講師に対し「金沢大学教授とし、医科大学教授を併任することとするが、実際は泌尿器科学の講義、研究、診療の一切を担当する」との発令がなされ、不完全講座ではあるが、現在の金沢大学泌尿器科学教室が開設された。同年11月16日附属病院において、皮膚科より分離独立して泌尿器科診療が始まり、学生に対しても泌尿器科学講義が開始された。

1960年4月1日からは完全独立講座となり、教授、助教授、講師各1名、助手5名が泌尿器科学の定員となった。1966年4月には、外来が現在の場所に、1967年11月には教室が現在の臨床研究棟6階に移転した。1974年4月、津川龍三講師が金沢医科大学泌尿器科教授に就任した。1977年11月30日黒田教授が第11期日本学術会議第7部臨床医学の部に

て学会会員となる。1981年7月黒田教授は退職され、福井県立病院長に就任した。1982年1月久住治男助教授が教授に昇任した。世界ではじめて金蒸気パルスレーザーの実用化に成功し、がんの先端医療に新たな道を開いたことに対して、1987（昭和62）年11月3日第41回北國文化賞が授与され、1990（平成2）年11月3日、金沢市文化賞を授与された。1991（平成3）年7月21日、久住教授が第15期日本学会議地域医学研究連絡委員に選出される。同年10月には、内藤克輔講師が山口大学泌尿器科教授に就任した。1993年3月久住教授が退職した。1995年11月には、並木幹夫教授が大阪大学より着任した。

金沢大学泌尿器科同窓会は、1963年9月21日に設立総会が開催された。以来年に1回の総会が開催され、会員相互の連絡親睦、後進の育成と泌尿器科学教室の発展に尽力することを目的とし、現在に至っている。

診療および研究

黒田教授時代 泌尿器科学教室が独立して診療を開始したのが、1956（昭和31）年11月16日であり、尿路結核や性病は年ごとに低下傾向が見られたが、泌尿器性非特異的炎症が最も多く、尿路結石や腫瘍及び前立腺肥大症患者が次第に増加してきた。当科の公的病床数も開設当時の19床から、1964年には28床に増加し、入院患者数もそれに伴い増加傾向を示した。北陸地区病院の泌尿器科の現状は、教室開設後の数年間は、皮膚科学及び泌尿器科学を両方研修した医師の派遣が続いた。1964年に富山市民病院で皮膚・泌尿器科が分離した後、両科の分離または泌尿器科新設病院が順次増加した。1972年泌尿器科外来に膀胱・尿道内圧測定装置が設置され、研究のみならず臨床的にも、大いにその威力を発揮した。膀胱腫瘍の線溶、組織培養による基礎的研究により、膀胱腫瘍再発予防を目的とした抗癌剤及びウロキナーゼの膀胱内注入療法が開始された。1980年泌尿器科用超音波断層装置が購入され、前立腺疾患の診断や膀胱癌の浸潤度判定のみならず、超音波ガイド下腎瘻造設術も安全かつ容易に施行可能となった。

研究面では、前立腺、膀胱疾患、特に癌関係のテーマが多く行われ、ついで前立腺手術、排尿障害及び尿路のX線診断の研究が行われた。前立腺腫瘍の酵素化学、早期診断、前立腺手術と線維素溶解現象とその対策、さらに癌発生病理についても研究が行われた。膀胱腫瘍の膀胱壁浸潤に関するX線学的stage診断、及び再発防止に関する基礎的・臨床的研究が行われた。排尿障害に関しては、排尿を中心としたX線学的形態と、その機能についての研究が続けられた。また、腎性高血圧症における腎血行動態の研究、腎移植術式の基礎的研究も始まった。また、男子不妊症に対するホルモン治療の基礎的研究も行われた。1967年11月には、現在の新研究棟へ引っ越しが行われ、生化学実験室も充実し、基礎的研究も十分行える環境となった。1974年4月津川教授以下5名が金沢医科大学へ赴任し、膀胱腫瘍を中心とした線溶系の研究、外科的腎疾患の研究及び下部尿路通過障害の研究にグループ分けされた。学会関係では、日本泌尿器科学会金沢地方会が1913（大正2）年に皮膚科集談会として創設された。1960年12月10日の第200回からは、皮膚科・泌尿器

第7章 医学部 医学部附属病院

科演題を分離して開催された。1964年からは、日本泌尿器科学会北陸地方会と改称され、皮膚科地方会より完全に分離して開催されるようになった。1961年5月には、第49回日本泌尿器科学会総会が黒田恭一会長により金沢で開催された。1967年11月には、第18回日本泌尿器科学会中部連合地方会が黒田会長により開催された。1974年10月には、黒田会長により第19回日本不妊学会総会が金沢で開催された。1980年11月には黒田会長により第30回日本泌尿器科学会中部総会が開催された。

久住教授時代 2代目教授として、1982（昭和57）年1月1日付けで教室主任として久住教授が就任。1981年度特別設備費により、表在性膀胱癌及び膀胱上皮内癌に対するアルゴン色素レーザー装置が設置された。5月27日、ヘマトポルフィリン誘導体とアルゴン色素レーザーによる光学的治療が、膀胱移行上皮癌患者においてはじめて行われた。1983年1月25日、尿路性器癌患者に対する高用量抗癌化学療法を目的とした無菌治療室が病室に設置された。当科での膀胱癌に対する光学的治療がニュースで報道され、各地より問い合わせが殺到し、本療法の幕開けとなった。11月9日に、金蒸気パルスレーザーが搬入された。1984年、温熱癌治療の基礎的・臨床的研究が本格的に開始された。同時に、学内より要望の多い腎移植に向けての準備が開始された。2月、外来にレーザー及び温熱治療室が設置された。4月8日、癌治療用局所深部加温装置による臨床応用が開始された。一方北陸地区においても、泌尿器科内視鏡治療（Endourology）の波が押し寄せ始めた。1985年2月19日、第1回腎移植連絡会が開催され、当科における腎移植への準備状況が説明され、各診療部門よりの協力体制が整った。3月20日には当教室第1例目の生体腎移植、7月11日には献腎移植第1例目が行われた。研究面においては、尿路性器癌に対する抗癌剤の感受性試験、膀胱癌に対する光学的治療、尿路性器癌に対する局所深部加温療法、尿路感染症におけるカンジダ感染、神経因性膀胱における各種薬剤の薬理作用など、教室員全員でこれらのテーマについての基礎的・臨床的研究を推進した。高度先進医療機器として、1989年10月体外衝撃波結石破碎装置が搬入され、多くの患者に福音がもたらされるようになった。学会開催については、1990年3月、第23回制癌剤適応研究会が久住当番世話人により金沢市で開催された。11月には、第11回日本レーザー医学会大会が久住大会長により金沢市で開催された。1991年5月、第79回日本泌尿器科学会総会が、久住会長により金沢観光会館を主会場として開催された。8月には久住会頭により、第13回日本光医学・光生物学会が金沢にて開催された。1992年9月には、久住大会長により日本ハイパーミア学会第9回大会が開催された。これら久住教授が主催された学会は、いずれも当教室のメインテーマであった尿路性器癌治療の基礎と臨床に関係したものであり、教授在職期間中に発案され、かつ基礎的研究を基に臨床的治療にまで拡大した集大成といえる。

並木教授時代 3代目教授として、1995（平成7）年11月16日付けで教室主任として並木教授が就任した。臨床においては、腎移植の推進を図るべく透析病院における啓蒙活動、移植コーディネーターの育成などを行っている。また、関連施設を含めた膀胱癌、腎癌、

前立腺癌及び精巣腫瘍の臨床的治験も大規模に行われ、今後は排尿障害及び泌尿器科先端医療の共同研究の開始も予定している。一方、研究体制としては、教授の専門である男子不妊、内分泌領域においては、Y染色体の不妊責任遺伝子の同定、精子成熟過程における分化誘導物質の同定など、分子生物学の技術を駆使した世界でも最先端のプロジェクトが着々と進行している。また尿路生殖器癌グループにおいては、膀胱癌、前立腺癌、精巣腫瘍の転移モデルの開発と転移、浸潤機構の解析、またモノクローナル抗体を使った標的治療、さらに遺伝子治療の可能性などの研究に精力的に取り組んでいる。前立腺癌のホルモン不応性獲得のメカニズムと、これを克服すべく癌細胞分化誘導療法の可能性などを基礎的に検討している。排尿障害に関する研究グループでは、ラット脳梗塞モデルを作成し、膀胱及び尿道の機能的、器質的变化を追うことにより、これらの病態の解明と新しい治療戦略の展開を追求している。学内外の他施設との共同研究の必要性を重視し、金沢大学がん研究所、産婦人科、核医学、解剖学、薬学部、北陸大学薬学部、岐阜薬科大学、東大人類遺伝学、阪大細胞工学、ピッツバーグ大学、NIHなどとタイアップして共同研究を推進している。

現状と展望

現在、当教室の同窓生は150人を超え、関連施設は50病院・医院に達し、更に多くの施設から泌尿器科医の派遣要請を受けている。これからの高齢化時代において、泌尿器科医の活動範囲はますます拡大しており、その前途は期して待つべきものがあると考えられる。医学教育、研究、診療において国際間の情報交換、共同研究の確立は必須であり、研修医教育を含め、国際的にも通用する優秀な泌尿器科医の育成が今後の大きな課題である。

(15) 眼科学講座史

沿革

1884(明治17)年に石川県甲種医学校が設立され、同年6月に一等教諭医学士山崎兵四郎が眼科長に就任した時に、はじめて眼科が独立した。当時、眼科は四大学科の一つとして考えられており、本校も内科、外科に次ぎ眼科をいち早く独立した科として持ったのである。山崎は1887年9月に海軍軍医として学校を去り、1888年4月から高安右人が着任し、以来眼科医長として1924年に及ぶのであるが、高安が赴任するまでの間は、有松戒三が眼科医長を3ヵ月務めた。1899年7月から1901年7月までの2ヵ年間、高安はドイツに留学したので、この間は第2内科部長佐々木達が眼科医長を兼任した。1894(明治27)年9月、第四高等中学校は第四高等学校と改められ、さらに1901(明治34)年4月に第四高等学校医学部は金沢医学専門学校として独立し、1923(大正12)年3月には金沢医科大学に昇格した。この間、眼科部長は引き続いて高安が担当していた。

1924年、高安に代わって眼科副部長山田邦彦が眼科部長に昇任したが、1927年急死し、

第7章 医学部 医学部附属病院

名古屋医科大学助教授中島実が教授に就任した。中島は、1940年4月に名古屋帝国大学教授に就任したので、助教授倉知与志が教室を主宰することになり、1942年10月27日に教授に昇任し、さらに教室員も増え業績が上がり、また病院長、医学部長を歴任した。1971年3月停年退職のあと、助教授米村大蔵が教授に昇任し、病院長を歴任。1988年の停年退職に合わせて、助教授河崎一夫が教授に昇任し、現在に至っている。

診療と研究

倉知与志教授時代（1942～1971年） 網膜を中心として眼の新陳代謝の研究を進めた。眼の新陳代謝については、網膜をはじめ眼球の各部分にある酵素の働き、また各種のビタミンあるいはホルモンなどを用いて組織呼吸の消長を探究した。第2次大戦直後に諸種の困難を排して行われた錐体視物質に関する研究は、当時の我が国眼科学会における最先端をいくものとして評価された。これらの生化学的研究の成果は、1963年第16回日本医学会総会における総会講演として、「眼の新陳代謝、とくに網膜の新陳代謝」の演題で行われた。本講演は、教授自身のライフワークであるばかりでなく、前任者中島教授以来の研究の総決算であった。主として以上の研究に対し、日本医師会研究助成金、金沢市文化功労賞、中日文化賞などが授与された。教授在任中に62編の学位論文が発表された。

臨床関係では、各種の新型検査器械、治療方法を取り入れ、診断治療の能率の向上を進めた。すなわち、屈折異常の治療としてコンタクトレンズを早期から導入してその普及に努め、また弱視患者に少しでも視力の増進をもたらすべく努力し、硝子体置換術の1種である倉知法をはじめとする諸手術方法を考案した。1964（昭和39）年、倉知教授の努力と石川県と金沢市の4ライオンズクラブの尽力により、金沢眼球銀行が発足した。附属病院長及び医学部長をそれぞれ2期務め、院長時代に長年懸案だった病院改築が決定した。また、1950年から1963年まで十全同窓会理事長を務めた。

米村大蔵教授時代（1971～1988年） 臨床網膜電図学の創始者の一人として知られ、海外渡航が容易でなかった1961（昭和36）年に、ストックホルムにおける第1回国際臨床網膜電図学会に欧米以外からただ1人出席して、網膜電図electroretinogram（ERG）における律動様小波が諸種の網膜疾患の早期診断に有用であることを発表したことは、内外に有名である。律動様小波の存在すら当時ほとんど知られておらず、律動様小波oscillatory potentialの命名も、米村教授によるものである。この報告以来、律動様小波を観察しやす



写真7-23 金沢大学眼科創設満80年記念式場（十全講堂）にて挨拶する倉知教授（右）及び式場入口（左）（1964年10月25日）

い強力閃光刺激ERG法が眼科臨床に定着した。さらに、先天性色覚異常の他覚的診断法の創案、網膜色素上皮の新電位の発見などにも多くの業績を挙げ、多くの欧米の教科書に引用されている。教授在任中の学位論文は12編である。1977年に日本眼科学会にて、翌年に国際臨床視覚電気生理学会にてそれぞれ特別講演を担当し、独創的方法論と巧みな臨床応用に絶賛を浴びた。1980年から2年間附属病院院長を務め、1982（昭和57）年に金沢市文化賞を受賞した。1988年3月に第92回日本眼科学会総会会長を務めたのち、同年停年退職した。

河崎一夫教授（1988年～現在） 1988（昭和63）年に米村教授の後を受けて河崎助教授が昇任した。入局以来、前任者米村教授とのコンビにより臨床視覚電気生理学の研究に従事し、眼科臨床に役立つ新しい電気現象を次々と発見して、この領域において、当眼科を常に世界の指導的位置に保ってきた。大学院時代には、早期視細胞電位を人眼ではじめて記録することに成功し、この電位の臨床応用を開いた研究によって学位を取得し、この仕事は多くの欧米の教科書にも付図とともに引用されている。

1985（昭和60）年には、米村教授と共著で単行本『臨床網膜電図学』（医学書院）を著した。1990年には、国際臨床視覚電気生理学会及び国際眼中毒学会の特別講演を依頼され、1994年に国際眼中毒学会の特別講演を再度担当した。御家芸のこの分野の研究のほか、最近では心理物理学的手法による緑内障、糖尿病網膜症の早期診断装置（特許取得済み）さらに眼内感染症の治療法、眼内手術用の器具や素材の研究などにも研究範囲は広まり、近年ではさらに新しい水晶体着色物質を発見し、また自然発症糖尿病モデルで動物において網膜電図の異常のほか、網膜における遺伝子発現の異常も見いだしている。教授就任から1998年4月までの学位論文は27編である。

臨床面でも、技術革新の激しい眼科診断・手術領域においても絶えず最高の装置を導入



写真7-24 第92回日本眼科学会総会を終了して、真鍋理事長（右）から感謝状を受け取る同窓会会長米村教授（左）（1988年3月26日、国立京都国際会館メインホール）



写真7-25 米村・河崎のコンビによる単行本『臨床網膜電図学』（医学書院、1985年）

第7章 医学部 医学部附属病院

して患者の期待にこたえ、外来患者数、年間手術件数、病床稼働率もともに高い水準を維持している。



写真 7-26 第42回日本臨床視覚電気生理学会担当を終了した直後の金沢大学眼科スタッフ一同
(1994年9月25日、金沢読売会館前)

現状と将来の課題

臨床医学講座では、医療面においても最新・最高の水準を絶えず維持することが求められるのは当然であり、当教室においては、高度の技倆と最新の設備を要する網膜・硝子体手術が既に実施され、黄斑下手術も最近開始され、従来不治であった疾患も治療して好成績を収めている。さらに、最近社会的にも注目されている屈折異常（近視、乱視）矯正手術も既に開始されている。研究面では当教室の長年の蓄積のある視覚電気生理学的手法のほかに遺伝子学的手法、分子生物学的手法も加えて眼疾患の早期診断・病態解明に努めたい。その成果は、失明の第1原因とされる糖尿病網膜症に関して既に得られている。

(16) 耳鼻咽喉科学講座史

沿革

本学における耳鼻咽喉科診療の始まりは、1903（明治36）年1月20日、宮田篤郎（東京帝国大学医科大学助手）が金沢医学専門学校の外科学教授として着任し、石川県金沢病院第2外科医長と新たに併設された耳鼻咽喉科の医長を兼務したことに始まる。ついで

1907年4月10日、官立医学専門学校規定により学科科目中に耳鼻咽喉科学が制定され、翌1908年9月11日金沢医学専門学校にも、はじめて耳鼻咽喉科学が規定されるに至り、宮田が外科学と耳鼻咽喉科学の講義を兼務担当することになった。このころから耳鼻咽喉科を専門に志す者の入局がみられるようになった。1914（大正3）年3月、宮田は耳鼻咽喉科学研修のためドイツへ留学したが、同年夏に第1次世界大戦が勃発し、やむなく帰国し、東京帝国大学耳鼻咽喉科教室岡田和一郎教授の下で1917年4月まで研修した。その間、佐崎伊久（1905年、金沢医専卒）が講師となり、職務を代行した。1921年7月4日、宮田は外科の担任を解かれ、専任の耳鼻咽喉科学教授となり、同年9月12日退職した。宮田の後任には、当時退職していた佐崎伊久が教授となり耳鼻咽喉科学を担当した。

その後1923年、官立医科大学官制により金沢医科大学となり、同年3月7日、当時九州大学助教授で、欧州留学から帰朝直後の久保護躬が、金沢医科大学としては初代の耳鼻咽喉科学教授として就任して講座を担当した後、1929年11月8日千葉医科大学へ転任した。次いで、九州大学助教授であった山川強四郎が後任教授となり、1931年10月30日大阪帝国大学へ転任した。その後当時熊本医科大学助教授であった松田龍一が教授として着任し、30年にわたり講座を担当し、1963年3月停年退職した。同年5月10日当時農協高岡病院長であった豊田文一が後任教授となり、1973年3月停年退職した。同年6月1日、金沢大学助教授であった梅田良三が教授となり、1990年3月停年退職した。現在は、同年8月1日から金沢大学助教授であった古川仍が教授に就任し、教室を主宰している。

診療と研究

宮田篤郎・佐崎伊久教授時代（1903～1924年） 鼻科領域の悪性腫瘍に対する手術的療法並びに放射線治療についての研究がなされ、その成果の一部は、1919（大正8）年日本耳鼻咽喉科学会第23回総会で「鼻及び副鼻腔の悪性腫瘍の治療」と題して宮田教授から宿題報告された。

久保護躬教授時代（1925～1929年） 聴器生体固定法についての研究がなされた。

山川強四郎教授時代（1930～1931年） 慢性上顎洞炎の治療に関する臨床研究がなされた。

松田龍一教授時代（1932～1962年） 次の各項目について研究がなされた。 耳性眼球震盪。 音声言語障害並びに嚥吐に関する研究。 女性における性的現象の耳鼻咽喉疾患に及ぼす影響に関する研究。本研究は、1938（昭和13）年日本耳鼻咽喉科学会、第42回総会において宿題報告された。 嗅覚に関する研究。

豊田文一教授時代（1963～1973年） 僻地における耳鼻咽喉科医療に関する研究。毎年北陸3県の僻地検診を実施して成果を挙げた。 音声言語障害に関する研究。言語外来を開設して、言語障害児の治療に大きく貢献した。 嗅覚に関する研究。特に臨床的嗅覚検査法の開発について研究を進め、1971年度の文部省総合研究「嗅覚検査のための基準臭と検査方式の研究」の研究代表者となった。その成果として、T&Tオルファクトメトリー

第7章 医学部 医学部附属病院

が開発され、本邦の標準的嗅覚検査法として普及するに至った。

梅田良三教授時代（1973～1990年） 嗅覚に関する研究。本研究は、1981（昭和56）年第82回日本耳鼻咽喉科学会総会で「嗅覚障害の診断と治療をめぐって」と題して、宿題報告された。腫瘍免疫に関する研究。音声言語障害に関する研究。顔面神経麻痺に関する研究。身体動揺に関する研究。

古川仍教授時代（1990年～現在） EBウイルスによる上咽頭癌の発癌のメカニズムの研究。EBウイルスの前初期蛋白Zと上咽頭癌の発癌機構の関連を分子生物学的解析。また頭頸部癌の浸潤転移に関し、マトリクスメタプロテナーゼに関連した研究も並行して行われている。嗅覚に関する研究。動物を用いた種々の病態モデルを作製し、in situ hybridization・電顕を中心として発展している。嗅覚の他覚的検査は、非常に難しい分野であるが、教室で開発中の電気生理学的検査法でこの分野に先鞭がつけられた。人工内耳と言語発達に関する研究。従来、補聴器以外に有効な方法がなかった難聴児の教育に、金沢方式と呼ばれる文字言語を早期から刺激し乳幼児の言語発達を促す方法に加えて、人工内耳を導入して、より健聴児に近い発達を促す研究と医療がなされている。頭頸部再建外科に関する研究。頭頸部癌切除後の機能障害に対して、血管柄付き遊離組織移植を行い、術後機能障害を最小限に食い止めるため種々の自家移植組織が検討されている。

現状と展望

診療面では、人工内耳手術、内視鏡下鼻内手術、遊離皮弁による頭頸部再建手術など、先端医療を取り入れ新技術の導入に努めている。

平衡・嗅覚・アレルギー外来など専門外来を行っており、嗅覚外来には、北陸以外の遠方からも患者さんが紹介されてくる。アレルギー外来では、アレルギー性鼻炎に対してのday surgeryとしてKTPレーザーを用いての下鼻甲介焼灼手術を行っており、侵襲が少なく効果的で、患者さんからの評価が高い。

他大学に比して、言語外来は充実しており、常時2名以上の聴覚言語療法士が言語発達遅滞・聴能訓練・失語症の言語指導などに従事している。人工内耳埋め込み手術後のリハビリは、言語療法士のサポートが不可欠であり、当科がいち早く人工内耳での高度先進医療の指定を受けられたのも、このような背景が大きな要因である。入院診療は、木曜日の教授診察を核として、月・水・金曜日が手術日で、年間450件以上の手術を施行している。以前と比較して手術件数は減少傾向にあるが、これは長手術時間件数の増加によるものである。頭頸部癌の手術は、再建手術を含めると10数時間に及ぶことも珍しくなく、咀嚼・嚥下・呼吸・発声など人間として生きていくのに不可欠な機能を回復させるため、再建手術を必要とする。当科では、血管付き遊離皮弁を用いて、整容的にも機能的にも患者さんに満足してもらえるよう努力している。

教育に関しても、スタッフ一同積極的に取り組んでおり、卒後教育の面では入局1年目は指導医の下で耳鼻咽喉科全般の基礎的修練を受け、大学院生はほとんどが学位を取得し、

医局員は5年間で学会認定専門医の資格を取得している。

以上、21世紀に残された大きな課題であろう癌の克服と感覚器障害の治療に対し、基礎と臨床の両面から教室員一同日々研鑽をしており、今後とも多方面からの御支援と御鞭撻を賜りたい。

(17) 産科婦人科学講座史

沿革

金沢医学館に1871(明治4)年蘭医スロイス(Sluys, P.J.A.)が来任するに及んで、医学館の教則が整備され、その後任として1875年来任、4年間在職した蘭医ホルトルマン(Holtermann, A.)によって産科学の講義が行われた。ホルトルマンの離任後、1880年着任したオーストラリア人ローレッツ(Roretz, A. von)が産科学をドイツ語で講義したと伝えられている。しかし当時の洋医は、全科の講義診療を行い、いまだ専門分科していなかった時代であった。その後、金沢医学館は金沢医学所、金沢医学校と名称を変えたが、その間も専門分科への進歩はみられず、婦人科学・産科学の講義は、1880年石川県金沢医学校に来任した外山林介、1882(明治15)年着任の佐藤廉らによってなされていた。

1884(明治17)年に甲種医学校となり、内科、外科、眼科の専門分科に引き続き、翌1885年に産科婦人科が独立分科し、石川県金沢病院も当時臨床4大科目として考えられたそのすべての診療科を、分科制として持つに至った。これが本学産科婦人科学教室の起源であるとされている。最初の専任婦人科学産科学教諭兼金沢病院婦人科産科医長は、菅沼貞吉であり、1885年6月より1年余在任、次いで中山専太郎が1886年10月に来任し翌年8月まで在職し、それぞれ短期間ながら分科後の診療・教育に従事した。1887年には、山田謙治が第四高等中学校医学部教諭として着任し、1890年同教授となり、7年間在職した。1894年10月には、小川勝陳が第四高等学校医学部教授として着任、1901年金沢医学専門学校教授となり、1908年9月まで13年11ヵ月の長きにわたって婦人科学産科学の教育と診療に従事した。1909年2月に鬼頭英教授が金沢医学専門学校教授として着任、3年間在職し、1912年3月より蔵光長次郎教授がこれを引き継ぎ、1923年5月まで11年2ヵ月間にわたって本教室の発展に尽くした。

1923(大正12)年4月に金沢医科大学となり、それまでの金沢医学専門学校の一臨床学科としての本教室も大学の産科婦人科学講座として、教育、研究、診療の3者が教室の目標とされるに至った。医科大学昇格以前の明治・大正時代の教室には、正規の助教授・講師の席もなく、歴代の主任教諭・教授の努力はそのほとんどが臨床治療及び医学生の教育に向けられていた。

1923年5月久慈直太郎教授が金沢医科大学教授兼附属医院産科婦人科医長として着任した。在職期間は5年未満であったが、大学講座としての基礎づくりに数々の業績を残し

第7章 医学部 医学部附属病院

て退官した。

1927年12月には笠森周護教授が着任し、本講座の充実・発展に尽くした。特に教室が研究機関として確立し、形を整えてきたのは、笠森教授の欧米留学以後であった。戦時下においては、空襲警戒、備品の疎開などに日夜奔走し、備品、建物などのすべては戦禍から免れた。1948年には、第43回日本婦人科学総会が金沢市において開催された。1953年金沢大学教授（金沢医科大学教授併任）となり、1958年3月定年制の施行により、30年余りの在職期間を経て退職した。

1958年12月赤須文男教授が着任し、産科婦人科領域における内分泌学的研究を精力的に行い、それらの研究業績は誌上に、あるいは学会において数多く発表された。また、多数の全国学会総会を金沢に招致し、学問の交流に尽力した。1971（昭和46）年3月定年制により退職した。なお、笠森教授時代の終りころから、附属病院総合改装工事が始まり、まず病室が1959（昭和34）年に現在の第3病棟に移転した。その後、産科婦人科学教室関連の研究室、外来、分娩関連施設などが相次いで現在の総合棟に移転し、病院正面向かって右側の一角を占めていた以前の産科婦人科学講義室、同教室研究施設・病棟・手術場は、すべて跡形なく取り壊された。1971（昭和46）年6月西田悦郎助教授が教授に昇任し、教室伝統の研究主題である産科婦人科内分泌学に関する研究を継続した。1994年3月定年制により退職した。

1994年11月に井上正樹教授が着任した。

診療と研究

久慈直太郎教授時代（1923～1927年） 1923（大正12）年4月金沢医科大学の発足とともに、同年5月金沢医科大学教授兼金沢医科大学附属医学専門部教授となり、1925年には金沢医科大学附属医院長を併任し、本学と病院の発展に貢献した。また、日本赤十字社石川支部産院の開設に尽力し、1925年には同産院長を兼任して、産科学教育の場とした。1964（昭和39）年11月叙勲、二等瑞宝章。

笠森周護教授時代（1927～1958年） 笠森教授時代の研究の中心は、主に組織形態学による実験内分泌学であり、エストロン・プロゲステロン・アンドロゲンなど性ステロイドの性器に及ぼす影響について詳細な組織学的研究が行われ、さらにその周辺の問題として、副腎における性ステロイド・ビタミンC・Eの雌性性器に及ぼす影響、レラキシンの作用などについて意欲的な研究が行われた。1933（昭和8）年には「人胎盤、妊婦血液並びに妊婦尿中に於ける所謂黄体ホルモンについて」の学会宿題報告が笠森教授によって行われた。臨床的研究としては、子宮癌の組織像についての検討、コルポスコープによる子宮腔部拡大像の型分類、黄体ホルモン注射の子宮癌発育抑制作用に関する研究、子宮頸癌の放射線治療面の研究、各種産科婦人科領域の手術機械の考案工夫などが挙げられる。研究面では、ホルモンと癌を主題として攻究し、臨床面ではレ線設備に意を注ぎ、子宮癌の診断と治療に業績を挙げた。1936年から1938年まで、附属医院長を務めた。1948年4月、

戦後第2回目の第43回日本婦人科学会総会を金沢医科大学において会長として開催、非被災都市ならではの総会であった。なお、笠森教授の在任期間は30年3ヵ月にわたり、その間百十余名の教室員が育成され、34人に医学博士の学位が授与された。また停年退職後、1972（昭和47）年2月に『婦人科手術図譜・同解説』の名著を執筆出版した。1968（昭和43）年4月叙勲、二等瑞宝章。

赤須文男教授時代（1958～1971年） 赤須教授時代は、尿中ホルモン測定を中心とした臨床実験が研究の主流となり、尿中ゴナドトロピン、各種性ステロイド、副腎皮質ステロイドなどについて広範な研究が行われ、臨床面では産科婦人科領域におけるホルモン療法の理論と実際についての指導的研究業績が、数多く発表された。また同分野の研究で、53人に医学博士の学位が授与された。さらに、第34回日本内分泌学会（1961年4月）、第4回日本臨床細胞学会秋期大会（1965年10月）、第10回日本不妊学会（1965年10月）、第16回日本輸血学会（1968年4月）、第21回日本産科婦人科学会（1969年4月）など種々の全国学会総会を会長として金沢において開催し、中央及び全国との学問的交流にも力を尽くした。

なお在職中、1960年より1962年まで附属病院長を併任し、病院の発展にも貢献した。退官後も数多くの論文や著書を執筆。1979（昭和54）年4月叙勲、三等瑞宝章。

西田悦郎教授時代（1971～1994年） 1971（昭和46）年、赤須教授の後を受けて西田助教授が教授に就任した。教室における研究の主要なテーマは、笠森教授以来の産科婦人科内分泌学をその中心として、赤須教授による性腺と副腎皮質性ステロイドに関する研究の拡大に引き続き、副腎性アンドロゲンの性器に及ぼす影響に関する諸研究、女性の老化とホルモン、生殖器としての乳房と内分泌などであった。赤須教授時代から引き継いだ同分野の研究を含めて、28人が医学博士の学位を取得した。なお、西田教授が会長として金沢で開催された全国学会総会としては、第27回日本母性衛生学会（1986年7月）、第32回日本不妊学会（1987年11月）がある。臨床面では産科と婦人科に教室員を大別し、またそれぞれの専門研究分野を定めて、その道のエキスパート養成に努めた。

井上正樹教授時代（1994年～現在） 1994（平成6）年11月、井上正樹が大阪大学講師より教授に就任した。教室における研究の主要なテーマとしては、ヒトパピローマウイルス（HPV）による子宮頸部発癌機序の分子生物学的研究、telomeraseを中心とした細胞・増殖に係わる分子機構の解明、癌の湿潤・転移の機序解明、ホルモン分泌における細胞内情報伝達機序の解明、受精・着床の分子機構の解明、早産発生の機序解明、癌化学療法の臨床腫瘍学的研究、DHEA receptorのクローニングが挙げられる。これらの成果は、一流国際学術誌や国際学会などにおいて多数発表されており、また数人が海外に留学しており、教室に活気がみなぎっている。

現状と課題

少子化の問題をはじめ、産婦人科医療を取り巻く環境は厳しいものがある。しかし、最

第7章 医学部 医学部附属病院

近の生殖医学における技術的進歩は目覚ましく、悪性腫瘍のQOLを考慮にIVF-ET、腹腔鏡大手術は日常化しつつある。量より質の時代に入ったと言える。高いアメニティーの新病院も建築の運びとなり、教室員一同教室運営のモットーであるOriginality（独創性）、Internationality（国際性）、Humanity（人間性）を掲げ、来るべき21世紀に向かって、女性のReproductive healthに日々研鑽している。

（18）麻酔・蘇生学講座史

沿革

1965（昭和40）年4月に金沢大学医学部に麻酔学講座が新設され、1966年3月に、本学の第2外科学教室から逸見稔、第1外科学教室から村上誠一の両名が助教授として着任した。1966年4月には、同時に附属病院に麻酔科が設置され、手術麻酔と疼痛外来を担当し始めた。開講当初から1978年2月までは講座主任を欠いていたため、赤須文男教授（産科婦人科学）、豊田文一教授（耳鼻咽喉科学）、黒田恭一教授（泌尿器科学）が、順次に講座の主任事務取扱を併任した。

1978年3月に至り、村上誠一が主任教授に昇任し、名実ともに講座としての体裁が整った。同教授は以後14年間にわたり教室を主催し、1992年3月に停年退職した。なおこの間、1990（平成2）年6月には、麻酔学講座から麻酔・蘇生学講座に名称を変更した。1992年7月から8月までは久世照五が主任教授を務め、1993年8月からは、小林勉が主任教授に就任して現在に至っている。開講当初から1997年10月までの教授、助教授及び講師の氏名と在職期間を表に示す。

診療と研究業績

診療 麻酔・蘇生学講座が関係する診療業務は、手術麻酔、救急・集中治療、ペイン・クリニックに大別されるが、とは、麻酔部及び救急・集中治療部の項に記載されているので割愛する。 に関しては、1966（昭和41）年の麻酔科開設と同時に、癌性疼痛や自律神経反射性疼痛などを対象にした診療が開始された。ちなみに、年間延べ外来患者数は、1975年が993人、1985年が5,346人、1996年が5,429人と年ごとに増加している。また、年間入院延べ患者数も、1975年には522人、1985年に1,005人、1996年には1,447人と、年を追って増加している。

開講当初から村上教授時代（1966～1992年） この時期の主な研究業績としては、まず神経筋伝達機序の研究が挙げられる。麻酔中に使用される筋弛緩薬の安全性を向上させるため、脱分極性筋弛緩薬の二相性作用、各種麻酔薬と筋弛緩薬の相互作用などに関する臨床及び基礎研究が精力的に行われ、有用な知見が数多く報告された。また、静脈麻酔薬による全身麻酔に関し、薬物動態及び薬物力学を踏まえた臨床研究も並行して進められた。そのほか、心肺蘇生後の脳機能の回復を向上させることを目的に、虚血後の脳機能に対す

表7 - 1 職員名及び在職期間

教授	赤須文男（併任）	1966年 3月～1969年 8月
	豊田文一（併任）	69年 9月～ 71年 4月
	黒田恭一（併任）	71年 5月～ 78年 2月
	村上誠一	78年 3月～ 92年 3月
	久世照五	92年 7月～ 92年 8月
助教授	小林 勉	93年 8月～ 現在
	逸見 稔	66年 3月～ 78年 9月
	村上誠一	66年 3月～ 78年 2月
講師	小林 勉	78年11月～ 93年 7月
	山本 健	93年10月～ 現在
	本多政寧	68年 6月～ 77年 6月
	小林 勉	70年 7月～ 78年10月
	久世照五	77年 7月～ 79年 3月
	定 常雄	78年11月～ 83年 3月
	相沢芳樹	79年 4月～ 80年 5月 ; 81年 4月～ 82年10月
	山本 健	80年 6月～ 81年 3月 ; 82年 11月～ 93年 9月
	東藤義公	83年 4月～ 83年 9月 ; 86年 1月～ 91年 6月
	上田隆夫	83年11月～ 84年 3月
	遠山一喜	84年 4月～ 85年 9月
	佐伯義機	85年10月～ 85年12月
	野村義明	91年 7月～ 92年 4月
	新田俊一	92年 4月～ 97年 9月
小林宏充	93年10月～ 96年 3月	
大村繁夫	96年 4月～ 現在	
櫛田康彦	97年10月～ 現在	

る軽度低体温の作用、麻酔薬の作用、各種受容体遮断薬の作用などに関する研究が行われた。

村上教授時代には、25名の教室員が研究成果を認められて学位（医学博士）を取得している。なお、この期間中に当教室が主催した全国及び国際レベルの学会には、1985年の第20回日本ペイン・クリニック学会、1988年の第35回日本麻酔学会総会、同じく1988年の日韓合同麻酔学シンポジウムなどがある。

久世教授および小林教授時代（1992年～現在） 侵襲の大きい手術が可能になるとともに、術後合併症、特に急性呼吸窮迫症候群の増加する傾向が見られ始めた。この問題に関連し、肺サーファクタントの異常に注目した基礎的研究が開始されている。急性呼吸窮迫症候群では、肺サーファクタントの活性を障害する物質が出現することを実験的に証明した研究や、経気道的サーファクタント補充療法が有効なことを示唆した研究は各界から注目され、補充療法を臨床に応用する研究も開始されるに至っている。また、麻酔の安全性の向上を目的として、硬膜外麻酔中に出血性ショック、低酸素血症、高炭酸ガス血症などが合併した場合の生体の反応を系統的に調査する動物実験や、村上教授時代からの筋弛緩

第7章 医学部 医学部附属病院

薬の研究、静脈麻酔薬及びその薬物動態解析の研究も継続して進められている。さらに、腋窩神経ブロックや気管内挿管の難易度予測法に関する臨床研究なども行われている。

小林勉教授が就任してから1997年末までに、14名が学位（医学博士）を取得した。また1995年には、当教室が第31回日本界面医学会を主催した。

現状と展望

1997（平成9）年現在、学内では救急部・集中治療部に、学外では16の関連病院（石川県＝8、富山県＝5、福井県＝1、京都府＝1、神奈川県＝1）に当教室から医師を派遣している。教室関係者は74名を数え、年々増加しているが、麻酔専門医の派遣を希望する病院が多く、要望に十分応じ切れていない状況である。したがって教室としては、教育や研究に割ける人員が不足しがちなこと、関連病院では人手不足を労働時間の延長で補っていることなどの問題が存在している。しかし、大学としての診療・教育・研究の水準の維持には、教室員が一丸となって努力している。診療では全国国立大学の中の5指に入る実績（年間麻酔症例数＝約4,000）を挙げ、教育では年間約40人の研修医に対して1人当たり3ヵ月の臨床指導を行っている。また研究についても、世界に真価が問える業績を挙げることを目標にして、全員が何らかの研究に携わる体制がとられている。なお、1997年度には、当教室に4件の文部省科学研究費が交付された。

手術適応の拡大、救急・集中医療や終末期医療の充実などで、麻酔・蘇生科医の需要が高まっている。また、研究すべき問題も多い。将来の展望は明るい、いかに多くの若い医師及び研究者を麻酔・蘇生学の分野に参加させるかが一つの課題である。

（19）臨床検査医学講座史

沿革

臨床検査医学講座は、1986（昭和61）年4月に本学医学部に新設された。初代教授には、医学部附属病院検査部長の松原藤継教授、助教授には検査部副部長の橋本琢磨助教授が任命された。講座のスタッフは、事務員1名を加えて3名である。1991年、松原教授の停年退官に伴い、同年11月に橋本助教授が教授に昇任（検査部長併任）した。1994年4月に米国留学を終えた藤田信一検査部助手が講座助教授（検査部副部長併任）となり、森下英理子助手は検査部に移籍した。

業務は医学部学生教育のほかに検査部の精度管理と、対外的には北陸3県の医療機関の臨床検査の精度向上に指導的役割を果たしている。

診療と研究

松原教授時代（1986～1991年） 臨床検査医学にとって診療とは、検査に関する専門的知識を持って内部データの精度管理をすること、さらに施設間差をなくすこと、標準化を

推進することなどであり、他科の診療とは少し異なっている。

松原教授は外科病理学者であったが、長年の検査部長としての手腕も見事であった。それに関しては、本書の「検査部」の項でも記されているごとく、適所に人材を登用して金沢大学医学部附属病院検査部を発展させてきた。1984（昭和59）年には、第31回日本臨床病理学会総会を、また1990年には、日本臨床検査自動化学会第4回春期セミナーを金沢で開催した。

研究に関して個人別に記す。橋本助教授は、間脳 - 下垂体疾患の内分泌機能検査法の開発で成果を挙げたが、その後、症例数の多い甲状腺疾患に焦点を絞り、高感度TSH測定法の開発とその臨床応用、さらに遊離甲状腺ホルモン測定をはじめ、内分泌機能検査法に関する臨床化学的研究を行い、1986年から1990年の間に英文原著18編をfirst authorとして発表した。

藤田助手は、真菌抗原の検出を本邦で最初に試み、血清中のカンジダ抗原及びアスペルギルス抗原を高感度で特異的に検出する酵素免疫測定系を確立した。これらの成果はそれぞれ国際誌に掲載された。これらの業績により、橋本助教授と藤田助手は「臨床病理学研究振興会研究奨励金」を、1986年と1990年に相次いで受賞した。

橋本教授時代（1991年～現在） 診療に関して従来の病院検査部運営のほかに、橋本教授は1994年から第2内科の外来で甲状腺専門外来を開始し、患者から感謝されている。

研究に関して橋本教授は、それまでの臨床的経験と文献検索の結果、甲状腺学における血栓止血学的研究の少ないことに着目し、第3内科の松田教授に依頼し、若手の森下英里子を助手として迎え、この方面の研究の一大進展を目指した。また、non thyroidal illness（NTI）における甲状腺機能や、運動時のTSHやプロラクチン分泌機能の機序を究明した。さらに、1990年代に入り急速に発達してきた化学発光や、蛍光を用いた第3世代のイムノアッセイに及ぼすhuman anti-murine antibodies（HAMA）測定に関する研究を行い、国際的業績を挙げた。それにより1996年、第35回イムノアッセイ研究会会長に推挙され、金沢にて学会を開催した。

藤田助教授はカンジダ症の診断法を更に発展させ、2種類の抗体を用いた酵素免疫測定法により、臨床的に重要なカンジダ症をほぼカバーできる測定系を開発した。また、ラテックス凝集法による抗原検出と血清中D-arabinitol値との比較検討から、酵素免疫測定法による抗原検出がカンジダ症の早期診断に有用であることを明らかにした。さらに、PCR法によりカンジダDNAを増幅後、菌種特異的プローブを用いて血液中のカンジダを検出する方法を確立した。これらの研究結果は、いずれも国際誌に掲載された。現在、病原微生物のDNA分子多型と菌種同定、血清型、病原因子、薬剤耐性との関連性について追求している。さらに、カンジダ症の血清診断法として利用されているラテックス凝集法（カンジテックR）や血清中-D-glucan測定の臨床的評価を酵素免疫測定法による抗原検出と比較しながら検討している。

第7章 医学部 医学部附属病院

現状と展望

臓器別系統講義がスタートした1996（平成8）年から、橋本教授は内分泌系疾患系統講義を担当し、視床下部下垂体前葉ホルモンの分泌調節機構、及び甲状腺ホルモン異常症の病態・診断・治療について、藤田助教授は呼吸器系疾患を担当し、感染症の遺伝子診断と血清診断について講義している。また、国際的規模で進展しつつある医療情勢を考慮して、1997年6月から英国、Western General Hospitalのウイリアム・デビッドソンを検査部助手に招へいし、医学英語と患者に接する時の国際的医師としての基本的な心構えについて実践的教育を行っている。

1996年の保健点数改定で、検体検査管理費が新設された。検査データの適切な管理を専門的知識と技術を習得した臨床検査医が行い、診療費に組み入れるべきであるという長年の我々の主張の一端が認められた。

今後、分子生物学的、分子生化学的手法を用いた新しい検査法の開発とルーチン検査への導入を図り、臨床各科への診療支援サービスに徹したい。以上の目標を達成できるように定数増員を要求し、魅力ある活力ある教室づくりを目指して、検査部員とともに努力したいと思っている。

（20）歯科口腔外科学講座史

沿革：36年間の診療科時代を経て講座昇格

終戦直後の1946（昭和21）年5月に、院内措置として「歯科治療室」が開設されたのが当教室の源流で、初代科長は湯本実であった。1959年4月に文部省から正式に認可され、湯本は薬理学教室での研究で学位を受領したのち、病院講師になった。1960年10月、湯本助教授退官後、石田勝一が第2代科長・講師として東大口腔外科より赴任した。1965年4月、石田講師辞任後、岡伸光が岐阜県立医大口腔外科より第3代科長・講師として赴任した。1973年4月、岡助教授帰任（しばらくして岐阜大学教授就任）後、玉井健三が第4代目科長、助教授に就任した。玉井は1961年4月から当科に着任しており、1977年1月診療科教授、さらに1982年4月待望久しい講座昇格がなり、初代医学部歯科口腔外科学講座教授となった。院内歯科開設後から、実に36年間の歳月が流れていた。1987年10月、玉井教授急逝の後を受けて、山本悦秀が1988年8月に札幌医科大学より第2代教授として赴任し、今日に至っている。

診療と研究：感染症研究単独から4本柱の研究体制へ

教授就任前時代（1946～1976年） 歯科口腔外科としての臨床及び研究が形を成してきたのは1965（昭和40）年の岡3代目科長が赴任して以後と考えられる。岡は臨床で本格的に口腔外科手術を行う傍ら、骨代謝の研究に精を出し、「硬組織の石灰化過程における無機質の動態に関する電子顕微鏡的研究」と題して『歯基医誌』（1972）に発表したのが最

初の成果であった。

玉井教授時代（1977～1987年） 一方、西田尚紀微生物学講座教授の指導を受けてきた玉井は学位受領後、本格的に口腔内嫌気性菌の研究に着手し、1970年に「第1報：分離培地の研究」として最初の成果を発表した。本研究は、1983年の「第18報：感染根管内の嫌気性菌生菌の分離および薬剤感受性」まで継続され、玉井はそれまで国の内外ともに、ほとんど関心が寄せられていなかった口腔内嫌気性菌研究に全力を傾倒していった。さらに、口腔内嫌気性菌の抗腫瘍性にまで研究を発展させ、1988年までにこれらの研究に関する論文は96編に上り、20名が学位を受領した。玉井はこれらの成果が認められ、1977年の診療科教授を経て1982年に講座昇格後の初代教授に就任し、学生への講義及び臨床実習も開始された。しかし、教授就任10周年を祝った1987年の10月に業半ばにして逝去した。研究の後半は、口腔内嫌気性菌フゾバクテリウム・ニユクレアツムからの抗腫瘍性物質を検出し、製品化直前であったところから誠に哀惜に堪えない。また、この教授昇任の一つの問題点は、助手の席をもって充てられたため助手の席がないという「定員不完全講座」となり、現在まで継続して助手定員を「借用」していることである。今後も「助手定員の確保」には、粘り強く関係方面に働きかけていく必要がある。

なお、臨床的には岡時代の口腔外科臨床を更に継承発展させた。

山本教授時代（1988年～現在） 山本教授は着任当初から臨床に直結する研究として、玉井教授時代からの歯性感染症に口腔癌、顎変形症、顎関節疾患を加えた4本柱を目標に据えた。

口腔癌では、熊谷茂宏講師、川尻秀一助手を中心に浸潤と転移に関する基礎的臨床的研究を継続し、癌の悪性度に基づく手術を約200例に施行している。基礎的研究のうち *in vitro* での浸潤能では、線維芽細胞を組み込んだジェル上に口腔癌細胞を培養し、臨床に相応する浸潤像が認められることを明らかにした。またハムスターに実験舌癌を形成してその浸潤様式を検討したところ、山本らの浸潤様式分類による1型から4C型まで観察されたが、最も浸潤傾向の強い4D型は見られず、極めて重要な示唆を与える論文となった。

さらに、ヌードマウスの口腔内に口腔癌細胞を正所性に移植することを開発し、臨床に極めて類似の浸潤、転移像を形成させることに成功した。そこで現在はこれらの研究を継続し、特に腫瘍血管の形成と浸潤像との関連について検索を行っている。一方、口腔癌組織の免疫組織所見では、マトリックス・メタロプロテナーゼ（MMP）の研究を行い、浸潤転移との関連性を発表し、さらにプラスミノゲン・アクチベーターの存在と転移形成率との関連や腫瘍血管密度と浸潤様式との関連をそれぞれ見だし、国際誌に発表して評価を得ている。なお、癌細胞の運動能についても解析中である。

顎変形症に対する顎矯正手術は、山本教授着任の年に当科での第1例が行われ、現在までに250例を超えている。顎矯正手術の中で最も代表的な下顎枝矢状分割では、分割後の骨片固定が強固になったことから顎間固定期間が短縮され、患者に大きな福音をもたらしたが、顎関節症を後遺する症例が稀に観察されるようになった。そこで中川清昌助教授、

第7章 医学部 医学部附属病院

松本成雄院生を中心とする基礎的研究として、下顎頭を外側に偏位させるラットの実験モデルを開発し、下顎頭のリモデリングの所見を肉眼的並びに組織学的に立証し、臨床への示唆を与えた。

現在、家兔の内方回転モデルについて実験を行っている。またTSEP（三叉神経誘発電位）の装置を独自に考案し、矢状分割術後の下唇麻痺の回復過程を客観的に分析した。

顎関節症に対する鏡視下あるいは開放下手術は、1992年から、米国留学から帰った中川助教、高塚茂行講師らにより開始され、良好な結果を得ている。基礎的実験としては、家兔を用いて関節円板切除・耳介軟骨移植術を行い、その有用性を明らかにした。

現在は、その成果に基づき、円板穿孔、さらに円板前方転位の実験系に引き継がれ、また死体顎関節の形態的所見についても検討している。

感染症研究では中川助教と齋木康正院生を中心に、歯性感染症の閉塞膿から検出菌を分離検出したところ、90%以上が好気性菌と嫌気性菌の混合感染であることを観察し、さらに重症になるほど嫌気性菌が関与していることを発表した。そこでストレプトコッカス・コンストラタスやフゾバクテリウム・ニュークレアツム等の代表的分離菌を用いてマウス腹腔内に注入投与する実験を行ったところ、各菌種の相乗効果が観察され、口腔内感染症の発生と進行機序の解明に資する成果を発表した。また炎症の経過に伴う酸化還元電位をin vitroで観察測定し、好気性菌と嫌気性菌の相互作用を立証した。これらの代表的研究により、1996年までに四つのすべての研究領域で学位取得者を出し、現在16名に達している。

なお臨床的には、1993（平成5）年から歯科インプラントが導入され、口腔癌切除術や顎骨骨折整復術を受けた患者の口腔機能改善に大きな貢献をしている。

現状と展望：標榜科実施を飛躍のステップとして

1996（平成8）年9月より「歯科口腔外科」が標榜科名として承認、実施された。実質的には従来からの口腔顎顔面外科（oral & maxillofacial surgery）としての診療内容、診療範囲には何ら変化はないものの、国から「お墨付き」を得たことの精神的効果は少なくない。この標榜問題は、我が国の口腔外科学会にとっては終戦直後からの重い課題であり、21世紀を前にやっと積年の問題にピリオドを打てたことは、次の世紀への飛躍の一つとなるエポックであったと言えよう。当教室では、こういった学内外の実績を基盤に、4本柱の研究体制を更に推進していきたい。

金沢大学医学部の源流を1862（文久2）年とすると、当科の歴史はわずか51年、講座として学生への講義を開始してほんの15年しか経っていない。医学部における歯科口腔外科学講座として、今後更に他講座の理解と協力を得て臨床・教育・研究を進めていかねばならないが、学生時代に歯科口腔外科の講義を受けた医師が大半になるのは、なお20年以上先である。長い道のりであるが、着実に前進していきたい。

4 附属病院中央診療施設の歩み

(1) 検査部の歩み

沿革

検査部は、1959（昭和34）年7月に設置された。初代部長は故早稲田正澄助教授（医化学）と技師12名であり、生化学、細菌、血清検査、次いで1961年、病理検査（松原藤継講師：病理学）を開始した（1987年病院病理部として独立）。

1966年から1967年にかけて、血液、循環生理、超音波、呼吸機能、脳波、筋電図と内視鏡検査（1984年検査部から独立）が、また1969年に内分泌検査が開始された。1967年、はじめて単チャンネルの生化学自動分析装置が導入され、検体検査は用手法から自動化の時代に入った。技師も、検査件数の急激な増加に対応するため年々増員され、1969（昭和44）年には非常勤を含め47名になった。

1972年、松原藤継助教授が教授・部長に就任、1978年11月、橋本琢磨助教授（内科・臨床内分泌学）を大阪大学から迎え、藤田信一助手（内科・微生物学）と水上勇治助手（病理学）が加わった。橋本助教授は、アイソトープ部内に検査部RIA検査室を新設し、1980年からホルモン、腫瘍マーカーの検査を開始した。1979年、大型自動化学分析装置が導入され、多量検体の処理が可能となった。生理検査についても、室長（第1内科、第3内科、神経科精神科、整形外科）の指導の下で、1980（昭和55）年心臓超音波診断装置、1985年循環機能検査解析システム、1987年肺機能総合検査測定装置、1990（平成2）年脳波ファイリングシステムが導入された。さらに1983年、時間外緊急検査業務の宿日直制が施行され、24時間体制が整備された。1984年、第31回日本臨床病理学会総会が金沢で開催された。1985（昭和60）年中央採血室設置、検査オーダリングシステムの開始、1988年大型自動化学分析装置の更新に伴い、ASAP（As soon as possible）検査、小児微量検査が開始された。

1991年、橋本助教授が教授、部長に就任し、non RIによる免疫化学的測定法の導入に努めた。1997年、化学発光や蛍光を用いた第3世代の自動免疫測定装置の設置により、臨床化学検査は超微量まで高精度に測れるようになってきた。さらに、近年の遺伝子診断学の発達により、PCR法等の新しい測定法が開発されるに伴い、これをいち早く導入し、ウイルスや細菌の同定・定量検査を行っている。（歴代技師長：川越昌男、山岸幸造、奥村次郎、西部万千子）

現状と展望

現スタッフは、橋本部長、藤田副部長の下に、教官1、技師42、事務員1である。近年の急速に発達しつつある分子生物学、分子生化学的手法を用いた検査を積極的に導入するにはスタッフ不足が悩みの種であるが、検体搬送システムと自動化によりこれをカバーし、部員一同協力し合い、精度管理の充実を図り、診断支援サービスを向上させ、臨床の要望にこたえられる検査室への発展を目指して頑張っている。

(2) 手術部の歩み

沿革

1959(昭和34)年3月23日に「医学部附属病院中央診療部に関する規定」が制定され、手術部が設置された。初代手術部長として占部美代志教授(第1外科)が選任され、約1年間の準備期間を経て、1960年4月13日から第1外科、第2外科、整形外科を対象診療科として手術部の業務が開始された。手術室は5室であり、教官4名、看護婦14名、技術系職員3名、計21名のスタッフによる出発であった。1963年の手術件数は、2,636件であった。

1966年3月に中央診療棟が増築され、手術室が12室に増加された。手術部長に高瀬武平教授(整形外科)が就任し、教官4名、看護婦17名、技術系職員6名、看護助手4名、計31名と増員された。眼科、産婦人科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、脳神経外科、歯科口腔外科、皮膚科が加わり、名実ともに外科系全科の手術が集中する中央手術部として稼動することになった。1968年に豊田文一教授(耳鼻咽喉科)、1971年に水上哲次教授(第2外科)、1973年に山本信二郎教授(脳神経外科)、1976年に米村大蔵教授(眼科)が手術部長に就任した。手術件数は、1966年4,644件、1974年5,208件と増加した。

1979年にクリーン手術室を設け、また全手術室にクリーンブースを取り付け、1980年にX線手術室が完成し、手術室11室と減じたものの、時代に即した近代化が図られた。1980年に梅田良三教授(耳鼻咽喉科)、1984年に宮崎逸夫教授(第2外科)、1986年に岩喬教授(第1外科)、1990年に久住治男教授(泌尿器科)、1992年に山下純宏教授(脳神経外科)、1994年に渡邊洋宇教授(第1外科)が手術部長に就任した。

1996年1月に『手術部35年の歩み』を発売した。手術件数は、1981年4,516件、1985年5,636件と増加し、1985年より1989(平成元)年までは全国国立大学病院で第1位の手術件数を誇った。1991(平成3)年から週40時間体制が施行され、さらに1994年より手術部整備日が土曜日から金曜日に変更された結果、手術件数はやや減少した。

1996年に河崎一夫教授(眼科)が手術部長に就任した。1997年に感染症手術室が増築され、手術室は12室となった。一方、医療機器の進歩は著しく、手術部でもそれに対応するため、手術台、无影灯、手洗い装置、滅菌・消毒装置、超音波メス、人工心肺装置、手術用顕微鏡、内視鏡手術器材などの各種医療機器が購入され、近代化が行われた。1996

年度の手術件数は4,583件であり、全国国立大学病院の中で、大阪大学、東京大学、京都大学、九州大学に次ぎ5番目となった。しかしこれらの大学では、手術部看護婦及び技術職員の人数が金沢大学に比べはるかに多い。現在は河崎手術部長以下、副部長（野口昌邦）、技術主任（五十嵐昭夫）、技術職員3名、婦長（赤堀容子）、看護職員30名、看護助手3名が担当している。

現状と課題

手術部は、近年特に進歩の著しい手術用機器を先進的に導入すべく、鋭意努力している。これに伴い機器が増え、その収納場所にも苦慮している現状であり、当院の非常に多い手術を行うには手術部の拡張が不可欠である。最新の設備・機器の下で最高の医療技術による手術を絶えず行うべく、近い将来の附属病院改築に合わせて手術部の建物も一新され、21世紀の先進医療に貢献したいと願っている。

（3）放射線部の歩み

沿革

放射線部の歴史は、1959（昭和34）年4月に、それまで院内各科に分散配置されていたX線器機及び放射線技師が統合され、中央診療棟放射線部（発足当時技官数16名）が発足したのに始まる。実質的な放射線診療設備の中央化は、我が国初の試みであった。1967年4月に、助教授1名、助手2名、技師22名として文部省から正式に中央放射線部として予算化され、1980年10月に現在の放射線部と名称変更を行った。部長は、設立以来放射線科科長（教授）が併任している。

診断部門 発足した1959年10月の国産第1号の自動現像装置の導入、1961年北陸唯一のイメージインテンシファイアの設置など、常に最新鋭の器機を導入してきた。現在の画像診断の柱であるX線CTの導入は、1976年10月に頭部専用機であるEMI社製CT1010で、1980年3月には、当時世界の標準機であったGE社製CT-8800が導入され、臨床・研究両面で活躍することとなった。現在GE社HSA、9800 Highlight、横河社9000の3台が稼働している。MRI装置（GE社1.5T Signa）は、1987年4月に、5病棟裏に読影室、データ処理室、患者待合を持つ独立した診療棟内に設置された。1996年12月より、MR棟の増築とEPI可能な2台目のMRI装置（GE社1.5T Horizon）及び既存のSignaのハード・ソフト両面でのバージョンアップが行われ、現在では最高水準の2台が稼働している。DSA装置は1986年に設置され、1996年10月から、Spiral CT装置とDSAを組み合わせたIVR-CT装置が導入され、診断・IVR（治療）の両面で活躍している。また、1973年9月より当時の高島助教授が中心となり、各診療科の胸部を中心に単純X線写真を読影、レポートを同封するシステムが開始され、現在まで引き継がれている。

治療部門 1962年10月、⁶⁰Co回転照射装置され、1968年5月よりペータトロンが稼働、

第7章 医学部 医学部附属病院

電子線治療が主体となった。1981年3月直線加速器（ライナック照射装置、10MVX線）と治療計画コンピュータが設置され、1994年に2台目ライナック（4MVX線）とCTシミュレーターと最新の治療計画用コンピュータが導入され、現在も活躍している。1998年度より遠隔操作高線量率密封小線源治療装置（マイクロセレクトロン）の導入も決定している。

現状と展望

ソフト・ハード両面で急速な発展を見せる画像診断・放射線医療装置から最善のものを選択し、運用ばかりでなく、膨大な画像情報の保存及び提供方法に至るまで、課題は山積みしている。新病院では、Picture Archiving and Communicating System（PACS）を含めて他部門との密接な連絡を取りながら、更なる発展を目指したい。

（4）理学療法部、作業療法部の歩み

沿革

理学療法部は、1960（昭和35）年10月に物療部として院内措置で設置され、1970年4月に中央診療施設の診療部門として設置される。初代部長に整形外科高瀬武平教授による筋性斜頸、内反足、先股脱、ポリオ、脳性麻痺などの整形外科後療法として稼動した。翌1971年に理学療法士2名が誕生した。1980年4月に理学療法部の名称に改められ、専属の医師が配置された。同時に作業療法部を院内措置として設置、作業療法士1名により開始され、リハビリテーション医療の礎となった。その後、徐々に技術員増となり、1995（平成7）年4月より部長1名、副部長1名、助手1名、医員1名、技術主任1名、理学療法士5名、作業療法士3名、事務補佐員1名の組織構成となり、11月からリハビリテーション総合承認施設をとり、大学病院という高度医療機関にふさわしいリハビリテーション医学医療を目指し開始した。また、1987年1月に日本リハビリテーション医学会による研修施設に認定され、専門医及び臨床認定医の資格取得の教育・研究の場となる。その間、9名のリハ専門医を県内外に輩出している。

理学療法では、身体に障害のある人に対して、中枢神経、末梢神経、骨・関節、筋肉、呼吸・循環、代謝、血液、泌尿器系などの生理学的機能や基本的動作能力などを身体的運動や種々の物理的治療、運動療法等によって回復させることを治療として科学的に行っている。また作業療法では、身体又は精神に障害のある人に対して、主に日常生活の応用的動作能力や社会的適応能力の回復を図ることを目的に科学的に行っている。

現状と課題

整形外科後、療法の一環として出発した理学療法部は、医療技術の高度化、また高齢化による疾病構造の変化により障害の度合いも複雑化し、現在年間1,000名を超える複雑多

様な患者に対して、リハビリテーション医療を行っていると同時に、医学教育の場としても重要な立場となってきている。大学病院は特定機能病院となっており、この病院の機能を十分に発揮させるためには、リハビリテーション医療を有効に利用する必要がある。急性期におけるリハビリテーション医療ほど重要なものはない。そういった中で、特殊診療施設の新設整備（リハビリテーション部新設）の必要性が要請され現在申請中である。また、リハビリテーション科が昨年標榜科として認定されたことにより、診療科として設置すべきであると思われる。

（５）材料部の歩み

沿革

材料部は、1961（昭和36）年10月に、手術部と検査部を結ぶ廊下に面したフロアーに院内設置された。初代部長は、卜部美代志教授、東ヲタ婦長、山本昌子看護婦、山本玲子・能村瑠璃子技能員、出口勝吉・大瀬戸弘子用務員の計7名で発足した。

業務内容として、女子職員は手術部で使用する衛生材料の作成、リネン類の洗濯・補修整理後、手術用各リネンをカストに入れセットした。男子職員は、そのカストを地下の保清に運び、そこに設置されているオートクレーブ滅菌機2台で滅菌作業を行い、手術部に搬送した。翌1962年保清係の一角へ移設、女子職員も1名増員になる。1964年男子職員1名、翌1965年副部長が定員となる。1966年中央診療部と病棟の中間で病院の中枢の場所に移った。同時に、オートクレーブ滅菌機5台・半自動超音波洗浄機1台・バックシーラ1台・乾燥機1台・ネラトン洗浄機1台が増設された。そして各病棟の滅菌医療器材の供給開始となり、供給品目は、注射器・注射針・ゴム手袋、ネラトンカテーテルなどだった。

この年より、木の繊維より作られた紙の袋「メッキンバック」が使用されることになり、これまでリネン類やカストに入っていた滅菌物は有効期限が1週間であったが、3ヵ月延長になり、頻回に滅菌する必要がなくなった。翌1967年デイスポー注射針の供給を実施し、次に病棟で共通に使用するデイスポー製品を供給することになった。

1969年、オートクレーブ滅菌機5台が7台に、ガス滅菌機1台の設置のため増築され、ほぼ清潔・準清潔・不潔区域に分けられた。

1973年、ガーゼ類の3種類がセット化された角型缶の貸し出しを開始した。1977年は、時代の流れとともに全自動洗浄機・無菌戸棚が購入され、業務の効率化がアップされた。2年後の1979年に、滅菌物を各部署に安全に搬送する密閉式カート車による供給が開始された。1988年、オートクレーブ、ガス滅菌業務が外部委託になった。翌1989年には、夜間業務の繁雑に対応して必要時の夜間払い出し戸棚を設置し、臨時に必要な医療器材や衛生材料の払い出しを図った。1991年、セッシ、クーパー、ゾンデを材料部定数管理にした。

1996年2月から、医療環境の変化に伴い、病院においても経営管理が問題視され、当

第7章 医学部 医学部附属病院

院も経営改善の目的により物流システムが稼動した。同時に材料部も材料オーダ導入への対応を行い、これまで伝票を使用していた事務作業がコンピュータ入力になり、各部署の材料部関連業務の短縮になった。

現状と課題

材料部は、看護業務が効率的にでき、患者さんに安全な医療と看護が提供できるように必要な医用材料を準備・滅菌し、病棟、診療科へ供給を行っている。滅菌については、高圧滅菌と酸化エチレンガス滅菌の2種類で行っている。業務内容については、セッシ、クーパー、セット類を定数補充方式で管理 オート、ガスの依頼滅菌 衛生材料の適正在庫管理 蛇腹、チューブ類の乾燥・滅菌 手術部、各部署で使用するリネン類の滅菌 ケアロールシートを裁断し、たたむなどであり、これらをカート車にて看護助手が各部署へ搬送している。

現在の定員構成は、富田勝郎部長、松本忠美副部長、砂崎弥生婦長、橋場忠子・笹林慧子看護婦、嵐富美子技能員、委託職員7名(うちパート2名)である。1998(平成10)年には、大型の自動洗浄(超音波洗浄を含む)・除染・乾燥装置が導入されることになる。病棟で使用していた医療器材の一次洗浄が、人的労力を使用せず一括で行える装置であり、医療器材の材質管理や院内感染防止にもなる。今後も雑務を少なくして、看護婦が本来の業務に専念でき、良い医療が提供できる材料部を目指している。

(6) 輸血部の歩み

沿革

輸血部は、1968(昭和43)年1月に中央検査部から離れ、院内処置で設置された。初代部長は、第2外科水上哲次教授、副部長は宮崎逸夫助教授、太田陽一助手、吉本良三主任技師、西田真理子、湯上礼子技能補佐員、金子和江看護婦の計7名で発足し、院内供血者の適合性検査と輸血検査(血液型、交差適合試験など)を開始した。1972年4月、部長に第3内科教授服部絢一、副部長に故宮保進第3内科助教授が就任。1975年1月、文部省の正式認可を受け、現在の定員構成(部長1(兼任)、副部長1、技師2、看護婦1の計5名)となった。

翌1976年4月、副部長に第3内科助手原田実根(現岡山大学第2内科教授)が就任し、成分製剤と冷凍血液の製造、HLA検査、HBV検査を開始した。病院地下の部室は、6病棟2階に移転、成分製剤分離装置も3台保有し、集学的癌治療(骨髄移植など)に備えた。

1981年6月、服部部長が学会長を務める第29回日本輸血学会総会が開催され、会長講演「自家骨髄移植による悪性腫瘍の治療」、ゲール博士(Dr. Gale)(UCLA)による「Present status of bone marrow transplantation in USA」、マーフィ博士(Dr. Murphy)(ペンシルバニア大)による「Storage of the platelets for transfusion」の

特別講演が行われた。1983年4月、副部長に第3内科助手森孝夫が就任し、北陸地区の輸血医療の発展を目的に日本輸血学会北陸支部を発足、事務局を設置した。

翌1984年、第3内科教授松田保が部長に就任し、造血細胞の採取、分離、保存を開始した。1987年4月、副部長に第3内科助手末永孝生が就任、院内供血者のHIV、HTLV-1の検査を開始した。さらに翌年には、造血器悪性腫瘍細胞の表面抗原の解析を始めた。1989年、副部長に第3内科塩原信太郎が就任した。翌1990年2月、GVHD対策として血液照射装置を導入し、HCV検査を開始した。また新入医師を対象に「安全で適切な輸血の実施」を目的としたオリエンテーションを始めた。1993年11月、HBV、HCV検査を中央検査部に移行し、末梢血造血細胞採取、分離、保存を開始した。1996年3月、血液照射装置2台目を導入、輸血同意書を作成し、文書による同意を実施した。

現状と課題

補助療法の一環として出発した輸血部は今日、造血細胞移植療法を支える部署に発展した。今後も安全な血液製剤を供給すると同時に、血液細胞を用いた遺伝子治療など、臨床側の要求にこたえられる部署への発展を目指している。

(7) 分娩部の歩み

沿革

分娩部は、1966(昭和41)年4月1日金沢大学医学部附属病院診療棟竣工に伴って、分娩室、待機室、新生児室、小手術室等の分娩関連施設を有する院内部門として発足した。その後、1979年3月30日の文部省訓令第5号によって正式に認可され、同年4月1日、助手1名、看護婦3名の定員化をみた。部長は、創設当初、産科婦人科学講座赤須文男教授、1971年6月からは同座講座西田悦郎教授、1994年11月からは同講座井上正樹教授が併任し、現在に至っている。副部長は、今日まで西田悦郎、赤祖父一知、上野宏郁、寺田督、大崎勝三、富田嘉昌、橋本茂、打出喜義の産科婦人科教官が併任し、現在は分娩部教官上野浩久がその任にある。しかし実際の運営は、助産婦学生の実地教育も含めて、産科婦人科医師と1病棟4階配属の助産婦・看護婦の協力によってなされている。

近年少産少子の時代を迎え、分娩数は減少傾向にあるが、本分娩部は開設以来1998(平成10)年春まで約20,000人の母・児を取り扱い、また産科緊急手術は年間平均70件、紹介を含めた病児の処置は年間約60件に達し、近年外部から依頼される妊婦褥婦の救急患者が増加してきている。

現状と課題

今日まで、時代の要請に対応すべく度々部内施設の改造や新しい医療機器の導入を図ってきたが、井上教授就任後、老朽化の見られた部内の更新をはじめとして、NICU部門充

実のために小児科との間で、これまで以上の緊密な連携が図られている。Volume（量）よりQuality（質）を重視した母子医療が実践されつつある。将来計画においては、更にこれを発展させ、妊婦・胎児・新生児・乳児の健康を一貫して管理し、また地域の第一線病院・医院をネットワークで結んだ高度医療施設を目指した「周産期母子総合医療センター」の構想の下に独立した施設として設置される予定である。

（8）救急部の歩み

沿革

救急部は、当大学附属病院中央診療施設として、1984（昭和59）年1月4日、初代部長村上誠一麻酔科教授の下、定常雄副部長、小川純（第1内科）が夜間・休日不問の診療を開始した。3次救急とトリアージ（患者の重症度判定）が主体であり、この年の受診件数は3,892人であった。1985年4月、急逝した定副部長の後、相澤芳樹救急部助教授が就任した。本院が長い年月にわたって地域医療を担当してきた歴史的な背景が考慮され、時間外診療患者の受け入れに制限を設けないという方針が当初よりとられた。しかし本院が医学教育の場であり、高度医療を目指す専門病院であることから、スタッフの増員と重症管理ベッドの確保が必然化し、1986年2月に開設された集中治療部と合体して、北陸では唯一の救急部・集中治療部として運営された。この時の専任スタッフは、医師5名、看護婦14名であった。救急部は、主に3次救急と救急車による搬送患者を担当し、1・2次救急や時間外再診は各診療科のバックアップを受けた。当直は、麻酔科、歯科口腔外科を除く全科勤務となって各科人数割で分担した。看護婦は専任スタッフのほか、各科外来より35名が夜間（準夜3、深夜2）、休日（3～4名）の勤務をサポートした。1992年4月、部長に宮崎逸夫第2外科教授が就任し、2年間の任期を務めた。1994年4月、部長に小林勉麻酔・蘇生科教授が就任した。同月、本院の初期臨床研修制度が開始され、救急は必須科目となった。1995年1月、副部長に石瀬淳救急部助教授が就任した。この年10月より救急ホットラインが稼働し、救急車からの電話連絡に専任スタッフが24時間直接対応して救急救命士に特定行為の指示を与えるようになった。1996年10月、医師、看護婦（士）、救急隊員などにより運営される北陸救急医学研究会は、日本救急医学会北陸地方会として正式に承認され、事務局は金沢大学救急部・集中治療部に置かれた。1997年7月、冠動脈疾患治療部（CCU）が併設され、急性虚血性心疾患に対し、緊急カテーテルを行える体制が整備された。この年の救急受診件数は11,859人であった。

現状と課題

現在、診療科あるいは講座制をとっていないが、救急医学は国立大学重点的整備項目に挙がっており、毎年のように救急医学講座が開設されている点を視野に入れたい。集中治療部とともに、3次救急と重症患者管理の実績を作ってきたが、プライマリ・ケアについ

ても総合診療部などと協力した診療・教育体制づくりが課題である。また病院再開発に伴い、国立大学付属病院初の試みとして、救命救急センターの設置が検討されている。

(9) 高密度無菌治療部の歩み

沿革

高密度無菌治療部は、骨髄移植の前処置である化学療法、放射線療法により、高度の好中球減少状態となり、重症感染症発症の危険性が高い患者に対して無菌室療法を施行するために、1984（昭和59）年4月に新設された中央診療部門である。

無菌治療室は当初、第3内科（服部絢一教授）の治療室として、国立大学でははじめて1977年3月に、3病棟3階の看護センターに隣接する6床部屋を改造した3室4床（クラス100の2室各1床とクラス1,000の1室2床）として設置された。これが新設の当部に移管されたあと、1987年に2室3床（クラス10,000の1床室と2床室）へ全面的に更新され、さらに1994年に改修され、現在の3室3床（クラス1,000の2室とクラス10,000の1室）となった。

治療対象は主に難治性血液疾患、固形癌に対する骨髄移植の患者である。年間15例前後の移植が施行され、1997（平成9）年10月現在の移植症例数は同種移植175例、自家移植30例に達した。この中には、本邦における移植後最長期生存例も含まれ、多くの患者が治癒し、社会復帰を果たしている。近年は、骨髄バンクを介した非血縁者間骨髄移植（20例）も行われるようになった。また、末梢血幹細胞移植も多く試みられている。

診療体制は部長1名（併任）、副部長1名（助教授）、助手1名であり、専任看護婦は配置されていない。高密度無菌治療部発足に当たって、第3内科より舟田久（現富山医科薬科大学教授）が副部長に就任した。同年7月より松田保第3内科長が部長を併任している。したがって無菌室の実質的な運営は、第3内科及びその病棟スタッフの寄与するところが大きい。骨髄移植では、感染防止対策の成否が治療成績を大きく左右する。舟田は無菌治療室における感染予防の日本における先駆的研究者としてゲンタマイシン、バンコマイシン及びナイスタチンによる腸内無菌化（GVN）療法を確立した。同時に、血液悪性疾患における好中球減少下での緑膿菌菌血症の病態と治療に関する研究により、日本感染症学会二木賞を受賞した。

1997年4月、舟田の転出後、副部長に大竹茂樹が就任した。大竹は無菌室療法の適応を拡大し、血液悪性疾患の化学療法時にも適用するために、原疾患の病態および易感染性の危険度に応じて無菌室療法を効率化、簡易化することに努めている。また、病院感染防止対策、HIV感染者対策の啓蒙に取り組んでいる。

現状と課題

無菌室療法の簡易化と適用の拡大、効率的な運用が求められている。新病院建築に当た

り、4床の無菌室を持つ無菌病棟が計画されている。看護体制の整備を含めた総合的な拡充計画の遂行を目指している。

(10) 集中治療部の歩み

沿革

集中治療部は、1986(昭和61)年2月、救急部に続いて開設され、救急部・集中治療部という形で運営されることになった。部長は麻酔科村上誠一教授が併任し、相沢芳樹副部長(麻酔科)、小川純講師(第1内科)に加え、水野清雄(第2内科)、富田富士夫(第2外科)、新田俊一(麻酔科)の3名の助手、及び前野つね婦長ら計14名の看護婦で構成され、24時間診療体制は強化された。集中治療部では、呼吸、循環、代謝その他の急性機能不全の患者を収容し、強力かつ集中的に治療を行うとともに、集中治療を中心とした医学の教育・研究を行う目的で運営された。初年度の入室患者数は94例、そのうち院外からの入室は51%、平均在室日数は9.8日/人であった。その後、麻酔・蘇生科から助手と研修医及び第1・第2内科から医員が加わり、人員の強化が図られた。

1991(平成3)年11月、村上部長を会長として北陸救急・集中治療医学研究会を発足・開催し、北陸地方の救急と集中治療医学の発展を果たした。また、集中治療部における自験例をもとに、石瀬淳講師や村上部長らは、脳死患者の臨床病理像を広く発表し、1991年より村上部長は厚生省臨時脳死及び臓器移植調査会(いわゆる脳死臨調)専門委員として、脳死判定の確立とその問題点を明確にした。

1992年4月、第2外科宮崎逸夫教授が部長に就任した。研修医の修練として集中治療は必須であり、それまでの麻酔・蘇生科に加えて、整形外科、神経内科の研修医も初期研修に加わり、卒後教育の場としての重要性を増した。

1994年4月より麻酔・蘇生科小林勉教授が部長に就任。同年4月から初期臨床研修制度が開始され、以後毎年20名以上の研修医が研修を行った。1995年1月に石瀬淳助教授が副部長に就任し、蘇生後患者の脳低温療法などの高度な集中治療を発展させた。また、1997年7月冠動脈疾患治療部も発足し、重症循環器疾患の集中治療の強化が図られている。

現状と問題点

近年救急患者及び術後重症患者の増加に伴って入室患者数は漸増し、1997年は197例であった。その結果、救急搬送患者やあらかじめ術後に入室を依頼されていた患者の収容が困難になっている。また、脳死臓器移植法案の成立に伴い、脳死判定及び臓器提供が可能な施設として一層充実した体制と設備が望まれる。複数科による多角的な診療が円滑に施されるよう、今後も集中治療部の運用について、関係各位の全面的な御理解、御協力を賜るよう切に希望する次第である。

(11) 病理部の歩み

沿革

病理部は、1987（昭和62）年5月に検査部病理検査室から独立・設立され、初代部長として当時の臨床検査医学講座松原藤継教授（検査部長）が併任し、検査部病理検査室から川岸徳子主任技師、久富元治技師、堀田知子技師、矢田啓二技能補佐員、田井麻子技術補佐員の5名が病理部に移籍し、スタートした。同年の10月に野々村昭孝（当時第2病理学講座助教授）が病理部専任助教授として就任し、検査部病理検査室より水上勇治講師が病理部へ移籍、細胞診標本の診断には、医療技術短期大学部（現保健衛生学科）の谷本一夫教授及び第3内科の中村忍助教授などの支援により、現在の病理部の体制ができあがった。迅速かつ正確な病理検査結果報告を目指すとともに、免疫組織化学検査や電子顕微鏡検査を導入した。翌1988年からは卒後教育として、院内の種々のカンファレンス（リンホーマカンファレンス、乳腺・甲状腺カンファレンス、骨軟部腫瘍カンファレンス、肺癌術前・術後カンファレンス等）に参加している。1991年3月31日の松原藤継教授の停年退官に伴い、4月からは山口成良附属病院長（当時神経精神科教授）が病理部長を併任した。以後1992年4月から1994年3月までは広根孝衛附属病院長（当時皮膚科教授）、1994年4月から1996年3月までは宮崎逸夫附属病院長（当時第2外科教授）、1996年4月から1997年3月までは高島力附属病院長（放射線科教授）と、歴代の附属病院長が病理部長を併任した。その間、1994年6月からは細胞診オーダーリングシステム、並びに病理レポートのファイリングシステムを導入し、病理業務の一部電算化を行った。1997年4月1日からは、野々村昭孝が病理部の専任部長に就任し、同年3月水上講師の医学部保健学科への転出に伴い、4月1日より湊宏が病理部助手に就任した。病理部へは、診療各科より全身の検体が提出され、1996年の病理部の実績は、外科手術材料及び生検を含めた病理組織検体が6,722件（臓器数7,268件、ブロック数14,718個）、細胞診検体6,719件（プレパラート枚数12,364枚）、術中迅速診断検体417件（687回）であり、病理組織検体については、特殊染色検査が656件、電子顕微鏡検査が69件で行われ、免疫組織化学検査が162件（1,167枚）について行われている。

現状と課題

技術革新に伴う高度先進医療の導入と診療内容の細分化が進み、病院の診療内容は近年いろいろと多様化している。それに伴い、病理診断の重要性が改めて認識されているが、診療各科から病理部に要求される内容もますます高度になり、病理部の仕事の量は増加するばかりである。現在、限られたスタッフで日常業務をこなしているが、病理部の業務は最近のコンピュータの導入が困難な職人的な手作業が多く、病院の中でも最も電算化の遅れている部である。迅速かつ正確で質の高い病理診断を病理部が目指すことに変わりないが、今後はできる所はできるだけコンピュータ化し、効率の良い病理部の体制づくりを目

指したいと思う。その余力をもって臨床各科の要求に対して更に柔軟に対応できるようになりたいと願っている。

(12) 血液浄化療法部の歩み

沿革

血液浄化療法部は、1967（昭和42）年7月1日に、透析センターが院内措置の独立した中央施設として開設されたことに始まる。初代主任は、武内重五郎第1内科教授、副主任は津川龍三泌尿器科講師で発足し、当初は人工血液透析装置2台で診療を開始した。1967年度は29件であったが、その後血液透析の健康保険適応を契機に飛躍的に取扱件数が増加し、2度にわたる施設増設により1980年3月より現在の第6病棟3階に移設された。この間、故黒田恭一泌尿器科教授、故米村大蔵病院長（事務取扱）、竹田亮祐第2内科教授、久住治男泌尿器科教授が主任を、故黒田満彦第2内科講師、東福要平第2内科講師、大川光央泌尿器科助教授、内藤克輔泌尿器科講師が副主任を歴任した。さらに血液透析のみならず、血漿交換、吸着療法、CAPD療法と取り扱う血液浄化療法並びに対応疾患も拡大し、1990（平成2）年4月1日には、国立大学附属病院の透析部門としては第6番目、血液浄化療法部の名称としては、全国初の予算措置による中央診療部として、定員構成（部長1（兼任）、副部長（助教授）1）で改編整備された。部長は、山口成良病院長（事務取扱）に引き続き、10月1日より小林健一第1内科教授が就任した。副部長には、太田博真第1内科講師が昇任し、内藤毅郎助手、看護スタッフ5名となった。施設面では、血液濾過透析1台、移動式緊急透析装置1台、血漿交換装置2台を購入し、緊急透析、血漿交換への対応が整備された。さらに1991年には、附属病院外来部門の土曜休診に伴い、監視装置1台の購入により現在の一般治療室（11床）、重症管理室（1床）、CAPD室における診療体制となった。1994年4月、横山仁血液浄化療法部助手が副部長に昇任し、1996年2月には、水供給装置と多人数透析装置並びに監視装置7台の更新とコンピュータ中央管理システムを導入した。さらに、個人用透析装置5台もすべて血液濾過透析に対応した装置とし、施設外における移動式透析装置2台、持続的濾過透析装置2台、血漿交換装置1台を整備した。これにより血液濾過透析、持続的血液濾過、全血漿交換、二重膜血漿交換、吸着（LDL、ビリルビン、薬剤）、特異的免疫吸着、リンパ球除去療法への対応が充実した。さらに1998年4月より、米村みよ石川県移植コーディネーターが配属となり、移植医療に対する積極的な取り組みが行われている。

現状と課題

取り扱う疾患は、慢性並びに急性腎不全、心不全、自己免疫疾患、免疫性神経疾患、自己免疫性皮膚疾患、高脂血症、ネフローゼ症候群、閉塞性動脈疾患、重症肝障害、ABO血液型不適合臓器移植（腎移植、骨髄移植）、薬物中毒等であり、病態に応じた血液浄化療法

を施行している。さらに維持透析あるいは腎機能低下例に対する術前、術中（手術部における緊急血液透析）、術後管理を積極的に取り扱っている。今後も血液浄化療法に関する最新の情報と技術を提供することにより、臓器移植をはじめ大学病院における高度先進医療の一翼を担う部への発展を目指している。

（13）医療情報部の歩み

沿革

医療情報部は、1984（昭和59）年3月に設置された病院業務電算化推進委員会を前身として、1986年5月に院内措置により設置されたことに始まる。部長は山口成良教授（神経）、副部長は渡辺洋宇助教授（一外）、部員は併任教官9名、技官2名と医事課医療情報係職員であった。当初は、カルテの中央管理と医事業務をはじめとする各部門業務の電算化から始め、照会系のシステム構築を順次行い、国立大学医療情報ネットワーク（UMIN）との接続を行った。

1992（平成4）年4月には、専任教官を置く医療情報部が文部省に正式認可され、部長に佐藤保教授、副部長に分校久志助教授が就任した。同年10月には、院内の情報教育、広報活動の一環として、総合病院情報システム意見交換会を開催し、以後、医療情報フォーラムとしてその時々の特ピックスの講演を中心に毎年開催した。医療情報の正確で迅速な伝達、患者サービスの向上及び業務改善を目的に、1992年1月以降、処方、予約、食事・入院基本、検査、病名、入院処方、注射、画像・生理検査の各オーダリングシステム及びイメージファイリングシステム、物流システムを順次稼働した。1993（平成5）年11月から、電算化対応業務の増加に対応して24時間稼働を開始し、システムが常時利用可能な環境に移行した。

学会活動では、医療情報学連合大会や国立大学附属病院医療情報処理部門連絡会議において、病院情報システム全般及び病院管理に関する発表を毎年行ってきた。1997（平成9）年1月16～17日には、金沢大学の担当で金沢市観光会館及び十全講堂を会場に、1996年度国立大学附属病院医療情報処理部門連絡会議を開催し、全国から500名を超える参加者を得て、12のシンポジウムと2つのワークショップで熱心な発表・討論が行われた。

現状と展望

現在、1998（平成10）年1月にPCオーダーによる新総合病院情報システム及び新規高速ネットワークが導入された。また、国立大学病院衛星医療情報ネットワーク（MINCS-UH）が先行8大学に次いで設置され、1997（平成9）年末には、4.5mのパラボラアンテナをはじめハイビジョンによる衛星通信・映像装置の設置が完了した。これらのシステムは大学病院内外における情報のネットワーク化、マルチメディア化を指向するものであり、その有効な利用には、病院全体の積極的な関与が必要である。医療情報部では従来か

らシステム導入のためのワーキンググループ結成など、病院全体としての取り組みを行ってきたが、今後ともこのような協力体制の下に、バリアフリーの新病院のインフラを支援する体制を整備する必要があると思われる。

(14) 光学医療診療部の歩み

沿革

光学医療診療部の歴史は、消化管内視鏡検査及び気管支鏡検査を目的に中央診療施設検査部内視鏡検査室から始まった。1984（昭和59）年には院内処置にて同内視鏡部となり、また検査場所も、当時外来診療棟2階中央内科外来に隣接した場所から、現在の西外来棟2階に移転した。初代部長は、服部信第1内科教授、副部長は渡辺洋宇第1外科助教授であった。1986年4月からは部長は宮崎逸夫第2外科教授、副部長は渡辺洋宇第1外科助教授となり、以後1992年、部長宮崎逸夫第2外科教授、副部長米村豊第2外科講師、1994年、部長富田勝郎整形外科教授、副部長鷓浦雅志第1内科講師、1995年、部長富田勝郎整形外科教授、副部長金子周一第1内科講師と担当した。経過中下部消化管検査の漸増に伴い、1992（平成4）年、下部消化管検査室が造設されている。1996年4月、発展的に光学医療診療部と改称し現在に至っている。1998年現在、部長は第2外科教授三輪晃一（併任）、副部長ト部健、助手小田誠であり、コメディカルとして看護婦4名、看護助手1名体制である。施設としては、上部消化管検査治療室3、下部消化管検査治療室2、気管支鏡検査室1、特殊検査治療室1である。

現状と課題

光学医療診療部は消化管疾患、呼吸器疾患に対する内視鏡検査・治療を担当し、中央診療施設の一部門という性格上、日常診療に重点が置かれ、「内視鏡学」の研究・教育は各診療科ごとに進められている。内視鏡は昭和40年代の硬性鏡から、昭和50年代「胃カメラ」「直腸鏡」、ファイバースコープ、さらに平成に入り、電子内視鏡の時代へと変革進歩してきている。それとともに、対象とする消化器疾患あるいは呼吸器疾患の診断治療における「内視鏡」の位置付けは大きくなってきている。その一指標として、光学医療診療部にて扱う内視鏡検査治療の件数の増加は著しいものがあり、1985年度の内視鏡部の検査件数は4,000件強であったが、近年では総数はその倍以上となり、その内容も診断・治療の多岐に及んでいる。特に「粘膜切除術」を中心とした内視鏡治療は、高齢化などの社会情勢あるいは医療情勢の変化、機能温存、生活の質（QOL）の要求、内視鏡治療の方法論の進歩などから著増しており、今後ともこの傾向は顕著になっていくものと予想される。このような状況の中で、光学医療診療部として診療及び研究教育面において独立性・専門性の高い「内視鏡学」の遂行を目指している。

(15) アイソトープ部の歩み

沿革

アイソトープ部は、1973（昭和48）年の核医学講座開設の9年前、1964年に院内組織として発足しており、中央診療施設の1部門をなしている。発足当初は、放射線科をはじめ幾つかの診療科が独自に放射性医薬品を投与し、アイソトープ部に検査を依頼していた。しかし、その後核医学部門が独立し充実するにつれ、各科より核医学診療科に依頼が出され、核医学診療科よりアイソトープ部に検査依頼を提出する形で検査が施行され、その結果により核医学診断医が検査報告書を作成、各科に送付する流れとなっている。

当初より、久田欣一部長（核医学講座教授兼任）の下で、松平正道技師（後に放射線部副技師長）を中心に、RI部の環境整備や機器開発が行われてきた。本邦で最初の核医学講座に対する期待も大きかったが、それにこたえてRI診療の充実や開発が行われ、日本のRI診療をリードする点で大きな役割を果たしてきた。また、複雑化するRI取り扱い業務や管理、法的規制にも対応してきている。

普及や教育、学会活動においても、日本アイソトープ協会の医学・薬学会の「核医学イメージング規格化専門委員会」（久田欣一委員長、松平正道委員）、「核医学技術専門委員会」など各種委員会で、中心的な役割を果たし、各種の報告を出してきた。さらに放射線技術学会、医学放射線学会、日本核医学会でも積極的に活動している。

現在、ガンマカメラ4台、SPECT装置3台が約10台の専用画像処理コンピュータと接続され、部内のネットワーク下に稼働し、病院内各臨床科の要請や研究にこたえている。また、管理業務としては、放射性医薬品の入手、管理、使用、廃棄の管理、廃棄物処理、排水、排気の管理、放射線に関する管理測定などが含まれている。

現状と課題

大勢の優秀な技師や事務員の働きで今日に至っているが、現在は、利波紀久部長（核医学講座教授兼任）、中嶋憲一副部長（核医学科講師兼任）、山田正人技術主任、西田順一、飛坂実、堀井純清の4名の放射線部技師、一明登詞子事務員のスタッフであるが、RI病棟の看護婦さんの応援で忙しい日常診療に対応している。

RI部での検査件数は、1972、1977、1982、1996年と追ってみると、3,100、4,500、7,400、8,000件と伸びているが、現在はカメラ台数と人員の限界であり、件数は頭打ちとなっている。一方70、80年代に多かった肝（42%）の検査は減少し、現在は心臓（26%）、腫瘍（22%）、骨（18%）が上位を占めるようになった。

今後も機能診断としてのRI検査の特徴を生かし、新たにポジトロン断層（PET）による診療も含めて、臨床の幅広い要請に応じるために努力したい。

(16) 麻酔部の歩み

沿革

麻酔部は、1964（昭和39）年3月、院内措置として附属病院中央診療部に設置された。当時は手術室が中央化されて日が浅く、第1外科、第2外科、整形外科の3科が中央手術室を使用し、それ以外の診療科は、それぞれの外来に手術室を有していた。麻酔科はいまだ独立しておらず、各科から2名の麻酔班員を募って麻酔を担当する状態であった。1966年4月に開講された麻酔学教室は、1978年まで講座主任を欠いていたため、赤須文男（1964年5月～1969年6月）、豊田文一（1969年7月～1971年4月）、黒田恭一（1971年4月～1978年3月）の各教授が麻酔部長を併任した。1970年5月には、各診療科の要望を麻酔部の運営に反映するため、麻酔部運営委員会が設置された。この間、麻酔部の実質的な業務は逸見稔、村上誠一両助教授が担当してきたが、1978年に村上誠一助教授が講座主任として選任され、はじめて麻酔科出身の麻酔部部長が誕生した。村上誠一助教授の停年退官に伴い、山下純宏教授（1992年4月～7月）、久世照五教授（1992年8月）、小林勉教授（1993年8月～現在）が麻酔部長を併任し、現在に至っている。現在の麻酔部の人員は、小林勉部長、山本健副部長、角谷準一技官より構成されている。

麻酔部が年間に管理する麻酔件数は、1968（昭和43）年には全麻2,160例、脊麻・硬麻213例、総麻酔件数2,413例（局所麻酔を除く、以下同じ）であったが、10年後の1978（昭和53）年には、全麻2,518例、脊麻・硬麻237例、総麻酔件数2,945例に増加した。総麻酔件数は、1991（平成3）年の4,064件を最高に、年間4,000件前後を維持している。年1回開かれる麻酔部運営会議では、麻酔部予算の執行や、各科若手医師の麻酔科研修の在り方などについて検討が重ねられている。

現状と課題

術前・術後管理並びに麻酔技術の進歩に伴って、手術適応は拡大の一途をたどっている。麻酔部は手術室内の麻酔資源が有効に利用できるように、環境を整備することがその主要な業務であり、特に、麻酔器やモニター類の日頃の整備点検は必須である。また、手術後の麻酔回復室の運営も、近い将来、麻酔部の業務として加わると考えられる。専任の技術員、看護要員をはじめとする麻酔部の人的、物的な一層の充実を切望する。

(17) 総合診療部の歩み

沿革

総合診療部は、1995（平成7）年10月に院内処置での設置が決定された。初代部長は宮崎逸夫病院長（第2外科教授）であり、運営委員会が1995年12月に開催され、副部長は輪番制により、1996年1月より第2内科小泉順二講師が、その後は10月と4月に交代

し、第3内科中村忍助教授、第1内科松下栄紀講師が歴任した。1996年4月、宮崎教授
停年退官により高島力病院長（放射線科教授）が部長に就任した。1997年4月に文部省
の正式認可を受け、教授1、看護婦1の定員が措置され、1998年4月より小泉順二が第
2内科助教授より総合診療部教授に就任し、新しいスタートをきった。

1996年1月より総合診療部ワーキンググループが副部長・担当医師を中心に設置され、
1996年4月より総合診療部外来を開設した。外来は午前中のみで、担当医は輪番制とし、
診察室には第1、第2、第3内科の医師2名がそれぞれの科の新患外来診察日に常駐し、
神経内科及び第1と第2外科医師は必要時にポケットベルで呼び出し診療する待機の形態
とした。受付事務員1名が専任として、看護婦1名が救急部・集中治療部より派遣され、
定員化されてからは専任となった。

1996年4月には超音波診断装置が総合診療部に設置され、1997年10月には光学診療部
との連携で、内視鏡画像システムが導入された。

現状と課題

総合診療部は、高度先進医療の進む中で、患者本位の医療の見直しのために設置された。
総合診療部の主な役割は、初診患者の診療、各専門診療科への紹介とプライマリ・ケアに
関する臨床実習・研修の実施とされている。金沢大学における総合診療部も、初来院及
び再来院で紹介状が無く、受診科を特定できない患者、総合診療外来で経過観察及び治
療の必要な患者、を対象に診療している。患者本位のプライマリ・ケアを実践できる良医
養成のための教育・研修システムの確立は、今後の課題である。

(18) 電子顕微鏡センターの歩み

沿革

電子顕微鏡（電顕）が細胞組織の形態観察の新しい道具として実用的価値を認められ、
それを用いた研究が急増した昭和30年代後半から、臨床各科に電顕を利用する研究人口が
増加し、また研究から診断へと使用目的も拡大されたことを踏まえて、当時の歴代病院長、
福代良一初代主任、臨床各科並びに検査部の尽力により、1968年4月に電顕センターが
院内措置の中央共同利用施設として開設された。

開設と同時に本センターには、横田輝一技官が専任技師として配属され、また運営委員
会が組織され、円滑な運営に当たってきた。その後、1980（昭和55）年4月には主任が
廣根孝衛教授に替わり、設置場所も当初の整形外科研究室から臨床研究棟竣工時に現在
の場所へと移った。最初、本センターには電顕（日立HU-11DS）1台と、超ミクロト
ーム（ポーターMT-1・MT-2）が置かれ、細胞組織の透過像の観察に利用されていたが、
1974（昭和49）年2月に電顕（日本電子JEM-100B）1台が追加され、走査像の観察も
可能となり、空き時間がない状態で使用されてきた。さらに、1980年3月にはX線マイク

第7章 医学部 医学部附属病院

ロアナライザーの付いた分析電顕（日立H-600）が、老朽化した最初の電顕の更新設備として整備された。

1992年4月には、主任が高守正治教授に替わり、翌1993年2月に、病理細胞診断システムとして透過電顕（日本電子JEM-1210）、走査電顕（日本電子JSM-5400）、超ミクロトーム（ライヘルトウルトラカットS）、真空蒸着装置（日本電子JEE-400）が日本電子JEM-100Bの更新装置として設置され、更に充実した設備となった。

現状と将来の課題

このような設備の改善充実と、近年における試料作製方法の進歩により検索の目的も多岐にわたり、現在では透過電顕像、走査電顕像及び免疫電顕像所見による各種疾患の病態解析、ウイルスの検出、抗原物質の検出とそれによる細胞同定などに利用され、電顕所見により診断が確定される症例も多く、本センターは研究と診療の両面にわたり大きな役割を果たしている。

（19）薬剤部の歩み

沿革

医学部史上、はじめて薬局の存在が明らかな記録として残るのは1867（慶応3）年10月、種痘所が壮猶館における医学研究部門と合併して、卯辰山養生所へと発展した時のことである。養生所に併置されていた薬圃及び舎密（シェイミ：Chemie）局を総理していたのは、高峯讓吉の父、高峯精一であった。以後、1880（明治13）年に薬局長となった大井玄洞から1945（昭和20）年の浅野順太郎までの薬局長の詳細については、「大学病院歴代薬局長の面影」にまとめられている。1946年より1948年まで薬局長を平本実が兼薬専教授の形で、1948年から1952年までは塚本長太郎、1952年から1959年までは田辺普が、金沢大学教授を併任した。1960年より山名月中が薬局長、金沢大学薬学部教授併任となったが、翌1961年、薬局が薬剤部と改称されたことに伴い、金沢大学薬学部教授、同医学部附属病院薬剤部部長併任となった。附属病院の総合改築に伴って、薬剤部が全面改築され、今日の姿になったのは1966年である。薬剤部長の教授職化に伴い、1979年1月、山名月中は薬剤部初代教授を拝命した。その後1984年3月に停年退職した。同年6月助教授市村藤雄が教授に選任され、現在に至っている。

診療と研究または研究業績

山名月中教授時代（1960～1984年） 山名教授が金沢大学赴任当時、薬学部薬剤学教室（現製剤学教室）は創設期にあり、その中で教育、研究のための人材の養成、設備の充実に尽力した。教授は、米国のヒグチ（T. Higuchi）博士と並び称される反応速度論の草分けで、学多才の士であり、卓越した洞察力と行動力をもって製剤学・薬剤学及び病院薬学の

分野に新時代を開いた。このとき確立された理論は、反応速度論の薬剤学への応用を可能にしたもので、名著『医薬品速度論』（山名月中編・南江堂、1979）は、現在でも医薬品開発・研究に多くの施設で使用されている。

薬剤部では、山名教授の下で、水上勇三、市村藤雄らが薬剤学の研究に従事、グルクロノラクトン類、一連の β -ラクタム抗生物質の加水分解反応及び β -ラクタム剤とアミノグリコシド剤などの反応など、分子内触媒反応及び酸塩基触媒反応の機構を明らかにし、薬物の安定性研究の基盤を築き上げた。1976（昭和51）年、その研究業績が認められ、「医薬品製剤の安定性に関する速度論的研究」に対し、日本薬学会の最高峰である学術賞を受賞した。

さらに水上、市村は山名教授の下で、昭和40年ころから、薬剤業務の内容を推計学的に解析・予測するという新応用部門を開いた。特にオペレーションズリサーチを応用した調剤作業解析、患者待ち行列の理論およびシミュレーション解析は、見事である。その後、水上は岐阜大学医学部附属病院教授・薬剤部長として転出した。

昭和50年代初期には、生物薬剤学的研究にも着手し、薬物動態学の研究結果を合理的な薬物投与設計として臨床応用するという新展開を図った。生理学的薬物速度論による薬物の体内動態の研究では、投与量に比例しなかったペンタゾシンのクリアランスが、ペンタゾシンそのものによる肝血流量の変化に由来するという稀な現象を突き止めた。この一連の研究は、導入麻酔時におけるペンタゾシンの適正投与マニュアルとして、麻酔科村上誠一教授との共同研究で完成させ、新しい導入麻酔法として広く用いられることとなった。また、てんかん発作重積患者へのフェニトイン急速飽和法マニュアルの確立は、全国の施設での抗てんかん薬の血中濃度測定、及び薬物療法へのTDMの活用としての応用を全国的に広めるきっかけとなった。この成果などを基に、山名教授は日本薬学会103年会（1983年、東京）において特別講演を行い、これからの病院薬剤師の一つの進むべき道標を示した。

市村藤雄教授時代（1984～1999年3月）市村教授は、金沢大学薬学部から招聘した中島恵美助教授とともに、薬物の適正使用という観点から、薬物の体内動態についての研究の展開を図った。主な研究成果には、先に示したフェニトイン、ペンタゾシン等一連の薬物療法のマニュアル化の充実、中枢性抗コリン剤ピペリデンをはじめとする塩基性薬物の体内動態変動因子の解明、抗菌薬の小児における分布容積の予測と適正投与、薬物の腹膜透過動態に関する研究などがある。薬物療法へのTDMの応用としての「血中濃度モニタリング」（臨床薬剤学、南山堂：1988）は、市村の力作であり、長年の臨床経験の所産である。さらに、将来の遺伝子治療時代に備えて遺伝子製剤の開発の研究に着手し、多剤耐性



写真7-27 山名月中教授

遺伝子のアンチセンスオリゴヌクレオチドによる遺伝子発現抑制の研究や、ケモカイン遺伝子導入等による抗癌免疫療法に関する研究を開始した。既にケモカインに関しては、腫瘍細胞へのMIP-1 遺伝子導入による抗腫瘍効果についての報文等注目されつつある。

一方、市村の指導の下、各部員は薬物投与設計確立の経験を生かし、TDMをはじめ医療薬学を熟知した薬剤師として、患者の薬物療法に貢献することを目指して努力を積み重ねた。全部員とともに医療薬学の研鑽を積み重ね、その成果として『疾患別服薬指導マニュアル 第1、2集』（薬業時報社：1994、1997）を著した。本書は、金沢大学各診療科医師の参加も得て完成させた、主要な疾患の概要とその治療薬に関する服薬指導の項から成る労作であり、本邦での薬剤師、薬学部生のための教科書として定着している。一方、この教科書を圧縮させた内容を疾患数を92と増やして大学医療情報ネットワーク（UMIN）に公開している。

この間、全国的な医療薬学の発展に資するべく、臨床研究を支えてきた横川弘一副薬剤部長は、1996（平成8）年金沢大学大学院医療薬学専攻・助教授に、中島助教授は、1997年、共立薬科大学薬学部薬剤学講座教授として転出。中島の後任としては、同年4月より松下良が助教授に昇任した。また技官の副薬剤部長は、旭満里子、古川裕之が担当している。

薬剤業務としては、1984年には病院情報システム（医事システム）による処方せん発行を開始し、さらにシステマトリーブによる薬品管理システムの稼働及び全科対象に薬物血中濃度モニタリングを開始した。1988年にはIVH調製、1991年には入院患者対象の服薬指導を開始するとともに、薬剤部での治験薬の一括管理を開始した。1992年より全患者への処方オーダーリングシステムも稼働させ、1993年からは院外処方せん発行を広く保険調剤薬局にも拡大した。1995年には全患者への注射薬処方オーダーリングシステムの完成に伴い、全国に先駆け、全入院患者を対象とした24時間対応の注射薬個人別セットを開始し、病棟における注射剤の管理・使用の適正化・合理化に貢献した。1997年4月より外来患者への医薬品情報提供のため、患者提供用医薬品データベースを医師とともに検討し、発行を開始した。また同年7月からは新GCPに基づく薬剤部での治験薬一元管理を開始した。これらの業績により、1993年に市村教授は日本病院薬剤師会病院薬学賞を受賞している。

現在、市村教授は、金沢大学大学院医学研究科及び自然科学研究科の教授も務め、医学生・薬学生、薬剤師の医療薬学教育に熱意を燃やしている。薬剤部では、1974年に金沢大学薬学部生の病院薬剤部見学を開始し、1983年からは4年生全員に対し調剤実習の一環として、午後2日間の薬剤部実習を定着させた。1989年には、薬学部医療衛生系学生



写真7-28 市村藤雄教授

と他大学薬学生に対する2週間の病院薬学実習を開始した。一方、1991年度から正式に薬学部4年生に対する薬剤部での卒業研究が開始され、さらに次年度からは、大学院修士及び博士課程学生の研究を指導することとなった。さらに、1996年度からは病院当局の支援を得て、学部学生の実習に加えて、医療薬学専攻修士課程(24名)の6ヵ月にわたる病院実務実習を開始した。最近では、日本薬学会116年会(1996年)では医療薬学部会を担当し、医療薬学研究の充実・発展に精力的な貢献を果たした。現在、薬学教育協議会委員の他に厚生省関連の研究班員も務め、日本における医療薬学の発展とその教育の充実において、金沢大学薬剤部は重要な位置を占めるに至っている。

現状と将来

医療をめぐる環境が激変する中、薬剤部では医療薬学の研究、教育の充実、及びその成果としての実践業務の発展に努めてきたが、現在、その内容の更なる発展・充実を目指して以下の基本方針を立てている。

患者のQOLに配慮した先駆的業務の推進、優れた情報提供による服薬指導と副作用防止、TDMによる薬剤の適正使用コントロール、院内感染予防等に精力的に貢献する。

優れた医療人としての薬学生の教育を目指した実習・研修の推進、充実化を図るとともに、さらに薬剤師免許取得者を対象とした教育の促進にも努める。

先進医療のための臨床薬学的研究(適正投与のための薬物動態・遺伝子製剤の臨床応用)を行う。

(20) 看護部の歩み

沿革

看護部は、病院の歴史とともに、幾多の変遷を経て現在に至っている。1901(明治34)年6月、石川県金沢病院に看護婦講習所が設置され、これが石川県における公的、組織的な看護教育の始まりとされている。1922(大正11)年、石川県金沢病院が官立に移管され、金沢医学専門学校附属病院となり看護婦養成科設置。翌年には金沢医科大学附属病院となり、関東大震災の発生時には、救護班として東京に派遣され活躍したと記されている。

1948(昭和23)年7月、「保健婦助産婦看護婦法」公布。翌1949年、学制改革により金沢大学が設置され、金沢大学医学部附属病院となる。翌1950年1月、第1回看護婦国家試験実施。2月より三交替制勤務施行、5月、総看護婦長制となり、初代総看護婦長に岩野亀代が就任した。12月、甲種看護学校の承認に伴い金沢大学看護学校を設置。総看護婦長に、1955年、龍口キミ子、1957年、岡野治子が就任した。この時から専任(任期制)となり、看護婦が診療科所属から独立して一本化された。1958年、健康保険法の規定により、完全看護は基準看護と改められ、翌1959年に基準看護1類承認。1960年、金沢大学看護学校が金沢大学医学部附属看護学校に改称した。1963年、総看護婦長に龍口が再

第7章 医学部 医学部附属病院

度就任。翌1964年、病棟婦（看護助手）採用となり、看護業務を整理した。1965年、鉄筋コンクリート4階建ての看護婦寄宿舎竣工。1967年、総看護婦長に宮崎女四子就任。淑翠会が発足し、『淑翠会だより』第1号を発刊した。同年日本看護学会が発足、翌1968年に看護教育の新カリキュラム実施。1969年、淑翠会に文化部、新聞部、レクリエーション部を設け、第1回ナースセミナーを開催した。以後毎年開催し、現在は看護研究発表会として継続、その中から各種学会に発表している。1971年、2人夜勤開始。第1病棟が開設され、看護体制を再編。翌1972年、医療技術短期大学の設置に伴い、1974（昭和49）年3月、看護学校廃止となり、閉校式を期に同窓会「翠の会」が発足した。

1976年5月、文部省令により看護部が設置され、宮崎総看護婦長が看護部長に就任（1978年1月）。8月、基準看護特1類承認。1979年、基準看護特2類承認。1982年、基準病衣設定。1983年、看護部長に安原よ志ゑが就任した。翌1984年看護手順作成。1986年、病院業務の電算化に伴い勤務計画作成システムが稼働した。1987年、看護部長に油木京子が就任。翌1988年、看護衣が現在のタイプに変わり、シーツ交換を外注化し、看護日報システムが稼働した。1989（平成元）年、基準看護特3類承認。翌1990年『看護のあゆみ』発刊。1992年、看護部長に前野つねが就任。処方・食事・入院基本等オーダリングシステムが順次稼働し、看護関連業務もコンピュータ化が進んだ。1994年、看護部長に和田出静子が就任。30年以上続いた基準看護に代わり10月新看護体系が創設され、12月特定機能病院承認と同時に「新看護2.5：1」に移行した。翌1995年1月、阪神大震災の際には、看護部から神戸大学へ11人、避難所へ4人派遣し救援活動を行った。4月、注射オーダ稼働と同時に患者個人別セットが開始され、薬剤管理業務が整理された。10月、医学部に保健学科が設置され、翌1996年4月、4年制の看護教育が開始された。同年4月、看護婦宿舎はワンルームマンション形式に全面改修された。

現状と課題

現在、再開発計画が急進展し、新病棟建築に向けて検討中であるが、高齢社会や複雑多様化する社会のニーズにこたえられるよう、ケアの質を高めながら、真のチーム医療を目指して努力している。

5 大学院医学研究科における教育と研究

（1）沿革

1955（昭和30）年7月1日、国立学校設置法の一部を改正する法律第44号、及び国立大学の大学院に置く研究科及び課程を定める政令の一部を改正する政令106号により、金

沢大学に大学院が設置されることになった。医学部については、これより先の1953年3月31日、政令51号をもって金沢大学医学研究科の設置が決まっており、諸準備が整った1955年4月1日をもって、医学研究科（博士課程）が発足した。

（２）新制大学院発足から現在まで

旧制大学院は、多分に閉鎖的かつ非組織的な研究者養成制度であったが、新制大学院は旧制大学院とは性格を異にし、制度のオープン化を目指し、アメリカにおける卒後学校と学位制度を標準として発足した。しかし、戦後の大学制度の急激な変革の中で、理念自体は追求すべきものであっても、それを直ちに完遂するだけの物質的、人的蓄積を持ち合わせなかったため、『京都大学大学院白書』（1961）が示すように、設立当初から、各方面にわたる問題が指摘され、この問題の真の解決は、現在に至るまで実現してはいない。

すなわち同白書は、新制度の特徴である流動的で開放的であるべきスクーリング制度が、十分に機能し得ておらず、新しい科学研究活動の要請にこたえることができない基本的な原因は、大学院が独自の研究機関として機能し得ておらず、既存の学部・講座に埋没したままで機能していること、及び大学院専任の教官が設けられておらず、既存の学部講座を対象として設けられている大学教官が、大学院生の研究指導をも併せ行わなければならないところにあると指摘している。また、大学院の貧困な研究条件の第2は、その研究手段及び研究予算の貧困にあり、さらに図書、実験設備などの不備も目立っており、文科系では図書の不足が、理科系では実験設備などの不足あるいは不備が、大学院生の研究を一時さし控えさせたり、また不十分な仕方で行わせるなど、研究活動の大きな阻害要因となっているとしている。

そして同白書は、以上のような大学院の当面する諸矛盾の基本的な原因は、第1に大学院がその制度的建前にふさわしい物質的な裏付けを与えられず、独立の研究機関としての体裁さえ整えられぬままに放置されてきたこと、第2に、我が国の科学研究体制の一環として大学院を正しく位置付け、その長期的、総合的な発展を図る政策が全く存在しなかったことにある、と結論付けている。

このような大学院の実態に関して、日本学術会議は1961（昭和36）年6月、総理大臣にあてて大学院改革勧告を出したが、ほとんど有効な対策は得られなかったのが実状であった。上記、京都大学大学院白書中の「諸矛盾の基本的な原因」については、ようやく近年になって大学院大学の構想や大学院生に対する経済的支援策など、各種の対策がとられており、今後なお一層の充実策が強く望まれている。

（３）現行の医学研究科の概要

修業年限4年の博士課程のみから成り、生理系専攻（定員25名）、病理系専攻（同11名）

第7章 医学部 医学部附属病院

社会医学系専攻（同6名）、内科系専攻（同17名）、外科系専攻（同19名）の5つの専攻が置かれている。各専攻の専攻部門は、以下のとおりである。

生理系専攻：解剖学第1、解剖学第2、解剖学第3、生理学第1、生理学第2、生化学第1、生化学第2、薬理学、神経情報伝達学（以下2専攻部門は神経情報研究施設）、神経情報物性学、分子生物学（以下5専攻部門は、がん研究所）、分子免疫学、生物物理学、薬理学、化学療法学、アイソトープ生命情報学（アイソトープ総合センター）

病理系専攻：病理学第1、病理学第2、微生物学、寄生虫学、ウイルス学（以下3専攻部門は、がん研究所）、病態生理学、免疫生理学

社会医学系専攻：衛生学、公衆衛生学、法医学、国際医療保健学、国際環境保健学

内科系専攻：内科学第1、内科学第2、内科学第3、神経内科学、神経精神医学、小児科学、放射線医学、核医学、皮膚科学、臨床検査医学、内科学（がん研究所）

外科系専攻：外科学第1、外科学第2、整形外科学、脳神経外科学、泌尿器科学、眼科学、耳鼻咽喉科学、産科婦人科学、麻酔・蘇生学、歯科口腔外科学、外科学（がん研究所）

（4）学位審査制度

1996（平成8）年10月2日の定例大学院医学研究科委員会で、学位審査制度の変更が決定され、実施は1997年4月1日以降の学位申請者に適応されている。

主な変更点を以下に示すが、特に最終試験の公開は、審査の透明性を高めるものとして期待されている。

審査員の構成

審査会は主査及び副査（2名）で構成され、研究科委員の中から投票で選出される。その際、「主査は論文提出者の指導主任があたる」ことは変わらないが、副査については「主論文の研究指導あるいは研究協力を行った者は除外される」ことになった。

最終試験（口頭試問）の公開

「最終試験は公開とし、審査員以外の出席者も発言することができる」ことになったのは、大きな変化である。この最終試験に出席可能な者は、「本学の教官・大学院生・医学研究者・および医学研究科長が特に認めた者」となっている。また、口頭試問の後に行われる「審査員による判定」は、従来どおり非公開とし、全員が適格と認められた者を合格とし、研究科委員会の2次審査（委員全員による投票）に諮っている。

共著論文

共著論文は、「外国語（英語）」による論文に限って認められることになった。またこの際、共著者は必ずしも本研究科の教官でなくとも良いと改められた。

論文提出による学位申請資格年限

「医学、歯学並びに獣医学（6年制）の大学又は専門学校の卒業生」では「基礎医学における研究歴が五年以上、臨床医学における研究歴が六年以上に達した者」に申請資格が与えられ、医学・歯学並びに獣医学（6年制）以外の大学の卒業生は「基礎医学における研究歴が七年以上、臨床医学における研究歴が八年以上に達した者」とされた。

論文博士の語学試験

1994年度からは英語のみの出題となり、さらに1998年度からは大学院の入学試験の語学試験と並行して、同一問題で行われている。

（5）大学院の将来構想

近年、文部省による大学院大学重点化構想に基づき、旧帝大を中心として大学院の拡充整備が図られている。金沢大学医学部においても、この大学院大学化を目指し、以下の諸項目を中心に大学院における研究・教育の変革・拡充と整備が進んでいる。

医学・医療分野の学際領域への対応

大学院は、医療研究の最も重要な担い手であり、優秀な研究者、技術者を育成する使命を持つ。したがって、現専攻系の見直しと改組を更に進めていくことは極めて重要である。医学部においては、現在、分子生物学や遺伝子工学を主要研究手段とする学際的な分子生体医学専攻（独立専攻）を設置することを計画している。また、今後も更に見直しを進め、医学の進歩に即して先端的、学際的分野や萌芽的領域などに対応した、新しい独立専攻を設置していくことを予定している。

バイオメディカルサイエンス教育・研究拠点の形成

分子生物学、遺伝子工学や細胞工学を基準とした研究方法を用いる新しい学際・複合領域「バイオメディカルサイエンス」は、医学研究の推進に最も期待されている分野である。この急速に進展した生命科学の成果を医療を通じて社会に還元していくには、臨床及び基礎医学研究グループが一体となった教育研究の推進を図ることが必要である。

そのため大学院講座を中核として、医学部、附属病院及びがん研究所の研究グループが有機的に連携する新しい枠組みでの組織化を計画している。この組織には、他学部、さらに大学外からの参加も求める。この新しい組織化の下で卓越した研究拠点（COE）形成を行い、活性の高い研究拠点化を目指している。

保健学科大学院の設置

新設の保健学科に、高度な専門的知識を持つとともに、幅広い視野と豊かな応用力を備えた研究者・技術者の育成を行う大学院修士、博士課程を段階的に整備する。

基礎系大学院の充実

第7章 医学部 医学部附属病院

近年、基礎医学系大学院では次第に医学部出身者の確保が困難になってきており、基礎配属、学部履修コースの多様化などその対策に系統的に取り組まなければならない。さらに、より現実的な方策としては、他学部からの優秀な人材の確保を図らなければならない。そのために、バイオメディカルなどの分野へ対応した医科学修士課程の新設を保健学科、がん研究所とともに構想する。

制度の弾力化

これらの大学院は、制度の弾力化を図り、多様な履修形態、履修コースを設け、卒業臨床研修、認定医・専門医制度等との共存を図るとともに、社会人の再教育等、十分に社会的要請にこたえ得るよう開放された組織を構築する。

国際化と国際協力の維新

外国の大学、特にアジア地域の医学系大学や研究所との活発な国際交流を行うため、大学間協定の締結、研究者の交流や留学生の受け入れなどを積極的に推進し、その受け入れの場となる外国人客員研究部門を新設する。さらに、国際医療保健学講座と国際環境保健学講座の新設により、国際保健の教育や研究を行うとともに、医療協力を推進していく。

以上のように、様々な問題点を抱えながらも、大学院医学研究科における教育・研究は、一步一步、着実に改善されている。医学自身の高度化、多様化に伴って、その原動力となるべき大学院には、従来にも増して大きな期待が寄せられている。

附 録

資料 1 歴代医学部長ならびに附属病院長

歴代学校長・医学部長

学部	氏名	就任年月
石川県金沢医学所	田中信吾	1876(明治9)年 8月
石川県金沢医学校	田中信吾	79年 11月
石川県甲種医学校	中浜東一郎	84年 12月
	木村孝蔵	85年 10月
第四高等学校医学部	木村孝蔵	87年 12月
	小林 広	92年 11月
第四高等学校医学部	高安右人	94年 11月
	山崎 幹	99年 4月
金沢専門学校	山崎 幹	1901年 4月
	高安右人	01年 10月
金沢医科大学	高安右人	23年 4月
	須藤憲三	24年 4月
	石坂伸吉	32年 4月
	谷 友次	54年 4月
	泉 仙助	56年 4月
	大谷佐重郎	58年 4月
金沢大学医学部	石坂伸吉	49年 5月
	谷 友次	54年 4月
	泉 仙助	56年 4月
	大谷佐重郎	58年 4月
	岡本 肇	60年 4月
	倉知与志	63年 4月
	井上 剛	67年 4月
	石崎有信	69年 4月
	豊田文一	71年 4月
	高瀬武平	73年 4月
	梶川欽一郎	76年 4月
	本陣良平	80年 4月
	西田尚紀	84年 4月
	山本信二郎	86年 4月
	正印 達	88年 4月
	岡田 晃	90年 1月
	竹田 亮祐	92年 1月
	山本長三郎	94年 1月
	松田 保	96年 1月
	中西功夫	96年 8月
	中村信一	98年 8月

歴代病院長			
学部	氏名	就任年月	
石川県金沢病院	大田美農里	1876(明治9)年 8月	
	田中信吾	80年 10月	
	中浜東一郎	84年 11月	
	木村孝蔵	85年 10月	
	小林 広	92年 11月	
	高安右人	94年 9月	
	山崎 幹	99年 7月	
	佐々木達	1902年 2月	
	高安右人	03年 5月	
	山崎 幹	09年 4月	
	高安右人	17年 4月	
	下平用彩	21年 4月	
	金沢医科大学附属病院	下平用彩	23年 4月
		土肥章司	24年 3月
久慈真太郎		25年 2月	
山田詩郎		27年 4月	
大里俊吾		29年 4月	
泉 仙助		30年 5月	
早尾帛雄		32年 5月	
石川 昇		34年 5月	
中島 実		36年 5月	
笠森周護		38年 5月	
熊笹御堂進		40年 5月	
松田竜一		42年 5月	
谷野富有夫		44年 5月	
並木重郎		46年 5月	
金沢大学医学部附属病院	日置睦奥夫	48年 5月	
	日置睦奥夫	49年 5月	
	秋元波留夫	50年 3月	
	泉 仙助	51年 4月	
	久留 勝	53年 1月	
	倉知与志	54年 1月	
	倉知与志	56年 4月	
	平松 博	58年 4月	
	赤須文男	60年 4月	
	高瀬武平	62年 4月	
	高瀬武平	64年 4月	
	卜部美代志	66年 4月	
	村上元孝	68年 4月	
	村上元孝	70年 4月	
黒田恭一	72年 4月		
山本信二郎	74年 4月		

学部	氏名	就任年月
金沢大学医学部附属病院	福代良一	76年 4月
	服部絢一	78年 4月
	米村大蔵	80年 4月
	野村 進	82年 4月
	竹田亮祐	84年 4月
	服部 信	86年 4月
	梅田良三	88年 4月
	山口成良	90年 4月
	広根孝衛	92年 4月
	宮崎逸夫	94年 4月
	高島 力	96年 4月
	渡辺洋宇	98年 4月

資料2 医学部医局史年表

年月日	事項	出典
1862年 3月 (文久2)	加賀藩は金澤彦三、八番丁に種痘所(反求舎)をつくる。	『百年史』(p.775)
64年	種痘所を南町心学所に移し、金澤藩種痘所となる。	同上
67年 6月	加賀藩主前田慶寧、卯辰山養生所の建設を命ずる。	同上
10月	養生所完成する。これに医学館、薬園を附属する。	同上
68年 7月	藩命により黒川良安が長崎に至り、医学校および病院の制度を調査。	同上
12月	慶応3年以來の卯辰山開拓が完成する。	同上
69年 3月	藩命により伍堂卓爾、岡島喜太郎、佐野鼎、関沢明清、吉井広次郎が欧州留学へ派遣された。	同上
4月	藩留学生として嵯峨寿安が、ロシアへ派遣される。	同上
6月 17日	前田慶寧、版籍奉還のため金澤藩知事に任ぜられる。	同上
70年 2月 1日	金澤医学館と病院が大手町に開設される。	同上
12月	外務省は金澤藩に医学教師として和蘭人スロイスの雇用を許可する。	同上
71年 3月 4日	スロイスが医学館に着任した。	同上
7月 14日	廃藩置県、金澤藩を廃し金澤、大聖寺、富山の3県を置く。	同上
72年 2月 22日	金澤県を石川県と改め、県庁を金澤から美川町に移す。	同上 (p.776)
12月 3日	太陽歴を採用(以上の月日は陰暦によった)	同上
73年 1月 30日	石川県庁が美川町から金澤に復帰した。	同上
12月 27日	石川県権令内田政風が初代県令に任命される。	同上
74年 9月	医学館のスロイスが、任期満了で帰国した。	同上
75年 8月	スロイスの後任として、和蘭人ホルトルマンが招かれた。	同上
	医学館は県立となり、石川県金澤病院と改称する。	同上
76年 8月	医学館は医療と医育部門を分離し、医育部門は金澤医学所、医療部門は金澤病院となった。	同上

	津田淳三は引退し、所長に田中信吾、院長に大田美農里がなる。	同上
10月	富山に石川県富山病院（院長田中信吾）福井に石川県福井病院（院長馬嶋健吉）を置く。両院にも医学所を併設し、生徒を養育する。	同上
77年 3月	第一私立七尾病院開設される。	同上（p.777）
79年 6月	殿町に金澤病院を新設し、旧建物を医学所とした。	同上
8月	金澤病院大聖寺出張所を開設する。	同上
11月 1日	金澤医学所を金澤医学校と改称、田中信吾が医学校長となり、金澤病院御用掛を兼ねる。	同上
	ホルトルマンが新潟医学校に転任する。	同上
80年 4月	福井、富山の両医学所を金澤に合併し、金澤医学校と改称する。	同上
	ホルトルマンの後任としてローレッツ着任（8月辞任）。	同上
6月	福井医学所を再開する。	同上
7月	県立七尾病院が開設。	同上
8月	富山医学所再開し、七尾病院内に医学所を置く。	同上
9月	金澤医学校に外山林介、伴野秀堅が招かれた。	同上
10月	大田美農里、金澤病院長を辞す。田中校長が兼任する。	同上
10月 24日	金澤病院大聖寺分院が開院する。	同上（p.778）
81年 2月	福井県新設のため、福井病院および医学所を分離する。	同上
5月	輪島に県立病院の分院ができる。	同上
11月	富山および七尾の医学所を金澤に併合する。	同上
82年 2月 17日	内務省は、三名以上の医学士をもって教諭にあてた医学校卒業生に対し、無試験で開業免状を下付することを決める。	同上
5月 27日	文部省医学校通則を制定し、医学校を甲乙に分け、甲は東大出身医学士三名以上を有することを規定する。	同上
7月	金澤医学校通則を改正し、11月、金澤病院をもって金澤医学校の実習研究の用を兼ねさせる。	同上
83年 5月	木村孝蔵、金澤医学校一等教諭を拝命する。	同上
10月 23日	医術開業試験規則及び医師免許規則を制	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

11月	定。 病院は初めて分科制をとり、外科、内科とする。佐藤廉が内科医長、木村孝蔵が外科医長となる。	同上
84年 3月 12日	金澤医学校は、石川県甲種医学校に昇格する。	同上
12月 1日	田中信吾医学校長を辞任し、中浜東一郎が就任。	同上
85年 1月	金澤病院長に中浜医学校長を迎える。内科・外科に加えて、眼科は山崎兵四郎、産婦人科は菅沼貞吉が担当する。	同上 (p.779)
10月	医学校に乙種薬学校を付設し、薬学生を分離する。	同上
10月	中浜校長、病院長は内務省に転勤し、後任に木村孝蔵が決まる。	同上
86年 4月	中学校令および高等中学校官制の発令。	同上
87年 4月	甲種医学校第一回卒業生を出す。	同上
4月 18日	第四高等中学校開設。	同上
5月 20日	学位令を公布（勅令第13号）。	同上
6月	田中信吾、金澤医会会頭に選任される。	同上
8月	高等中学校の医科を教授する所を医学部とし、第四高等中学校医学部を金澤に設置。	同上
12月	木村孝蔵を第四高等中学校教諭に任じ、医学部長を命ずる。	同上
88年 1月	県立金澤病院を借りて医学部の臨床実習用に供することを決める。	同上
3月	石川県甲種医学校廃止となる。	同上
6月	医学研究のための死後解剖を本校に限り認められる。	同上
89年 1月 13日	金澤医学会の発会式を卯辰山山乃尾楼で挙げる。	同上
4月	第四高等中学校医学部に薬学科を付設し、9月より授業を開始。	同上 (p.780)
12月	内外科臨床講義室竣工し、講義を開始する。	同上
90年 10月	官制改正により医学部長を医学部主事に改める。	同上
91年 3月	医学部無給助手規程を定める。	同上
92年 4月	校舎が仙石町に新築され、基礎学科が移転した。	同上
11月	木村孝蔵依願退職し、小林広が後任となる。	同上
94年 7月	高等学校令の公布により、高等学校医学	同上

	部と改称。	
9月	医学部主事、小林広依願退職し、高安右人に主事を命ずる。	同上
95年 2月 1日	第四高等学校医学部教官、生徒が十全会を組織し発会。	同上
5月	医学部卒業生に「医学得業士」の称号を与えることになる。	同上
96年 8月	木村孝蔵、ドイツへ留学。	同上
9月 25日	金澤医会設立。	同上
11月 25日	医学部『十全会雑誌』第一号を発行。	同上
97年 12月	金澤病院の職制改正し、内科、外科を二部に分つ。まず内科第1部長山崎幹、第2部長高橋剛吉となる。	同上
99年 4月	眼科学講義室竣工し、講義を開始する。	同上
7月	高安右人の医学部主事を免じ、山崎幹を後任とする。	同上
12月	木村孝蔵の帰朝とともに、外科を二分制とし、第1部長木村孝蔵、第2部長下平用彩を命ずる。	同上
1900年 1月 23日	田中信吾死去。64歳。	同上
6月	木村孝蔵学位を授与さる（本学初）。	同上
01年 4月	第四高等学校医学部を分立し、金澤医学専門学校と称する。	同上（p.781）
5月 11日	山崎幹を校長心得に命ずる。	同上
8月	天皇、皇后両陛下の御真影、勅語を下付せられ拝戴式を挙げる。	同上
10月	山崎幹の校長心得を免じ、高安右人を校長に任ずる。	同上
02年 4月 2日	第1回日本連合医学会を東京で開催。	同上
12月 23日	木村孝蔵が大阪府医学校へ転出し、宮田篤郎が後任になる。	同上
03年 3月	勅令第61号をもって専門学校令公布。仙台、千葉、金澤、岡山、長崎の官立五校は新令による医学専門学校となる。	同上
3月 21日	全国医会連合大会、県会議事堂で開催。	同上
05年 3月 25日	県立金澤病院が小立野に新築完成し、移転。	同上
8月 9日	34年から着工の県立金澤病院落成、8月25日移転完了。	同上
06年 5月 2日	法律第47号をもって医師法公布。	同上
07年 4月 14日	金澤医師会の発会式を金沢市議事堂で挙げる。	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

11月	卒業試験規則を改正し、明治41年以降の卒業生に学士の称号を与えることになる。	同上
09年 4月 15日	金澤病院長が高安右人から山崎幹に交代する。	同上
5月 12日	金澤病院に精神科を新設し、松原三郎を医長に任命した。	同上 (p.782)
9月	皇太子、北陸地方行幸に際し、本校に台臨。	同上
10月 2日	大田美農里死去。79歳。	同上
12年 3月 25日	かねてから病院横に建設中の校舎が竣工し、移転式を挙げる。	同上
7月 25日	金澤医学専門学校は、小立野の新校舎に移転。	同上
12月 3日	金澤医学専門学校教授に石坂伸吉、須藤憲三が任命された。	同上
13年 1月 13日	県立金沢病院に、皮膚および花柳病科を設置し、土肥章司を専任医長とする。	同上
14年 2月	開校25周年記念事業として記念館の設立を決める。	同上 (p.783)
4月	解剖学教室が竣工。	同上
15年 4月 2日	第19回日本眼科学会（高安右人）を金沢で開催。	同上
5月 11日	金沢医学専門学校創立25周年記念および校舎改築移転祝賀式を挙げる。	同上
16年 7月 25日	第24回日本解剖学会（金子治郎）を金沢で開催。	同上
7月 28日	金沢医学専門学校創立25周年記念館落成し、開館式を挙げる。	同上
17年 4月	理学的診療科が新設され、医長心得に小池才一を任命する。	同上
8月 26日	金沢医学専門学校教頭、金澤病院長の山崎幹が勇退、後任教頭に下平用彩、病院長は高安校長の兼任となる。	同上
9月	図書閲覧室が竣工する。	同上
12月	金沢医学専門学校が単科大学に昇格することが内定。	同上
20年 1月 24日	金沢市医師会設立総会。	同上
3月 21日	石川県医師会設立総会。	同上
3月 28日	第20回日本皮膚科学会（土肥章司）を金沢で開催。	同上 (p.784)
21年 11月 30日	明治3年以来、医学館として存続してきた大手町乃木会館が兼六園内に移築される。	同上

22年 4月 1日	文部省直轄学校官制を改正し、石川県金沢病院を官立に移管して付属医院とする。以後医学専門学校の生徒を募集せず。	同上
12月	十全会より文部省に十全記念館を寄付する。	同上
23年 3月	金沢医科大学の発足とともに、付属医学専門部及び付属薬学専門部を置くこととする。	同上
4月	金沢医科大学発足し、高安右人学長となり、付属医学専門部主事を兼ねる。下平用彩を付属医院長に補す。	同上
9月 4日	大里俊吾「淋巴の研究」に対し、日本内科学会から恩賜記念賞を受ける。 関東大震災の第1救護班出発、17日帰沢。同日第2救護班出発、10月2日帰沢。	同上
24年 2月23日	下平用彩死去。62才。	同上
3月	土肥章司を付属医院長に補す。	同上
4月	金沢医科大学長高安右人辞任。後任に須藤憲三を任命する。	同上
9月	生理学、衛生学、細菌学教室並びに付属建物竣工する。	同上
25年 2月	病理学教室、細菌学実習室、給水機関室、蓄電室など竣工。	同上 (p.785)
3月	土肥章司に代わり、久慈直太郎を付属医院長に補す。	同上
8月	看護宿舎、外科手術室竣工する。	同上
26年 4月	第3回日本産婦人科学会（久慈直太郎）を金沢で開催する。	同上
5月 11日	開学祝賀式を挙げる。	同上
5月 12、13日	衛生展を開催（観覧者5万有余に達する）。	同上
7月	書庫、病理学実習室、病理学講義室、婦人科手術室竣工する。	同上
11月	古畑種基を付属図書館長に補す。	同上
27年 3月	医化学研究室、動物室竣工する。	同上
4月	金沢医科大学第1回卒業生17名を送る。 山田詩郎が久慈直太郎に代わって、付属医院長になる。	同上
5月	病理学標本庫、医化学実験室、危険薬品庫、薬物有毒ガス分析室、危険薬品庫、汚物消却炉を竣工する。	同上
6月	細菌学教室が焼失する。 石川県女子師範付属小学校と幼稚園に、5月より猩紅熱に類似の熱病が発生流行し、泉仙助は新疾患である旨を表明（後	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

	の「泉熟」した。	
8月	健康保険の療養給付が公布される。	同上
9月	付属医院外科病室、レントゲン深部治療室、内科弦線電流計室竣工する。	同上
10月	第2内科教室、診察所竣工する。	同上
10月27日	山崎幹死去。	同上 (p.786)
28年 3月	細菌学動物室災害復旧工事竣工する。	同上
	付属医院において、健康保険法による政府管掌保険者の診療を開始。	同上
5月	付属薬学専門部教室、同危険薬品庫、付属医院内外科学生診察室、皮膚科診察室、眼科、小児科研究室、耳鼻咽喉科手術室、小児科、伝染病室、外科日光浴室、伝染病室が竣工する。	同上
8月	職員図書閲覧室、付属医院栄養部研究室兼食堂竣工する。	同上
10月18日	第4回日本生化学学会(須藤憲三)を金沢で開く。	同上
10月28日	第28回北陸医学会(新潟、富山、石川、福井)を開催する。	同上
29年 3月	付属医院看護婦養成科を看護婦養成所と改称する。付属病院に助産婦養成所を設置する。	同上
3月25日	第56回帝国議会において、金沢市に総合大学設置に関する建議案が可決された。	同上
4月	山田詩郎に代わって、大里俊吾が付属医院長になる。	同上
7月	精神科病室竣工する。	同上
11月	付属医院に検査部を設置する。	同上
30年 1月	看護婦寄宿舍増築工事竣工する。	同上
3月	衛生学、解剖学、法医学各動物室が竣工する。	同上
5月	泉仙助が大里俊吾に代わって、付属医院長になる。	同上
	上野一晴が古畑種基に代わって付属図書館長に任命される。	同上
31年 3月	細菌学教師動物室増築、石川外科手術室増築工事が竣工。	同上
4月	第36回日本小児科学会(泉仙助)を金沢で開催する。	同上 (p.787)
	付属医院内科研究室が焼失する。	同上
11月	第1内科研究室、第2内科研究室が竣工する。	同上
32年 2月	工作室竣工する。	同上

3月	山田、大里両内科研究室竣工する。	同上
4月	石坂伸吉が須藤憲三に代わって、大学長に任命される。	同上
5月	早尾厩雄が泉仙助に代わって、付属医院長になる。	同上
7月	谷友次を付属図書館長に補す。	同上
12月	学生更衣室、食堂が竣工する。	同上
33年 7月 10日	第12回日本生理学会（上野一晴）を金沢で開催する。	同上
9月	法医学、解剖学、組織学、病理学、医化学、細菌学、薬物学、各実習室の増築が竣工する。	同上
12月	付属医院汽罐室が竣工する。	同上
34年 1月	須藤憲三死去。63才。	同上
3月	生理学講義室準備室、石川外科患者控室、付属医院汚物焼却場が竣工する。	同上
5月	早尾厩雄に代わり、石川昇が付属医院長になる。	同上
7月	佐口栄を図書館長に補す。 上坂熊勝死去。68才。	同上 同上
10月	解剖学標本庫が竣工する。	同上
11月	事務官官舎、眼科患者控室竣工する。	同上
35年 4月	第25回日本病理学会（中村八太郎）を金沢で開催する。 第20回日本法医学会（古畑種基）を金沢で開催する。	同上 同上
5月	大里内科の新館六階建築が竣工。 十全学友会発足とともに「学友会報」発行。	同上 同上
9月	職員、学生食堂竣工し、大学へ寄付する。	同上 (p.788)
12月	付属医院検査部細菌検査部が竣工する。	同上
36年 5月	中島実が石川昇に代わって、付属医院長になる。	同上
7月	岡本規矩男を図書館長に補す。	同上
37年 4月	第11回日本薬理学会（石坂伸吉）を金沢で開催する。	同上
4月 11日	中浜東一郎死去。81才。	同上
12月	金子治郎死去。80才。	同上
38年 1月 25日	石川外科の建築が竣工。	同上
2月	付属医院看護婦養成所の修業年限を3カ年とする。	同上
5月	笠森周護を付属医院長に補す。	同上
7月	古屋芳雄を付属図書館長に補す。	同上
11月 20日	高安右人死去。79才。	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

39年 4月	第47回日本解剖学会（佐口栄）を金沢で開催。	
5月	帝国大学官立医科大学に臨時付属医学専門部設置の公布があり、本学に臨時付属医学専門部を設置する。石坂伸吉を主事に補す。	同上
6月	付属医学専門部の授業を開始する。	同上
8月	青少年学徒に賜った勅語謄本を下賜される。	同上
9月	古屋芳雄転任にともない、後任図書館長に岩崎憲を補す。	同上
40年 5月	熊笹御堂進を付属医院長に補す。	同上
11月	付属薬学専門部講義室、臨時付属医学専門部講義室、同銃器室を増築竣工する。	同上
41年 9月	井上剛を図書館長に補す。	同上
11月	戦時体制により、昭和18年3月卒業予定者は、一斉に昭和17年7月末卒業を繰り上げる事になる。	同上
12月 26日	三ヶ月繰り上げ卒業式が行われる。	同上（p.789）
42年 3月	結核研究所を開設する。	同上
	付属医院内科一部診療所を増築竣工する。	同上
4月	石坂伸吉を結核研究所所長に補す。	同上
	臨時付属医学専門部生徒控室、同講義室、付属薬学専門部特別講義室が竣工する。	同上
5月	松田竜一を付属医院長に補す。	同上
43年 3月	岡本規矩男死去。	同上
4月 3日	第44回日本耳鼻咽喉科学会（松田竜一）を金沢で開催する。	同上
9月	大谷佐重郎を図書館長に補す。	同上
11月	入隊学徒を送る出陣学徒壮行会が第四高等学校で開かれ、本学学生も参加する。	同上
44年 3月	大里内科を日置内科と改称する。	同上
4月 1日	第16回日本連合衛生学会（大谷佐重郎）を金沢で開催する。	同上
5月	谷野富有夫を付属医院長に補す。	同上
9月 6日	結核研究所より出火、半焼する。	同上
45年 1月	中村八太郎死去。	同上
8月 15日	終戦を迎える。	同上
	金沢医科大学十全医学会を設立する。	同上
12月	石川県議会は、北陸総合大学設置を決議し、隣県に呼びかける。	同上
46年 1月	御真影を奉還する。	同上
2月	金沢市議会は、北陸総合大学設置を可決	同上

	3月	する。 泉本町に学生寄宿舍開設。	同上
		十全報国団は十全学友会に改組する。	同上
	6月 3日	石川県庁において、北陸総合大学設置期 成同盟会発会式を、石川、福井、富山各 県の要人を招いて行われる。	同上 (p.790)
47年	4月 12日	第43回日本産婦人科学会（笠森周護）を 金沢で開催。	同上
	4月 28日	第45回日本精神神経学会（秋元波留夫） を金沢で開催。	同上
	5月 11日	第47回日本皮膚科泌尿器科学会（並木重 郎）を金沢で開催。	同上
	5月 11日	開学25周年記念会を挙げる。	同上
	11月 3日	岡本肇、金沢市文化賞を受ける。	同上
	11月 4日	学制改革により石川県独自で大学を設置 することに決め、北陸大学設置委員会を 発足させる。	同上
	12月 3日	石川軍政隊長より、金沢城跡を大学設置 場所とするよう指示した。	同上
48年	3月 25日	北陸大学は、医、薬、工、理、法文、教 育の六学部編成により創立するよう、文 部省より指示される。	同上
	5月 14日	北陸総合大学実施準備委員会に改称され る。	同上
	7月 10日	文部省の指示により、金沢大学実施準備 委員会に改称。	同上
	8月	新制北陸医学会成立。	同上
	9月 25日	第一回十全医学会を開催。	同上
	11月 10日	文部省より大学設置委員が実施調査に来 沢。	同上
	11月 23日	第一回北陸医学会を開催。	同上
49年	3月 16日	大学設置審議会で、金沢大学設立が正式 に決定した。	同上
	5月 1日	並木重郎、千葉医科大学へ転出。	同上
	5月 1日	第22回日本細菌学会（谷友次）を金沢で 開催。	同上
	5月 7日	第53回日本眼科学会（倉知与志）を金沢 で開催。	同上
	5月 31日	石坂伸吉を金沢大学医学部長兼金沢大学 金沢医科大学長兼同大学附属医学専門部 長兼金沢大学結核研究所長に補す。 法律一五〇号をもって、国立学校設置法 公布。金沢大学発足。 金沢医科大学附属医院を金沢大学医学部	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

	附属病院に改称する。当時の診療科名は第一内科、第二内科、精神神経科、小児科、理学的診療科、皮膚泌尿器科、第一外科、第二外科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、歯科である。	
	日置陸奥夫を医学部附属病院長兼厚生女学部主事に補す。	
6月 3日	斎藤幸一郎、生理学第一講座教授に就任。	同上 (p.620)
6月 15日	金沢大学入学試験実施。	同上 (p.791)
	久留勝が「脊髄後角に於ける痛温度覚伝導の細胞群決定に関する研究」により、第三十九回日本学士院賞を授与される。	『第一外科百年の歩み』
7月 1日	理学的診療医学を放射線医学と改称。	『百年史』(p.791)
7月 25日	金沢大学第一回入学式挙行(八一六名)。	同上
9月 22日	戸田正三、金沢大学長に任命される。	
50年 3月 31日	川村太郎、皮膚泌尿器科学講座教授に就任。	同上 (p.638)
4月 1日	金沢医科大学最後の入学式を挙行。公衆衛生学講座を新設し、石崎有信を主任教授に任命(同年5.31付)。寄生虫学講座の新設も認められ、主任教授には、すでに教授になっていた渡辺四郎が任命された(同年6.15に新研究室発足)。	同上 (p.791)
5月 30日	金沢大学通則が制定された。	『三十年の歩み』(p.20)
8月 14日 ~ 9月 8日	三週間にわたり、日米連合医学教育者協議会が東京と関西で開かれる。本学より宮田・谷・斎藤・岩崎・岡本・熊埜御堂・平松・高瀬が出席(詳細は金沢医科大学十全学生自治会発行の『学芸雑誌』通巻二十二号、昭和二十五年十二月発行に座談会記事として報告)。	同上
12月 1日	第二回日本学術会議会員選挙に戸田正三(全国区)、大谷佐重郎(地方区)当選。	同上
12月 28日	甲種看護学校の設置を承認。	『百年史』(p.792)
51年 2月 13日	附属厚生女学部を金沢大学看護学校と改称する。	同上
3月 27日	金沢大学医学部の第一回医学専門課程の入試施行。	同上
3月 31日	法律第八四号により、金沢医科大学附属薬学専門部を廃止。厚生女学部及び助産婦養成所廃止。	同上
6月 15日 ~ 26日	日米医学研究会が開催され、ルシア教授(内科)、ブライス教授(外科)、アッカ	同上

52年 3月31日	ーマン教授(病理)の三教授が来学した。金沢医科大学臨時附属医学専門部を廃止。	同上
53年 5月12日	岩崎憲が「アツオトメトリーの研究」により日本学士院賞を受ける。	同上(p.793)
7月 1日	整形外科科学講座新設。主任助教授に高瀬武平を任命。	同上
9月 1日	解剖学第三講座新設。主任助教授に本陣良平を任命。	同上
54年 3月12日	金沢医科大学を送る会(金沢医科大学最後の卒業式、卒業生八五名)を開く。	同上
3月26日	附属病院の総合改築計画による改築工事の起工式を挙げる。	同上
3月27日	新しい医学部長選挙規定により、後任学部長選挙会が行われ、谷友次が当選。	同上
4月20日	医学部長石坂伸吉退官。	同上
4月21日	医学部教授谷友次、医学部長及び金沢医科大学長に併任。	『十年史』(p.138)
4月 1日	久留勝、阪大へ転出。	『百年史』(p.551)
6月 1日	卜部美代志、外科学第一講座教授に就任。	同上(p.552)
12月 1日	生理学第二講座新設により、主任教授に東北大学医学部助教授岩間吉也を任命する。	同上(p.504)
12月 1日	高瀬武平、整形外科科学講座教授に昇任。	同上(p.629)
55年 3月18日	第一回金沢大学医学部卒業式を挙げる。	同上(p.793)
4月 1日	金沢大学医学部進学課程が設置された。	同上
6月15日	佐口栄教授急逝、医学部告別式執行。	同上
7月 1日	国立学校設置法の一部を改正する法律第四十四号、および国立大学の大学院に置く研究科および課程を定める政令の一部を改正する政令一〇六号により、金沢大学に大学院が設置されることになった。これより先、昭和二十八年三月三十一日、政令五一号をもって金沢大学研究科の設置が決まり、医学部で諸準備が整い、昭和三十年四月一日より医学研究科(博士課程)が発足した。	同上
9月16日	六月に皮膚泌尿器科学を、分離することに決め、皮膚科学主任には川村太郎教授、泌尿器科学主任教授には東京大学黒田恭一講師を任命した。	『三十年の歩み』(p.22)
9月27日	宮田栄教授急逝、医学部告別式執行。	『百年史』(p.794)
11月 8日	金沢大学教員停年規定を制定した。	同上
11月16日	附属病院皮膚泌尿器科を、皮膚科と泌尿	『三十年の歩み』(p.22)

第7章 医学部 医学部附属病院

	器科に分離。	
56年 1月 1日	本陣良平、解剖学第一講座教授に就任。	『百年史』(p.614)
4月 1日	泉仙助、医学部長に就任。	同上(p.794)
4月 15日	寄生虫学講座に代わり、医動物学講座が設置された(昭和五十一年五月医動物学講座の名称を寄生虫学講座に改めた)。	『三十年の歩み』(p.22)
4月 15日	医学部附属診療エックス線技師学校設置。	『百年史』(p.794)
12月 2日	渡邊四郎、病理学第一講座教授に就任。	同上(p.616)
57年 5月 14日	岡本肇、「核酸による溶血性連鎖状球菌の溶血毒増産現象の発見について」により、日本学士院賞を授与される。	同上(p.794)
5月 26日	日置陸奥夫死去。	同上
58年 3月 15日	前述の停年規定に基づき、泉、笠森、熊埜御堂、岩崎の四教授の退職記念会を開催(3.31退官)。	『三十年の歩み』(p.23)
3月 31日	医学部附属助産婦学校を設置。	『百年史』(p.794)
4月 1日	大谷佐重郎、医学部長兼金沢大学金沢医科大学長兼金沢大学大学院医学研究科長に併任された。	『十年史』(p.140)
5月 1日	村上元孝、内科学第二講座教授に就任。	『百年史』(p.626)
9月 16日	佐川一郎、小児科学講座教授に就任。	同上(p.634)
10月 24日	金沢大学医学部に天皇、皇后両陛下が行幸啓される。	『三十年の歩み』(p.23)
12月 1日	赤須文男、産科婦人科学講座教授に就任。	『百年史』(p.631)
59年 3月 1日	高木康敬、医化学講座教授に就任。	同上(p.618)
3月 31日	谷友次、停年退職。秋元波留夫、東大教授に転任。	同上(p.483)
	医学部附属病院中央診療棟755坪、及び第三病棟廊下95坪の新築が完了した。	『十年史』(p.152)
4月 1日	西田尚紀、微生物学講座教授に昇任。	『百年史』(p.622)
	島藺安雄、精神神経科学講座教授に就任。	同上(p.635)
	医学部中央研究室システムを設置。	『三十年の歩み』(p.23)
5月 1日	本庄一夫、外科学講座教授に就任。	
7月 1日	川村太郎、東大へ転出。	『百年史』(p.438)
	附属病院検査部・放射線部を設置(院内設置)。	『三十年の歩み』(p.23)
60年 3月 31日	大谷佐重郎、石丸士郎、停年退職。	『百年史』(p.438)
4月 1日	法律第16号により、本学に包括の金沢医科大学(旧制)を廃止した。	同上(p.795)
	岡本肇、医学部長に就任。	同上
	山田致知、解剖学第二講座教授に就任。	同上(p.615)
	福代良一、皮膚科学講座教授に就任。	同上(p.638)
	金沢大学看護学校が、金沢大学医学部附	『三十年の歩み』(p.23)

	属看護学校に改称。	
5月 1日	附属病院手術部を設置（院内設置）。泌尿器科・検査部を正式設置。	同上
7月 21日	精神神経科学講座を神経精神医学講座に改称。	同上
10月 1日	医学部教授会は、金沢大学医学部の起源を文久二年三月と定め、昭和三十七年に百年祭を挙げることに決定。	同上(p.24)
12月 5日	附属病院物療部設置（院内設置）。	同上
61年 3月 31日	石崎有信、衛生学講座教授に転任。	『百年史』(p.621)
4月 1日	谷野富有夫、停年退職。	同上(p.625)
	医学部附属がん研究施設の設置許可される。	『三十年の歩み』(p.24)
	附属病院手術部正式に設置。	同上
5月 20日	武内重五郎、内科学第一講座教授に就任。	『百年史』(p.438)
10月 1日	附属病院材料部を設置（院内設置）。	『三十年の歩み』(p.24)
12月 1日	附属病院産婦人科を産科婦人科と改称。	同上
62年 1月 1日	重松逸造、公衆衛生学講座教授に就任。	『百年史』(p.621)
4月 1日	附属病院薬局が薬剤部となり、薬剤部長を置く。	『三十年の歩み』(p.24)
8月 13日	創立百年記念講堂起工式を行う（昭和三十八年七月七日落成式、十全講堂と名付ける）。	同上
11月 3日	金沢大学医学部創立百年記念式典を金沢市観光会館で挙げる。	同上
63年 3月 31日	松田龍一、定年退職。	同上(p.309)
4月 1日	医化学を生化学第一、第二講座に分離した。	同上
	倉知与志、医学部長に就任。	同上
	岐阜県上宝村に高原温泉研究所を開設。	同上
	岩間吉也、阪大へ転出。	同上(p.106)
5月 10日	豊田文一、耳鼻咽喉科学講座教授に就任。	同上(p.309)
7月 1日	高木康敬、九大へ転出。	同上
7月 7日	創立百年記念講堂（十全講堂と命名）が竣工。	同上
8月 1日	現在地において新校舎が竣工した。	『8年度医学科生手引』(p.2)
11月 1日	大村裕、生理学第二講座教授に就任。	『三十年の歩み』(p.309)
64年 2月 1日	米山良昌、生化学第一講座教授に就任。	同上
	久野滋、生化学第二講座教授に就任。	『8年度医学科生手引』(p.2)
2月 1日	国立大学の学科及び課程並びに講座または学科目に関する省令が制定され、医学部は1学科 ²⁸ 講座になった。	
3月 1日	附属病院麻酔部・アイソトープ部を設置（院内設置）。	『三十年の歩み』(p.309)

第7章 医学部 医学部附属病院

65年 2月 1日	倉知与志、医学部長に再選。	同上
3月 1日	医学部附属衛生検査技師学校を設置し、初代校長を中検部長早稲田正澄が併任。	同上
4月 1日	本庄一夫、京大へ転出。	同上(p.310)
4月 1日～ 2日	第三十八回日本薬理学会（岡本肇会長）金沢で開催。	同上
4月 1日	麻酔学を新設した。	同上
5月14日～16日	第六十四回日本皮膚科学会総会（福代良一会長）金沢で開催。	同上
8月 1日	水上哲次、外科学第二講座教授に昇任。	同上
9月 1日	医学部改築第一期工事を開始。	同上
11月 1日	倉知与志、第七期日本学術会議会員に当選。	同上
	石坂伸吉、勲二等旭日重光章を受章。	同上
	柿下正道、北國文化賞を受賞。	同上
66年 3月 1日	精神神経科を神経科精神科と改称。	同上
4月 1日	卜部美代志、附属病院長に就任。	同上
	脳神経外科学講座を新設、脳神経外科正式設置、麻酔科設置、分娩部を設置（院内設置）。	同上
8月 1日	重松逸造、国立公衆衛生院へ転出。	同上
8月16日	山本信二郎、脳神経外科学講座教授に就任。	同上
11月 1日	医学部実験研究棟5,863m ² 、および解剖棟949m ² の新築工事が完了。	同上
	泉仙助、勲二等瑞宝章を受章。	同上(p.311)
	岩崎憲、勲三等旭日中授章を受章。	
	柿下正道、金沢市文化賞を受賞。	
67年 4月 1日	井上剛、医学部長に就任。	同上
6月 1日	神経情報研究施設（情報伝達研究部門）を設置、附属病院放射線部を正式設置。	同上
	金沢大学がん研究所の発足に伴い、医学部附属がん研究施設を廃止。	同上
11月 1日	本陣良平、日本医師会医学研究賞を受賞。	同上
	本陣良平、金沢市文化賞を受賞。	同上
	大谷佐重郎、勲二等瑞宝章を受章。	同上
11月21日	医学部校舎第二期工事を開始。	同上
68年 1月 1日	附属病院輸血部設置（院内設置）。	同上
3月31日	岡本肇、停年退職。	同上
4月 1日	島藺安雄、東京医歯大へ転出。	同上
	村上元孝、附属病院長に就任。	同上
	内科学第三講座を設置、第三内科設置。	同上
	透析センター、電子顕微鏡センター設置（院内設置）。	同上(p.312)

4月 8日 ~ 9日	第十六回日本輸血学会（赤須文男会長）を金沢で開催。	同上
4月 1日	笠森周護、勲二等瑞宝章を受章。	同上
5月 15日	大塚良作、神経精神医学講座教授に就任。	同上
9月 1日	核医学診療科を設置（院内設置）。	同上
10月 1日	正印達、薬理学講座教授に就任。	同上
11月 1日	水上哲次、北國文化賞を受賞。	同上
12月 1日	医学部校舎第二期工事6,045㎡竣工。	同上
69年 1月 1日	梶川欽一郎、病理学第一講座教授に就任。	同上
2月 1日	早稲田正澄、教授に昇任。	同上
3月 31日	早稲田正澄、停年退職。	同上
4月 1日	石崎有信、医学部長に就任。	同上
4月 15日	服部絢一、内科学第三講座教授に就任。 医学部附属診療エックス線技師学校が廃止され、医学部附属診療放射線技師学校設置。	同上
4月 14日 ~ 16日	第二十一回日本産科婦人科学会総会（赤須文男会長）を金沢で開催。	同上(p.313)
4月 1日	谷友次、勲二等瑞宝章を受章。	同上
5月 1日	卜部美代志、中日文化賞を受賞。 梶川欽一郎、電頭学会寺田賞を受賞。	同上
5月 20日 ~ 22日	第六十六回日本精神神経学会総会（島蘭安雄会長）を金沢で開催。	同上
10月 14日 ~ 16日	第二十八回日本癌学会総会（岡本肇会長）を金沢で開催。	同上
11月 1日	医学図書館竣工。 石丸土郎、勲二等瑞宝章を受章。 谷野富有夫、勲二等瑞宝章を受章。 大谷佐重郎、金沢市文化賞を受賞。 平松博、北國文化賞を受賞。	同上 同上 同上 同上
11月 1日	平松博、第八期日本学術会議会員に選出。	同上
11月 8日 ~ 9日	第八回日本鼻・副鼻腔学会総会（豊田文一会長）金沢で開催。	同上
12月 8日	医学部学生ストライキ開始（翌年5.7まで）。	同上
70年 4月	理学療法室（物療室）正式設置。	同上
4月 5日 ~ 6日	第四十回日本衛生学会総会（石崎有信会長）金沢で開催。	同上(p.314)
4月 15日	根岸晃六、神経情報研究施設教授に就任。	同上(p.277)
4月	村上賢三、勲三等瑞宝章を受章。	同上(p.314)
5月 7日	医学部学生ストライキ打切り。	同上
6月 27日	医学部図書館の改築落成披露。	
10月 16日 ~ 17日	第十二回日本消化器病学会・第八回日本内視鏡学会合同秋季大会（武内重五郎会	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

10月 21日 ~ 22日	長) 金沢で開催。 日本核医学会総会 (平松博会長) 金沢で 開催。	同上
10月 24日 ~ 25日	第十五回日本音声言語医学会総会 (豊田 文一会長) を金沢で開催。	同上
11月 1日	松田龍一、勲二等瑞宝章を受章。	同上
71年 2月 1日	高瀬武平、北國文化賞を受賞。	同上
	石崎有信、医学部長を辞任、豊田文一が 代行。	同上
3月 31日	臨床講義棟563m ² 新築工事が竣工。	同上
	井上剛、赤須文男、倉知与志、停年退職。	同上
4月 1日	豊田文一、医学部長に就任。	同上
6月 1日	西田悦郎、産科婦人科学講座教授に就任。	同上
7月 1日	米村大蔵、眼科学講座教授に就任。	同上(p.315)
8月 1日	何川涼、法医学講座教授に就任。	同上
11月 1日	柿下正道、勲三等旭日中綬章を受章。	同上
	井上剛、北國文化賞を受賞。	同上
72年 3月 1日	平松博、第九期日本学術会議会員に再選。 附属病院の総合改築計画による工事は 完了。	同上
4月 1日	核医学講座新設、核医学診療科正式設置。 金沢大学医療技術短期学部発足。	同上
	黒田恭一、附属病院長に就任。	同上
4月 6日 ~ 8日	第四十五回日本整形外科学会総会 (高瀬 武平会長) を金沢で開催。	同上
4月 10日 ~ 12日	第三十六回日本循環器学会総会 (村上元 孝会長) を金沢で開催。	同上
5月 1日	核医学を新設した。	『8年度医学科生手引』(p.2)
6月 25日	『金沢大学医学部百年史』出版。	『三十年の歩み』(p.315)
7月 15日	村上元孝、東京都養育院附属病院長就任 のため退職。	同上(p.168)
8月 20日	記念館改築落成・百年史出版祝賀会。	同上(p.315)
9月 1日	中島博徳、小児科学講座教授に就任。	同上
10月 1日	松原藤継、中央検査部教授に就任。	同上
	竹田亮祐、内科学第二講座教授に就任。	同上
10月 14日 ~ 16日	第三十四回臨床外科医学会総会 (水上哲 次会長) を金沢で開催。	同上
10月 27日 ~ 29日	第七回日本アルコール医学会総会 (何川 涼会長) を金沢で開催。	同上
11月 3日	岡本肇、勲二等瑞宝章を受章。	同上(p.316)
11月 15日	岡田晃、公衆衛生学講座教授に就任。	同上
11月 20日	宝町団地厚生会館オープン。	同上
73年 3月 15日	水上哲次 逝去、勲三等瑞宝章を授与され る。	同上

	久田欣一、核医学講座教授に就任。	同上
3月31日	医療技術短期大学の設置に伴い、医学部附属衛生検査技師学校を廃止。	同上
	斎藤幸一郎、石川太刀雄丸、卜部美代志、豊田文一、停年退職。	同上
4月1日	高瀬武平、医学部長に就任。	同上
4月5日～6日	第十四回日本神経病理学会総会（大塚良作会長）を金沢で開催。	同上
4月15日	太田五六、病理学第二講座教授に昇任。	同上
5月1日	岩喬、外科学第一講座教授に就任。	同上
6月1日	梅田良三、耳鼻咽喉科学講座教授に昇任。	同上
9月22日	豊田文一、金沢大学長に就任（昭和54年9.21まで）。	同上
11月1日	西田尚紀、小島三郎記念文化賞を受賞。	同上
74年 2月1日	武内重五郎、東京医歯大へ転出。	同上(p.164)
3月31日	医療技術短期大学の設置に伴い、医学部附属看護学校及び診療放射線技師学校を廃止。	同上(p.317)
4月1日	山本信二郎、附属病院長に就任。	同上
	吉村裕之、医動物学講座教授に就任。	同上(p.134)
	宮崎逸夫、外科学第二講座教授に昇任。	同上(p.317)
	材料部正式設置。	同上
4月4日～5日	第七十九回日本解剖学会総会（本陣良平会長）を金沢で開催。	同上
9月1日	服部信、内科学第一講座教授に就任。	同上
10月11日～12日	第十九回日本不妊学会総会（黒田恭一会長）を金沢で開催。	同上
10月15日	永坂鉄夫、生理学第一講座教授に就任。	同上
10月16日	大塚良作逝去、勲四等旭日小綬章を授与される。	同上
11月1日	西田尚紀、北國文化賞を受賞。	同上
75年 1月1日	山本長三郎、生理学第二講座教授に就任。	同上
3月31日	石崎有信、平松博、停年退職。	同上
4月1日	高瀬武平、医学部長に再任。	同上
4月2日～4日	第四十八回日本細菌学会総会（西田尚紀会長）を金沢で開催。	同上
5月1日	高島力、放射線医学講座教授に昇任。	同上
	山口成良、神経精神医学講座教授に就任。	同上
5月1日	本陣良平、中日文化賞を受賞	同上(p.318)
6月1日	橋本和夫、衛生学講座教授に就任。	同上
7月1日	高原温泉研究所を廃止。	同上
7月26日	早稻田正澄、勲三等瑞宝章を授与される。	同上
9月21日	第十一回日本眼光学学会（米村大蔵会長）金沢で開催。	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

10月 1日	輸血部正式設置、齒科を齒科口腔外科と改称。	同上
11月 1日	倉知与志、勲二等瑞宝章を受章。	同上
76年 3月 31日	高瀬武平、停年退職。	同上
4月 1日	梶川欽一郎、医学部長に就任。	同上
	福代良一、附属病院長に就任。	同上
	附属病院事務部門の三課制を施行。	同上
5月 1日	医学部附属動物実験施設を設置。	同上
	医学部附属神経情報研究施設に神経物性研究部門を設置。	同上
	医動物学講座を寄生虫学講座に改称。	同上
	吉村裕之、小泉賞（学会賞）を受賞。	同上
	西田尚紀、浅川賞（学会賞）を受賞。	同上
5月 15日～16日	第七十七回日本医学史学会（高瀬武平会長）を金沢にて開催。	同上(p.319)
6月 1日	野村進、整形外科学講座教授に昇任。	同上
11月 1日	梶川欽一郎、北國文化賞を受賞。	同上
	井上剛、勲二等瑞宝章を受章。	同上
12月 1日	中村俊雄、神経情報研究施設神経物性部門教授に就任。	同上
77年 1月 1日	玉井健三、齒科口腔外科教授に就任。	同上
4月 1日	医療技術短期大学部に専攻科助産学特別専攻が設置されたことに伴い、医学部附属助産婦学校を廃止。	同上
5月 13日～15日	第三十九回日本血液学会総会（服部絢一会長）金沢で開催。	同上
7月 1日	中島博徳、千葉大へ転出。	同上
10月 15日～16日	第三十三回日本寄生虫学会・第三十二回日本衛生動物学会西日本合同大会（吉村裕之会長）金沢で開催。	同上
78年 1月 1日	本陣良平、北國文化賞を受賞。	同上
	高瀬武平、金沢市文化賞を受賞。	同上
	秋元波留夫、勲二等旭日重光章を受章。	同上
1月 1日	黒田恭一、第十一期日本学術会議会員に選出。	同上
3月 31日	村上誠一、麻酔学講座教授に昇任。	同上(p.320)
4月 1日	服部絢一、附属病院長に就任。	同上
6月 1日	何川涼、岡山大学へ転出。	同上(p.147)
7月 1日	谷口昂、小児科学講座教授に昇任。	同上(p.320)
7月 14日～15日	日本結合織学会（梶川欽一郎会長）を金沢で開催。	同上
9月 1日	動物実験施設棟4,238㎡の新築工事が竣工。	同上
10月 12日～14日	第十八回日本核医学会総会（久田欣一会	同上

10月 21日 ~ 22日	長)を金沢で開催。 第三十回日本気管食道科学会総会(梅田良三会長)を金沢で開催。	同上
10月 25日 ~ 27日	第八回日本脳波筋電図学会(山口成良会長)を金沢で開催。	同上
11月 10日 ~ 11日	第四十三回日本民族衛生学会総会(岡田晃会長)を金沢で開催。	同上
79年 1月 1日	山名月中、薬剤部専任教授に就任。	同上
4月 1日	永野耐造、法医学講座教授に就任。 分娩部正式設置。	同上(p.321)
5月 1日	赤須文男、勲三等瑞宝章を受章。	同上
11月 1日	西田尚紀、中村信一、中日文化賞を受賞。 豊田文一、北國文化賞を受賞。	同上
80年 2月 1日	佐川一郎、勲三等旭日中綬章を受章。 附属病院旧館改修工事完了、第六病棟と名称変更。	同上
3月 31日	梶川欽一郎、医学部長を退任。 福代良一、停年退職。	同上
4月 1日	本陣良平、医学部長に就任。 米村大蔵、附属病院長に就任。 廣根孝衛、皮膚科学講座教授に就任。 物療部を理学療法部と改称・作業療法部設置(院内設置)。	同上 同上 同上 同上
10月 15日 ~ 17日	第三十九回日本脳神経外科学会総会(山本信二郎会長)を金沢で開催。	同上
11月 3日	山田致知、北國文化賞を受賞。	同上(p.322)
12月 1日	黒田恭一、第十二期日本学術会議会員に選出。	同上
81年 4月 1日	附属病院に神経内科を設置。 中村泰尚、解剖学第三講座教授に就任。	同上 同上
7月 31日	黒田恭一、退職。	同上
10月 13日	アイソトープ総合センター開所式。	同上
10月 24日 ~ 25日	第四十三回耳鼻咽喉科臨床会総会(梅田良三会長)を金沢で開催。	同上
10月 29日 ~ 31日	第二十三回日本臨床血液学会総会(服部絢一会長)を金沢で開催。	同上
11月 1日	平松博、勲二等旭日重光章を受章。	同上
11月 17日 ~ 18日	第十九回日本人工臓器学会(岩喬会長)を金沢で開催。	同上
82年 1月 1日	久住治男、泌尿器科学講座教授に昇任。 高守正治、神経内科教授に就任。	同上 同上
4月 1日	歯科口腔外科学講座を設置、玉井健三、同講座教授に配置換。 本陣良平、医学部長に再任。	同上 同上

第7章 医学部 医学部附属病院

10月 2日	野村進、附属病院長に就任。 第十七回日本高気圧環境医学会（岩喬会長）を金沢で開催。	同上 同上(p.323)
11月 3日	米村大蔵、金沢市文化賞を受賞。	同上
11月21日	福代良一、北國文化賞を受賞。 高瀬武平死去、勲二等旭日重光章を授与される。	同上 同上
83年 3月31日	梶川欽一郎、停年退職。	同上
4月 1日	中西功夫、病理学第一講座教授に就任。 附属病院に救急部を設置。	同上 同上
11月 1日	石崎有信、勲二等瑞宝章を受章。	同上
84年 1月 1日	吉村裕之、北國文化賞を受賞。 附属病院に大型電算機を導入。 附属病院救急部が始動。	同上 同上 同上
3月31日	外来診療棟増築工事完了。	同上
4月 1日	服部絢一、山名月中、停年退職。 西田尚紀、医学部長に就任。 竹田亮祐、附属病院長に就任。	同上 同上 同上
4月 1日	高密度無菌治療部を設置。	同上
4月 1日	服部絢一、紫綬褒章を受章。	同上(p.324)
5月11日～12日	第九回日本睡眠学会学術集会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
6月 1日	市村藤雄、薬剤部教授に昇任。 附属病院に内視鏡部設置（院内設置）。	同上 同上
7月 1日	松田保、内科学第三講座教授に就任。	同上
9月 7日～ 8日	第八回日本神経心理学会総会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
10月12日～14日	第三十一回日本臨床病理学会総会（松原藤継会長）を金沢で開催。	同上
10月	附属病院業務電算化稼働披露式。	同上
10月28日	第十四回日本医事法学会総会（永野耐造会長）を金沢で開催。	同上
12月 1日	電子計算機による医事業務を開始。	同上
85年 3月 1日	宝町地区課外活動共同施設棟651m ² の新築工事が竣工。 附属病院中央採血室開設。	同上 同上
3月15日～16日	第十九回糖尿病学の進歩（竹田亮祐会長）を金沢で開催。	同上
4月 1日	附属病院に集中治療部設置。	同上
5月17日～18日	第十五回日本心臓血管外科学会総会（岩喬会長）を金沢で開催。	同上
7月 1日	岡田晃、第十三期日本学術会議会員に選出。	同上
9月22日	本陣良平、金沢大学学長に就任（平成1	同上

86年 2月 1日	年9.21まで)、 附属病院に集中治療部発足。	同上(p.325)
3月 27日 ~ 28日	第八回日本生物学的精神医学会(山口成良会長)を金沢で開催。	同上
3月 31日	西田尚紀、停年退職。	同上
4月 1日	山本信二郎、医学部長に就任。 服部信、附属病院長に就任	同上
	臨床検査医学講座設置、松原藤継、同講座教授に配置換。	同上
	附属病院に医療情報部設置(院内設置)、 近藤尚武、解剖学第一講座教授に就任。	同上
5月 1日	中村信一、微生物学講座教授に昇任。	同上
7月 26日 ~ 27日	第二十回日本ペインクリニック学会(村上誠一会長)を金沢で開催。	同上
7月 27日 ~ 29日	第二十七回日本母性衛生学会総会(西田悦郎会長)金沢で開催。	同上
8月 31日 ~ 9月 1日	第一回日本整形外科学会基礎学術集会(野村進会長)を金沢で開催。	同上
9月 18日 ~ 10月 1日	第二回国際環境複合影響学会(岡田晃会長)を金沢で開催。	同上
10月 1日 ~ 3日	第二十八回日本消化器病学会(服部信会長)を金沢で開催。	同上
11月 1日	伊藤亮、勲三等旭日中綬章を受章。	同上
11月 3日	服部信、北國文化賞を受賞。	同上
11月 4日 ~ 7日	国際不整脈シンポジウム(岩喬会長)を金沢で開催。	同上(p.326)
87年 2月 1日	黒田恭一、勲三等旭日中綬章を授与される。	同上
3月 31日	太田五六、山田致知、停年退職。 中村俊雄、退職。	同上
	MR - CT装置棟増築工事が完了。	同上
5月 1日	岩喬、中日文化賞を受賞。 中沼安二、病理学第二講座教授に昇任。	同上
	MR - CT装置棟開所。 附属病院に病理部を設置。	同上
7月 1日	田中重徳、解剖学第二講座教授に就任。	同上
10月 6日 ~ 8日	第四十回日本胸部外科学会(岩喬会長)を金沢で開催。	同上
10月 12日 ~ 15日	第六十回日本生化学会(米山良昌会長)金沢で開催。	同上
10月 25日	玉井健三逝去、勲三等瑞宝章を授与される	同上
10月	中沼安二、ローラ賞を受賞。	同上(p.327)
11月 1日	米山良昌、日本医師会医学賞を受賞。	同上

第7章 医学部 医学部附属病院

11月 3日	岩喬、金沢市文化賞を受賞。 久住治男、北國文化賞を受賞。	同上 同上
11月 19日～21日	福代良一、勲三等旭日中綬章を受章。 第十七回日本免疫学会総会（右田俊介会長）を金沢で開催。	同上 同上
11月 23日～24日	第三十二回日本不妊学会総会（西田悦郎会長）を金沢で開催。	同上
88年 2月 1日	東田陽博、神経情報研究施設神経物性研究部門教授に就任。	同上
3月 17日～18日	第二十四回脳のシンポジウム（高守正治世話人）を金沢で開催。	同上
3月 24日～26日	第九十二回日本眼科学会総会（米村大蔵会長）を金沢で開催。	同上
3月 31日	米山良昌、山本信二郎、米村大蔵、停年退職。	同上
4月 1日	正印達、医学部長に就任。	同上
4月 11日～14日	梅田良三、附属病院長に就任。 第六十一回日本産業衛生学会及び第四十四回日本産業医協議会（岡田晃会長）を金沢で開催。	同上 同上
5月 18日～20日	第三十五回日本実験動物学会総会（早川純一郎会長）を金沢で開催。	同上
5月 27日～29日	第八十九回日本耳鼻咽喉科学会（梅田良三会長）を金沢で開催。	同上
6月 1日	河崎一夫、眼科学講座教授に昇任。	同上(p.328)
6月 2日～ 4日	第十一回日本バイオレオロジー学会（松田保会長）を金沢で開催。	同上
6月 9日～11日	第三十五回日本麻酔学会（村上誠一会長）を金沢で開催。	同上
7月 4日～ 5日	第三十二回日本消化器外科学会（宮崎逸夫会長）を金沢で開催。	同上
7月 16日	山下純宏、脳神経外科学講座教授に就任。 岡田晃、第十四期日本学術会議会員に選出。	同上 同上
8月 1日	山本悦秀、歯科口腔外科学講座教授に就任。 岡田晃、国際環境複合影響研究大賞を受賞。	同上 同上
10月 16日	福田龍二、生化学第一講座教授に就任。	同上
10月 7日～ 8日	第二十二回日本てんかん学会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
11月 3日	廣根孝衛、北國文化賞を受賞。	同上
12月 9日～10日	第十一回日本骨髄移植研究会（松田保会長）を金沢で開催。	同上

89年 3月 31日	野村進、吉村裕之、停年退職。	同上
4月 20日 ~ 22日	第三十二回日本糖尿病学会（竹田亮祐会長）を金沢で開催。	同上
5月 11日 ~ 13日	第八十八回日本皮膚科学会学術大会（廣根孝衛会長）を金沢で開催。	同上(p.329)
5月 18日 ~ 20日	第八十五回日本精神神経学会総会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
5月 21日	第二回日本思春期青年期精神医学会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
5月 23日 ~ 26日	第五回国際手腕振動会議（岡田晃会長）を金沢で開催。	同上
5月 1日	本陣良平、電子顕微鏡学会功績賞を受賞。	同上
6月 1日 ~ 2日	第二十五回日本肝臓学会総会（服部信会長）を金沢で開催。	同上(p.94)
7月 1日	近藤尚武、東北大へ転出。	同上(p.165)
8月 1日	服部信、東京都立駒込病院長として転出。	同上(p.329)
11月 3日	富田勝郎、整形外科科学教授に昇任。	同上
11月 17日 ~ 18日	松田保、北國文化賞を受賞。	同上
	第三十五回日本宇宙航空環境医学会総会（岡田晃会長）を金沢で開催。	同上
90年 1月 1日	岡田晃、医学部長に就任。	同上
	小林健一、内科第一学講座教授に昇任。	同上
3月 31日	久野滋、梅田良三、停年退職。	同上
4月 1日	山口成良、附属病院長に就任。	同上
	竹田亮祐、中日文化賞を受賞。	同上
	岩喬、紫綬褒章を受章。	同上
5月 1日	井関尚一、解剖学第一講座教授に就任。	同上(p.100)
	中村泰尚、東京医歯大へ転出。	同上(p.329)
5月 26日	日本臨床検査自動化学会第四回春季セミナー（松原藤継会長）を金沢で開催。	同上(p.330)
6月 1日	血液浄化療法部設置（透析センター廃止）	同上
	麻酔学講座を麻酔・蘇生学講座に改称。	同上
	麻酔科を麻酔科蘇生科と改称。	同上
8月 1日	古川仍、耳鼻咽喉科学講座教授に昇任。	同上
10月 1日	山本博、生化学第二講座教授に就任。	同上
10月 11日 ~ 15日	第一回国際法医学シンポジウム（永野耐造会長）を金沢で開催。高円宮憲仁親王殿下御台臨。10.12医学部を御視察。	同上
11月 3日	久住治男、金沢市文化賞を受賞。	同上
	村上誠一、北國文化賞を受賞。	同上
91年 1月 1日	工藤基、解剖学第三講座教授に就任。	同上
3月 19日	久住治男、スウェーデン国王より北極星勲章を授与される。	『十全同窓会報』(89号, p.16)

第7章 医学部 医学部附属病院

3月31日	松原藤継、岩喬、停年退職。	「三十年の歩み」(p.330)
4月 1日	森厚文、アイソトープ総合センター教授に就任。	同上
4月12日	神経内科学講座設置。高守正治、同講座教授に配置換。	同上
5月11日～13日	第七十九回日本泌尿器科学会総会（久住治男会長）を金沢で開催。	同上
6月 2日	十全講堂、記念館改修工事完了し、同窓会総会開催。	同上
7月 1日	岡田晃、第十五期日本学術会議会員に選出、日本学術会議第七部会長に就任。	同上(p.331)
	久住治男、第十五期日本学術会議会員に選出。	同上
10月 1日～ 3日	第四十六回日本体力医学会（岡田晃会長）を金沢で開催。	同上
10月 3日～ 5日	第二十三回日本小児感染症学会（谷口昂会長）金沢で開催。	同上
10月19日	第十一回精神科国際診断基準研究会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
11月 1日	渡邊洋宇、外科学第一講座教授に昇任。	同上
	橋本琢磨、臨床検査医学講座教授に昇任。	同上
11月 3日	谷口昂、北國文化賞を受賞。	同上
	山名月中、勲三等旭日中章賞を受章。	同上
92年 1月 1日	竹田亮祐、医学部長に就任。	同上
3月31日	根岸晃六、村上誠一、停年退職。	同上
4月 1日	廣根孝衛、附属病院長に就任。	同上
	附属病院に医療情報部を正式設置。	同上
4月21日～24日	第七十六回日本法医学会総会（永野耐造会長）を金沢で開催。	同上
6月 1日	早川純一郎、医学部附属動物実験施設教授に昇任。	同上
7月 1日	久世照五、麻酔・蘇生学講座教授に就任。	同上(p.332)
7月10日～11日	第五回日本老年精神医学会（山口成良会長）を金沢で開催。	同上
7月23日～24日	第二十三回日本膵臓学会（宮崎逸夫会長）を金沢で開催。	同上
8月26日	久世照五逝去。	同上
9月 4日～ 5日	第四回日本消化器癌発生研究会（磨伊正義当番世話人）を金沢で開催。	同上
9月10日～11日	日本ハイパーサーミア学会第九回大会（久住治男会長）を金沢で開催。	同上
9月11日～12日	第四十二回日本体質学会総会（竹田亮祐会長）を金沢で開催	同上
10月 2日～ 3日	第二十六回日本小児内分分泌学会（佐藤保	同上

	会長)を金沢で開催。	
11月 1日	加藤聖、神経情報研究施設、情報伝達研究部門教授に昇任。	同上
	岩間吉也、勲二等旭日重光章を受章。	同上
11月 3日	岡田晃、金沢市文化賞を受賞。	
11月 18日	第十一回日本痴呆学会(山口成良会長)を金沢で開催。	同上
12月 3日~ 4日	平成四年度日本動脈硬化学会冬季大会(馬淵宏会頭)を金沢で開催。	同上
12月 4日	第六回肺癌手術手技研究会(渡邊洋宇世話人)を金沢で開催。	同上
93年 3月 31日	正印達、久住治男、停年退職。 永野耐造、警察庁科学警察研究所へ転出。	『十全同窓会報』(94号, p.2)
4月 1日	佐藤保、附属病院医療情報部教授に就任。	同上(94号, p.5)
4月 21日	定例医学部教授会にて「金沢大学医学部百年史以後の歩み刊行会」の発足を承認。	同上(94号, p.7)
6月 3日~ 5日	第六十六回日本内分泌学会総会(竹田亮祐会長)を金沢で開催。	同上(95号, p.12)
6月 12日~13日	国際中毒性末梢神経障害会議(橋本和夫会長)金沢で開催。	同上
7月 29日~30日	第二十六回日本門脈圧亢進症研究会並びに第十六回食道静脈瘤硬化療法研究会(小林健一当番世話人)を金沢で開催。	同上(96号, p.8)
7月 31日	「金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み」刊行される。	同上(95号, p.8)
8月 1日	小林勉、麻酔・蘇生学講座教授に昇任。	同上(95号, p.6)
9月 22日	岡田晃、金沢大学長に就任(平成11年9月21日まで)。	同上(95号, p.1)
11月 3日	山本信二郎、金沢市文化賞を受賞。 竹田亮祐、北國文化賞を受賞。	同上(96号, p.6) 同上
11月 6日	金沢大学白山診療班の創立四十周年記念式典を開催。	同上(96号, p.9)
11月 11日~12日	第二回中部地区医学教育シンポジウム(医学部と医学教育振興財団の主催)を金沢で開催。	同上(96号, p.7)
11月 20日	第四十一回手術手技研究会(宮崎逸夫当番世話人)を金沢で開催。	同上(96号, p.8)
12月 1日	大島徹、法医学講座教授に昇任。	同上(96号, p.2)
12月 5日	市民対象の公開講座「成人病の予防・治療の最前線 - がんと心臓病」(医学部と大学教育開放センターの主催)、医学部十全講堂で開催。	同上(96号, p.7)
12月 1日	英文の紹介誌『金沢大学医学部ブレチン 1993~1994』刊行。	

第7章 医学部 医学部附属病院

94年 1月 1日	山本長三郎、医学部長に就任。	同上(97号, p.11)
	吉本谷博、薬理学講座教授に就任。	同上(96号, p.2)
2月 1日	『金沢大学医学部・大学院医学研究科教育と研究の歩み1993』(医学部教育等評価委員会編)が刊行される。	同上(97号, p.11)
3月31日	橋本和夫、竹田亮祐、山口成良、廣根孝衛、西田悦郎、停年退職。	同上(97号, p.3)
4月 1日	宮崎逸夫、附属病院長に就任。	同上(97号, p.2)
4月 6日 ~ 8日	第六十四回日本衛生学会(会長 岡田晃金沢大学長)を金沢で開催。	同上(98号, p.16)
4月	医学部図書館創立七十周年(1923年の旧制金沢医科大学付属図書館創立以来)を記念し、『古医書目録補遺版』完成。	同上(96号, p.5)
7月 1日	馬淵宏、内科学第二講座教授に昇任。	同上(98号, p.6)
	久住治男、第十六期日本学術会議会員(地域医学)に就任。	同上(98号, p.9)
8月 1日	越野好文、神経精神医学講座教授に就任。	同上(98号, p.6)
9月23日 ~ 25日	第四十二回日本臨床視覚電気生理学会(河崎一夫会長)金沢で開催。	同上(99号, p.5)
11月 1日	竹原和彦、皮膚科学講座教授に就任。	同上(99号, p.2)
	井上正樹、産科婦人科学講座教授に就任。	同上
	西條清史、衛生学講座教授に就任。	同上(99号, p.3)
11月 3日	久田欣一、北國文化賞受賞。	同上(99号, p.4)
	本陣良平、勲二等旭日重光章受章。	同上(99号, p.5)
95年 2月 1日	荻野景規、公衆衛生学講座教授に就任。	
3月 1日	近藤力王至、寄生虫学講座教授に昇任。	同上(100号, p.5)
3月 2日	西田尚紀、大山健康財団賞受賞。	同上(100号, p.7)
3月31日	久田欣一、近藤力王至、停年退職。	同上(100号, p.2)
4月29日	西田尚紀、勲二等瑞宝章受章。	同上(101号, p.2, 3)
8月 1日	利波紀久、核医学講座教授に昇任。	
8月24日 ~ 26日	第六回日韓整形外科シンポジウム(富田勝郎会長)を金沢で開催。	同上(101号, p.6)
10月 1日	医学部に四年制の保健学科設置。医学科との二学科制になる。	同上(102号, p.6)
10月 4日 ~ 5日	第三回日本台湾耳鼻咽喉科頭頸部外科学会(吉川仍会長)を金沢で開催。	同上(102号, p.5)
10月14日	第三十一回日本界面医学会(小林勉会長)を金沢で開催。	同上
11月 6日	保健学科設置記念式典・祝賀会開催。	同上(102号, p.2)
11月16日	並木幹夫、泌尿器科学講座教授に就任。	同上(102号, p.3)
12月 9日	第三十二回口腔組織培養研究会(山本悦秀会長)を金沢で開催。	同上(103号, p.12)
96年 1月 1日	松田保、医学部長に就任。	
3月 1日	『金沢大学医学部・教育と研究の歩み	同上(102号, p.2)

	1995』(医学部教育等評価委員会編)刊 行。	
3月31日	谷口昂、停年退職。	
4月1日	医学科に、国際医療保健学及び国際環境 保健学の二講座を設置。	同上(103号, p.3)
4月2日～4日	高島力、附属病院長に就任。 第五十五回日本医学放射線学会総会学術 大会(高島力会長)金沢で開催。	同上(103号, p.2) 同上(103号, p.12)
4月29日	岩喬、勲三等旭日中綬章受章。	同上(104号, p.16)
5月15日	竹田亮祐、日本糖尿病学会坂口賞受賞。	同上(104号, p.12)
5月17日	永坂鉄夫、石川テレビ賞受賞。	同上
6月1日	小泉晶一、小児科学講座教授に昇任。	同上(104号, p.7)
6月6日～7日	第二十八回日本結合組織学会学術大会 (中西功夫会頭)を金沢で開催。	同上(104号, p.14)
6月21日	医学部附属動物実験施設開設二十周年記 念講演会及び祝賀会を開催。	同上(104号, p.13)
6月28日	第五六五回金沢大学評議会において、金 沢大学宝町団地再開発計画基本構想の全 学的合意を得る。	同上(105号, p.6)
7月22日～24日	第四十三回毒素シンポジウム(中村信一 世話人)加賀市片山津で開催。	同上(104号, p.14)
8月1日	中西功夫、医学部長に就任。	同上(104号, p.3)
11月3日	小林健一、北國文化賞を受賞。	同上(105号, p.4)
11月9日	第三十五回イムノアッセイ研究会(橋本 琢磨会長)を金沢で開催。	同上(105号, p.5)
11月28日～29日	平成八年度日本動脈硬化学会冬季大会 (松田保会長)を金沢で開催。	同上(105号, p.5)
97年 3月31日	山本長三郎、宮崎逸夫、停年退職。	同上(106号, p.4)

- 『百年史』……………『金沢大学医学部百年史』
『三十年の歩み』……………『金沢大学医学部百年史以後 三十年の歩み』
『十年史』……………『金沢大学十年史』
『8年度医学科生手引』……………『平成8年度医学科生の手引』
『十全同窓会報』……………『金沢大学医学部十全同窓会会報』

【参考文献】

1. 部局史

- 『金沢大学医学部百年史』(1972)
- 『金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み』(1993年7月)
- 『金沢大学第一内科百年のあゆみ』
- 『金沢大学第一外科百年の歩み』
- 『眼科学教室八十周年記念教室史』
- 『眼科学教室百周年記念教室史』
- 『日本解剖学会百周年記念教室史』
- 『金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室史』
- 『金沢大学医学部附属病院歯科の四十三年』
- 『金沢大学医学部附属病院手術部三十五年の歩み』
- 『金沢大学医学部附属病院検査部創設三十五年記念誌』
- 『金沢大学医学部附属病院透析センターの歩み』
- 『金沢大学医学部附属病院病理部五年の歩み』
- 『金沢大学医学部附属病院薬剤部五年の歩み』
- 『金沢大学医学部教育と研究の歩み』(1995)

2. 同門会報、年報

- 『金沢大学医学部第一外科年報』
- 『金沢大学十全同窓会報』
- 『金沢大学医学部第二内科同門会報』
- 『第2内科同窓会会報』
- 『金沢大学医学部第三内科同門会報』
- 『金沢大学医学部神経精神医学講座同窓会会報』
- 『金沢大学医学部整形外科学教室同門会誌』
- 『金沢大学医学部産科婦人科学教室同門会誌』
- 『金沢大学医学部眼科学教室同門会報』
- 『金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室同門会報』
- 『金沢大学医学部脳神経外科同門会誌』
- 『金沢大学医学部泌尿器科同門会誌』
- 『金沢大学医学部麻酔蘇生学教室同門会報』
- 『金沢大学医学部核医学同友会誌』
- 『金沢大学医学部小児科年報』
- 『金沢大学医学部第一外科学教室年報』

- 『金沢大学医学部歯科口腔外科年報』
- 『金沢大学医学部脳神経外科年報』
- 『金沢大学医学部附属病院核医学診療科年報』
- 『金沢大学医学部附属病院救急部、集中治療部の歩み』
- 『金沢大学医学部附属病院看護部のあゆみ』
- 『金沢大学医学部附属病院医療情報部だより』

3. 業績集

- 『大村研究室10年の歩み』
- 『本陣良平教授退任記念研究業績目録』
- 『米山良昌教授開講十五周年記念研究業績目録』
- 『岡本肇教授退官記念研究業績目録集』
- 『正印達教授退官記念業績集』
- 『中西功夫教授就任十周年記念教室業績集』
- 『太田五六教授開講十周年記念業績集』
- 『太田五六教授退官記念業績集』
- 『金沢大学医学部細菌学（微生物学）教室業績集』
- 『近藤力王至教授退官記念 むし されど むし』
- 『橋本和夫教授退官記念誌』
- 『岡田晃教授退任記念業績集』
- 『公衆衛生学教室論文集』
- 『永野耐造教授転任記念教室業績集』
- 『藤原勝夫業績リスト』
- 『外山寛業績リスト』
- 『金沢大学医学部附属神経情報研究施設業績集』
- 『服部信教授退任記念集』
- 『竹田亮祐教授業績集』
- 『Steroidologia from basic to clinical science』
- 『服部絢一教授退官記念教室業績集』
- 『松田保教授開講十周年記念教室業績集』
- 『金沢大学医学部神経精神医学講座業績集』
- 『金沢大学医学部神経精神医学講座博士論文集』
- 『山口成良教授在職十九年教室業績集』
- 『山口成良教授在職十九年指導論文集』
- 『谷口昂教授退官記念業績集』
- 『久田欣一教授就任十周年記念業績目録』

第7章 医学部 医学部附属病院

- 『Nuclear medicine in Kanazawa from its early beginning to the present』
- 『金沢大学皮膚科学教室業績集』
- 『金沢大学医学部第一外科業績集』
- 『宮崎逸夫教授開講十周年記念教室業績集』
- 『宮崎逸夫教授開講十五周年記念教室業績集』
- 『整形外科科学教室開講三十周年記念教室業績集』
- 『野村進教授退官記念業績集』
- 『黒田恭一教授業績集』
- 『久住治男教授業績集』
- 『金沢大学医学部眼科学教室業績集』
- 『金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室業績集』
- 『西田悦郎教授退官記念業績集』
- 『金沢大学医学部麻酔蘇生学教室業績集』
- 『松原藤継教授退官記念業績集』
- 『村上元孝教授就任十周年記念業績集』
- 『金沢大学医学部放射線医学教室業績集』(1996年3月)
- 『金沢大学医学部放射線医学教室業績集追補号』(1975年3月)

4. 要覧、通報

- 「金沢大学医学部概要」
- 「金沢大学職員録」
- 「金沢大学事務通報」
- 「金沢大学医学部附属病院概況」
- 「金沢大学医学部附属病院要覧」
- 「金大病院だより」
- 「現状と課題」金沢大学
- 「教育と研究の歩み」金沢大学大学院医学研究科
- 「金沢大学大学院便覧」
- 「金沢大学シラバス」
- 「金沢大学医学部学位録」
- 「日本医事新報」